THE CENTRAL REVIEW

中央公論

3-1916

三月號

第三十一年第三號　第三百廿八號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



余の腦病は救はれたり。

島村醫學博士證明の

健腦丸の効果を堅く信じて服用の結果!!

特長

健腦丸を少量宛持藥とせば逆上を引下げ便通をよくし怖る可き腦充血を快治し中風卒中を未發に防ぐ特効あり。

本舗 東京 大阪 丹平商會藥房 全國藥店ニアリ

島村博士證明
健腦丸
腦病良藥
KENNOGWAN

◀主効▶

□腦充血 □逆上症 □神經痛 □腦貧血 □卒中 □中風

□頭痛 □耳鳴 □眩暈 □健忘 □便秘 □癲癇

藥價

四回分	金廿錢
半週分	金四十錢
壹週分	金七十錢
二週分	金一圓卅錢
三週分	金一圓八十錢
五週分	金二圓八十錢
十週分	金五圓

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

ストリンドベルヒ作

「阿部次郎氏 江馬 修氏共譯」

赤い部屋

▼大判細字▲
▼五百十頁▲

江馬氏は英譯より、阿部氏は獨譯より譯出對照して嚴密に訂正し人名地名は瑞典語を調べたる苦心の名譯也

總洋布箱入上製
定價壹圓六拾錢
小包料金十二錢

誠に是れ世界的大傑作稀に看るの雄篇。誰か本書を讀まずして近代の文藝を談ずるを得ん!。

瑞典唯一の大文豪たるストリンドベルヒの代表作にして、其の自傳を經とし、當時の世相を緯とし、天才に特有なる絶對的の誠實を以て用捨なく人間生活の虚僞を剔出す。美くしき女優あり、不遇の天才あり、厭世家あり、陶醉の人あり。壁も天井も、血潮の如き紅を以て彩れる「赤い部屋」に集れる若き藝術家の群れは、或は革命の血潮を湧かし、或は悲戀の火に燃ゆ。情景複雜にして刺戟頗る强烈なる小説。これを原稿紙にして實に七百枚を超ゆるの雄篇。兩氏が二ヶ年に亘れる苦心の名譯として世評籍甚たり。

生田長江、大杉榮兩氏譯

ルソオ懺悔録

□全二册一千頁一册九十錢郵税八錢

赤裸々の自傳、人間の聖書と稱せらる。

ダンヌンツイオ作 生田長江氏譯

死の勝利

▲一圓四十錢 小包十二錢▲

文藝に志ある人は一度は必ず讀むべき世界的傑作

ミュッセ著 相馬御風 野尻抱影 兩氏譯

戀より戀へ

□上製極美本□定價七十錢□送料八錢

著者は若くして逝ける佛國の天才詩人本書は其僞らざる赤裸々の戀の懺悔也

トルストイ著 相馬御風氏譯

我が懺悔

□肖像二葉入□定價六十錢郵税八錢□

全人類の惱を代表せる大偉人の苦悶録

東京市牛込區矢來町中の丸 **新潮社** 電話番町二二二三番 振替東京一七四二二番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨を御附記乞ふ

特價撤回

[illegible]紙價暴騰す 締切と同時に特價撤回のみならず定價改正値上斷行す（前付の四）

大正名著文庫

特賣書目		著者
(1) 兎糞録	全	和田垣博士
(2) 人の運	全	大町桂月
(3) へちまのかけ	全	杉村楚人冠
(4) 罵倒録	全	浪六
(5) 吐雲録	全	和田垣博士
(6) 元禄 四十七士	上	浪六
(7) 元禄 四十七士	下	同
(8) 洗心録	全	幸田露伴博士
(9) 三叉文存	全	竹越三叉
(10) 活修養	全	前田慧雲博士
(11) 人の心	全	加藤咄堂
(12) 破木杓	全	大内青巒
(13) 搦手から	全	長谷川如是閑
(14) 妄人妄語	全	森鷗外博士
(15) 樂しい人生	全	前田慧雲博士
(16) 悦樂	全	幸田露伴博士
(17) 族から旅	全	加藤咄堂
(18) 幽芳集	全	菊池幽芳
(19) 放言録	全	浪六

特價 四六判特製美装 各冊四百頁以上五百頁内外 特價各冊金九拾八錢 定價各冊金壹圓貳拾錢 郵送料各冊金八錢

新譯漢文叢書

縮刷袖珍 特製天金

郵券二錢內容見本送呈

特賣書目	譯者	紙數	正價	特價	税
(1) 新譯 日本外史	大町桂月譯評	壹千貳百頁	一・五〇	・九六	八
(2) 新譯新評 文章軌範	友田宜剛譯	壹千百頁	一・一〇	・九〇	八
(3) 新譯 孟子	濱野知三郎譯註	八百頁	・九〇	・七二	八
(4) 新譯 日本政府	大町桂月譯評	三百五十頁	・五〇	・四〇	六
(5) 新譯 日本政記	大町桂月譯評	六百五十頁	・八〇	・六五	六
(6) 新譯 十八史略	久保天隨譯評	七百頁	・八〇	・六五	六
(7) 新譯新評 續文章軌範	友田宜剛譯解	九百三十頁	一・〇〇	・八五	八
(8) 新譯 國史略	大町桂月譯評	九百五十頁	一・一〇	・九〇	八
(9) 新譯 水滸全傳上	久保天隨譯補	千三百頁	一・二〇	・九〇	八
(10) 新譯 水滸全傳下	久保天隨譯補	千貳百頁	一・二〇	・九〇	八
(11) 新譯 論語	大町桂月譯評	八百五十頁	一・一〇	・九〇	八
(12) 新譯 演義三國志上	久保天隨譯補	壹千壹百頁	一・二〇	・九〇	八
(13) 新譯 演義三國志下	久保天隨譯補	壹千頁	一・二〇	・九〇	八
(14) 新譯 大學中庸	濱野知三郎譯註	三百五十頁	・六〇	・四八	六

學生文庫

大町桂月先生校訂解題

◎縮刷袖珍◎製本堅牢◎特製美本◎定價各金參拾錢◎記念特

特賣書目		紙數
一 南朝史傳	全	三四九
二 日本外史	上	二九六
三 益軒十訓	上	三〇六
四 謠曲全集	上	三一〇
五 曾我物語	全	三〇二
六 西遊記	上	三一四
七 源平盛衰記	壹	三三九
八 太平記	壹	三四七
九 心學道話	全	三〇三
一〇 常山紀談	上	三三〇
一一 日本外史	中	二七五
一二 益軒十訓	中	三一三
一三 先哲叢談	全	二七六
一四 義經記	全	三一八
一五 一休諸國物語	全	三〇〇
一六 常山紀談	中	三〇八
一七 益軒十訓	下	三〇九
一八 源平盛衰記	貳	三〇六
一九 謠曲全集	中	三〇三
二〇 西遊記	下	三一三
二一 百人一首一夕話	全	三〇六
二二 狂言記	全	三〇〇
二三 太閤記	壹	三六八
二四 大岡政談	上	二七九
二五 日本外史	下	二八三
二六 續心學道話	全	二八一
二七 禪學名著集	全	二七五
二八 四書	全	二八〇
二九 常山紀談	下	二九六

全部取揃へ即刻御注文に應ず金五圓以上一時に御買上の方は五分割引す

發兌 東京市本石町 至誠堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

〆切愈三月十日限

浪六全集

編	書名	定價	特價
壹編	當世五人男 前後 飯田健次 前後	一圓三拾錢	金一圓
貳編	上田力 前後 倉橋幸藏 前後	一圓三拾錢	金一圓
參編	川上三吉 前後 吉田婦峰、花車	一圓三拾錢	金一圓
四編	八軒長屋 前編	一圓三拾錢	金八拾五錢
五編	八軒長屋 後編	一圓三拾錢	金八拾五錢
六編	鬼あざみ 大和心 日本武士 金剛盤	一圓三拾錢	金一圓
七編	岡崎俊平 魚屋助左衞門 呂宋助左衞門 古賀市	一圓三拾錢	金一圓
八編	居家處世 人間學 正續	一圓拾錢	金八拾五錢
九編	男山 前後 高砂長右衞門 前後 男一匹	一圓三拾錢	金一圓

郵送料各冊内地八錢支那二十錢

井上十吉	上英和大辭典	二.五〇円	二.二〇円	一〇
三宅雪嶺	想痕	三.八〇	二.八〇	一六
大町桂月	修養の礎	二.二〇	一.七〇	一六
大内青巒	處世の道	二.〇〇	一.五〇	一二
杉村楚人冠	戰に使して	一.六〇	一.三〇	八
加藤咄堂	修養小品	一.二〇	.九五	八
村上浪六	我五十年	一.五〇	一.五〇	八
大町桂月	文章大辭林	三.〇〇円	一.三〇円	一二
同	桂月文選	一.三〇	一.三〇	八
同	文藻三百題	.六〇	.四五	六
同	ちび筆	.五五	.四〇	六
同	新訂日本外史	一.〇〇	.七五	八
同	少年文學日本人の弓矢	.六〇	.四〇	六
同	名士の四十七士觀	.五五	.四〇	六
同	箱根山	.八〇	.六〇	六

德川達孝伯	國民道德	[illegible]	[illegible]	八
杉村楚人冠	合本續大英遊記・一年半	一.五〇	一.〇〇	八
福本日南	大勢史	一.二〇	[illegible]	八
松内冷洋	世界大戰史	.八五	[illegible]	八
友田宜剛	現代作文新辭林	一.〇〇	[illegible]	一二
同	口語文語大正新書翰	一.二〇	.九六	八
同	中等教育作文自習寶鑑	一.二〇	.九六	八
同	國語國文實用新辭典	一.五〇	一.〇〇	八
同	小學教育に於ける文法と綴方との關係	一.五〇	.九〇	一〇
澁川玄耳	一萬金	.八五	.九〇	八
和田垣博士	世界商業史要	一.二〇	.九〇	八
同	青年諸君	一.〇〇	.八〇	八
幸田文學士	冠註古事記讀本	.九五	.七五	八
竹中信以	ポケット孝經講話	.三五	.二八	四
カーネギー 山崎梅處譯	勤儉の教訓	.六〇	.四五	六
床次竹二郎	歐米小感	.五〇	.三五	六
三上正毅	外遊十二年	一.〇〇	.五〇	六
安東鶴城	英和對譯寸鐵警句集	.四五	.三五	四
菅原曇華	婆言翁語	.三〇	.二二	四
芦川忠雄	父の書簡	一.三〇	.八五	一二
同	修養と人物	一.〇〇	.七〇	一二
同	修養座右錄	.六〇	.四五	六
同	克己座右銘	.二〇	.一六	四
同	談話術修養	一.〇〇	.七〇	一〇
同	交際と應對	.五〇	.四〇	六
同	交渉規範 なかれ	.三五	.二八	四
同	時間の經濟	.六五	.四五	六
同	奮鬪の本領	.六五	.四五	六
同	勤儉の實踐	.六五	.四五	六
浪六	日露戰爭	.六〇	.三〇	六
同	男女の戰ひ 正	.九五	.六五	六
同	男女の戰ひ 續	.九五	.六五	六
同	黑雲	.九五	.六五	六
同	雪達摩	.二〇	.七五	八

著者	特賣書目	正價	特價	郵稅
熊田葦城	日本史談 大阪陣 冬	二.〇〇	一.二〇	一二
同	同 大阪陣 夏	二.〇〇	一.二〇	一二
森田小六郎	ヤンキー	一.二〇	.七〇	八
坂本辰之助	明治天皇御大喪記	二.〇〇	.六〇	一〇
同	乃木大將と其夫人	一.〇〇	.六〇	八
牛門隱士	近世偉人百話	.五〇	.四〇	六
同	近世續偉人百話	.六〇	.四五	六
中川克一	天覽山陽外史	.七〇	.四〇	六
柳川春葉	誓（前篇）	一.二〇	.九六	八
瀬川博士	最新育兒のをしへ	.八〇	.六〇	八
同	最新小兒病手當法	.六五	.五〇	八
碧瑠璃園	史傳小説 高山彦九郎 前	.八〇	.五〇	八
同	同 後	.八〇	.五〇	八
同	白河樂翁 前	一.二〇	.八〇	一〇
同	同 後	一.二〇	.八〇	一〇
同	家庭讀本 春日局	一.〇〇	.六五	八
同	家庭讀本 大石陸女	一.〇〇	.六五	八
蓑笠翁	偉人小説 水戸光圀	一.〇〇	.七〇	一〇
篠原靈瓏	旅順の花	.八〇	.四五	八
中村白鳳	運命	.八〇	.四五	八
香衆浪人	史傳小説 後藤又兵衛	一.〇〇	.六五	一〇
原穂村	蒲生氏郷	.四〇	.二五	四
瀬戸半眠	珍々間語	.五〇	.三〇	四

全貳拾貳錢（郵稅各四錢）

（三三）太平記 貳卷
（三四）源平盛衰記 終
（三五）太閤記 三
（三六）謠曲全集 下
（三七）太閤記 四
（三八）太平記 三
（三九）太閤記 終
（四〇）太平記 四
（四一）太平記 終

……三六六番
……東京一七四四番

紙質の撰良なる名著を廉價に得る時は今！此好機會は再び來らず即刻申込あれ（前付の五）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新會期本年一月より開始——會費至廉——目下入會最好時機

會長 伯爵 大隈重信
編輯長 法學博士 浮田和民
理事長 市島謙吉
編輯顧問 十九博士五大家

新大日本文明協會

創設以來約八箇年帝國文運の開發に貢獻せる本會は舊臘今上陛下御即位大典奉祝紀念の爲め組織の革新事業の擴張を計畫發表し既に着々之を實現しつゝあり。今や眞摯確實なる本會の聲價は益々大を加へ江湖識者の賛同いよいよ旺盛となる。此際有志者は奮つて本會に加盟あれ。

（本會の事業は不斷に發展し永久進歩的社會教育に任ず）

略則

毎月一卷づゝ、世界的學術名著刊行頒布（非賣品）
四六版型ポイント式活字毎卷紙數平均大約四百五十頁
選擇適切、譯述は正確平明、編纂は叮嚀親切最も要を得たり

會費
（通常）毎月分納金壹圓也
半年分金五圓五拾錢
一年分金拾圓也
（特別）毎月分納金壹圓五拾錢
半年分金八圓廿五錢
一年分金拾五圓也
▲月納會員は別に入會金壹圓を要す

會則 來報次第無料送呈

第一卷 一月刊行
歐洲大戰の經驗
口繪並に精密戰局圖、其他寫眞版數葉入

第二卷 二月刊行
幸福學
佛國現代大哲フイノー氏最近世界的名著

第三卷 三月刊行
婦人と犯罪
社會の內相及び人生の機微を穿てる快著

（申込所）東京市麹町區元園町一丁目
大日本文明協會事務所
（電話番町三五四二番●振替東京二一八九〇番）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

古河家經營

博愛生命

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電長本局一八五六、五一五〇、一二八七番
振替貯金口座東京一七一七番
支店 大阪市東區本町一ノ一三(電長本局二三一一番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり



中央公論第卅一年三月號目次

▲公論

▲說苑



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

MAX BOHM



Woman and Child

中央公論



三月號
第卅一年第三號
第三百二十八號

大戰後の世界的競爭

(一) 文明の表面と裏面

近世歐洲の制度文物は羅馬希臘の精華を移し、加ふるに猶太の高崇なる宗教觀の光明に輝き、燦爛として古今東西文明の絶頂に達せるの觀あるは爭ふ可らず、其物理科學の驚くべき進步は交通の便を開き富の生產を普及し、生活の苦痛を輕減して以て物質的樂土を眼前に實現するの槪ある耳ならず、人道主義の發達は平和論、非戰爭的計畫の高調を來たし、殊に社會主義の流行は其實行不可能の疑義頗る多きに關はらず新福音として各方面に歡迎せられ個人競爭に疲憊せる社會に一種の向上心と慰安を與へつつあり、此れ實に歐洲文明に對する表面の觀察にして、而かも必ずしも虛僞ならず、幾多の學者は人生

の苦痛を輕減し其幸福を增加せんが爲めに犧牲的に研究に從事し、幾多の博愛家は資産を倒盡し心力を傾注して人道、平和の實現に努力しつゝあり、試みにナポレオン大戰爭當時と百年後の今日とを對照比較せんに、此間に於ける人道の進歩頗る人意を强ふするものなくんばあらず、其一例を擧ぐれば奴隷制度は當時世界一般に行なはれ、黒奴賣買を以て有名なりし北米合衆國、西印度諸島等は言ふも更なり、露西亞、普魯西の如き何れも農奴ありて土地と共に賣買されたりき、然るに百年後の今日は如何、地球上何れの地方に於ても人權を認識し奴隷若しくは農奴の制度を一掃し、我邦維新以來の進歩の如き亦た世界一般に於ける人權發達の影響を受けたる結果たらずんばあらず、其他鑛山、工場に於ける勞働者に對する保護の漸く見るに足るものあるに至れるが如き亦た進歩の一例として指定するに足れり、戰時の規定に關しても亦列國赤十字社の會合又は平和會議の決議に由て大に進歩の跡を認むべく、今次の歐洲戰爭に於ける獨逸軍の横暴は人道を破棄して毫も國際規定を顧みざるが如くなるも、多くは是れ潜航艇、飛航機、毒瓦斯等新武器の使用に聯關して未だ以て慣例を成すに至らずして、大體に戰爭の慘憺を及ぶべく丈け輕減せんとする觀念の現存することは否む可らず、斯くの如く觀し來れば過ぎし一世紀間に於ける人道の進歩大に見るべきものありと謂つべし、然れども同時に是れ表面の光明ある一方の觀察に過ぎざることたるも亦た記憶せざるべからず。若夫れ歐洲文明の暗黒方面に至りては亦實に言ふに忍びざるものあり、其最も顯著なる一例は列國經濟上の競爭に在りと云ふべく、即ち世界市場に對する爭奪の競爭は自ら統治權の競爭を來たし、遂に今次の大戰爭の原因をなする至れるが如き是れなり。

抑も人類個々に就きて之を觀るに名譽の慾あり權力の慾あり、財產の慾あり、男女の慾ありと雖も、最も根本的にして人生の終始變らざるものは飮食の慾に外ならず、人にして名譽、權力、財產の慾なきものあり、性慾の如き一生中の或時期に限られ其前後の時期に於ては毫も其發動を見ざるなり、而かも飮食の慾に至りては母胎を出で呱々の聲を揚ぐる一瞬時より老衰の末期一滴の水に脣を濕ほして世を辭するまで一日として忘ること能はず、釋尊が斷食苦行の後に或る長者の娘が與へたる一椀の粥に舌鼓を打ちし如く、基督が十字架上に磔せられつゝ我渴くと呼び海絨に漬たせる醋を啜りて事竟りぬと云へりしが如く、大聖尊者も亦た飮食慾の自然性に制せらるゝを免れざりしを見るべし、更に之を國家國民に就きて觀んに、曾て宗教の爲めに國家を賭して爭ひしことあり、中世紀歐洲十字軍の運動の如き、又は十七世紀に於ける獨逸三十年戰爭の如き是れなり、我邦に於ても元龜天正の頃に於ける各宗本山の信長の統一政策に抗爭せしが如く又は一部の耶蘇教徒は肥前天草に於て德川氏に對し最後の抵抗を試みしが如き亦た以て宗教の利害が國家の利害以上に優越して認められし時代の特徵として見るべきなり、近代歐米を初め世界一般何れも宗教の利害を人道以上に重視するの風なく、獨り天主教と新教との關係の大に親和せる耳ならず、舊新兩派の基督教と佛教印度教其他の異教との關係まゝ漸く緊張の程度を緩弛せるを認めざる能はず、其の理由に至りては或は之を比較宗教學の進步、普及に歸すべく、或は東西交通の密接に及べる人情の接近にも歸するを得べく、又た或人は之を近代思想の現世的傾向に從ひ宗教觀念の薄らげる結果なりとも云はん、其の理由は兎も角も宗教的憎惡怨恨の次第に世界の人心より根絕せら

れんとするは爭ふ可らず、現時世界の各宗教中最も頑迷に凝固せるは回々教徒とせらる、而して數年來摩洛哥より埃及に及び土耳其、波斯、阿弗肝を經て印度に達し宗教上神聖戰爭の氣勢を高めんとするの傾なきに非ずして、獨逸皇帝は手を變へ品を換へ全力を盡し此の氣勢を煽揚するに努め來れるが如きも、今次の大戰爭に際し未だ大に此の傾向を利用するを得ず、神聖戰爭のこと遂にカイゼル一場の妖夢を以て終らんとするが如き以て世界大勢の歸趨を察すべからずや。

次に人種問題は世界最後の爭因なりと論ずるものあり、近來の歐米にて最も率先して人種問題を國際政爭の具に供せんと試みしものを現獨逸皇帝とす、カイゼル維廉二世は今より二十餘年の以前、日清戰爭の終に臨み早くも黃禍論を首唱し、當時世界の物議に上りし如く、帝自ら筆を執りて蒙古民族が巨大の佛像を推立てゝ雲霞の如く歐洲に襲來する想像畫を描出し以て大に警鐘を鳴らすに努めたるも、終に識者の眞面目なる考慮を動かすに足らず、其より幾許もなくして英國は却て我日本と同盟の約を締するを見るに至れり、濠洲聯邦の有色人排斥、米國の排日運動等、一部論者の太平洋を白人の有に歸すべしとの主張に伴ひ國際の風波を多少蒞立てたるに相違なきも、未だ甚だしきに至らざるに際し今次の歐洲大戰勃發したりしかば、各國とも國家存亡の問題に接しては流石に人種の異同を口にするの遑なく、濠洲人は日本の援助を大に德とし獨逸人は土耳其の歡心を買ふに汲々たり、加奈多は歸化日本人の軍隊を組織して之を歐洲の戰線に派遣せんとし、米國亦た稍々排日感情を緩和せるかの觀なきこと能はず、過般澁澤男の米國より齎せる消息に由れば排日の原因は全く白人勞働者と日本勞働者との勞銀の競爭に在

りと云ふは、未だ這般の事情を說得て餘蘊なしとは云ふ可らず、何となれば有色人種にして白人と同等の實力を發揮し平等の權利を主張する日本人を不快視するは隱れなき事實にして、之を以て排日の一大動機と做すべきは何人も之を否む能はざるべければなり、然れども脊に腹は替へられず人種の觀念は暫く忍ぶべし生活問題の競爭は寸時も忘る可らず、故に勞銀の競爭を以て排日運動の根本の動機と見るは蓋し失當と云ふ可らず、之を要するに今次の戰爭の開展に由り列國關係の動機としては宗教問題以上、人種問題以上、別に重大の問題あること火を見るよりも明白となれるは頗る興味ある事實と云ふべし、其別に重大の問題ありとは他なし、國家の興廢存亡と直接の關係ある經濟力及び統治權の發展、別言すれば世界市場の爭奪、是則ち國際關係の最終の動機なり、宛も個人の關係に於て名譽、權力、男女の慾よりも何よりも、飮食の慾は根本的にして最有力なるが如く、國家關係の動機としても世界に於ける經濟競爭を以て最終にして最大の動機と做さゞる可らず。

斯くて歐洲の文明には表面と裡面と自ら別樣の光景を呈し、一方に於ては文藝美術を以て社會を裝飾し化學の應用に由り人生の便利幸福を無限に增大し、以て人道と平和の理想を直に地球上に實現せんとするに對し、他の一方には列國內に資本と勞働の衝突あり外には世界市場の競爭あり、各々堪へ難きの兵備を維持し、之を平和の保障と稱したるも素より戰爭の爲めの兵備たるは今次大戰の勃發により說明せられたり、即ち表面には仁義博愛を標榜するも裡面には弱之肉は是れ强之食、文明社會は依然たる生番氣質を實現せり、人道の理想虛僞なりと云ふには非ず未だ文明國民を敎化し能はざるなり、弱肉强食

の光景甚だ悲慘悽愴ならずとせず國家生存の必要上亦實に已むを得ざるものなくんばあらず。

（二）列國の殖民地爭奪

近世西歐民族の覺醒勃興が主として世界航路の發見に刺激せられしに由れる如く、爾來數百年間の列國間の紛議戰爭亦多くは殖民領土の問題に關係あり、此間宗教改革の問題起りて、十七世紀の英國革命、獨逸の三十年戰爭は主として宗教問題は起因せしも、素と是れ一國內の問題に屬し國際性質を佩ぶること極めて少なし、之に反して第十六世紀に於ける英國と西班牙の大戰爭の如きは純然たる殖民戰爭にして、即ち西班牙は葡萄牙と世界の新發見地を二分して獲得せる中米南米を初め其他の領土に對する通商貿易を獨占せんと欲し、英國は之に突貫して其獨占權を奪はんと欲したるに外ならず、此一幕の英國の勝利を以て終るや、次に英國及聯合諸國と佛國との大戰爭ありて、其表面の理由は佛王路易十四世の歐洲大陸に對する飽くことなき野心を掣肘するに在りしも、英國が多大の補助金を列國に分配して聯合を成立せしめし裡面には佛國の殖民地を奪はんと欲するの野心を包藏せり、即ちウツレヒト平和條約に由り英國が地中海の咽喉に於けるヂブロルターとミノルカ嶋、北米のニウフオントランド、ハツトソン・ベイ、西印度のセント・キツド等を獲得して以て其殖民帝國の基を擴大するに至りしを以て證す可し、降りてナポレオン戰爭に對しても亦た英國は更に露骨に同一筆法に出でたり、此時の敵手たりしナポレオンは不世出の人傑たりし程ありて、路易十四世の如く着眼平凡ならず、先づ歐洲を蓆卷して次に英國を伐ち以て印度を初め其殖民地を奪はんと欲するの志を抱けり、彼れが曾て埃及遠征を試みしこと又た露帝

アレキザンドルと印度征討案を協議せしことの如き以て明に其志の存する處を察すべきなり、而してウイエナ會議の結果として英國の利せし處を觀れば悉く殖民領土の獲得に在り、即ち地中海に於てモルタ嶋、印度洋に於て錫倫嶋、モリシャス嶋、亞弗利加南端の希望峰、西印度のトリニダット等を其版圖に加へ以て其世界帝國の基礎を完成するを得たり、英國の學者は其殖民地經營の歷史を論ずるに當り寧ろ其無方針、無經綸なりしを指摘して竊に得々たるの傾ありて一に皇天が英國民に幸する處ありしに由れりと論結するが如くなるも、吾人を以て之を觀れば素より區々たる一方面の問題に付てまで悉く預定の計畫ありと云ふには非れども、過去三百年間英國民が專心一意世界市場の開展に努め、不屈不撓の精神を以て領土の獲得と其各領土間を聯關すべき航路の開通に向つて周到の經綸を立てたることは何人も爭ふべからざる事實たり、皇天如何に英國民を寵遇すと云ふと雖も英人自ら深謀遠慮、能く奮鬪努力することなくば如何で國運の隆盛終に今日の如きを見るを得べけんや、斯くて英國の殖民帝國は其處衷實に全世界面積の五分一弱に及び、其人口に於ては五分一强に達し、大にしては印度、北米カナダ、濠洲、南阿弗利加の如きありて、小にしては星羅棋布して全世界の各方面に及び、米のダニエル・ウェブストルをして英皇の配下には永久日の沒することなしと稱歎せしめしもの實に故なきに非ず。

英國に次ぎて殖民領土の獲得に成功したるを佛蘭西となす、佛國は曾て北米大陸を英國と爭ふて敗れ、又印度を獲んと欲して遂に英人に先鞭を着せられ、加ふるに普佛戰爭後は頗る失意の境に在りしが、一八八〇年代に入りてより頓に殖民地擴大の必要を自覺せるもの丶如く、阿弗利加北岸のチウニスを初めと

して、アルゼリヤ其他西岸一圓に莫大の領土を獲得し、東岸に於てはマダガスカル嶋を版圖に加へ、更に安南、東京を獲て印度・支那領の境域を完成し、摩洛哥の如きは最近に至り僅かに獨逸との交渉を終結せり、斯くて一八八〇年以前に於ては佛國の殖民地は僅々三十餘萬方哩の面積を有するに過ぎざりしに關はらず、今や實に無慮四百七十餘萬方哩の廣袤を有して乍ち從前に十倍し、英國に次て世界第二の殖民帝國を有するに至れり、而して佛國殖民地の第一の長所と云ふべきは其多くが其の母國に接近することに在り、チウニス、アルゼリヤ、摩洛哥は地中海を距てゝ一衣帶水の對岸に在り其他亦多く阿弗利加洲中に屬して甚だ遠からず、次に其長所と云ふべきは其の能く集團的なることに在り、即ち其大部分の一大陸の内に在る耳ならず印度・支那の如き美事なる一圓を成して頗る統治に便なるものあり、佛國第三共和政の事蹟中その殖民地經營は蓋し將來の史上最も光輝ある數頁を添ゆるものならずんばあらず。

其國勢の隆々たるに關はらず、殖民地經營に於て頗る振はざるものは獨逸なり。獨逸の殖民地は何れも一八八四年後の獲得に係り、單に其面積數のみを以て觀れば一百餘萬方哩に及び佛國殖民領土の四分一に當るも、其大部分は南緯十度内外の亞弗利加の西東部に在りて、氣候の關係上經營頗る容易ならざる耳ならず、甚しく官僚主義を發揮せしが爲め從來の經驗は多く失敗に屬せり、其他に在りては南太平洋上の諸島にして、ニウギニーの一部、ビスマーク群島、カロリン群島等に過ぎずにして、多くは是れ彈丸黑子の土塊のみ、獨り支那に於ける膠洲灣の租借地は二百方哩の小地域に過ぎざるも、山東鐵道及津浦線北段に聯關して獨逸の勢力は山東省全部と直隷の一部に及び、經營亦た着々成功の觀ありしは最

も著しく世界の視聽を惹けり、斯くて獨逸は佛國に對し大陸に勝ちしも、殖民地の經營に後れを取りて宛然背後に瞠若たり、獨帝が獨逸は廣き世界に『日當りの好き土地』を懇望すと哀訴するに至れるも、世界中の有りとあらゆる土地は其日當りの好きも、好からざるも、皆な既に分配され了り、是より新たに獲得せんとするものは兵力に依り他の所有を奪取せざるべからず、左もなくは葡萄牙又は土爾其の如き破產若しくは死亡に近き國の領土、屬地を相續すべき方法を取るの外領地擴大の道あらざるなり、是れ則ち一方に陸海の兵備を充盈し乾坤一擲の國際勝負を期する傍ら獨逸は土耳其を懷柔し英國は葡萄牙と同盟を協約し、又列國競ふて支那人の歡心を買はんことに熱中したる所以なり、而して獨逸は殖民地經營に立後れたるが故に、世界の變亂を希望し國際的大博奕を敢てせんとするの情切なり、或は摩洛哥問題を提げて佛國に强談を試み或は巴爾幹問題を以て露國の屈從を强ゐんとし、其兵力財力の充實するに任せて各方面に當り散らせし結果遂に今次の大戰爭を爆發するに至れるものなり、獨逸が近年盛んに海軍擴張を行ひ英人を驚かすに至れるは正さに其野心の一端を暴露せし所以にして、夙とにカイゼルの野心を看破して英佛の接近を謀り以て今日の三國協商の地を作りしものは英の先帝エドワード七世なり、而して獨逸の海軍擴張歲々止まるを知らず、英國が獨の一に對する一、六の擴張を以て妥協せんと試みて成らざるや獨逸の志す所は英の制海權を奪はんとするに在りと云ふこと始めて一般に認めらるゝに至れり、獨逸は英國の意氣容易に屈す可らざるを觀るや、遂に一對一、六を以て假りに妥協するの決心を爲し、同時に五億圓を投じて陸軍の大擴張を行へり(一九一三年)當時その理由として是れ巴爾幹戰爭の

結果東方國境の防備を充實するの必要あるが爲めなりと聲明せしも、其の眞の理由は一時英國と妥協して此國を佛露より分離し、先づ露佛と戰ひ、露の勢力を巴爾幹より驅逐し、佛國より其殖民帝國を奪取し、一先兵を休めて後再擧して英の世界帝國を覆さんと欲するの遠謀大略を定めたるに外ならず、斯くて殖民地經略の問題は近代に至り益々露骨に國際爭亂の動機たるに至れるを見るべきなり。

（三）大戰後の世界的競爭

大戰後の世界競爭を豫想せんとするには先づ戰局終結の狀態を豫想せざる可らず、若しも聯合軍側に於て當初より期待せるが如く獨逸の軍國主義を全滅することを得べしとせば、戰後少なくとも數十年間は獨逸の世界政策に惱殺せらるゝの憂なく、從つて世界市場に對する競爭亦た特に激甚を加ふることなかるべし、然れども聯合諸國果して豫期の如き完全の勝利を占むるを得べきや否や、現に開戰後十有九月を經過する今日獨軍は白耳義を占領し、佛の東北諸州の一半を奄有し、又た露領ポーランドを略し、巴爾幹方面に於ては獨墺軍の向ふ所敵なく塞國黑山國已に其奄有する所となり、聯合軍は僅かにサロニカを占據して戰機の熟するを待たんとするに過ぎず、故に世間一部の論者は到底互角の勝負を以て局を結ぶより外途なしと悲觀するものなきに非ず、是れ皮相の見を以てせば或は一應首肯すべきに似たらんも、吾人の見る所に依れば前途必ずしも斯くまで悲觀すべしとは思はれず、近時西方戰線に於て佛軍が隱然大に其實力を加へ來れるの觀あるは爭ふべからずして、其兵の素質益々精銳を加へ重砲の如き亦漸く獨の砲火に敵すべき巨砲の鑄造を了り、英軍に於ても亦數、質ともに益々整備し、英佛とも最後の戰

勝を期し元氣頗る旺盛なるに似たり、東方の廣き戰線に於て露軍は近來頻りに高加索に於て土軍を破り、エルゼルムの堅塞ヶ拔きて、將にメソポタミやの英軍と策應して土軍南進の背後を脅かすべき氣勢を示しつゝあり、而してガリシヤ、波羅的諸州方さに一大活動を開始せんとするものゝ如く、之に反し獨軍は漸く其精兵の數を減じ新兵又は老朽を以て補足彌縫するの狀態なるより察すれば今後勝敗の數未だ必ずしも過去の成蹟を以てトす可らざるものあるべし、吾人は獨逸が最後まで最も頑强に、最も勇敢に奮鬪し其一たび占據せる地歩を容易に退却すべしとは思はず、然れども歲月は獨墺の大敵にして是より漸く聯合軍の味方となるべし、歲月を閱みすると共に兵數を損し、財政の困難を加ふることは双方孰れも免れざるも、聯合軍側の損害は獨墺側の如く甚だしからず亦た其補充の方法も比較的に備はり居れり、吾人は今春より夏にかけて戰局自ら一變し聯合軍側の形勢漸く樂觀に傾くべきを豫期せんと欲す、而して玆に世人が戰局の打算上に殆んど忘却せるが如き觀あるは獨逸殖民地の喪失にして、其實質に於て最も價値あるは膠洲灣なるも、其廣袤を以てせば東方亞弗利加、西南亞弗利加最も面積に富み合計無慮七十萬方哩に及ぶ、此外南太平洋の諸嶼島の如き何れも獨逸が非常の苦辛を以て獲得したるもの、而かも是等の殖民地は悉皆已に日英佛の占領に歸せり、今後もし歐洲の戰場に於て獨軍が其東西の國境内に驅逐せらるゝこととなり、其海軍亦一大打擊を蒙るにも至らは、殖民地の略占と共に聯合軍は六七分の勝を占め得るに至らん、即ち軍國主義を全滅することは能はざるまでも之に一大打擊を與ふるを以て終結することは蓋し必期し得べしとせんか。

然りと雖も軍國主義に一大打擊を與ふるは必ずしも之を全滅する所以に非ず、之を全滅せんと欲せば普魯西の獨逸に於ける優越を打破し個人として維廉二世の讓位を見るに至らしめざる可らず、而かも斯くまでの大打擊を與ふることの軍事上頗る困難なるべき耳ならず、戰敗後獨逸國民は果して今次戰禍の全責を獨帝及び之を繞圍せる軍人派に歸するを肯すべきや否や甚だ疑問とせざるを得ず、抑も獨逸國民は上下一同此次の開戰を以て英露佛の猜疑、嫉妬、野心に基づくと思惟し、獨逸は止むことを得ず自衞防禦の爲めに應戰しつゝありとの信念を抱けるに似たり、是れ素より事の實際を顚倒せるものにして獨逸人民の愚憐むべしと雖も、果して斯くの如き信念を抱けりとせば戰敗の故を以て獨帝に對し多大の同情、崇敬を拂ふことこそあれ、決して其讓位を要求するの擧に出でざるべきこと疑ふ可らず、然れば戰局の終を豫想せば聯合軍六七分の勝に歸すべし云ふを妥當の見と云ふべく、普魯西の軍國主義を根本的に打破すと云ふ如きは、言ふべく、遂に行ふ可らずと斷定せざる可らず。

既に普魯西の軍國主義を根本的に打破す可らずとせば、獨逸は必ずや臥薪嘗膽十年を期して復讐戰を企圖すべきこと疑を容れずして、英や佛や露や戰時の經驗に顧みて大に兵備を張るの擧に出づべきこと想像に堪へたり、且つ獨逸は全力を盡して英佛露の離間に腐心すべく、戰後二三年の後には果して如何の變局を現出すべきや素より測量す可らず、現に國際關係の前途頗る險惡にして、平和主義者輩の希望するが如くならざるべきは、米國政府最近の主張に由りても察すべし、即ち今や米國は多年非帝國主義を唱へ來れる民主黨の全盛時に屬し、方に軍備制限をも實行すべかりしにも關はらず、大統領ウイルソ

ン氏は軍備擴張の題目を提げて全國遊說の途上に在り、世の論者或はウィルソン氏の軍備主張を以て與論に媚びて來らんとする總選擧に資せんとすと評するものあれども、吾人は之に與みせず、寧ろ此說を以て一願の價なき皮相の見と云ふを躊躇せず、元來民主黨は多年海軍擴張に反對し來りし歷史ある耳ならず大統領ウィルソン氏は國家重大の利害を政爭の具に供せんとする如き煽動政治の流にあらず、其軍備擴張を高調するに至れるは必ずや大に歐洲の時局に鑑みる所あり、且つ戰後の國際關係に備ふ所あらんとするに由らずんばあらず、前大統領ルーズヴェルト氏の軍備擴張論は吾人已に其說を聞けり、幾分の危虞疑惑を以て之を聞けり、而かも重厚なるウィルソン氏亦之に和すると云ふに至りては吾人は宇內の形勢眞に止む可らざるものあるを肯定せずんばあらず。

然るに玆に世人をして米國民主黨の軍備擴張の眞意を疑はしむる所以のものあり、他なし菲律賓放棄の英斷是れなり、米國元老院は旣に向後二年乃至四年を以て菲律賓群島より米國の主權を徹回すべしと云ふの案を通過せり、而して菲律賓獨立の事は民主黨多年の主張にして、且つウィルソン氏亦た公會の席上之を是認し、下院の多數民主黨に屬する以上、此案の必ず代議院を通過し遂に大統領の裁可を得べきこと疑ふ可らざるに似たり、今菲律賓獨立案の內容如何に關はらず、合衆國が其主權を該群島より徹回するとせば是れ則ち一種の退嬰にして、此退嬰策を一方に行はんとし一方に軍備大擴張を行はんとするは形式上矛盾を免れず、一派の論者が之を見て軍備擴張の眞意を疑ふ亦一理なきに非ずと言はざる可らず、然れども更に一歩を進めて之を考ふれば菲律賓の徹退案は却てウィルソン氏及び民主黨の軍備擴

張に對するの誠意を間接に保證するものたること自ら明白ならん、請ふ試みに之を說かん。

北米合衆國にして果して大に軍備を擴張し、國際間に於ける其主張の支持を之に求めんと欲するに於ては、先以て其對外國是に關する思想を徹底せしむるの必要あり、抑も米國は一八二三年以來モンロウ主義を主張して歐洲諸國の亞米利加南北大陸に對する政治的干涉、若しくは侵略、を防遏し來れる歷史あり、即ちモンロウ主義は米國の萬里の長城にして、一たび此の長城を徹回せんか歐洲舊國の政治的勢力は潮の漲るが如くに中南米諸邦に侵入し來るべきは合衆國人の寸時も忘る能はざる所なり、殊に獨逸は今次の戰爭に於て志を得ず却て其從來の殖民地をさへ喪失せんとする現狀に在りて、且つ獨逸の君臣が國際條約の神聖を犯して平々然たるより察すれば、戰後或る機會に際しモンロウ主義に抗議し又たは不意に之を突破して、ブラジル、アルゼンタイン等に侵略を試みんこと決して豫想す可らざるに非ず、斯る歐洲强國の暴擧を防遏せんには單に口舌文章の主張を以て足れりとせず、獨逸軍國主義の前には口舌文章は云ふも更なり、條約も公法も多年の歷史的傳統政策も皆な是れ巨人が手を振ふて蜘蛛の巢を掃ふと一般なればなり、然れば米國として軍備擴張を必要とするは自ら明かなり、決して一時の政略方便に非ず歷史的國是を維持すべき必要條件たればなり、然れども米國がモンロウ主義を維持せんとするに付ては兵力以外更に他に一の弱點あり、他なし米國が西班牙と戰爭の結果として亞細亞洲の沿岸に於ける非律賓を領有せしこと是なり、即ち米國は非律賓の領有により兩米大陸以外世界の何れの方面にも領土を略取するの權利を主張したるも同樣にして、自らは世界何れの方面にも侵略を試むべく、他の國は

一歩も兩米大陸に侵入すべからずとは甚だしき矛盾、甚だしき我儘勝手の主張と云はざる可らず、是れ識者の夙に指摘したる弱點なりしが、若しも獨逸英國を初め世界の公論を盾に米國に對しモンロウ主義の抗議を試むべき場合來ることありと假定せば、米國が依然として菲律賓を領有せんことはモンロウ主義の理據を甚だ薄弱ならしむべきものたること想像するに難しとせず、想ふに前年民主黨の大統領クリウランド氏がヴエネズウエラ問題に關し獨英に猛烈なる通告をなせし關係もありて民主黨として殊にモンロウ主義の理據を堅固にするの必要もあらん、兎に角菲律賓獨立の期限決定は宛も野を清ふして敵の襲來に備ふるものと謂つべし。

（四） 世界競爭に對する準備の必要

之を要するに戰後宇内の形勢は益々世界市場の爭奪を激甚ならしめ、國際關係の變化測量し難きものあらん、此の傾向を最も早く看取し準備を急げるものは流石に北米合衆國なり、蓋し合衆國が其勢力圈内と見做せる中米南米は今後の殖民地として歐洲舊國の垂涎措かざる所なればなり、中米南米と共に、寧ろ之れ以上に世界市場として列國爭奪の焦點たらんとするは支那方面なるべし、移民地として、新國建設地としては南米を以て最も優れりとすべきも、市場として、實業發展の新天地としては四億の勤勉なる民衆を有し、氣候中和を得て無盡藏の富源ある支那の右に出づるものある可らず、其他殖民地としてはスマトラ、ボルネオ、ニウギニー、濠洲、大凡そ無人の土地ある所は必ず列强爭奪の舞臺となるべし、我日本は極東に於ける唯一の强國として此際疾くに其地歩を開拓すべき準備なかる可らざる耳ならず、

亦た此方面に於ける列强の競爭軋轢を緩和して東洋民族の平和安寧を保護すべき天職を有す、此天職を感ずるの點に於て我日本國民は北米合衆國民がモンロウ主義に於けると頗る髣髴たるものなくんばあらず。

論じて茲に至れば讀者或は吾人を以て將に軍備擴張の必要を說かんとすと思はれんも、我陸軍は既に二個師團の增設を斷行し、海軍亦た八四艦隊の設置に着手せる今日、吾人は新たに陸海軍の擴張を說くの必要を認めず、但し飛航機潛航艇の設備等特に大に計畫すべきもののなきに非ずとするも、此等は事自ら小にして今茲に改て論ずべき限りに非ず、吾人の論ぜんと欲する準備の必要は別の方面に在り、古人曰く天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずと、想ふに今日我日本が其極東に於ける天職を果たさんとするに際し天の時方に來り、地の利已に存するも、我國と對岸の支那國民の間には果して十分意思の疏通を見るや否や、不幸にして日支間の關係は往々圓滿を缺き、殊に昨春の日支交涉以來支那人の我を見る事每に猜疑心を挾むを免れず、帝政延期の勸告以來更に甚だしきものあるに似たり、極東の平和は日支兩國民の一致協力を以て始めて之を把持すべく、兩國和を失すれば假令我に兵力餘あるも何に由りて天職を盡し得んや、抑も我邦の支那に對する啓發扶持を主眼とし侵略分割を目的とするものに非ず、日支相依り相援け以て唇齒輔車の實を全ふせんと欲するに在り、我國の興廢一に繫がりて日支關係の親和にある如く、支那もし列强の侵迫を免れて獨立自强の實を擧げんと欲せば我邦と結托するより外策の出づべきなきは天の時、地の利の示す處なるに關はらず、兩國間親和雍睦の實擧らざるは吾人

の常に遺憾とする處なり、今や大戰正に闌にして是より一般に國際的關係は益々險惡ならんとし、列國の殖民的競爭は愈々激甚ならんとするに際し、我當局に一貫の主張なく右にも左にも列國の誤解を招かんとするが如きは吾人の最も痛歎に堪へざる所、蓋し近き將來に於て政局一變し自ら外交刷新の機會に接せんことは吾人の竊に期待する處たらずんばあらず。

大隈内閣存在の理由なし

海軍を廓清し政友會の横暴を膺らすを以て成立の一理由となせし大隈内閣は其閣僚中より瀆職違犯者を出だし、且横暴なる政友會の代りに横暴なる與黨を現出して其の存在の第一理由を滅却せり、日獨開戰は其時機方法に關し幾多疑問の存せしも兎にも角にも事を海外に構へたる以上擧國一致の必要あり、爲めに現内閣が其内治上前日の言質口約に制せられて瓦解すべき運命より脫するの機會を得たる耳ならず、戰局の持續する以上現内閣も亦存續するを要すと思惟されたり、然るに爾來現内閣の外交は國家の爲めの外交に非ずして、一種人氣取りの方便なるやの觀を免れずして、却て内には識者の疑惑を醸し外、列強の信頼を失したるの跡歴々たり、大戰參加當時の事已に大に議すべきものある耳ならず、昨春の對支交涉の如き大失態を演じ、更に最近の帝政延期勸告の如きも、人をして殆んど其目的の存する處を解するに苦ましむるものあり、帝政派の我を深く怨むのみならず、革命派亦た我國を以て支那の獨立を傷

くるものとなし、政府をして徒らに先見の虚名を贏得しめたる耳にして、支那を始め列國より好んで隣邦の内政に干渉するものと誤解せらるゝの恨なき能はず、斯の如き無能無定見の當局に軍國の外交を托するは最も危險と云ふべく、今や一部與黨以外世間の心あるものは一般に堪へ難き危惧の念に襲はるゝに至れり、斯くて大隈内閣は又た其存在の一理由を失へり。

第三十七帝國議會に於て大隈内閣は與黨の擁護により容易に衆議院の關門をば突破するを得たるも、貴族院に到れば質疑難詰續々として起り、先づ兵器賣却會計手續に付き將來に對する希望條件を附せられ、八四艦隊の將來の財源に關し注文を附せられ、鐵道軌制に關し次の議會までに方針を一定すべく要求せられ、而して最後に減債基金還元問題に關し前年の言質に絡まり絶對絶命の境に入り遂に山縣公の斡旋あり不徹底にして不名譽なる妥協に同じ僅かに起死回生の希望を達するを得たり、即ち議會開會中頓死の運命を免るを得たるも『財政計畫其要を得ざるもの少なからざるは甚だ遺憾とする所なり』との體のよき不信任決議を受けて漸く貴族院の關門を通過し得たり、大正の御代に入り曾て本豫算の議會を通過せしものなきが故に今次の豫算は如何なる苦痛を忍ぶも之を通過せしめたしとは大隈首相が山縣公に哀訴せし主旨なりと傳ふ、若しも然りとせば既に該豫算の通過せし耳ならず、貴族院より事實上不信任の決議を受けたる大隈内閣は其存立に對する最後の理由を失へるものと謂ふべし。

吾人は世間に傳ふる如く大隈首相が果して或る方面に其辭職すべき言質を握られ居れるや否やを知らず、然れども今期議會に於ける貴族院の態度に對しては流石に居据りに妙を得たる大隈首相も遂に近き將來に於て遂に處決せざるを得ざるべき歟。

公論

我が憲政の根本義

＝議院中心の憲政論を排す＝

法學博士　上杉愼吉

（一）

我が立憲政體は　天皇親政を基礎とするものであつて、議院中心の政體即ち議院政治又は政黨政治又は政黨を基礎とする內閣政治たる可らざる事は、私の年來主張する所であつて、如何なる點より觀ても我が憲法の精神は議院政治を排斥するものなる事は明かであると信ずるに拘らず、今尙深く硏究せずして雷同附和し、議院政治を以て憲政有終の美を濟す所以であると爲すものゝ少からぬは誠に慨嘆すべきことである。世間の滔々たる者は止むを得ずとするも有力なる學者にして尙之を主張するものゝあるは、頗る遺憾であると云はねばならぬ。斯くの如くなれば我立憲政體を如何せん。私の說は餘り事珍らしくもあるまいが、需めに應じて少しく我が立憲政體は、議院中心を主義とするものに非らざる事を述べやうと思ふ。

「憲政の本義」であるとか、「憲政有終の美を濟す」とか云ふが、立憲政體を施行するの目的は、結局平易なる言葉を以て云へば、善政を行ふに在るといふに盡き

て居る。善政とは何であるか。元來政治は國家存立の本義に基いて、時に應じ處に依りて最もよく之を充實し發展するにあるのであるが、國家存立の本義如何と云ふが如き哲理的の深遠なる問題は今暫らく論ずることを略する。之に就ては私に一家の所見もあり、世の教を乞ひたいと思ふが、それは略して此問題に就て如何なる見解を取るとしても、一國の政體は如何なる政體を宜しとするかと云ふに、結局此政治の目的を其國其時代に適應して最もよく達するにある、即ち善政を行ふにあると云ふ事は誰しも認むる事であらうと思ふ。所謂治國平天下の道と云ひ、堯舜の道を行ふと云ひ、之れを達せんが爲めに如何なる政體をよしとするかといふ問題が起つて來るので、我國に於て明治二十二年憲法を發布し立憲政體を施行することになつたのも、結局其目的は善政を行ふにある。之によつて最もよく我國情と時勢とに適したる政治を行はんとするにある事は疑ない。其意味を憲法發布に方りても明にせられてある。皇祖皇宗の神靈に告げられたる御告文の文字に就て申すならば「益々國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ、八洲民生ノ慶福ヲ增進スル」るのが立憲政體の目的である。又御上諭に「朕ガ親愛スル所ノ臣民ハ即チ朕ガ祖宗ノ惠撫慈養シ給ヒシ所ノ臣民ナルヲ念ヒ其康福ヲ增進シ其懿德良能ヲ發達セシメムコトヲ願ヒ」「茲ニ大憲ヲ制定」すると宣はせられた。之皆憲政を布くの目的は直ちに國家存立の本義を充實し發展する善政を行はんとするにある事を示されたるものであつて、而も之は皇祖皇宗の遺訓を明徵にするものである。皇祖皇宗の後裔に殘し賜へる統治の洪範を紹述するに外ならぬとせられたのである。我皇祖以來列聖がよく國家存立の本義を體得して、人民を惠撫慈養せられ國家の理想を達せんと努力して謬まられざりし遺訓を繼ぎ、益々之を發揚せんが爲めに立憲政體を定められたのであつて、政體の形式はもとより新らしく、未曾有の改革ではあるけれども、其根本義たる精神に至つては建國以來祖宗の實行し給へる所と毫も異なる所なく、只時勢の異るが故に斯くの如き新らしき形式の政體を取ら

れたに過ぎぬ。「朕ガ躬ニ逮デ時ト倶ニ擧行スル」と宣はせられた所以である。

夫れ故に憲政の目的又は根本義は民本主義の實行にあるといつても宜しい。唯だ民本といふは如何にも狹く且つ低い。國家存立の本義は、君本なりや民本なりや、斯くの如き差別を置て、民が本である、國家の存立は人民の爲めであるといふが如き、狹く且つ低きものではない。固より人民を撫育し、其康福を增進し、其懿德良能を發達せしむると云ふ事、即ち民本といふが如き事は立憲政體を施行するの廣大深遠なる目的の中に包まれて居る事は云ふ迄もない。夫れ故に民本といふを以て國家存立の本義即ち政治の本義を充實し發展する事、即ち政治の目的を言ひ表はす積りであるならば、憲政の目的は民本に在りと云つても少しも差支へがない。只民本と云ふ丈けで、それ丈けの廣大深遠なる意味が云ひ表はせ得るや否やを危むのみである。

憲政の目的又は根本義は善政を行ふにあるといふ事は誠に簡單な事であるが、此一事を先づ明白に認むる事は、憲政を論ずるの根本とならねばならぬ。何の爲めの憲政であるか。それが不明であるならば如何なる憲法論も浮いて來るのである。然るに此明白簡單なる事が動もすれば分つて居らぬかのやうに見ゆるのは誠に不思議と云はねばならぬ。例へば憲法發布前には、よく憲法の發布を希望するのは藩閥を打破せんが爲めであるといふ事を云つた。藩閥は固より打破せねばならぬ。然しながら藩閥を打破するのも詰り善政を行はんが爲めである。藩閥を打破するといふ丈けが憲政の目的であるとは云へぬ。或は立憲政體を行ふのは民意を暢達するが爲めであるといふ事をよく云はるゝが、何の爲めに民意を暢達するのであるか。又或は政黨を以て政權の中心たらしむるが憲政有終の美を濟す所以であるとかいふが、果して政黨を以て政權の中心とすれば、善政が行はれ得るや否やは別論とするも、斯くの如きは皆善政を行はんとするの手段として認めらるべきであつて、それ自身の目的ではない。兎に角政黨を以て政權の中心たらしむればそれが立憲である、憲政

は完備するといふが如きは政治の本義を解せざるの論と云はねばならぬ。其結果の善惡を問はず、政黨を以て政權の中心とさへすれば、それで憲政有終の美が濟さるといふが如き論も頗る少からざるやうに思はる。其外、種々勝手なる主義を立てゝ之を以て憲政の目的なりとする論が多いやうに見受けるが、何れにしても其最終の目的即ち根本義は善政を行ふの途であると云ふ事になければならぬ。憲政を論ずるには此簡單明白なる事を明かに認めて置く必要がある。

次には憲政論は政體論即ち政治の方法論であると云ふ事を忘れてはならぬ。立憲政體が如何に善美なる政體であつても永久不變なる政體ではない。絕對的に、時と處とに拘はらず理想的なる先天的の良政體と云ふものは有るべき道理が無い。政體は國情により時勢に應じて如何樣にも變化しつゝ行くものである。唯其時と處とに適するや否やによりて善惡が分るゝので、立憲と云ふが如き一種の根本主義を確立して恰かも之が永久の眞理である如く唱へて、如何なる場所、如何なる時に於ても憲政即善政であるといふが如きは根本的に誤つた論といはねばならぬ。然るに世の中の憲政論には、深く政體の何たるかを研めずして立憲主義なるものを獨斷して、之を時と處に拘はらざる絕對的眞理なるが如くに考ふるものが少からぬやうに見受けられるから、此點も先づ一言して置くのである。

茲に注意すべきは、斯く云ふのは決して憲法があつても其運用は時に應じて變通自在をるべしといふのではない。憲法を定むる所以は之に遵據して毫も悖らず、確實なる政治的行動が出來、善政の自ら行はれん事を期するのである。法は自由勝手に變通され得べきものではない。一度定れる以上は之を改むるまでは唯一に之に準據すべきのが法の法たる所以の効用である。之を否認するは法を否認するのである。苟も不磨の大典たる憲法が制定せられてある以上、一寸一分でも之に違ふ事を許さぬ。憲法違反は何處までも許すべからざるので、解釋の名によりて憲法を都合よく運用する事を許すならば初めより憲法なきに等しい。憲法の下に、

憲法に拘はらざる變通の政を行はんとするが如きは憲法の賊である。之は固より斷じて排斥すべき事は私の常に力を盡して論じて居る點である。此點に就いても世の中の實際を見て、深く歎息して居る事もあり、此際大に論じ度きこともあるけれども、本論には直接關係が無いから略して置く。唯だ政體といふものは千古不變の絶對的のものでないといふのは、憲法の自由變通なる運用を認むるといふ趣意でない事を注意する迄に止めて置く。

（二）

以上述べたる事は簡單明白、何人と雖も認むる所であらうと思ふ。或は深く考へずして之を認めざるが如き論をなす者が少くないにしても、私が以上の如くに述ぶるのを聞くならば、何人と雖もそれは無論分り切つた事である、別段お前の論を聽くに及ばぬといふ事であらうと思ふ。此根本義が左樣に簡單明白な事であるならば、我立憲の根本主義に就ても疑も爭も起るべき道理は無い筈であるが、尙いろ／＼爭があり、疑があるのは如何なる次第であらうか。之は憲政の根本義といふ事に就て諒解が足らぬ爲めであらうと思ふ。之さへ明かならば別段の議論は起るべき筈は無いのであるが、少しく我が憲政の根本義に就いて論のある所を大觀して、私の見る所をも述べやうと思ふ。

我が憲政の根本義如何といふ事に就ては、世の中の議論は其主力を置く點に就ても、其言ひ表はし方に就ても頗る多岐であらうと思ふが、結局我が立憲政體は天皇中心の政體であるか、又は議院中心の政治組織であるかと云ふに歸すると見るのが間違ないと思ふ。議院中心の政治組織と云ふのは即ち英國に於て行はれて居るが如き議院政治又は政黨政治又は内閣政治を云ふのである。かゝる政治を行ひて議會又は議會に於ける政黨が政治の中心となり、内閣大臣は多數政黨の領袖を以て組織し、天皇は大臣を任免するの自由なく、政黨は立法行政の權力を掩有して政權を掌握する事になれば、即ち　天皇は虛器を擁し何事をもなし能はざる事になるのである。議院中心の政治と云ふのは即ち

天皇親政を排斥するの政治である。歐羅巴に於ける所謂立憲主義即ち議院政治を主張する論は君主をして何事をも爲し能はざる無爲無能の地位に置かんとするのである。所謂君主は統御すれども政治せざるを以て立憲主義の根本原則として居る。されば我國に於て、我が立憲政體の運用は議會中心でなければならぬといふのは、天皇の親政を非なりとするの主義である。然らば我が立憲政體は果して議院中心を以て其主義とするものであらうか、私は斷じて然らずと信ずる。

私の我が憲政の根本義と信ずる所は、我が立憲政體は　天皇中心の政體にあると云ふ事は、今更云はずとも多年主張し來つた事で、世人もよく知つて居る事である。私の從來の著書論文に於て已に述べ盡した事であるが、簡單に私が我が立憲政體は　天皇中心を基礎とするものであると信ずる所以を述ぶるならば、第一には我國體である。即ち　天皇が主權者であるといふ事である。或は國體といふが如き事は一種の道德觀念であつて憲法論には用ふ可からずと云つて私を駁撃した人も澤山あるが、一國に於て何人が主權者であるかと云ふ事は完全なる法律論である。國體は法である。一切の法の根據である。何人が主權者なりやが定まらずしては、國家もなければ憲法も固よりあるべき筈はない。憲法論が國體論を第一の根據とすべき事は何故に間違つて居るか。私は國體とは單純なる道德觀念であつて法律觀念でないと云ふ論をば諒解する事が出來ないのである。　天皇が主權者であるとは　天皇の意思が主權たる力があると云ふ事で、西洋の主權論には彼等の複雜なる國體を説明するが爲めにいろ／＼言葉を設けて主權の體と用とを區別し、又は主權の所有と其行使とを分ちなどして居るが、用なくして體のみあるを主權と云ふものもない。主權を所有するのみで行使せざると云ふ事も何事か諒解すべからざることである。我　天皇の主權者であると云ふのは眞實に主權者であると云ふ意味であつて、主權の體をも用をも兼ね有し之を所有すると云ふ名義のみならず、實際に主權といへる活動を爲す一人であるといふの意味である。

斯かる意味に於て　天皇が主權者である國體である以上は、國王を空位に置き虛器を擁せしめ、君主は統御すれども政治せずと云ふが如き事に歸する政體論を以て　我　天皇の地位となす事は出來ぬのである。如何なる政體を定むるとも、　天皇の主權者たる事は動かす事を許さぬ。　天皇が眞實に主權活動の中心である事は、我が國體を變ぜざる限りは動かす事は出來ないのである。

我が憲法に　天皇の主權者たる事を明言して居るのは固より我國體を文字の上に宣示したのであつて、此文字が無くとも我國體の　天皇を以て主權者とするにある事は動かざる事であるが、維新以後憲法制定に至るまでの政治思想の跡に就て見れば、頗る過激な論も實際行はれて、主權は人民に在る、　天皇を戴くとも眞實の主權者は人民全體であらねばならぬと云ふが如き論は頗る盛に行はれた事は人の知るが如くである。一時は、憲法を發布すべしと云ふ論は、主權を人民に歸せしむるの論であると見られた程である。之に對して憲法は發布するとも　天皇の主權者にまします事は千古動かすべからずといふことが明かになり、國是が之に固まつて、之を本として憲法が制定せられた事は是れ亦人の知る所である。今より見れば主權が　天皇に在りや人民に在りやの爭が有つたと云ふが如きは不思議千萬なる事であるけれどもそれは事實である。而して此事實を知つて我憲法が　天皇の主權者である事を其首條に明白にした事を思ひ合はすれば、我が立憲政體の基礎は　天皇中心に在るものと解すべき事益々明瞭であると思ふ。かゝる事實が無くとも我が天壤と共に極りなき國體より見て、我政體は　天皇を中心とする政體でなければならぬ事は明かであるが、反對論者は此等の事實も考へ合はしてよからうと思ふ。

我憲政の根本義を知るには明治維新の大意義をも深く會得せねばならぬ。明治維新は即ち皇政復古である。皇政復古とは　天皇の主權者たる名義を復するといふ事であらうか、否、　天皇の主權者たる名義は如何なる時代と雖も消え失せた事はないのである。何ぞ殊

更らに之を復するといふ事があらん。皇政を復古すると云ふのは　天皇が現實に主權を行使せらるゝの中心たる事を復古するの意味でなければならぬ。即ち當時よく云はれた　天皇の親政を復するのである。皇政復古の論と云ふのは、幕府時代に於て　天皇は主權者の名あれども其實なく、京都に於て拱手して虚器を擁せらるゝに過ぎなかつた。斯くの如きは　天皇を主權者とする所以ではない、我國體ではない。我國體よりすれば　天皇は現實に政權の中心でなければならぬと云ふのである。此國體の自覺が徳川の末に盛んに起つて志士の心を刺戟し、皇政復古すべしとの論となつたのである。此大精神が種々の事變と結合して遂に明治維新となつて表はれた。徳川氏は政權を返上して皇政復古したのである。徳川氏は主權者たるの名義をお返しゝたのではない。名義は初めから　天皇が之を有つて居らるゝ。お返しゝたのは實權である。皇政復古の初め、詔してすべて神武創業の原に復り爾今親ら政を行はんと仰せられた。之が維新の大意義であり、皇政復古といふ所以である。維新以來幾多の變遷を經て憲法發布に至つたのであるが、　天皇親政を基礎とする維新の大精神は益々之を發揚こそしたれ、再び之を有名無實に歸して　天皇をして空位虚器を擁するものとしたと云ふ事は決して無いのである。憲法の下に於ても　天皇親政といふ維新の大精神は政治組織の基礎とならねばならぬ。然るを立憲政體を布くと共に　天皇中心の實も亦泯びなければならぬと云ふのは如何なる次第であるか。論者は憲法の發布を以て再び皇政復古以前の狀態を復する者であるとするのであるか。維新の大意義及び維新以來政體變革の跡を考へて見れば、今日の政體も　天皇親政を中心とするものたるべき事は斷じて否む事は出來ないと思ふ。憲法制定の由來を顧みても、我立憲の方針は其基礎を　天皇中心に置いた事は明々白々である。維新によつて皇政復古し、　天皇親政の實が之より行はれんとしたが、其事は頗る容易でなかつた。種々の爭論變動を經て遂に明治十四年の國會開設の勅諭となつたのであるが、之は即ち維新

の大精神たる　天皇中心の政治を益々確實にするものであつた。詳細なる事は略するが、十四年に國會開設の勅諭を發せらるゝや大隈參議一派の人々は即日官を免ぜられて野に降つたのである。大隈氏等は元來立憲論者である。其人が立憲の詔勅出づると共に野に降つたのは奇妙なる如くであるが、要するに此詔勅に依りて天皇中心なりや、議會中心なりやの立憲の根本義に就ての爭が定まつたのである。我が立憲政體は我が固有の國體に基き　天皇を中心とし、憲法は欽定憲法であつて所謂大權内閣の制に則り、議院中心の政體を排斥し、大隈氏等の主張したる立法行政の實權は議院が之を握ること、英國の政治の如きものとはなさずと云ふ大方針が定つたが爲め、大隈氏等は廟堂を去つたのである。此時に　天皇中心の大方針が定まり、それより以後之を基礎として憲法制定に着手し、遂に現在の憲法となつた事は誰も皆知る所である。我が憲法は初めより議院中心を排斥して成立したので、　天皇中心なりや議院中心なりやの爭論は明治十年前後數年の爭論を經て一度決定したのである。然るに今漫然我が憲政の根本義は議院中心に在りといふが如き說をなすは、我が憲法制定の苦心慘憺たる歷史を知らざる皮相の見であるといはねばならぬ。

斯くの如く我が國體より觀ても、憲法制定當時の國體觀より見ても、又憲法制定の由來に徵するも、我が憲政は　天皇中心を根軸とすることは明かであるが、我が憲法の規定を見ても、政體の中心が　天皇の親政に在る事明白にあらはれて居るのである。「天皇ハ統治權ヲ總攬シ、此憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ」而して憲法を改正するものは　天皇である。天皇が憲法を改正するには固より一定の手續を經ねばならぬけれども、改正の權は一に　天皇に在ること我が憲法の規定する如くである。立法權は帝國議會の協贊を經れども之を行ふは　天皇である。議會の議決したる法律案は　天皇の裁可によつて初めて法律となるのである、帝國議會の一部は公選の議員を以て組織するけれども、　天皇召集せざれば議會成立せず、其活動を始終するは

天皇である。　天皇が衆議院の解散を命ぜらるれば公選の議員も消滅するのである。　天皇は法律に代るべき勅令を發することが出來、又法律と相並んで最も廣き範圍に於て政務の全般に亘つて勅令を發することが出來る。國家の歳出歳入は帝國議會の協贊を經たる豫算に據るべきであるけれども、大權に基く歳出をば議會は自由に排除削減することは出來ぬ。豫算成立せざるも前年度の豫算を施行するのであつて、議會に歳出歳入の根を絶つの全權はない。其他憲法の規定について一々委しくは述べぬが、憲法の規定は　天皇を中心とすることと私が從來著書論文に於て詳說して居るところである。

(三)

我が　天皇の本質を詳述することは略するが、天皇中心の政體は善政の行はるゝ大根柢である。之が我國體の精華として國史の美を中外に誇る所以である。抑々主權者は絶對なる力を有つて居るのであるが、斯くの如く絶大なる主權の存在する所以は之によつて、國家存立の本義を充實し發展せんが爲めである。然るに東西古今の歴史を見れば、主權は屢々其絶大なる力を濫用又は誤用して主權の本文天職を全うせざるものが極めて多い。否寧ろそれが通常であるといつてよい。恰かも個人は何事をもなし得る意思の力を有つて居る。之れ人類の天職を全うせんが爲めである。理想に到達せんが爲めである。然るに之を濫用し誤用して己を亡ぼす者の多いと同じやうなものである。よく己れの意思を向ふべき所に向けて人の人たる本性を全うするが如き聖人君子は稀に觀るところである。然るに我が　天皇は之を歴史の跡について見よ。皇祖皇宗以來其主權を濫用又は誤用せしめた事實は殆んどないので、列聖皆よく國家存立の本義を體得して時に應じて之を實行せられた。一言にしていへば歴代皆善政を行はれた。之を民本主義といふならば列聖皆民本主義を行はれた。「民の富めるは朕の富めるなり」といふのは、歴代　天皇の大御心であつた。人民を惠撫慈育し賜ふに事至れり盡せり。支那や西洋諸國に見るが如き君主

の暴虐なる戰慄すべき壓制政治といふものは二千五百年間一度も之を見ることはない。我が　天皇は實に民本主義の擔當者であらせらるゝ。我が國に於て民本主義は只一に　天皇によつて行はれた。回顧して我が歷史を觀るに文明の進步が阻止せられ、人民塗炭に苦むといふやうな時代もあつた。然しながら斯くの如き時代は何時でも　天皇が或程度まで虛器を擁せられた時代で、或は蘇我氏權を專らにして皇權伸びず、或は藤原氏『此世をば我世とぞ思ふ』などゝいつて、　天皇虛器を擁せられ、政權武門に移つて　天皇は上に拱手せられて居られた。斯の如き時代には人民が惡政に苦んだので、人民の爲めに民本主義を行ふ擔當者が其實力を失ふたからである。　天皇親政すれば善政行はれ、天皇の親政が阻まれば人民が塗炭の苦を受けたといふ事實を深く味つて見るならば、我　天皇の本質は明かに認めらるゝであらうと思ふ。之は實に我が國體の精華ともいふべきものであつて、萬國無比の事實である。支那には堯舜といふ如き者があつたと言ふけれども、之は寧ろ理想的人物であつて眞正なる民本主義の擔當者は一度も實現しなかつたのである。それであるから儒敎に於ては天子の道を敎へることを第一とした。敎のみあつて天子の實を擧げる天子は古今絕無といふ有樣である。西洋諸國の國王は初めから人民の敵として生れたものである。西洋の建國は民主共和である。中世に至つて初めて國王といふものを生じたが、固より其國體の本義に合するものではない。謂はゞ主權を私借したものである。それであるから强力を以て人民を壓伏し、其權勢を張ることを努めた。其壓制が極度に達し當時の歷史を讀んでも血腥く感ずることは人の知れるが如くである。即ち彼等の君主は民本主義の反對者である。之と我とを比較すれば私が常に我が國體の精華と誇稱するものは自國を愛する一片の感情論でないことが認めらるゝであらうと思ふ。我が　天皇と外國君主との比較は私の屢々論文講演に於てなしたることであるから、委しくは言はぬが、元來民主共和なる西洋諸國に專制君主が起つて暴虐の政を行ふた

跡を、我が封建時代と比較して見るに、我　天皇の民本主義の擔當者にまします所以が明かになるのである。土地が權力の原因となり武力が之に合して政權の源になつたのは、西洋の中世も我が中世も同じである。如斯にして權勢を得たものが西洋では國王となつて暴虐を振ひ、我國では斯くの如きものが源平二氏である。莊園天下に洽く全國の武力を掩有した。之によつて人民惡政に苦んだが、斯る際に人民が遙かに仰いで救主としたる者は　天皇である。西洋では斯かる　天皇がないから國王は擅に專制した。虛器を擁し玉ふと雖も　天皇あり、民本主義再び行はるゝの機會に到達することが出來たのである。永い間の武門の專權が德川に至つて亡びて、明治維新となつた。明治維新は　天皇の親政を回復すると共に民本主義の大回復であつた。民本主義――誤解なきが爲めに言つて置くが、民本主義といふは狹くて低い、好んで用ふるのではない。世人の耳に通じ易いが爲めに此言葉を用ふる――の擔當者たる　天皇の實力を回復して、此實力によつて民本主義を發揚せんとしたのが明治維新である。所謂維新の洪謨なるものは君民合一の理想である。　天皇の力によつて善政を行ひ人民の幸福を增進し個人の力を充實して日本民族の發展を計るが維新の洪謨である。維新の精神が皇政を復古すると共に民力を伸暢するにあることは多くの人が已に述べて居るところである。中野正剛といふ人は如何なる人か知らぬが、『明治民權史論』（此書物はなか〳〵よい著書である）といふものを著はして其の初めによく維新の大精神は　天皇の御力によつて此人の所謂民權を伸張するにあることを述べて居る。

　民本主義の擔當者にまします　天皇が直ちに人民と合一して民本主義を實行せらるゝのは最も理想的なる政體と言はねばならぬ。我が古代の有樣は之れであつた。回顧すれば誠に完全なるよき時代であつたと仰がるゝのである。然しながら世の中のことが益々複雜になり行くに從つて斯くの如き簡古朴素なる政治は何時までも行ふといふことは出來ぬ。　天皇は其御意思を

益々完全に行はせらるゝが爲めに適當なる人を用ひらるゝことを適當とするやうになつた。如何なる人を用ゐらるゝかは、即ち時勢の宜しきに從ふ政體の變革であつて、其時代〳〵に於て適當に　天皇の下に政權を擔任すべき人を用ゐられたのである。初めは世襲の氏族、中には外戚、後には武門武士を用ゐられた。皆其時に應じて適當なる制度であつたことを疑はぬ。然しながら此等の人々が永く其地位に在る中には何時の間にか其政權を壟斷することゝなつた。之が我國の歷史に於ては何時でも禍根である。斯くなると　天皇は上に拱手し人民は下に塗炭の苦みを受くる、といふことになるのである。元來此等の中間勢力は何の爲めに存するかといふに、君民の間を疏通するが爲めである。君民直接して政の行はるゝことは世の中の進歩と共に出來なくなつた。夫れ故に當時最も都合よき地位にある人物を取つて、君民意思の疏通を益々十分ならしめ、天皇の民本主義を行ひ玉ふて益々之を發揚せんが爲めの機關である。然るに動もすれば其本分を忘れて君民の間に蟠り、上、君を蔑ろにし、下、人民を虐ぐるに至つた。斯くの如きは所謂君側の奸である。　天皇は人民を愛撫し玉はんと思召さるゝけれども、此等の中間勢力が之を阻止して下に達せしめぬ。維新前に志士が上下壅塞と言つたのはこれである。維新の精神といふのは約り之を撤去するにある。武門幕府なるものは上意を下達せず下意を上達せざる邪魔物である。之を取去つて君民合一の理想を再び行はねばならぬといふのが維新の精神である。　天皇の親政を回復して　天皇の力によつて日本民族の全力を合一し大いに所謂開國進取の國是を行はんとしたのである。斯くの如く我が歷史上、　天皇は民本主義の擔當者にましますことを顧み思ふ時は、我政體は如何なる政體であつても天皇親政を中心とすべきものであることは認め得らるゝであらうと信ずる。我國に於て善政を行ふこと、或は民本主義を行ふことは唯一に　天皇の力にあるのである。世界孰れの國を見ても民本主義の我國の如く完全に行はれた國はない。假令國王を廢して純粹なる共

和國を建てた處と雖も同一である。我國の如き　天皇を戴くといふことは誠に國體の精華として慶賀すべく、日本民族の幸福である。　天皇親政によつてのみ民本主義の行はるゝ所以をば深く古今東西の歴史に鑑みて憲政論をなす人々が熟慮せられんことを希望する。

（四）

以上述べたる如く我が　天皇は所謂民本主義の擔當者にましまし、　天皇の御力によつて民本主義の大いに伸張することを其本質として居る。明治維新の大精神は君民の間を阻礙する中間勢力を取去つて君民合一の古に復るにあつたのであるが、固より今日の時勢に於て君民直接の政治は行はるべくもない。何を以て今の時に適當なる中間勢力とするか。何によつて何を機關として君民合一の理想を完成するかといふことは大體に於て維新以來の政治論の中心思想であつた。徳川氏倒れて之に代つて實力を有したものは諸藩であつた。之を中心として政治を行はんとした、所謂公議輿論に決するの政體である。然るに諸藩も其内容は殆んど腐朽して其用を爲さゞるものであつたから、忽ちにして廢藩置縣が行はれた。之に代つたものは大體に於て所謂藩閥である。薩長なるものが幕府に代つて政權を握るが爲めに維新の大運動を行つたのであるか、又は斯くの如き私心なく只管に　天皇親政を回復するに努力したのであるか、後の歴史家の判斷を待たねばならぬ。私は兩方の分子があつたと想像する。維新後薩長の所謂藩閥が權勢の地位に居つたのも果してよく上下疏通の機關なる實を擧げたか、或は却つて君民の間を阻止したか、藩閥專制といふ事實があつたか、之も一片の感情論では論定出來んのである。後の歴史家の判斷を待たねばならぬと思ふが、若しも幕府に代ふるに薩長を以てしたるの實があるならば、固より之を打破せなければならぬものである。後の元老といふものも同様である。所謂官僚なるものも同樣である。共に　天皇の意思を益々發揚し、人民の幸福を益々增進するものでなければならぬのである。若し之に反するな

らば断じて排斥せねばならぬ。然しながら藩閥といひ元老といひ最早や過去のものである。官僚といふ如きも左程の團結したる勢力はない。然らば將來君民の中間にあつて君臣合一の理想を實現すべき地位に置かるべきものは何であるか。斯かる地位に置かるべきものは其時に於て社會百般の關係上最も勢力あるものでなければならぬ。此意味からして昔世襲の氏族が此地位に居り、外戚が其地位に居り、武力の重んぜらるゝ時代に軍人の其地位に居つたのも皆適當なことであつたと言はねばならぬ。然らば今何が斯かる勢力を有するものであるかといへば、直ぐ頭に浮ぶのは政黨である。政黨の是非得失は私の從來屢々論じて居るところであり、私が大體の主義として政黨を非なりとすることは知られて居ることであるから又述べぬが、政黨なるものは、殊に從來の形式に於ける政黨なるものは最早や舊式である。之も屢々述べたことであるが、等しく政黨といつても政黨の内容をなす勢力は國により時によりいろ〳〵違ふのである。今日の時勢に於ては經濟の發展と共に金力が政黨を支配する時が來るであらうと思ふ。社會の勢力は金力にあるといふが現實であらうと思ふ。然らば金力が政黨の形に於て此地位に立つことが將來望ましきことであらうか。深く考ふべき問題であらうと思ふ。それは兎に角今日の日本は建國以來最も多望なる從つて最も多難なる時機に遭遇して居るのである。二千五百年來養ひ來つた日本民族の力を結合發揚して世界に大日本を建設するか、又は大國の間に並び立つこと能はずして亡ぶるか、誠に困難なる危急存亡の際であろと思ふ。かゝる際に當つては人民の力の外に大日本の力といふものはないのである。我が日本は小國であつて人民の數に限りある。一人一人の力を三倍にも五倍にも働かさねばならぬ時代である。斯の如きことは最も適當なる統率者によつて之を現實にする外はない。此點から見れば我日本國は此時勢に最も適した組織を有する國家である。二千五百年來養ひ來つたのは徒爾ならずして大日本建設の運命が到達せらるべき時機に廻り合つたのである。即ち　天皇によ

つて民力を合一し、民力を最も適當に働かせて列强にあたるといふことは我國體の精華でなければ能はぬことである。然るに今の時に當つて　天皇を空位ならしめんとするの論があり、舊式なる立憲論を唱ふるが如きは誠に時勢に迂遠なることと言はねばならぬ。我が日本の將來は　天皇中心の政治組織によつて益々國威を發揮することが出來るのである。私は漫然たる机上の憲政論者が思をかゝる點にも致さゞることをいかにも殘念に思ふ。

（五）

以上述べたる如く我が立憲政體は　天皇が善政を行ひ人民と合一して日本帝國の光榮を益々中外に宣揚せんが爲めに時勢の進運と共に樹立せられたる政體である。我が國體より觀るも維新の大精神より見るも憲法制定に當つて定められたる立憲の大方針に徵するも、又現在の憲法の解釋としても　天皇親政を中心とする政體であつて、議院中心、政黨中心を以て我憲政の主義とするものにあらざることは十分明かであらうと思ふに拘はらず、我が憲政の根本は議院中心にあるといふ論の行はるゝ所以は如何なる次第であらうか。學者は英吉利其他に於て議院政治、政黨政治が頗る完全に行はるゝやに見え、其他の國々でも議院政治となるのを以て立憲の目的なりとするの主張が頗る盛んになるを見て、我に於ても又然らざるべからず、然らざれば我が立憲政體は完備したるものとは言へぬ。議院中心とならざる間は、我が立憲政體は尙幼稚なる未熟なるものと言はねばならぬかのやうに考へて、率直に斯くの如くに主張するのであらうが、一般の人心に議院政治といふことが氣受よく響き、之を深く硏究せずして只漫に議院政治でなければならぬとかいふが如くに唱ふる者の少からぬのは、自己の權勢を張らんが爲めに、爲めにする所あつて知りつゝ故らに之を主張する野心家の論は固よりいふに足らぬが、何となく議院政治論の行はるゝのは其所由必ずしも單純ではないと思ふ。之は漫然たる空理空論を唱ふるのでなくして維新以來の實際に基く深刻なる根柢があることゝ思ふ。學者がか

ゝる深刻なる根柢あることを知らずして皮相的に議院政治を論ずるの迂遠と、取つて代らんとする野心家が爲めにするところあつて、政黨政治でなければならぬといふの狡猾とは暫く眼中に措かざるも、一般に氣受けよき議院政治論の根柢については深く研究して其迷を去り之が善導することを勉めねばならぬと信ずる。

我國に於ける議院政治論の根柢を明かにするには維新の當初に遡らねばならぬが、維新直後の狀況を見るに幕府は已に大政を奉還して權力の地位を去つたけれども、京都の朝廷は羽翼未だ成らず諸藩の力を用ゐて大政を行はんとしたのである。當時公議輿論によつて政治を行ひ、天下の公論を基として萬事を決するといふが如きことを盛んに言つたのは、詰り諸藩の勢力を用ゐて之を基礎として政治せんとするの意味である。五箇條の御誓文に『廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スベシ』とあるのは必ずしも文字通りの意味ではなくして、其直接に目指したるところは諸藩の意見を參酌して政治するといふにあつた。夫れ故に、明治元年の政體書には各藩より議員を出し輿論公議を問ふと定めた。然るに諸藩は三百年の泰平を經て幕府と同じく已に其實力を消耗して居つたのである。眞に政治を擔當するの實力を備へて居つたのは、先づ薩長、之に次いで土肥の四藩であつた。薩長等の藩閥が初めより德川氏を倒して自ら德川氏に代つて政權を壟斷せんとする目的を以て、討幕の大運動を起したものであるとは言ひ難いけれども、事實上幕府倒れて混沌たる時に當つて政治を擔當するの實力を備へたのは薩長藩閥で、假令諸藩を基礎とする制度を立て、公議輿論を標榜しても實權は自ら薩長に歸せざるを得ぬ。夫れ故に明治四年に至つて已に其實なき諸藩を排して郡縣の制度を布くことが一擧にして出來上つた。諸藩を以て政權の中心としようとしたのであるが、其事行はるべからずして四年にして中央集權となつたのである。中央集權とは即ち實力ある薩長諸藩が政權の中心となつたことである。之よりして中央政府の根柢はいよ／＼堅くなり、薩長が政權を握ること久しきに及んだのである。中央集權即ち薩

長が政權を得ると共に、所謂公議輿論の制度の廢弛したることとは以上の事實から見て當然のこと、言はねばならぬ。遂に明治六年に至つては集議院を廢止し、中央集權即ち薩長諸藩の有力者が政權を掌握することに名實共になつたのである。

我國に於て所謂民論の盛んに起つたのは此時である。之は最も注意すべきことであつて、薩長專權が出來上ると共に民權論の盛んになつたのは、當時の狀勢を考へて見れば自然の勢であつたと言はねばならぬ。諸藩は其實力巳に朽腐したりとはいへ、尙幾多の英邁なる人物を有して居つたのである。薩長が初めより幕府に代つて政權を壟斷する目論見ではなかつたとしても、今や實際に政權を握つて居る有樣を見ては不平は自ら國中に漲らざるを得ない。之れ當時民權論の盛んに起つた所以であつて、維新直後の公議輿論といふのとは其意味大いに異れども、自ら隱然之を受け繼いで中央の權力に反對したのである。當時の民權論は頗る極端であつて立憲政體を建つべし、國會を開設すべしと主張したのみならず、國體は假令　天皇を戴くとも議院中心でなければならぬ。民主共和を國是とせねばならぬと唱へられたのである。當時の民權論が如何に極端であつたかを委しく述べることは略するが、其勢奔放を極め今より見れば戰慄すべきものであつた。正面よりの　天皇非中心說である。然しながら之を其儘に取つて　天皇に反對したるものと考ふるならば非常なる間違である。當時の民權論者に付て見ても何れも皆熱心なる尊王心を抱いて居つた人であつて、決して　天皇を廢せねばならぬ、　天皇の虛器を擁すること幕府時代の如くなければならぬと考へたのではない。然らずして當時の所謂有司專權に反對したのである。即ち後の所謂藩閥打破である。當時政府に立つて居つた人々が、權勢を專らにして國利民福を計らざるものであるとして之に反對したのが當時の民權論の眞相である。後の議院中心の政體論も玆に根ざして居ることをよく〳〵注意することは今の議院中心說を主張する人にとりても、之に反對する人にとりても必要なること

とである。當時の民權論が其實有司專制に反對するものであつたとは、民權論を代表して唱へた人々が最も權力に近づき得べき地位にある人であつた。即ち當路者が倒るれば直ぐに代るべき人であつたことを見ても解る。民權論は薩長に雁行して之と對抗したる土肥より起つた。土佐は自由民權論の發祥の地であつて其唱首は維新の元勳たる板垣氏であつた。又我が國の政體は英吉利と同じくならねばならぬ、君主は何事をもなさゞる地位に置かるべきものであるといふ論を唱へたのは、參議中で最も有力なりしも志を得ざりし大隈氏であつた。前原一誠、江藤新平、西鄕隆盛の武力を以て當局に反對したるのも、民權論と相呼應して有司專制を除かんとしたのである。十年の亂後には最早や武力を以て中央政府に突擊せんとする者はなくなつたけれども、言論を以て藩閥を攻擊するのは益々盛になつたのである。藩閥を攻擊するものゝ理論上の標題は立憲政體の樹立、國會開設であつた。藩閥も又之に對抗して假令立憲政體を行ふも國會中心の政治を行ふてはならぬと主張した。當時藩閥攻擊といふも、國會開設の主張といふも結局同じことであつたのは、當時の立憲論の如何なるものなるかを示すものであつて、後の憲政を論ずるものゝ最も着眼すべき點である。立憲可否の論、後に至つては更に具體的になつて國會政治を主義とする憲法を制定すべきや否やの激しき爭論は、有力者の權勢爭奪と表裏して相交互して進んで來たのである。遂に明治十四年の國會開設の詔勅となつたが、之によつて將來制定せらるべき憲法に議會中心を主義とせざることが定つたのあでる。之は裏面より觀察すれば藩閥政治の勝利である。それであるから其時に野に降りし大隈氏を初めとし板垣氏の自由黨も益々天下不平の士を集めて藩閥攻擊に力を盡したのである。

政府も亦始終力を盡して之に對抗し、所在少からぬ騷動をも見たのである。斯の如くにして憲法發布に至り、憲法發布さるゝや、當路の人は超然內閣といふことを主張して民間の政黨を排斥し、政黨は政黨內閣を呼號して之に當つたのであるが、其目標は藩閥打破であ

つた。斯の如き狀勢が略ぼ明治の末頃まで續いたのである。大正の初の憲政擁護と云ふと矢張藩閥反對に歸する。以上の沿革より考へて明かなるが如く、維新以來今に至るまで熱心に唱へられる議院中心、政黨中心の政體論なるものは結局表面は如何であつても藩閥打破論である。有司專制に反對するのである。前に述べた通り君民の間に起つて政權に與るものは、君民を疏通して其合一の理想を發揚するを以て職分とする。其ものが上下を雍塞するに至つては之を排除することを務めねばならぬ。明治年間に於て薩長藩閥が如斯ものであつたか否やは暫らく後の歷史家に委すとして、政權の爭は藩閥は如斯ものであると目して行はれたことは事實である。其看板として議院中心の政體論が主張されたので、當局者が之に反對するのは自己の專有する政權の奪はるゝことを恐るゝ私慾に出でたものであると攻擊した。或はさうであつたかも知れぬ。然しながら議院中心の政體は結局　天皇を空位に置き虛器を擁せしむるに限るものであることは前述したる如くであるが、民權論の當初より後に至るまで其論理の結局が茲に至るものであることは主張するもの自身必ずしも之を知らなかつた。唯だ藩閥攻擊に急なるが爲めに其政權を奪ふの手段として、議院中心の政體即ち政黨內閣といふが如きことを主張したのは誰も認むる事實である。

（六）

西洋に於ては立憲政體の理想は議院政治にありとするのは公論であらうと思ふ。西洋諸國の立憲政體の由來に考へて、彼に在りてはどうしても君主を空位に置き君主の親政を排斥し、議院中心の政治を行ふことが其本義であるとせねばならぬのである。これ我が憲政を論ずる者の先づ知らざるべからざることである。

元來西洋諸國は其建國の精神に於ても事實に於ても、民主共和の國である。彼我立國の體制を異にすることは我國體及び政體を誤りなく認識するが爲めに必要なることであつて、私が常に講說して居ることであるから略するが、斯かる國柄である以上は人民全體が

直接に政治を行ふか、若し其事が行ふべからざれば人民の代表者たる國會が政權の中心たらざるべからざるは事理の當然である。西洋の中世には變體として專制君主を生じたが、近世の國家は所謂國民的國家であつて、我國に於て皇政復古といふと趣を同じくし現代の國家は民政復古の國家である。かゝる國に於て立憲政體であらうとも何であらうとも主義に於て君主中心を非とすることは論なきことである。

西洋近來の立憲主義(コンスチチユーシヨナリズム)又はパーリアメンタリズムの由つて起りし由來を明かにするには、中世の專制君主に遡らねばならぬ。前にも述べた通り西洋の建國は民主共和であるにも拘らず時勢の變によつて中世に極端なる專制君主を生じた。此專制君主は初めより人民を敵として生れたものであつて、初めより民本主義の擔當者にましますが我が　天皇とは全く其類を異にしたものである。此專制君主は極度まで力を盡して人民を壓抑し、物質上精神上の進步を阻止し暗黑の中に其權勢を恣にした。彼等の壓抑の甚だしきは歷史を見ても血腥き感じを起す位である。此專制の時代が暫らく續いたが、人智は何時までも盲目ならず、時と共に覺醒して文明の曙光あらはるゝと共に人民は建國の源を回顧し、又人間なるものを思考する哲理より出發して、專制國王に反對するの思想が盛んに起つたのである。國王何者であるか、人民は暴君を放逐し、之を殺戮し、革命を行ふの權利ありと主張した。此極端なる民權論が魁となつて社會契約說なるものが起つたのである。社會契約說は人民には天賦の自由權利あつて、主權と雖も之を侵犯することは出來ぬ。主權の行動には先天的絕對的に初めより定まつた必ず則とるべきの自然的憲法があると主張した。第十七八世紀には君主の壓制は一方に益々甚だしく、之に對する人民の反抗も益々甚だしく、時と共に激して遂に火を發し佛蘭西革命となつたのである。革命は現代國家の鑄出されたる熔爐であつて、結局思想の上に於ては民主々義が勝つたのである。革命の失敗に懲り、歷史を重んじて必ずしも國王を廢せざる國に於

ても主義の上に於ては民主思想が勝を占めた。國王の下に於て民主の實を徹底せんとするのが十九世紀の所謂立憲主義である。議院政治である。一八一五年の佛國憲法は國王の下に此立憲主義を實行したものとして、一時模範的憲法と稱せられた。當時稱へられて後に至るまで祖述せられたる立憲說又は議院理論なるものは、國王は名義上存在するとも何事をもなすべからざる空位でなければならぬ、所謂統御すれども政治せざるが君主の地位である。大臣は形式上國王が之を任命するとも必ず議院の多數によつて進退すべきものであり、政權の中心は議院に存すべきものであるとしたのである。此政治組織は英吉利に於て早くより行はれたものであつて、佛蘭西憲法は之を模倣したものであると言はれて居る。英吉利に於ては已に百年前に革命が行はれた。國王が議會の壓迫に堪えずして國を逃れ去るや、議會は國王を迎へて之を擁立した。此時に議會主にして國王從たる形勢が已に成立つたのである。ウイリアム王は自己を擁立したる國會の命令には唯々として從はねばならなかつた。其後種々の原因によつて國王は無爲無能何事をもなさず、實權は多數黨を代表する內閣大臣の手に歸して完全に議院政治が行はれたのである。之を立憲政體の理想であるとなし、英吉利は憲政の母國なるの名譽を擅まにした。十九世紀に於ける歐羅巴諸國の憲政は此方針に向つて進んだのであつて、結局國王を空位に歸せしめ、人民の代表する議會が政權の中心たるを以て立憲政體の歸結としたのである。之が西洋立憲政治の眞相であるが、歐羅巴に於て憲政の根本義は何であるかと問ふならば、私と雖も議院中心に在ると答へる。所謂民本主義を實行するのは之に依るの外道なきことは中世以來の歷史を經て明かなのである。歐羅巴の君主は人民の敎である。君主親政すれば民本主義は行はれない。民本主義は一に民主の形によつて行はるゝのである。君民合一して互に己れの利益を以て他の利益とするが如き有樣は歐羅巴に於ては見ることが出來ぬ。人民自身以外に民本主義を擔當して之を實行するものはない。自己の利益は

自己自ら獲得せねばならぬ。政權を他人に渡せば必ず人民を壓抑する。君主は止むを得ず之を置くと雖も、人民を壓制したる歷史を有するものである。斯の如きものは手も足も出ざるやうにして政權より遠ざけ、空位を擁するものとせねばならぬ。歐羅巴に於て君主專制といふことは最も恐るべき民本主義の破壞である。之を我國の　天皇が民本主義の擔當者にましますのと比較すれば日を同じうして語るべからざるものであつて、善政を行ふこと即ち解り易きが爲めに、民本主義といふ言葉を用ふれば、民本主義を行ふことが憲政の目的であることは東西同一であるけれども、此目的を實現するが爲めには我國に於ては　天皇親政でなければならぬこと前に述べたるが如くであると共に、歐羅巴に於ては君主專制を排斥するに之れ由るのである。

憲政を論ずる者は此彼我の差異を十分に會得せねばならぬ。憲政を行ふの目的は彼も我も異るべき道理はない、民本主義である。然しながら其國體の相違、歷史の相違によつて之を實現するの手段たる立憲政體の仕組が自ら異らなければならぬ。彼にありては議院中心でなければ之を實現することが出來ぬのである。故に之を憲政有終の義を濟すの所以とするのである。然るに漫然西洋の立憲說を其儘持つて來て、我國に於ても議院中心でなければならぬといふが如きは、彼を知らず我を知らず、皮相幼稚の論と言はねばならぬ。明治初年の民權論は露骨に主權在民と說いた。此系統を傳へて議院中心の主義を唱ふる者も之に反對する者も、議院中心は主權在民主義に基くものと考へて居つた。私は年來國體論を力說して我が主權の　天皇にあることを說いたが、世間よりは誰も知つて居る解り切つたことをいふものと見られた。而かも倘攻擊を受けたのは如何なる次第であるか、奇怪であるといはねばならぬ。其等の事を思ひ合はすれば今日議院中心主義を主張する人が、主權在民といふは民主々義である。民本主義とは主權の所在を論ずるものでなくして、政治上の主義の論であるといふことをいふに至つたのは、私の自ら愉快に感ずることであるが、民主々義と民本主

義を區別しつゝ、民本主義を行ふには議院中心の政體でなければならぬと言つて、西洋流の立憲主義を唱へ、民主にあらざれば民本主義を行ふべからずとする西洋の立憲説を持ち來つて、結局　天皇を空位に歸せしめんとするが如きは尙甚だ慊らざるのである。（西洋諸國にも君主々義といふものはある。然しながら必ずしも人民主權といふことに反對する君主々義ではない。其基礎を民主に置いて多少君主の權能を大ならしめんとするのを特に君主々義といふのである。）

（七）

議院政治は西洋立憲主義の精神由來よりして其理想でなければならぬけれども、之を我國に採用すれば結局　天皇を空位に置くことになるのであつて、之を以て我が憲政の主義となすべからざることは以上論じたる如くであるが、前述べたる通り此思想が明治年間を通じて藩閥打破と合一したることが今日尙議院中心論の世間に氣受けよき本であらうと思ふ。權勢の爭奪を眼中に置きたる人は只藩閥攻擊に急であつたのである。明治初年より西洋の學問をなしたる學者は或は佛蘭西流の天賦自由論、或は英吉利流の議院政治論を唱へて之と步調を合して一代の思潮をなし今日に至つたのであるが、學者は無邪氣にして西洋の新説を唱へて喜んだに止るとしても、深く思はざりしの罪は到底免るべからずして、禍根を今に殘したものと言はねばならぬ。然るに今尙學者が深く究めずして議院政治を主張するといふことは、私は私かに嘆息に堪へぬ。

藩閥を憎むの情が自ら　天皇親政に對する反感となり、甚しきは私の國體論の如きすらも世間の攻擊を受けたといふことは、其原因頗る錯雜であつて、いふべからざる際どき關係もあらうと思ふが、一つには藩閥の罪であると思ふ。明治年間當路の有力者は非常なる　天皇の信用を得たるが爲めに、世間のいふが如く天子を挾んだとか、袞龍の袖に隱れたとまでは言はぬが、彼等自身に私はなかつたとしても兎に角天下の不平を一身に受けつゝ、累を　天皇に及ぼしたといふが如き關係はあらうと思ふ。夫れ故に我が國體は　天皇を主權者

とする國體である、　天皇を空位に置き奉るといふことは許すべからざることであるといふ主張は正論であつても、或は藩閥擁護の論と見られた。私の如きは前にもいふ通り藩閥にも反對であり政黨にも反對である。只國體を重んずるのみ。我が憲政の本義は　天皇中心たることを主張するのみであるけれども、私の國體擁護論は藩閥擁護論であると見られた。權勢に阿るものと見られた。誠に心外千萬であつて憤慨に堪へなかつたが、顧みれば明治年間の歴史は人をして斯く感ぜしむるだけの事實があつたと思ふ。夫れ故に議院政治を主張するのも無理からぬ事情はあるであらうと思ふが、學者の憲政を論ずるは何れの方面よりも斯くの如き事情より脱離して、公平に我憲政の本義を發現すべきであらうと信ずる。

無邪氣なる學者の説及び眞心より藩閥打破を希望して其議論の結局が、如何なる事になるであらうかを顧みざる人は暫く措くとして、議院政治論は權勢に向つて野心を有する人には誠に都合よき説である。野にある者には常に不平は絶えぬのである。政治の働きは一つには之を疏通する事其宜しきを得るにあらねばならぬ。然しながら人は權勢の慾を絶つこと能はざるものであつて、殊に有力なる人は如何にかして自ら取つて代らんと思ふのであるから、政黨內閣論が理論の如何に拘はらず歡迎さるゝといふが如き傾もあらうと思ふ。然らばますます以て之を排斥すべく、不平の疏通は他に其途を講ずべきものであらうと思ふ。

（八）

少しく自分のことを云ふならば、私は年來國體擁護の説をなし、議院政治、政黨政治を排斥せんと努めて居るが、私は北國の生れであつて、幼少の時から父兄長老より、薩長藩閥なるものゝ最も憎むべく、不倶戴天の仇である事を教へられた。壯なるに及んで志を同うするものが社を結んで、尊皇の主義を奉じ藩閥打破に努力せんと誓つたのである。後憲法の學問に志し政治の實際をも研究して、藩閥なるものゝ眞相をも知りが、藩閥なるものゝ專制して君民の間を雍塞するならば

得た固より之を打破しなければならぬ。然しながら私は同様の意味に於て、議院政治非なり政黨非なり、之を打破しなければならぬと云ふのである。私の議院政治を非なりとするの眞意を誤らざらんことを希望するのである。私は常に理想國の論を唱へて居る。プラトオの所謂賢者が政治の運用に當り、國家存立の本義を充實し發展する　天皇の御心をなし奉り、日本民族の文化を促進して大日本帝國の丕基を益鞏固にせねばならぬと信ずるのであるが、人或は斯くの如きは一片の理想である、取るに足らぬといふけれども、我々の努力は常に理想に向つての努力でなければならぬと信ずる。或は政黨を排斥するとも政黨の存在は事實である、時勢は議院政治に向つて進むのであつて、止むを得ざる事ではないかと私を攻撃する人もあるが、時勢の滔々として動く儘に委かしてよろしいものならば、學者思想家は何の用をなすのであるか。天下の憂に先つて憂ひ、よく時勢の柢柱となり、時勢過る事あれば隻手の之を支ふべからざるものがあつても敢て努力するのが我々の本分では無いかと思ふ。

今日に於ては最早や藩閥と云ふものはない、官僚などゝ云ふけれども、一團の勢力として政權を私して居ると云ふ事はない。今日に在つては舊式なる憲法論は最早改めなければならぬ。世の人はよく大正維新と云ふ事を云ふが、明治維新の精神は　天皇の親政を復古して、之によつて大いに民本主義を行はんとするに在りしことは前に述べた如くである。此大精神は明治年間に十分に發揚せられたや否や疑はしい。事實は如何であるとしても民本主義は十分に發揚せられなかつたと信ずる人々多いのである。今や明治の中心勢力であつた藩閥もなく元老も凋落した。天皇親政によつて大いに民本主義を行ふの明治維新の大精神は今や大いに發揚せられなければならぬ。明治維新は大正維新によつて完成せられなければならぬ。然るに再び議院政黨と云ふが如き、我國に於ては民本主義の本旨に反して、民本主義の擔當者たる　天皇の親政に反對する政治を行はんとするは何の意たるかを解するに苦しむの

である。此國步艱難の時に方つて大いに大日本の國策を行はねばならぬのである。天皇を中心として日本民族の力を結合し、大いに大日本主義、大日本民族主義を實行せん事を希望せざるを得ぬ。

＊　＊　＊　＊

附記

吉野博士が本誌の一月號に於て、憲政の本義を論ぜられたのに、私の主張と非常に違つて居るから之を批評せよとの中央公論の希望であるが、私は吉野博士より一部の雜誌を送られた時に之を熟讀して、其根本の主義に於て私の主張に反するのみならず、同博士の說を主張さるゝとしても徹底せず、又失禮な申分であるが研究の足らざる點も多々あると考へたから、匿名ならば駁論を出してもよいと答へたのである。然し吉野博士の說は先づ措いてお前の考を述べよと云ふ事であるから、玆に本論を草して江湖に問ふことにした。

何故匿名でなければ吉野博士の說を駁擊しないと云つたかと云ふに、近來どうも新聞雜誌の學者に對する態度が面白くないと思ふからである。新聞雜誌の經營者は新進の學者の論說を揭げて、或は之に對する駁論を他の學者をして爲さしめ、世の中の人氣に投じて喝采を博せんとするのは彼等自身は左程の影響のあることとも思つて居らぬかも知らぬが、私は近來切にから感ずるのである。我々の先

輩は固より例外はあるけれども、多くは發達すべき丈けの發達はしなかつた。其故如何と云ふに、彼の人達は早く秀才として外國に留學し三十歲に達せざるに已に歸朝したのであるが、當時は學問らしき學問をしたものが居らなかつたから、在朝の有力者は極度に此人達を利用したのである。實は三年五年の留學で學問らしき學問もして居らぬのに、斯くして直ぐに大家の列に入つた。私は在朝の有力者が彼等少壯の學者を利用したのが、此等の人達の發達を沮止して早くより老朽の域に入らしめた者と思つて居る。之は當時學者拂底の有樣から云へば無理からぬ事であるが我が學者を毒した事は非常である。洋行歸りの學者先生も有力者から重寶がられ、大家扱をせられるから有頂天になつて、なけなしの學問を絞り出して何時の間にか年を取つたのである。今や時勢一轉して新聞雜誌全盛の世の中となつて來るや、新聞雜誌は當時の政治家等に代つて少壯學者を毒するの役目を初め出して來た。四五年來之が實に甚だしい。洋行歸りの少壯の人は意氣旺盛である。新聞雜誌は直ぐに之を捉へて其論說を揭載する。忽ちにして名聲が喧傳する。新聞雜誌は益々之を煽てる。天下に名を成す亦易い哉。少壯の學者は有頂天にならざるを得ぬ。さうなると自分が研究を盡した事許りを發表して居る譯に行かぬ。斯の如き面白き時事問題がある、意見はないかとか、今かゝる事を論じたならば喝采を博するであらう、論說を起草して欲しいと云ふ譯で、研究の結果を發表するのが學者の本分であるのに、發表

するが爲めに研究するといふが如き事になつて知らず識らず眞面目なる研究を怠らしむるやうな事にもなる。早くより大家にして了つて、之を稱する事は以前の當路の有力者の場合よりも甚だしい。之は學者自身を咎めるは酷である。人情の弱點自らさうなるのであるが、私は近來特に之を苦々しく思つて居る。我が學界の進歩を妨ぐる由々しき大事である。それであるから、稍々極端かも知れぬが學者が、殊に新進の學者が新聞雜誌に頻りに意見を發表する事は止めた方がよいと思つて居る。自分の主義主張の爲めに止むに止まれぬ場合は別であるが、然らざる以上は事柄さへ世間に知れればよいのであるから匿名位にして置く、新聞雜誌も餘り新進の學者を煽動しない方がよからうと思ふから時弊に激した傾はあるかも知らぬが、名を擧げて新進學者の説を駁擊するが如きことはしたくないと云つたのである。かゝる自分一身の感情論も多少の刺戟を人に與へるかも知れぬと思ふから、餘白あらば付け加へて掲載せらるゝことを中央公論の經營者に依賴するのである。

小守壯輔事件の眞事實と人權蹂躙問題

福島一郎

一

世間ほど御し易いものはない。鈴ケ森殺人事件の被告人として小守壯輔なるものが起訴せられたと聞くや、新聞を初め世間一般これを罪人扱にした。而して一度眞犯人と稱する石井なるものが現はれたと報ぜらるれば、俄に小守に同情して、警視廳に手痛き攻擊の矢を向ける。警視廳が拷問をしたといへばこれぞ由々しき人權蹂躙であると騷ぐ。吾人は果してもう少し眞面目に此事件を取扱ふことが出來ないものだらうか。

余は、世間の解する如く拷問といふ事實と人權蹂躙といふ理由とを結付けて、此問題の全部をつくすものとを見て居ないのである。拷問は法律の禁ずる犯罪行

爲である、警視廳の刑事がこれを犯したとすれば彼は即法律上の犯人である、主任警部これを命じたとすれば其警部は共犯關係に立たう。此點に於て、吾人は人權蹂躙の法律あれども人權蹂躙の犯罪なし、人權とはもと法律に認められたるもの又は認めらるべきものである、との江木博士の卓見に服する。拷問をたゞ拷問丈として論ずれば、殺人放火等と同樣に、別段事々しく騷ぐに足らぬ一小犯罪事件たるに過ぎない。よし拷問なる行爲の内容が吾等の權利を蹂躙する結果を惹き起すとも、法の明にこれを禁ずる以上、一官吏これを犯せばとて、我司法制度の缺點と稱することを得ない、また所謂人權蹂躙問題ともならぬのである。

拷問それ自身は、これを犯したりとせらるる刑事に適法の刑を科することによつて解決せらるゝを得やう。然しながらその拷問の背景として存在した事情と、法の不備に乘じ、法の曖昧にかくれて、國民を虐げた非人道的行爲は、社會が聲を鋭くしてこれを難せねばならぬ問題である。此點に於て小守壯輔事件は初めて人權蹂躙問題となるのである。

二

犯行のありしは四月二十九日の夜である。翌朝小守は品川警察署に拘引せられた。何の證據あり、何の根據ありてに非ず、たゞ平常の不行跡と被害者お春と情交ありしといふことに目がくらんで、一も二もなく犯人は小守と目星をつけたのである。他に存する有力なる捜査の糸口は犯罪捜査に關する科學的智能を缺く今日の警察官の注意をひく由もなく、小守が犯人でないことを知らせる事情や反證は一切眼に入らずに、彼等はたゞ一圖に小守を犯人と信じた。かくて他の一切の捜査を中止して小守一人に全力を集中したのである。だん〳〵調べて見ると、其信じきつた犯人が少し怪しくなつて來た。或は他に眞犯人がと思つたがもう遲い、眞犯人は遠く逸して、他方面に捜査の手をすゝむべき者は既に消えて居たのである。當時都下を騷がした大事件の多くはその犯人を檢擧し得ずして、其無能を難ぜられて居た警視廳は、此事件に依つて、更に其

攻撃を新にせられる事を恐れねばならなかつた。則理が非でも小守を犯人にしてしまはねばならぬことゝなつたのである。もとより個人の人格の尊重すべきことを理解するに足る敎養なき刑事等は、今や全力をあげて小守を犯人と見るに足る根據の製造に努力するに至つたのである。即一方に拘留の蒸返しなる武器を提げ、他方に「玉」なるものを使役して、其犯罪事實の製造を完成せんとした。而して遂に拷問となつたのである。

三

「玉」とは何ぞ、或者に旨を含め、偶然同房に監禁せられたる如く裝はしめて、目ざす嫌疑者と起居を共にせしむる、かくして甘言と詐術とを以て犯罪の秘密をさぐり、或はこれを陷しいれんとする、これに使用せらるゝ者が即「玉」である。

小守の爲に使はれた「玉」の名を山口利男といふ。此憎むべき山口が小守の同房に入るや、まづ幾多の同情ある言葉をはいた、起居動作に親切を盡した、小守の空腹を見ては自分の食を割いてこれに與へた、而して日はく、自分は數日にしてこゝを出る、如何なる苦痛を忍んでも誓つて君の爲に計らうと。身に寃をおうて冷たき獄窓に憂愁の日を送り迎ひ、日夜殘忍なる係官の叱咤に苦む小守が、どうして此人を信ぜざるを得やう。小守は泣いて山口の厚情を感謝した、山口が小守の房を去るに際しては又泣いて別れを惜んだのであつた、而も彼は小守にとつて恐るべき死の陷穽であつた。

かくして山口は巧みに小守の心を捕ふることを得た、しかしながら小守はもとより罪を犯さゞるもの、堅き秘密のあばかるゝ筈なく、犯罪を是認する如き何等の言葉をも得ることが出來なかつた。山口は此事を刑事等に報告して更に新なる密議を凝した、こゝに於てか小守をして虛構の自白をなさしめんとする計劃は成つたのである。則ち山口の曰はく、警察は飽くまで君の外に犯人はなしと確信して居る、君にしてもし頑强に否認し續くるならば、拘留は幾十度の蒸返しを繰返されるだらう。都下の警察署數十、一署に二十九日を繰返されんには、直ちに以て一年二年を算するでは

ないか、さらば君の妻子はどうなる、君の爲に思ふに、寧ろ此際假りにお春を殺したといへ、然らば君は直ちに豫審に廻されるだらう。豫審に行けば保釋がある、かくして自由の身となり、徐ろに公判を待つことが出來る、公判に於て自白の虛僞なることを言明せば君は即ち青天白日の身となることが出來ると。情意をつくして、其信ずる山口に日夜これを說かれる、日々の苦痛に悶々する小守がどうして之に動かざるを得やう。然り小守はたしかに動いた。動いて而して惑うた。かりに犯罪を認むることが此際有利であることは了解されたけれども、犯さゞる罪をいふの恐ろしく、或は此上拘留の蒸返しもなく放免されるのではあるまいかと、惑のうちに日を過した。然も山口の言葉は漸次的中して來た、品川警察署から警視廳に送られた小守は、こゝでも亦再度の蒸返しを受けた。而も訊問振はいよ／＼酷に、或は打たれ、或は蹴られ、手錠のまゝ手を頸にかけさせられて何時までも立たされる、疲勞して倒るれば又打擲せられたといふ。而して一方に刑事等は妻子の窮狀を虛構誇大して物語つた、小守は泣いて如何にしてか放免されんことを願つた。則ち刑事等は假りにお春を殺したと認むることをすゝめ、公判廷で取消さば何の禍もなきことを繰返した。且又溫言を以て何か妻子の用事もあらば遠慮なくいふ樣にと恩威並び行ふの態度に出でたのである。（小守は某刑事に家庭のことを依賴し、彼はこれを固く承諾した風をして小守を欺き、何の用も果さなかつた事實を豫審廷で其刑事が證人として述べて居る）かくして小守は欺かれ、苦められて遂に決心をした。さればとて犯罪の模樣も時刻も知らざる小守が如何にしてこれを物語ることが出來やう。即ち刑事等が「それからこうしたのだらう」「それからこうだらう」といふ如き質問に、小守はたゞ「さうです」「さうです」を答へたのみである。此質問が即ち小守の言として書き表はされて其自白書なるものが成つたのである。

四

拷問の有無はしばらくおく、證據なき公民を逮捕

し、これが犯罪事實を製造せんとして、詐術を弄し拘留を繰返せる事につき、そも警視廳は如何なる辯解をなさんとするのであるか。

法條に反する小盜よりも、法の網をくゞる詐僞師高利貸に、著しき惡性と殘忍性とが見られるとすれば、法の禁ずる拷問を行へるに增して、法の不備に乘じて詐術を弄せる此非人道的行爲をせめねばならぬ。世人は一に拷問のみを責める。然し、もし法律違反といふ見地を離れて行爲自體の價値を判斷すれば、「玉」の使用は拷問にまさる惡行爲である。何故に法律は、一を罰して他をゆるすのであるか。抑もまた、證據なき公民を拘引し、詐術を弄して犯罪事實を作り上ぐることとは、證據ある犯人に拷問を强制して、訴罰の至當なるを認めしむる行爲に比して善良なりとするのであらうか。

或は、「玉」の使用が非人道的行爲なるを認めつゝ、此惡手段も、社會の共同生活を脅す殺人犯人を發見するといふ社會共同の利益の爲には是認せらるべきであるといふかもしれない。さらば何故に小守一人に搜査を集中したのであるか、一の證據なく、犯人たらざる幾多の事情明なる此一人を以て敢て犯人とし、他の一切の搜査を中止したのであるか。小守にして嫌疑を受くべしとすれば、他に同樣の疑を受くべきもの多々ありしに何故にこれが搜査をすゝめなかつたのであるか。警視廳に於ける「玉」の使用は、罪なき公民を强ひて犯人に作り上げんとする惡目的の爲に用ゐられた惡手段である。吾人は遂にこれを許すべき理由を見出し得ないのである。

然らば則拘留の蒸返しは如何。小守の拘留は引續き二ケ月に涉つて居る、云はく第一回は他人に刺靑を施せる爲め、第二回は何々の理由によりと。而も事實はお春殺し嫌疑者として拘引し、全拘留をこれが訊問に費したのである。形式はこれにても可ならん、たゞ如斯にして猶法律たるの權威と目的とを保つことを得るのであるか。智能低き刑事等は敢てとはず、警視廳の上級官これを認め、檢事が法廷に於て滔々これを理由

ありとするに至つては、吾人はたゞ驚嘆するの外はないのである。

證據なき公民を犯罪の嫌疑者として自由に拘引せしむるは法の不備である。法律は警察犯處罰令といふ官吏の手段によりどうにでもなる惡法を殘した。警察は之を惡用して勝手に國民を拘引する、拘留する、三十日未滿と限られた拘留を、警察署から警察署へと轉々さして幾度でも繰返す。かくして法律によるに非れば逮捕監禁をうけざる立憲國民は、罪なくして數ヶ月乃至數年間身體を縛られる、此間詐術を弄して寃罪を作りあげられ、遂に死罪を科せらるべき被告人として法廷に身を曝すに至るのである。如斯にして終らば吾人が憲法によりて認められたる權利は一枚の反古たるに等しい。吾人は憲法を得たと喜んで居る、而も官僚は法の不備に乘じ、法の形式にかくれて、憲法の精神を蹂躪して吾人の生活を脅して居る。これをしも許し得るならば、吾人は最早憲法を必要としない、法律を必要としない、寧ろこれなきに劣るのである。立憲の空名を荷うて專制に甘んずるものと憫笑せられんも、又何の辯解があり得るであらう。若し吾人に憲法上認められたる人權なるものあらば、警視廳の行爲は明に人權蹂躙の行爲である、社會はこれに對してあくまでも糺斷せざるを得ないのである。

五

以上述ぶる所に依つて、余は本事件により二個の教示をうけた。一は憲法上認められたる立憲國民としての權利を實現すべく、新法をつくり惡法を削り、以て法の不備を改善することである。二は法の不備と曖昧にかくれて憲法の精神を逆用するものを絶滅することである。共に歸着する最後の道は立憲政治に關する國民教養の問題である。議會が區々たる一犯罪事件をとらへて人權蹂躙の質問をなすことを暫く止めて、法律の根本的改善の研究調査會の開設を提議する時、政府が當座即妙の辯解に焦慮せずして、これに協力するの熱誠を披瀝する時、吾人の憲法上の權利は初めて確保せらるゝを得るであらう。然れども、人間が遂に人間

たるを免れざる以上、法の缺陷と幾何の曖昧なる文辭とは免れ得ないかもしれぬ、此時に於て警察官の教養依然として今日の如く、立憲國に於ける國民の意義についての理解と、之を尊重する誠意の植付けられざるに於ては、法は幾百回の補修を經るとも、人權蹂躪の行爲の絶滅は遂に期することを得ないであらう。見よ、拷問は法の禁ずるに拘はらず、證據を殘さゞる巧妙なる方法により常に行はるゝではないか。

警察官の背後に立つものは國民である。今日の如く國民一般立憲政治に對する理解を缺き、犯罪の搜査は警視廳の司る所なりとして一切をこれに委ね、また自己の政治する意識と責任とを解せず、而も常に警視廳を敵視して一の同情を加へざるに於て、如何にしてか犯罪搜査の完全を期し得やう。世間一般は勿論、これに關係する職業に從事する者の團體すら、制度の根本問題を愼重に攻究する態度を缺き、一朝過失の暴露せらるゝあれば猛然として之を罵り、以て能事終れりとして居るではないか。吾人を必しも警視廳のみを責むるを得ない、まづ吾人自分を責めたい、不備なる警察制度の下に、犯罪搜査に關する何の科學的智識なき警察官の活動するが儘に放置し、警察官と共に被告人を見るに犯人を以てするはおろか、嫌疑者をも亦犯人と眺むる吾人自身を責めねばならぬ。敢て小守壯輔の一小被告事件に固着して、拷問警察官の犯行を明にするを以て本問題を畫し終れりとせば、問題は永久に未了に終るであらう。一の人權蹂躪問題去つて更に又千百の人權蹂躪問題はつぎ／＼にあらはるゝであらう。

思ひ來れば最後に歸趣する所は吾等一般國民の立憲政治に關する理解と內的教養の問題である。一面からいへばこれが最初の出發點である。之をよそにしては、法律の完備も警察制度の改善も遂に其實あるを得ないのである。

我國の幼稚なる社會道德

安部磯雄

△個人道德と社會道德

道德は時と處とを問はず、あらゆる場合に行ふべきものであるから、個人道德とか社會道德とかいふ區別を設くるのは面白くない。然し今日私共の眼に映ずる道德上の事實に就て考ふる時には、斯樣なる區別も實際便利ではないかと思はれる。私は個人として見たる日本人の道德が決して泰西人の共に劣つて居るとは考へない。親しき友人として交際する時には多數の日本人は最も信頼すべく、且つ禮儀正しき人である。これは多數の泰西人が日本人に對して有つて居る感想であらうと思ふ。然し面識なき人として、若くは群集の一人として見たる日本人は全く別人ではないかと思はれる程である。彼等は未だ社會的禮儀に慣れて居ない。他人に對して思ひやりをする程に精神的修養が出來て居ない。知人に對してならば決して爲すまじと思はれることを他人に對しては平氣でやるのである。彼等に決して惡意があるといふ譯ではないけれども、何等反省する所もなく、唯思ふたまゝにやつて居るといふに過ぎない。然し私共が無意識に爲して居ることが、他人の感情を少からず傷ふものであるから、私共は相互の幸福のためこれを改むることにせねばならぬ。社會は恰も器械の如きものである。若し絶えず社會的道德といふ油を注入しないならば、必ず何處かに摩擦を生ずるに相違ない。私は以下我國民の欠點であると思はれる所を指摘し、最後に其矯正法に關する卑見をも陳べて見たい。

△責任の觀念に乏し

一人にて責任を負ふ場合は何人も眞面目であるけれ

ども、多數の人々が其責任を分擔する時は、誰も眞に其責任を感ずるものがない。これは多少泰西人にも共通なる弱點であるかも知れぬが、殊に日本人に於て然りである。數人の宴會に於ては到底有り得べからざることも、往々大宴會に於て起ることがある。私は大宴會に於てナイフ、フォーク、さてはナップキンなどの屢々紛失することを聞かされたのであるが、若しこれが事實であるとすれば、これは全く大宴會に限られたことで、小宴會に於て起り得べきことでない。人には多數の中に隱れて惡事を働かんとする心もあるのだが、これは全く責任の觀念が徹底して居ないからである。

嘗てシカゴの附近に在る某小都會に於て電車値上の問題が起つた。一部の市民は乘車賃の値上を爲すよりも寧ろ思ひ切つて車掌を全廢し、乘客をして各自に乘車賃を車內の函に投入せしむることにすれば、これにより大に經費を節減することが出來る、若しこれによりて尙ほ缺損を生ずるならば、其時値上を斷行するも遲くはないといふ說を唱へ、これを電車會社に忠告した。會社もこれを諒とし、直に實行したのであるが、意外にも好成績を得たので、終に値上を思ひ止まつたといふのである。乘客をして勝手に乘車賃を車內の函に投入せしむるには大なる社會的道德心を要する。よし米國の如き所に於ても、これを大都市に應用することは困難であらう。小都市に於ては乘客も多く知人であるから、何人も乘車賃を拂はずには居られない。然しこれが果して我國の小都市に於て實行の出來ることであらうか。若し我國人に知人の前に於けると同じく、多數の中に在つても同一の責任を感ずる心あらば、經濟的に電車を經營し得るのは明である。

演說會に於て妨害的批評を試むるのも、つまり多數の力を恃むとか多數の中に隱れるとかいふ卑怯なる心より出づるものである。如何なる彌次でも自分の知人の演說を批評することはしない。よし辯士が知人でなくとも、聽衆が僅に二三十人であれば、直に人々に發見せられ、若くは制裁を加へられる恐れがあるから、決して妨害を試みるが如きことをしない。亦辯士側の

人々が彌次を演說會場より引ずり出し、或は袋叩きにするといふが如きも畢竟多數といふ力を恃むが爲に生ずるものである。少數者の席に於ては單に彌次に警告を與ふる位で濟むのである。

電車內に於て老人や小兒に席を讓るといふことは一時よく行はれて居る樣であつたが、今日は餘り行はれて居ない。若し假りに知人のみが電車を貸切りにしたとすれば、壯者のみが席を占めて老人や小兒を立たせる樣なことはあるまい。否老人と小兒のみではなく、荷物などを持てる人には素手の人が必ず席を讓るに相違ない。何人に席を讓らねばならぬかといふ標準は年齡でもなく性でもない。唯電車內に立つて困つて居る人ならば何人に限らず、これに席を讓るのが社會的禮儀である。婦人でも年若くして壯健らしき人ならば、これに席を讓るの必要はない。男子でも老人、病氣らしき人、重き荷物を持てる人であるならば、これに席を讓るのが當然である。而もこれが今日實行されて居ないのは何の爲であらうか。車內の人が知人でないといふことが唯一の理由である樣に思はれる。詮じ詰めれば知人に對しては禮儀を守らねばならぬが、知人でない者に對しては其必要がないといふことになる。私は何だか我國人の道德思想には徹底した所がない樣に思ふ。

△他人の事をも考へよ

私共に自分の身を他人の位置に於て考へるといふ同情心があるならば、社會は今少し溫か味のある團體となることが出來はしまいか。つまり己の欲せざる所を人に施すこと勿れといふ敎訓を實現さへすれば我社會道德も一段の進步を爲すに相違ない。私は今思ひ付いた種々なる實例を擧げて、私共の道德が日常生活の小事件に就て如何に欠乏して居るかを陳べて見たい。

私共は道路を通行する際に於て幾度も不快な思ひをさせらるることがある。俥夫や馬車の御者などは一體道路を何と心得て居るのであらう。私は彼等が道路を獨占して居るが如き態度を見て何時も苦々しく考へて居る。俥夫が疾走する時には碌にベルをも鳴らさず、

通行人に間近くなつた時急に叱咤するが如き聲を出すのである。殊にこれが婦人小兒といふが如き弱者に對して甚しい。これは俥夫の方からも充分注意すべきことであるが、乘客も、自分が屡通行人として不快なる感を懷きたるに鑑み、俥夫の傲慢なる態度を戒めねばならぬことと思ふ。馬車の御者は一層此點に於て注意せねばならぬ。彼等は晏氏の御者然として其主人の位置を笠に着て居るらしい。彼等がイーと掛聲して馬車を驅り來る時には何人と雖も一種不快の念を起さゞるを得ない。封建時代ならいざ知らず、今日の如き平民主義の時代に於て通行者を睥睨するが如き者には警察權を以て相當の罰を與ふる必要がある。私は馬車にも自動車の如き喇叭を用ゆることを勸めたい。喇叭も決して愉快なる音響ではないが、御者の使用するイーといふ横柄なる掛聲に比すれば遙に優つて居る。

自動車位自分で乘つて心持よく、人の乘つて居るのを見て不愉快なものはない。何故に斯の如き矛盾が生ずるかといふに、これは全く自動車を取扱ふ不注意より生ずるのである。道路の廣き場合、若くは通行人の少なき場合に於て自動車を疾走せしむることは敢て差支なきも、東京市の如く道路の狹き所に於ては大に遠慮する所がなくてはならぬ。殊に晴天の日には砂塵を揚げ、雨天の日には泥濘を飛ばして通行人を惱ますのであるから、充分に注意しなくてはならぬ。米國に於ても自動車に對する反感は少なくない樣である。私が二年前自動車業に關係ある米國の友人より聽いた所に據れば、自動車が小兒や老人を轢き倒したる場合に、其附近の彌次連が梶棒などを携へ來りて自動車をメチャメチャに叩き壞はした例がいくつもあるそうだ。人情は何處も同じで、自動車は餘り評判が良くないと見へる。然しこれも文明の利器であるから、此位の理由で以て廢止すべきものではない。要は御者及び乘者の注意如何によることである。

以上は通行者の立場より人車、馬車、自動車等に對して私共の注文を陳べたのであるが、私は更に馬車や自動車の御者が如何に通行人を見て居るかといふことと

に就ても一言せねばならぬ。私共は平常通行人がドンナであるかといふことを考へないけれども、一たび自分が人車や自動車に乘つて見ると通行人の多數が如何にボンヤリして居るかを知ることが出來る。彼等は左側通行の規則などはとうの昔に忘れて居る。道路の中央をブラ／＼と歩行しながら、左右の店などを横見して居る。甚しきになると、道路を眞直に歩行せず二十度位の角度をなして斜に徐行して居るものがある。我國では電車の交叉點に旗振りなるものがあるから、通行者も大分助かつて居る様であるが、若しこれがなかつたならば我通行者の如きボンヤリでは大分多くの怪我人を出すに相違ない。東京市の電車が今少し其速力を早くすれば、從つて輸送力を増加することが出來るけれども、警視廳は市民の危險といふことを心配して容易にこれを許さない。大阪市の電車は東京市の電車よりも疾走力が多くて、然も何等危險を感じて居らぬ。これによりて見れば東京市民のボンヤリさ加減は大阪市民よりも甚しいと見へる。

御者や乘者が自ら通行人であつた時の場合を考へたならば、通行人を叱咤したり睥睨したりすることも自然に止むであらう。通行人が自ら車上より通行人を見た時のことを考ふれば今少しく注意して道路を歩行する様になるであらう。斯くなれば双方共不快な思ひをすることもなく、又危險に遇ふ虞れもない。斯くして私共は此社會生活を一層溫情の溢れるものとしたい。

鐵道車内で乘客が比較的多くの席を占領して、これを新しく入り來る乘客の爲に讓らうともしないことは、今日まで度々攻擊の材料となつて居るのであるが、これなども全く社會道德の幼稚なることを證明して居る一例である。更に今日の旅宿に於ける習慣を考ふれば私共は何とも言へぬ不快に堪へない。私は旅行を以て最大娛樂と信じて居るけれども、旅宿のことを考ゆると忽ち愉快の大半を殺がれる様な氣がする。幸にして宿泊者の少なき時は安らかなる夢を結ぶことが出來るけれども、隣室で騷がれる時には殆んど夜半まで眠ることが出來ない。旅行者は旅館を以て單に宿泊

所と考へず、これを料理屋と考へて居る。故に隣室の迷惑が如何に大なるかといふことは少しも考へないで、盛に飲食し且つ騒ぐのである。私は誰にも斯る經驗があると信ずるのであるが、彼等は何故に自らの欲しないことを平氣に他人に施すのであらう。然し彼等は必ずしも故意に斯様なることをするのではないから、若し迷惑を感じて居る人が少し注意をすれば彼等を反省せしむることが出來るかも知れない。

泰西諸國では役所とか學校とかの受附にはなるべく愛想のよい親切な人を置いて居るのであるが、我國の受附人は概して傲慢であり不親切である。受附人は官省なり學校なりを代表して居るのであるから、充分禮儀を以て來訪者に應對すべき筈であるに、中には傲然たる態度を以て接するものがある。勿論彼等は多くの來客に接し、多くのつまらぬ質問にも答辯せねばならぬのであるから、或場合には面倒だといふ感も起ることであらう。然し彼等の一擧一動は來訪者をして愉快を感ぜしめ、若くは不愉快を感ぜしむることになるのであるから、彼等は自らも不親切なる受附人に對して不快を感じたる經驗に照らし、充分に戒むる所がなくてはならぬ。電車の車掌にも極めて愛想のよき者と然らざるものとがある。乘客の我儘も随分責むべきであるが、車掌の內にも不親切な者が少なくない。大概誰でも一度位は車掌と衝突した經驗を有して居るであらうと思ふ。私は外國に於て乘客が車掌と爭ふたのを見たことが一度もない。これは習慣にも因ることであらうが、重なる原因は双方の間に一種の禮儀と言ふか、或は道德といふものが存在して居るためである。

△不注意より生ずる不道德

何故に我國民の社會道德が幼稚であるかは以上陳べたるが如き原因に歸すべきであるが、更に私が陳べて置きたいと思ふのは社會的不道德が往々私共の不注意より起るといふことである。私共が電車內に於て、宴會に於て、學校に於て見る所の無作法は多く此不注意といふことが原因となつて居る。電車內に於て唾を吐くことは規則を以て禁ぜられて居るに拘はらず、今日

も尙ほ唾を吐く者を見受ける。これは單に不注意から生ずる所の行爲であると思ふ。全體電車内で唾を吐くといふが如きことは注意深き人に出來ることではない。自分の自動車や馬車に唾きする人は一人もあるまいと思ふが、他人の自動車や馬車に乘りたる時には尙更謹愼するに相違ない。電車は東京市民の共有物ではないか。然も平氣でこれに唾きする人は電車の何物たるかを考へて居ない人である。英國にては道路にすら唾きするものは四十圓位の科料に處せられることになつて居る。若し愼重に衞生のことを考ふれば我國にも速に唾を取締る法律を制定する必要がある。電車内で唾する人の如きは嚴罰に處して差支がないと思ふ。

これと幾分か似て居ることが往々公園や學校などで行はれて居る。人々は公有の物品に對して自分の所有品に對するが如き注意を拂はない。公園に備附けられたる器物が破壞せられ、若くは花卉が摘取られる如きことは近年著しく減じたのであるけれども、學校の机や腰掛は頗る亂暴に取扱はれて居る。机の如きは殆んどナイフの痕迹のないものはないといふ有樣で、或ものは丁寧にナイフを以て文字を刻んである。此等は全く學生の不注意より起りたることで、彼等の社會道德が如何に低級であるかを證明して居る。

今日の學生は敎場道德といふことを充分に考へて居ないらしい。時間に後れて敎場内に入り來る者は、なるべく授業を妨害せぬ樣に注意すべきであるに、中には荒々しく戶を開閉し、靴音高く入り來る者もある。隣りの敎場に授業のあるをも考へず盛に騷ぐ所の學生がある。階上の敎場で多數の學生が足踏をするため、階下の授業が全く妨害せられることがある。而して妨害を受くる學生は何れも憤慨するのであるけれども、彼等が階上に在る時は少しも階下の者に對して思ひ遣りがない。要するに今日の學生は此等の事に關して餘り思慮を費さない樣である。

△非常識の實例

私は最後に社會的不道德が往々私共の非常識より起ることを陳べて見たい。次に示す實例は單に傳聞した

のであるが、事實であるかどうかは保證が出來ぬ。若し事實であらばズバ拔けた非常識の實例である。嘗て我國の實業家が觀光團を組織して米國に渡航した。彼等が桑港の旅館に宿泊して居た時、一行中の或人々は浴衣姿で廊下に出るといふ不行儀をやるので、領事は彼等に米國の習慣を飲込ませる様に次の如く説明して聽かせた。旅館では各客室が各自の住宅の如きもので、廊下は道路に比すべきものである。浴衣姿で廊下に出るのは恰も裸體で道路に飛出す様なものであるから、今後充分に愼んでもらいたいといふのであつた。其翌日領事は再び旅館を訪問したのであるが、觀光團連中の居る客室の前の廊下には果物の皮が堆くなるまでに棄てゝあつた。領事は眞赤になりて彼等の無作法を責たのであるが、彼等は一向平氣なもので、廊下は道路の如きものであると昨日承つたのだから、果物の皮を棄てたので御座るといふ返答であつたそうだ。私共の不道德は時として斯様なる非常識より起ることがある。

電車の車掌が混雜の場合に乘客を中へ中へと進めるのは當然のことで、私共は寧しろ出口の所に押合ひへし合ひして立て居る乘客を責めねばならぬ。然し電車内が割合に少人數である場合にも尙ほ乘客を眞中に押進めんとするのは所謂杓子定規である。非常識である。此場合に於ては車掌を非難するのが寧ろ當然ではあるまいか。

△如何にして社會道德を發達せしむべきか

社會道德を發達せしむるには旣に私が暗示して置いた通り、時と處とを擇ばず如何なる場合にも同一の道德標準によりて行動することが必要である。即ち知人ならざる人に對しても知人に對すると同一の考へを以てするといふことである。其他自分の身を他人の位地に置いて見るといふこと、常に事物に注意すること、或は常識を働かせるといふことも社會道德を修養するに大なる助けであるに相違ない。然し私が玆に一言して置きたいと思ふのは、制度の改良によりて社會道德上の欠陷が著しく減じ得られるといふことである。別言すれば社會的道德の發達は個人の修養を要すると共

に制度の改善をも要する。例せば電車に關して私が陳べた不道德は電車の乘客數に制限を加へさへすれば忽ち改まる所のものである。ベルリン市では乘客を悉く腰掛けさせることとし、車內に立つ者は七人を超ゆることが出來ぬことを規定して居る。斯の如くして車內の混雜が避けらるれば乘客と車掌との間に不快なる爭論を起すこともなく、老人や小兒に席を讓ることも容易に出來る樣になる。これを思へば私共は社會道德といふ立場から見ても電車の改良を要求せねばならぬ。今日の如く乘客を多く詰め込む樣では、車內の混雜は甚しく、如何なる車掌も神經的にならざるを得ない。若し東京市が强ひて電車賃の値上を爲すならば、私共は其代償として此位の改良は當然要求することが出來ると思ふ。

馬車、自轉車、自動車、人車などの問題は人道と車道との區別が出來る程に道幅さへ廣くなれば直に解決が出來る。今日東京市の道路に人道車道の區別がないから、私共は馬車、自動車等に對して時々不快を感ずることがあるけれども、斯の如きことは殆んど泰西諸國に於て見ることが出來ない。

鐵道車內に於て無作法の行はれるのも畢竟制度の罪である。若し米國の列車に於けるが如く一人に付き一の腰掛を供給することにすれば、一人にて二三人の座席を占領するが如き不都合の行はれる餘地はない。

要するに私共は個人の道德を進むると共に、出來得るだけ道德發達の妨害となつて居る制度を改善するために努力せねばならぬ。これが幼稚なる我國の社會的道德を發達せしむる最も有効なる方法であると信ずる。

順自然生活論に到達するまで

茅原華山

一

東京なる××へ。

私はいま大井町の海岸から微かに漂ふて來る海潮音を聽きながら、緑いろの水平線の上をひねもす白羊の群のやうに走つてゐる帆船を眺めながら筆を走らしてゐます。

あの樣な事件があつてから、大井へ落ちてからといふものは、私は全く著述の外何者も書くまい……操觚界から全く隱遁して、專心に讀書し思索しやうと考へてゐたのです。けれどもこの事はとう〳〵私の思ふやうには行かなかつた。あの持主事件のあとにとり殘されたものは私一人では無かつたのです、私が斯うして大井迄落ちのびても、私の周圍にゐる私と最も親しい多くの人々は私が大井に隱遁するといふことを承知しないのです……いや承知しない許りではない、その事をてんで本當にして呉れないのです、私は這うなつて來るとどうしても筆を執らなければならなかつたのです、私は私自身の要求を抑へて筆を執らなければならなかつたのです、その結果は以前のやうに私は原稿紙の前に坐らなければならなかつたのです。

けれども私は一度筆を執つて見ると天性の熱が燃えて來なければ承知が出來ない、私は筆を手にするとどうしても熱狂と醉陶の中に生きなければ、私の内部が承知しないのです、私は一度出發した以上はどうしても行く處まで行つて、大解放を受けて破裂しなければ納まることが出來ないのです、私は自然と地平線と人とに添ふて行く處まで行かなければならなかつたのです。

××よ、恐らく私にとつて大井に於ける這度のことは私がライターとしての最後の悲劇を演ずるゝのであるかも知れぬ、私はともかくもこれ迄のあらゆる力を盡してこれに從事する決心でゐるのです。

　それに彼歴事件が起る始めからのことであつたが私は私の思想に何とはなしに轉機が來てゐるのではないかといふことを知つたのです、私は東京にゐる時分から何故か知ら私の內部から激しい讀書慾の衝動してゐることを感じた、私は何となくわけも無く讀書がしたくなつた、何でも可い、何でも可いから讀書しやう：…：私が今迄讀んだものも、それから新らしく讀まうと常々から思つてゐたものも是非とも讀まなくてはならない、私は隱遁しても可い、今迄の過去をみんな打ち捨てゝも可いから讀書しやう…：と思つたのです、だから私には實際のところ、あの事件が突發して、悲を後にして大井町へ來たといふことが非常に愉快でたまらなかつたのです。

　××よ、私が大井町へ引越して來た日は午後であつたが、その日は大井町の一年中で最も美はしい日の一日では無かつたらうかと思はれる程靜かなスキートな感じのする日であつたのです、眞青い空が燃ゆるやうに土地の上に下りて來てゐる、その中を冬の太陽が燃えながら靜かに歩んだ…：私は二三人の若い友人と鳥のやうに丘に上つたり海へ降りたりして樂んだのです。

二

東京なる××よ。

　私の思想の激變に驚き給ふな。私の現在は甚だしい思想の過渡期にゐるやうな氣分がする、私にはそれが筆を執つたら表現せずにはゐられないのです、私の內部生活は昨今非常にファナチカルになつて來たとともに、今迄私の經驗したことの無い程透明になつて：…いや分明になつて來たやうな氣がするのです、私はこの頃は不思議にも今迄餘り見向きもしなかつた生理學や生物學や發生學や化學や地質學や天文學に非常な興味を覺えるやうになつて來たのです、そして私は興味

を持つて研究してゐる中に私は今私達が驚くべき時機に遭遇してゐることを見出したのです、私の内部の轉機は愈々其處から生じて來たのです。

××よ、私はいま職業としてこれらの諸科學を研究してゐるのではない、私は專門家として試驗管をとり、メスを握り、或は星の速度を測定することに餘りにその出發が晩かつたことを知つてゐる、然しながら××よ、私はその研究されたる自然の事實を見さへすれば可い……私は一人間としていまそれらの科學の支配者としてその中央に立つて居れば可いのだ、私は今人間として大自然の中に强行進軍を試みてゐるのです、私は科學を信賴します、然しながら科學の被支配者とはならないのです、私は科學の中に更に或る何物かを發見しやうとするのです、そして私の發見したものは私にとつて驚くべきものであつたのです、××よ、世の大多數の科學者はその研究に熱中して、研究の爲めの研究をしてゐるのです、それは決して不必要なことではない、敵の要塞を擊破するためには、攻城砲の研究をしなければならない、攻城砲の研究には彈丸を研究しなければならない、彈丸を研究するには火藥を研究しなければならない、その火藥を研究にはその火藥が何處の硝石で何處の硫黄で出來てゐるかも知らなければならない、それは研究としては精細な誠實なものでなくてはならない、けれども世の大多數の科學者は、その科學が人間の恐るべき過程を報じてゐることを知りません、科學そのものの中に秘められた一大事を報告して吳れないのです。

××よ、私はいま科學者が默つて研究してゐる研究の中には私等の最も重大なものとして考へなければならないものがありはしないでせうか、今や私等や私等の世界は、恐るべき過程の中にあるものではあるまいか、××よ、私は最近に於て著しく疑ひ始めた、また考へ始めた、私は最近に於て、私等や私等の世界が、これで一先づその成長を告げたのではないか、最早今迄の行き方ではどうしても成長の出來ない時機に遭遇したのではないか、私等や私等の世界はこれで全く行

き詰る時代が來たのではないかと疑ひはじめたのです、この疑は××にとつて價値の無いことであると言はれるかも知れません、然しながらこれは私の内部の經驗から言ふと相當に深い根據を持つてゐたのです。

三

玆まで書いて來ると海の樣子は著しく變化して來ました、今迄輪を投げたやうな行列をつくつて飛んでゐた白い海鳥は何處かへ行つてしまひました、青く振り亂れてゐた波筋も、漸く乳白色になつて和いで來ました、然し綠いろの水平線は依然として低くもならなければ高くもなりません、その上には矢張ひねもす走つてゐる帆船が白羊のやうに群れてゐます。

通信はこれで前の談を續けるのですが、私は最近に於いていろんな化學の讀書に沒頭して見ました、私は自ら試驗管を執りはしないが化學者の言ふ所にはよく肯かれました、然しながら私は最近の化學が餘りに自然を知り盡してゐるのに驚きました（これは決して皮肉を言ふのではありませんが）化學といふものを歷史的に研究して見ると、その餘りに進化し過ぎてゐるのに喜びを感ずると同時に驚怖を感じます、見給へ、××、ラヂユームもその發見の日より二十年を經過すれば半價になるといふ、それよりも化學に現はれた世界はもつと行き詰つてゐる、魯西亞のメンデレーフの言ふ如く最早世界には元素なるものが行き詰つてゐる、勿論まだ自然の中に隱された二三の元素はあるかも知れない、然しながら自然の畑は餘りに多く掘り類されたといふものではありますまいか。これは獨り元素の問題、化學上の問題のみではありません、我々は地質學の研究の結果を洞察し、それから天文學の結果を推考して地球の年齡如何といふことも知ることが出來ます、這麼ことを言ひ出すと狂人じみてゐるといふ人があるかも知れないのですが、若し私が地質學を或は天文學を自己のものとして信ずる以上は、私にはこれも大なる問題となつて來るのです、地球の年齡今如何といふことは勿論定つた學說ではなく、また研究された事實でもないのです、別に地球不老說を唱へてゐる學

者もあります、けれども我々は死せる地球として月球の存在してゐることを知つてゐる、地球も何時かは死なねばならぬといふ運命は月が夜々地球上に物語つてゐるではありませんか。地球の現在は果して如何なる狀態に在るのであらうか、地球は進化してゐるのであらうか、退化してゐるのであらうか、老衰の狀態にあるのであらうか、地質學の報告する所に從つてもこれらの恐ろしい疑問を解決することは出來ませんが、私にはどうしてもこれ以上に地球が進化して行くものとは考へられません。

次いで私は人類學の上に更に深い疑問を投ぜざるを得なかつたのです、地球の年齡如何といふことを考へると同時に、私は人間の進化の程如何といふことを考へて見なければなりません、發生學の上からいふと人類の發生は他の諸動物とは異つてゐることも論じられてゐる、それについて種々の學說と實驗とがあります、然しながら人類が若し進化すべきものであるとすると今後の人類はどう進化して行くものであらうか、或はどう進化して行く可能性があるだらうか、ダーウインやヴアイズマンは科學の進步の促進者として功績があります、其の他の今日の進化論もそれぞれ獨特な研究を積んでゐます、けれども彼等は要するに兎の進化の歷史、白魚の進化の歷史、花の進化の歷史、葉の進化の歷史を說明してゐるに過ぎないのではないのですか、人類は今後どう進化して行くものであらうか、人類は今如何なる進化の位置にゐるものであらうか、それに對する報告はない、けれども人間は內面に於ては進化して行くかも知れませんが外面に於ては次第に退化して行きます、人の身體の如きも次第に破壞の斧に碎かれて行く、文明人の眼は次第に近視眼になつて行く、齒は次第に小さく細くなつて行く、若し內面と外面と最もよく調和される時代があつたとして、それが進化の頂點であるとすれば、その時代は竟に人間に得らるゝものであらうか。

××よ、私はかういふ行き詰つた位置を我々や我々の世界は亦これを民族文明の上にも發見したのです、

試みに世界の民族史を見て下さい、世界には殆んど新成長の民族といふものが無くなつたのではないですか、支那、印度、波斯はいふ迄もない、英國既に成長期を經過してゐる、佛蘭西、伊太利亦既に過去の歴史を飾つてゐる、西班牙、葡萄牙またさうである、土耳古、塞耳比、羅馬尼亞、勃牙利それから墺匈國等にも大なる成長の時期があるとも思へない、丁抹瑞典諾威またさうである、唯だ殘るものは未來の奇蹟の民族として殘されてゐる露西亞民族と今其の成長の最大頂上にある獨逸民族とのみである、世界の歴史の問題は最早民族よく成長し得るかといふ問題でなくしてよく復活し得るかといふ問題となるのではありませんか、如何にして歴史の重荷を捨離して復活するかといふ問題ではありませんか、民族成長の問題は最早これから世界の過程に無くなつて行くのではありませんか。

××よ、私はとう／＼最後の一線に立ちました、そして私はこの問題を何とかしなければならなかつたのです。

四

東京なる××へ。

私は斯る問題のために私は非常に苦しんだ、私は何とかしなければならなかつた、それでなければ我々と我々の世界は大なる墓の彼方に運ばれて行かなければならなかつたからです、少なくとも私にはさう考へられたからです、その結果考へ出されたものが……私の新らしい實行に移つて行つたものが、私の順自然生活論です、新英雄主義です、三世一貫の自我中心説です、一元歸一主義です、私は最後の線上まで行つて自ら高らかに凱歌を奏して引き揚げたのです、私は今迄の科學や哲學藝術や政治が多くは逆自然の生活であつたことを知つたのです、全體であつて全一であるものを説明しやうとしたのが抑もの誤りであつた、自然の恩恵に生きてゐる人間が自然に反抗しやうとしたのが誤りであつた、分つべからざる自然を分つたのが誤りであつた、進化の一面を見て、勇ましき永遠の輪廻を直覺し得なかつたのが誤りであつた、自分自身の眞の統一

を忘れたのが誤りであつた、××よ、私は、斯かる化學の裡に入つて化學と共に行き、斯かる地質學、天文學の裡に入つて斯かる地質學や天文學と共に生き、斯かる人類學、斯かる進化論の中に生き、斯かゝる文明と共に生きたことが抑も〳〵の間違であつたのです、私は自然の前に今迄の反逆をわびなければならぬ、自然の前にその非行を謝せなければならぬ、そして私は自然の大道を歩んで行かなければならぬ、私は科學上に英雄主義を叫びます、それは科學の中央に坐して科學の支配者たることである、私は久遠の更生をなす所の久遠の輪廻である宇宙に對して三世一貫の自我中心說を把持してゐる、そして現在の文明に對してはその分裂と焦慮とに對して一元歸一主義を說くのである、文明今や全く分たれた、それは一つに歸つて行かなければならぬではないですか。

五

東京なる××へ。

私は言ひたいとは多いが他日一冊の書物としてもつと悉しく物語る積りです、外はもう夕暮です、今まで乳白色に光つてゐた波筋は再び黃金色に輝きはじめました。

北の方の海岸を遠望すると深川あたりであらう、もく〳〵と出る煙突の煙が一面の空を蔽つてゐる、その煙は全く密集部隊のやうになつて北の方へ、北の方へと進んで行く、××よ、あの煙の中に生きて行く××等は東京の空を蔽つて戰つてゐる煤煙について何等も知らないでせう。

この煤煙の中でもいろんな戀が語られてゐるでせうが、あの中では戀まで黑くなるでせう、これが日本の歌舞の地、歡樂の場、即ちこれ人間自殺の地、自滅の場。

對支國策統一論

支那國是の根本義

文學博士 內藤湖南

一

一時の政策上の問題として觀るときは、日本政府が支那に帝政延期の警告を發したことなぞは、餘り上出來といふことのできないものと思つた。しかし現に警告をした以上、そして今日支那が爭亂を惹き起すことにより、また日本に於ても袁氏の政策に事實反對した結果より生ずる將來の危險を考へる以上は、何處までも帝政延期を爲さしめ、その結果として袁氏の政府が崩倒(たふれ)ても之れを恤ふるに暇ないといふことは、何人も異論ないところである。これは勿論日本の一時の政策から出た當然の結果に就ての考へであるが、支那の永久の幸福から考へても余はもとより帝政に反對し、共和政を維持することが得策であるといふ意見を有するものである。勿論此處に共和政といふは、佛蘭西の如き米國の如き制度とか政治上の原理より定めた共和政治を指して云ふのでなくて、兎も角支那の元首が世襲で無いこと、中央集權の政治を採らぬことの二つの例を除けば、如何なる共和政治にても可いといふ意味の共和政治に過ぎないのである。最近に至つて日本では支那の帝政を主張する人が急に減じたやうに思はれるが、先般までは帝政論者が尠からずあつた。それらの理由とするところは、支那は永い間帝政の國であつて、未だ曾て共和政治の經驗が無い。人民の程度も亦共和政治を理解する程度に達して居らぬと云ふやうな種々の理由を擧げて居る。しかし永い間帝政の國が共和政治に變更出來ぬといふことはない。現に日本は長い間封建政治であつて、德川氏の末年に於ても二三十年後に立憲政治に化らうとは何人も想像せなかつたところである。然るに立憲政治を以て今日何等の支障ないの

である。政治家の中には憲法を潜らうとするものが無いではないが、全國の人心は何處までも立憲政治を維持せんとする思想を有して居る。支那が四五年前までは帝政であつたのが、共和政にすることの不都合であるといふ理由のないことも之れと同一である。

二

然し之れは極めて抽象的の理論に過ぎぬと云へばそれまでゝあるが、實際支那は近世數百年の間、既に君主專制の弊に堪えなかつたのである。元來、隋唐以來、地方を治むる官吏が皆渡り者になつて、自分の治むる土地に就て親密な利害休戚を感じなくなつた。そして人民の苦しむところは、帝室並に政府の組織の過大なることろである。その組織の大なる時は、人民の苦しむ時、その小なる時は人民の幸福の時といふことが、長い間の原則となつて居た。それについては支那の治亂興廢と云ふことが如何して起るかを併せ知らねばならぬ。支那は天然の狀態が人力を超越したところに特色を有する國である。支那の聖人の政治は天然を利用することとあるも、天然に打ち勝ち人力を以て之れを左右することゝは不可能ことになつて居る。殊に統一した政治が行はれて以來、また地方を治むる官吏が地方人民との直接の關係が失はれてからは、益々天然の力が大となり、治亂興廢は明君賢相の力でもなければ、また暴君奸臣の力でもないといふことが明らかになつて來た。要するに其の國の生產力と政府の組織の大小との關係を以て大勢が定まるのに過ぎない。例へば、ある時代に騷亂があつたとする、支那は騷亂になると全く無政府の狀態に化し、ために人口も減じ生產力も減少するのである。その際には組織の大なる政府を維持する力は到底なくなり、之れを統一するものは必ず微賤より起り平民に近かき簡易なる生活に堪え、また簡易なる政府組織を以て政治を行ふことのできるものである。斯かる政府であれば、たとひ其の人物の善惡に拘らず多くは成功するのである。明の太祖の如きは決して仁君とは云へない。唯微賤より起つて簡易の生活が可能ところから兎も角統一に成功したのである。それより三四代の間は祖先の敎訓の効あつて、帝室及び政府の組織が小さいまゝ繼承することができた。また人民は戰亂の無い結果漸次生產力を增加するやうになる。それが則ち支那で謂ふ太平の世である。ところが帝室が永續すると單に一族の繁殖の上から見ても非常に膨張する。明の太祖は祖父の名さへ分らず、親戚

故舊のない身分から起つたのに拘らず明末には宗室二萬餘人を數えるに至つた。清朝の如きは更に多く、清朝が奉天より北京に入る際既に三千人以上の宗室覺羅があつた。これらの費用は支那の財政にとつては餘程重大の問題である。そしてこれらの人の生活は多く無賴漢の巣窟となつて良民を苦しめる。その上帝室の生活も膨大となり、それを圍繞する中央官吏の生活も亦大きくなり、その帝室、中央官吏に賄賂を贈つて地位を保つて居る地方官吏の生活も亦大きくなるのである。總ての治者の系統の斯く膨張するにつれて、人民の生活は漸次苦しくなつて來る。そこに支那の常として不可抗力ある天災地變が起り、時としては騷亂が起ると、獨裁政治の結果として官吏に責任觀念の乏しいために騷亂は限りなく廣がり、到頭その朝廷の轉覆にまで及ぶのである。近世の支那は此の道程を屢々繰返して居る。明末の崇禎帝の如き明君があつても國は滅ぶことがあり、清朝の雍正帝の如き苛酷なる君主でも安全に一代を過すこともあるといふやうに、畢竟支那人民より云へば、帝王並に政府の權力組織の小さい程幸福であつて、如何なる明君であつても、それが世襲し漸次中央の組織が膨張すると結局不幸となるのである。これが支那の政治上の常態である。

三

斯の關係は余が考察するのみならず、支那の學者達も勿論考へたことである。殊に明末から清初に當つては崇禎帝の如き明君が滅亡の悲慘を來たし、國は滿洲人のために奪はれたのであるから、その頃有力なる學者顧炎武、黃宗羲、王夫之等の人々はその國勢の斯くの如き關係に注意して、君主專制は凡ての惡政の根原であることと並びに地方分權をせなければ政治の良く修まらぬことと、及び人民を基礎とした政治でなくば決して永久治安の不可能であることを何れも皆論及して居る。しかし清朝の初めに於ては、滿洲の一隅の小さな種族より支那に入り努めて勤儉の政治を行つたから、一時人民は騷亂の苦痛を忘れ、これら學者達の痛切なる議論に傾聽するものはなかつたが、今日の如き時勢になると、又夫等の議論を想ひ起す必要がある。要するに支那の歷史の示すところ、學者の議論、その何れも皆同樣の結果となるのである。

支那の人民が共和政治の知識の有無は暫く論外として、兎も角世襲せない元首、小さい中央政府といふことの要求から今日の帝政を主張することの全く理由な

いことは明らかである。唯爰に近來支那人に一つの除き難き迷ひのあるは、往時と異つて列國との干係があり、そして支那が大國を有つて居ながら日本の如き小國よりも輕侮せらるることを殘念に思ひ、自ら奮つて强國となつて、此の遺憾を晴したいといふ思想である。それがためには中央集權を行ひ、國の統一力を旺んにして、能ふべくんば獨逸の軍國主義を學び極めて敏活なる政治を執りたいといふにある。今日帝政論の根據としても、以上の點に勢力があるから、單に袁氏始めその周圍のもの丶野心より起つたものと見ることが出來ない。然し之れは大なる誤解である。支那は統一力の充實した政治をするには、既にその時機の過ぎ去つた國である。支那に於て民政の完全に充實した時代は、今日より二千年前の漢代である。その頃ならば統一した政治も行へたであらうが、今日にありては早やそれに昔の夢である。中央に權力を集注しやうとした政治が亡滅の因になるのが近代支那の常態である。それで支那の人民は一方より云へば政治には既に痲痺して居るも、その世界的思想、平和を愛し商業に長じその他種々の點に於て國家組織を超越した生活をして居るから、今更之れを統一の完全な政治組織に戻さうとするのは、その進歩を逆行せしむるものと云ふことができる。數十年來の實績より觀ると、支那の政治は之れを外國人に委す方が成功して居る。財政に於て外國人に委した海關が先づ成功し、次ぎに釐金、鹽稅等が外人の手に渡つて以來益々餘裕を生じ、今日では財政丈は外人に委任する方が政府にも人民にも利益であるといふことは、支那人に於て之れを認めないものは無くなつた。支那に於ける民政の主なるものは裁判であるが、支那人は支那官吏に裁判を仰ぐよりは、居留地に於て外國官吏に裁判さるゝことが、幾多の讓歩をしても尙ほ幸福であることを了解して居る。警察制度も亦居留地の警察に依賴することは、本國の警察よりも遙かに良いとして居る。それで日本人などの中心となり組織せる北京の一時の警察は、支那人民が曾て經驗せるとなき信賴すべき警察であつた。若し支那が全國の警察を外國人の手に託したならば、遙かに少額の費用を以て大なる安全を得ることができるであらう。軍備に就ても同樣である。若し日本の將校に委託した軍隊が一大隊あるとすれば、支那人の組織せる軍隊の一箇師團よりも保安の効力は大である。

四

然し實際を考察して見ると今日の支那は軍備の問題を焦慮する必要は些しも無いのである。支那が日本よりも優秀なる其艦隊を有した時は、却つて日本と戰爭をする危險があり、その艦隊を全然失ひ、更に領土の幾分をも失つた。其艦隊を失つて以來二十餘年、その當時だけの艦隊をさへも回復せざる支那政府は僅かに猫額大の土地を外國に租借せられたのみであつて、更に領土を失ふの憂ひがないのである。今日支那が幾十萬の陸軍を備えたとて、日本の如き隣國と兵端を開けば半年を經ずして軍隊を全滅し併せて更に大なる領土をも失ふに至るかも知れない。支那の今日まで、二十餘年間安全であるのは海陸軍の認むべきもの無きがためである。それで今日支那のために最も安全なる政治は依然として國防を具備せないことと及び今日よりも更に多くの外國人に政治を委すことである。そのことは決して支那の恥辱でも無く、まして人民の不幸でも無い。今次の世界大戰亂のために、世界の强國の勢力範圍も從來の形式を一變して實力の存するところに、夫々纒まらんとしつゝある。此の秋に當り支那の如きは、眞に自己の地位を考慮して、政治上に於て自國の地位を高めるといふが如き卑近の思想を棄て、支那人民の眞の天職を思惟する方が宜しくはないかと思ふ。

五

支那人は古來屢々大なる天才を出して居る。その點に於ては日本などの到底企及すべからざる處である。印度が今日英國の支配を受けて、その獨立の不可能を嘆息せるものあるも、印度本來の思想を繼承するものから考ふれば、婆羅門の如き尊き階級の人間は、政治などの卑しき職を執るべきものでないと思ひ、又刹帝利の如き武家階級は、英國人の爲めにでも將た何人の爲めにでも劍を帶び兵器を執つて戰ふことが、自己の天職と信じ印度の國境とか政治とかを眼中に措いて居ない。また印度人自ら政治を行ふも英國人以上の勝れた政治を行ひ得る見込みも無い。それが印度の獨立の行はれざる所以であるが、しかし獨立せざることが印度の不幸とは必ずしも言はれない。支那の思想は之れとは稍異つて、治國平天下を理想として政治と密接の關係を繫いで居るやうにあるも、近代の發達せる思想に於ては支那に在りても講學を尊び、身は處士であるも萬世のために泰平を開くといふやうなことを理想として、官に就き錢穀、兵刑の如き瑣細なる政務を執ることを卑しむといふ傾向が漸次增して來て居る。淸朝

の撰學の人々等は學術を以て生命とし、官に仕へることを屑しとせないものが多い。その間勿論學問に於ても詩文に於ても非常に卓越した能力を顯して居る。そのまた一方商業等に於ては各國民の到底及ばざる能力を有し、總て將來の世界に於て、その中心となり勢力となるべき業務には支那人は秀れて居る。今日の支那は政治上の能力を以て後進の國と爭ふ必要は何處にも發見されない。殊に隣國には日本の如き教育を受けたもの丶過剩を憂ふる國があつて、しかもその教育は多く政治上に之れを用ふる外に用途なきものを控えて居るから、曾て日本の内地に於て薩摩人が中央政府の權力を握つて、日本中に其の國の產物たる巡査を輸出した如く、支那に於ても長髪賊の亂後、湖南の農民より編制せられし兵隊が全國に輸出されし如く、その湖南の農民より遙かに政治上の能力に秀れた日本人を巡査として使用する意志にて之れを輸入し、自國の安全を保ち、財政その他のことも諸外國より人才を招聘し以て政治機關を整備し、自國人はそれより遙かに高かき學問とか商業とかの業務に、その秀れた能力を用ふるなことが遙かに得策ではあるまいか。それには勿論世襲的の元首無き政治が最も適當であるから、支那の今日は第一共和政を維持すること第二には政治機關を外國人に開放すること、之れが支那の安全を維持し併せて東洋の安全平和を維持する所以である。支那の國是が其處に定まらば日本の支那に對する國是も自づから決定するわけである。それさへ決定すれば一時の政策上の得失少しも憂ふるに足らないのである。

對支外交根本策の決定に關する日本政客の昏迷

法學博士　吉野作造

一

近年我國政府の對支外交は、屢々機宜を失し、頗る帝國の威信を失墜したといふことは、最早爭ふべからざる事實である。去年の日支交渉に於ても少からず失敗の跡を殘して居るが、今度の帝政延期の警告に關する外交も亦決して巧妙なりと許すことが出來ぬ。多く

の人の難ずるが如く、其警告を發した時期に就いて、又英國等と事を共にした手續に就て、幾多批議すべき點あるのみならず、予輩は警告を發したといふ其事を以て、已に一の失敗と見るのである。然し此れ丈けならばまだしもよい。更に昨年の十二月末から本年の一月央にかけて、帝國政府の態度が支那帝政問題に關して二度變調を來たしたといふことは、之によつて齎らすところの結局の結果如何は暫らく措き、外交上の手續としては最も拙劣を極めたる行動なりと言はざるを得ない。何故なれば、十二月の末頃まで我國政府は帝政問題に對しては、終始一貫の態度を取つて來た。十月の廿八日に最初の警告を發してから、絶えず袁世凱政府に精神的厭迫を加へ、之にも拘らず袁世凱が着々帝政實現を急いで居るに對しては、我國は絶えず喧嘩腰で之を監視して來た。然るに十二月の末に至つて、帝國政府は俄かに袁政府の派遣する慶祝特派大使の接受を諾した。是れ豈從來のムツトした顏を和らげて温顏談笑の間に事を決めようといふ態度ではないか。此頃新聞紙上に於ては、特使の提供する重大なる利權の報償として我國は袁家の帝業を承認せんとするものなりなどの流説を見たのであるが、之は一個の流說に止るとしても、兎も角も我國は一旦背けた顏を向け直して再び袁世凱と場合によつては手を握つてもよいといふことに此時考を直したものと見なければならぬ。袁世凱が支那の朝野に在りて精神的に孤立となり、已に南方に於ては重大なる動亂の起つて居る際に、帝國政府は何の觀るところあつてわざ〲袁氏と提携せんと欲するの態度を示したのか。是れ我々の了解に苦むところである。而して何の觀るところあるにしても一旦斯うと腹を極めたならば、それで押し通して行くかと見て居るのに、我國の政府は二週間も經たないうちに復た態度を變へた。即ち一月十六日に至り突如我が日置公使をして特使拒絶の通告を支那政府に致さしめたのである。勿論表向きの口實は、日本宮中の御都合といふにあつた。然し實際に於ては、一旦向け直した顏を再び背けて、支那政府の取り縋る手を管なく振り放したものたることは殆んど疑ない。少くとも支那では斯く觀たのである。斯くの如きは大國の外交として果して其當を得たものといふことを得るか。結局の歸着するところがよいにして、二週間の中に二度も外交方針の變るといふことは、決して帝國の名譽ではない。猫の目の如く對外方針の轉輾するのは、明かに帝國の

威信に關する。而かも其遣り方が頗る輕率にして、在北京の公使とも懇ろなる打合せがなかつたらしい。其結果日置公使をして、此度も亦恰度去年の最後通牒の通告の際と同じやうな苦しき破目に陥らしめて居る。支那新聞の傳ふるところによれば、在北京日本公使館では、不日發程せんとして居る特使の一行と他の大官二三氏とを招いで盛大なる送別の宴を張り、日置公使は好々爺の面目を發揮し起つて美辭讃頌の辭を聯ねて特使の爲めに乾杯した。焉んぞ知らん、翌朝彼は特使拒絶の通告を支那外務省に報ずべきの訓電に接せんとは。是れ獨り日置氏一人の不面目に止らず。帝國使館の威厳を傷くることと亦頗る夥しいと謂はねばならぬ。要するに斯く帝國の態度の再轉せるによつて、我國の對支政策は正道に回つたと言はゞ言へ、兎に角斯の如き朝夕を計らざる小刻みの手段を弄するのでは、左らでも受けのわるい帝國の威信は、支那に於て益々失墜するばかりであらうと思ふ。

　何故に帝國政府は斯の如き明白なる失敗を重ねたか。之を一概に外務當局者の無能に歸するのは餘りに淺薄の議論である。我々は外交問題を批評するに當つては、常に如何に無能の評ある當局者と雖も、素人なる我々よりは數層外交の情僞に通じて居るものであるといふことを忘れてはならぬ。故に今度の如き外交上の失態を論ずるに方つても、只當局者の不見識を罵るばかりでなく、斯の如き判り切つた失態を何故に當局者は識つて之を犯さねばならなかつたかといふことを研究して見ねばならぬ。斯くの如き態度を以て研究の歩を進めざれば、我々は往々にして問題の眞相に觸るゝことが出來ない。然らば問ふ。我が聰明なる當局者は何故に短日月の間に斯くも政策を轉輾せねばならなかつたか。予輩は固より此事に關し十分適確なる眞相を聞いて居るのではないが、世上の風説する所によれば、外務當局者と陸軍側乃至元老とが當初支那問題に關して各々意見を異にしたといふことが根本の原因であるといふことである。帝政延期の警告を發するといふことの發頭人が外務省であつたことは、今更ら言ふを俟たない。外務省が此警告を發するについて、どれ丈け陸軍側や元老に渡りをつけたかは、今日我々の未だ知り得ざるところであるけれども、然し陸軍並びに元老の側は、此事に關し一時外務省の態度に慊焉たるものがあつたといふことは、第一次警告發送の當時から噂されて居つた所であつた。蓋し陸軍側は、袁世凱

を以て支那を背負つて立つべき唯一の中心人物と爲し、此中心人物と捩れ合ふことは帝國の將來の爲めに決して得策でないと考へたのであらう。此思想は實は有力なる一部の政治社會に中々勢力があつて、爲めに外務省の態度も從來幾分鈍らざるを得なかつた事情もあつたらうと察せらるゝ。而して此思想が遂に十二月の末に至つて進んで、外務省を壓迫し其一部の意見を容れしめたのが、帝國政府の特使接受の承諾となつてあらはれたのであらう。然しながら其後南支那の動亂が起つて支那の形勢も變り、且つ袁世凱の到底日本と提携せざるべきの説も段々に了解されて、再び外務省の當初からの態度がいゝといふことになり、陸軍乃至元老の側も之に追々贊成するやうになつたといふことが、後ち一月十六日の特使拒絶といふこととの上にあらはれたものであらう。以上の説明は固より一個の想像に過ぎないが、然し全く根據のない説でもないやうである。假りに此事實に多少の誤ありとしても、少くとも此觀察は日本當今の最高政客の間に、支那問題に關して二つの全く異つた思想の系統があるといふことを我々に暗示するものである。即ち一つは袁世凱を以て支那の中心人物となし、如何にかして之と提携せざる可からずとするの考であつて、他は袁世凱の到底日本と提携すべからざる所以を斷じ、袁に賴る日支親善の謬めねばならぬことを信ずる主張である。此二つの思想が日本の政客を支那問題に付いて二つの種類に分けて居ると見てもよい。例へば陸軍側は前者に屬し、外務省側は後者に屬するといふ風に漠然區別するが如き是である。又は此二つの思想は相幷んで支那問題に志ある日本最高政客の頭腦を支配し、時として甲説によらしめ、時として乙説を執らしめ、以て其對支外交の根本的決定に昏迷せしめて居ると見ることも出來る。要するに此二つの思想が、共に相當の勢力を以て日本の政界を支配して居るといふことが禍因となつて、帝國の對支政策を動搖せしめて居ることは疑を容れない。最近の外交的失態の如きも、畢竟其の根本的原因をこゝに有するものであつて、強ち當局者の無能無識にのみ之を歸することは出來ないであらうと思ふ。且つ又此の二つの思想が對立して政界の有力者を昏迷せしめて居るのは、實は或る意味に於ては尤もの次第と觀るべき理由もある。其故如何といふに、元來日支の親善を計つて東洋平和の實を擧げんとする立場からいふのも、又日本自身の將來に於ける經濟的發展の必要から

いふのも、我國は最も密接に支那と結ばねばならぬ。而して支那と結ぶには必ずや先づ其中心勢力を手に入るゝに成功せねばならぬが、その中心勢力は今日のところ袁世凱を措いて外にはない。斯ういふ事情であるのに、他方に於て袁世凱は生來非常な日本嫌であつて、殊に最近は殆んど日本と事實非常に反目して居る。斯くて日本から進んで最も提携するを要する人が日本に反撥するのだから、玆に我々は大いに煩悶せざるを得ないといふ譯なのである。而して此煩悶、此昏迷は、實は我々國民全體の前に横るところの難問にして、決して、當局者や二三政客のみの問題ではない。我々は只當局者のみに對して此難問に遭遇して昏迷爲すなきを責むるのは實は餘りに酷である。

二

日支兩國の親善ならざる可からざるは今更言ふを俟たない。比隣相背くは個人の交際に於て忌むべきが如く、殊に外勢の壓迫を共同の憂とする東洋諸國間に於ては、最も愼むべく又最も恐るべきことに属する。中にも支那は李鴻章の外勢誘致政策が禍因を爲して以來、歐米諸國の政治的幷に經濟的壓迫の爲めに今日非常に苦んで居る。之れが爲めに一時支那の分割をさへ論ぜられた程である。此の外勢の壓迫を脱して眞の自由獨立の面目を回復するといふことは、支那に取つて決して容易のことではない。少くとも日支提携して、即ち陰に陽に日本の同情援助するにあらずんば、支那は恐らく此目的を達することは出來まい。此點に於て日支の親善が支那の爲めに必要であるが、支那の强くなるといふことは、又日本それ自身の安全の爲めにも極めて必要である。何故なれば、支那が弱ければ外國の勢力は乃ち四百餘洲の到る處に跳梁すべきを以てゞある。支那に外國の勢力のはびこるは、決して日本の爲めに利益ではない。故に日本は出來る丈け支那を援けて、彼の眞の自由獨立を完うせしむるに努むべきである。人によつては、支那がそんなに强くなれば日本が困るではないかといふ。けれども、支那は强くなればなる丈け又新に南は佛國、西は英國、北は露國等と力爭するの必要を感ずるに至るべきを以て、決して日本が獨り强大なる支那の爲めに苦むといふ程のことはなからう。寧ろ支那の强くなつた爲めに感ずる日本の苦痛は、支那に外國の勢力の扶植さるゝによつて蒙る苦痛よりも遙かに少いであらうと思ふ。例へば彼の日露間の困難なる滿蒙問題の如きも、支那が弱いからて

を起る問題である。且又支那は日本の經濟的發達の將來にとつては缺ぐべからざる市場である。日本が經濟的に支那と提携和親することが出來なければ、日本の經濟的發達は全然將來に見込はない。故に日本の商工業の發達といふところから見ても、支那を外勢の壓迫から救ひ、進んで日本と提携せしむるといふことは絕對的に必要である。これ程提携の必要があるのに、何事ぞ、從來兩國の關係は甚だ疎隔を極めて居るとは。尤も此事は、一つには日本の國力發展に伴つて、朝鮮や其他の問題で支那と餘義なく衝突したといふやうな事情にも原因して居るに相違ない。何れにしても近年は年每に月每に日支兩國の親善なる關係は傷けらるゝ一方である。それに日本に於ける支那に對する一般の言論が頗る穩當を缺いて居り、又支那に居る日本人といふものも隨分種の惡いのが多い。之に加ふるに日本の外交も亦事每に失態を重ねて居るので、近頃の日支兩國の疎隔といふものは實に手の附け樣が無くなつた。斯くては到底提携の實は擧るものではない。如何に兩國の政治家が提携の必要を感じても、一般國民の感情が常に之に裏切るといふ形勢になつて居る。そこで心ある日本の先覺の政治家は深く之を憂へて、何とかして又如何なる犧牲を拂つても、出來る丈けの力を盡して、日支親善の端緒をつけたいものだと日夜頭を惱して居る。それにはどうすればよいかといふに、他なし、其中心的勢力に結ぶにあるのみである。支那はまだ民智開けず所謂民間の輿論といふものはない。時の勢力あるものゝ考次第では相當に社會の風潮を改むることも出來る。故に支那では中心たる勢力を動かせば比較的容易に萬事を動かすことが出來るのである。斯ういふ考から我國の先覺政治家の中には、眞に將來を憂ふるの精神からして、場合に依つては自ら支那に行つて彼の地の中心勢力と面接し、何とかして提携親善の端緒を得んと考ふるものさへあるに至つた。而して當今支那で中心勢力といへば、言ふまでもなく袁世凱である。そこで我國の政治家中には、此袁世凱に依るにあらずんば、日支親善の端緒を開くことが出來ないと確信して居る者が少くは無い。然るに不幸にして袁世凱は、今日已に英國殊にモリソンの藥籠中のものである。即ち支那の中心勢力を見出し、之と結托せんとするの方策に於て、生來の日本嫌ひなるモリソンは、日本に先立つて已に首尾よく成功して了つたのである。そこで最近の袁世凱は其行動自ら排日主義たるを免れ

ない。然しながら我國の政治家中には、斯くても尙袁世凱に未練を残し、出來る丈け彼の感情を害せず、何とかして彼の態度を緩和して和親の道を回復したいと考ふるものがあるのである。否な今日の元老の中には、多少袁世凱を買冠り、如何に排日主義に固まつて居る袁世凱でも、直接彼と面談して共に東洋の時事を諮れば、キツト日本の眞意を了解するに相違ないとまで考へて居る人もある。さればにや、去年の五六月日支交渉問題について、いよ／＼最後通牒を發する發せないといふことから元老と當局との會合があつた時に、山縣公が頻りに加藤外相の自ら北京に出馬せんことを慫慂したといふことであるが、之は强ちに難問をもちかけて時の外相を困らしたと見るべき者ではないと思ふ。山縣公なども恐らく、我より責任ある大官が彼地に渡りて目のあたり彼に赤誠を吐露すれば我が意必ず袁に通ずるに相違ないと信じて居つたのであらう。即ち機會あらば袁に接近し、斯くして日支提携の實を擧げたいといふことは、此等の最高政治家の間に於て、當時少くとも一個の動かすべからざる信條であつたやうに想ふ。

三

然るに右の考と併行してもう一つ袁世凱に對しては、反對の系統に屬する考が同時に行はれて居る。それは袁は如何に此方から手を出しても、到底日本とは快く提携せまいといふ考である。何故に斯く考ふるかといふに、第一彼は實に三十年以來の排日本主義者である。彼の名が日本人の目に初めて觸れたのは、明治十七年の京城の變の時であるが、此時彼は二十四歳の靑年を以て、一方の隊長として馬建忠と共に在朝鮮の我が公使館を圍み、竹添公使をして辛うじて仁川に逃れ去ることを得しめたのである。之より彼は朝鮮に在つて日本人排斥の張本となり、日清戰爭の前後には、屢々大鳥公使と折衝して日本を翻弄したのである。日露戰爭の前後より彼は一時日本に好意を表し、多數の日本人を傭聘して庶政の改善に當らしめたが、此變態も永く續かず、一つには日本の滿洲に於ける大陸經營に恐れを抱き、又一つには日本の不謹愼なる言論に憤慨したといふやうなことも原因であつたらうが、兎に角彼は明治四十一年の頃から漸く元の排日主義に復り遂に歐米諸國の勢力をかりて、日本の跳梁を抑へんとするに至つた。四十一年の秋、唐紹儀を海外に派遣して米淸同盟を結ばしめんとしたるが如きは即ち其證據

である。四十二年一月彼は不幸にして其職を奪はれ、暫く故郷にかくれて隱忍して居つたが、端なくも第一次革命の後、再び北京に呼び出され、やがて大統領に選ばれた。而して大統領としての袁世凱は再び排日主義を踏襲した。のみならず、彼と英國との關係はまた彼をして益々日本と離れしむるやうになつた。彼と英國との關係殊にモリソンとの關係は、今日は到底離るべからざるものがある。モリソンは袁世凱の沒落以前はそれ程袁と親しくなかつた。けれども革命以後は袁世凱は事毎にモリソンの説に聞き、モリソンの説は一つとして袁世凱に用ゐられずといふことはない。なぜ斯くまでにモリソンと袁世凱と近いのかといふについては、玆に一種の想像説がある。其いふところによれば、袁世凱をして今日の地位を占めしめたものは、實にモリソンであるといふことである。そは第一次革命の爆發して北京政府の大に困憊するや、年少無經驗の攝政醇親王は、變に處して策の出づるを知らず、窮餘乃ち暫く遠ざけて居つた慶親王を召して相談せられた。然るに慶親王は此時此難局を收むるものは袁世凱の外に人あるを見ず、舊怨を忘れて彼を擧用し、以て國家の急を救へと告げた。そこで袁世凱を俄かに河南の草廬から呼び起して、革命軍討伐總司令官に任ずることにした。さて其際更に慶親王に對し袁世凱を推薦すべきを勸説した者がある。夫れが即ちモリソンであるといふ説がある。併し此邊のことは眞否よく解らないが、少くとも袁世凱擧用の説あるや否や、直ちにモリソンが走つて河南に赴いたこと丈けは事實である。斯くして、モリソンは、最も早く袁世凱に會見し、且つ相當の助言を與へたものと見える。察するところ彼は袁世凱の爲めに計り只管一軍の將たらんよりは寧ろ四百餘州の天下を志すべき旨を勸めたものと見ゆる。袁世凱は初め南軍討伐總司令官に任ぜられたのであるから、世人は多く彼の直ちに南して討伐軍を指揮すべきと信じて居つたのに、突如として倫敦タイムスに現れた電報は袁世凱の南に向はずして北に向ふべきを報じた。人皆其意外に驚いて居る中に、袁世凱は果して直ちに北京に乘込んで來たことは人の知る所である。當時世人は或はモリソンの敏活を稱へ、又袁世凱の志少ならざることを說いたのであるが、又一方には袁は即ちモリソンの献策によつて北上天下を取るの志を爲せりと說くものもあつた。袁は果してモリソンの献策(?)の如く遂に天下を取つた。斯くして袁とモリソンとの關係は

今日實に水魚の交りである。而してモリソンと袁と極めて接近して居るといふことは、我國に取つて何を意味するかといふに、取りも直さず排日政策を意味する。モリソンの排日主義者たることは天下に隱れなきところ、而して英邁の使臣ジョルダン亦日本と利害關係を異にする在留英人の後押に乘つて、盛んに排日的行動をなすのであるから、英國と落花流水の關係にある袁世凱は、是非共排日主義者にならねばならぬことになつたのである。單にそれ許りではない。更に袁世凱は、今日幾多の反對派を懷柔する政策上、是非共日本の禍心を說くの必要に迫られて居る。彼は曾て討滿革命の際、先づ北上して北京を乘取るや、更に天下を併呑するの志あり、只南に南京の政府あつて、所謂南北相對峙して讓らざるものあるを見るや、彼は唐紹儀等を遣はして南北の妥協を講ぜしめたのであるが、此際南方の容易に袁世凱に屈せざるを見、彼は遂に兄弟斯く內輪に爭ふて居つては、我々の知らぬ間に日本と露西亞とが滿洲の分割を計るの恐がある。現に日本の桂は此問題の爲めに露國當局と相談をするさうだと云ふ樣な風說を流布し、以て愛國的青年の幼稚なる敵愾心をそゝり、斯くて耳目を一時日本禍心の警戒に轉じて以て內部の統一を計らんとした。當時南方の志士の間には此誘に對して議論百出容易に決するところなかつたが、故宋教仁等の、國家邦土の保全の爲めに淚を揮つて主義の爭を捨て、暫く袁氏に大政の統理を托するに及び、他の人々も殘念ながら皆大統領の地位を袁世凱に讓るに一致したのであつた。之に味をしめてから、袁世凱は常に日本の禍心を說いて、各方面の反對を懷柔するの策略を繰り返して居る。斯ういふやうな譯で袁世凱は今日では最早改むべからざる排日主義者になつて居る。彼が陰に陽に日本の勢力の排除に腐心してをることは、所謂通惠公司の最近の活動に徵しても解る。二月一日の東京の諸新聞にあらはれた上海電報によれば、通惠公司は漢口水力電氣會社借款金百六十萬圓を東亞興業會社に返して、日本の財政的勢力の一掃を企てたといふことであるが、之は實は數ある中のホンの一例に過ぎない。同じやうな壓迫は去年の秋漢冶萍にも、江西鐵道にも加へられた。之れ皆日本の經濟的勢力の排除を意味するものである。而して通惠公司は袁而袁世凱の總秘書官梁士詒の計畫するところであつて、其資本は黑幕なる諸外國の出資にかゝることといふを俟たぬ。即ち通惠公司は、袁世凱が日本の勢力の

排除を目的として建てさせたものといふてよい。而して其背後にある外國とは恐らく英國などを謂ふのではあるまいか。其證據には、通惠公司が邪魔をして日本の勢力を抑除しようといふ方面は、主として夙に英國が段々力を入れて居る楊子江沿岸の方面に限つて居る。

四

斯く英國と袁世凱と結托して居る以上は、日本の利害は到底袁世凱と一致することが出來ないやうにも見える。そこで袁は當今支那の中心的勢力たるには相違ないけれども、又彼と結ぶにあらずんば日支提携の實を擧ぐることは困難であるけれども、然し結局に於て果して彼と結ぶことが出來るかどうかは、亦極めて疑はしい。何んとかして彼と結ばん乎又は寧ろ諦めて彼と離れん乎。孰れにも深い理由と根柢とがある。それ丈け日本の政治家は其去就に惑はざるを得ない、政策の決定に昏迷せざるを得ないのである。この二つの考は現今最も眞面目に東洋の問題、殊に支那問題を考へて居る人々の頭を惱して居る所であつて、支那の事情に通じて居る丈け、又支那と日本との關係を忠實に考へる丈け、それだけ其人の煩悶は大なるものがある。去年の暮から今年の一月にかけての帝國政府の對支政策の動搖の如きは、一面に於て恐らく我國に於ける最高政客間に於ける對支根本策の動搖を意味するものであつて、予輩は固より一方に於て其動搖の餘りに輕卒なるを遺憾とする者であるけれども、又他方に於ては如何に此等の政客が此問題の爲めに苦悶したかを推察して其情を諒とする者である。何れにしても支那の狀態が現在の如くなる以上は、我國は到底この苦しい立場を脱することは出來ない。是に於て一部の人は支那に於ける局面展開を計るのであるが、然し之とても旨く行けばよし、一朝失敗すれば我國は益々窮地に陷るのであるから、政府としては固より表立つて此權道に出づることも出來ない。玆處に帝國の對支外交の困難がある。何人が其局に當つても此困難は常に存在して居るのであるが、又斯かる困難がある丈け、其局に當るものに最も有爲の人物を要するのである。

然らば我國は今後、如何なる態度を以て又如何なる方針を決めて、支那に對すべきであるか。此問題に對して予輩は實は今日未だ不幸にして明白適切なる答辯をなし得ないのである。其故は支那其物が今日のところ、未だハツキリ固まつてゐないからである。蓋し支

那に於て今日何者が中心的勢力であるかと尋ぬるに實は能く分らない。成程目前の皮相的觀察によれば袁世凱が即ち支那の中心的勢力を代表して居るやうに見ゆる。然しながら少しく事物の奥に觀察の眼を放てば、袁世凱は今や殆んど支那幾億の人心を失ふてをる。少くとも今後の『若き支那』は決して袁世凱を宗とするものではない。斯く云ふて見れば、支那の將來の永遠の中心的勢力となるものは、今日袁世凱の一派に非ずして恐らくは現に祖國の改革を唱へて居るところの幾百の青年であると見るべきではあるまいか。此等の連中は別に固まつて一つの組合を作つて居るのではない。けれども、曾て土耳古に青年土耳古黨ありしと同じ意味に於て、之を青年支那黨と云ふことが出來やう。青年土耳古黨は少壯の人才西歐の文明諸國に留學して、此等諸國の興隆に比較して轉た祖國の不振を慨嘆し、一度は無量の感慨に沈んだが、更に大に發憤して祖國の改革に熱中するに至つた青年の愛國者である。而して之と同じ系統の青年は今日支那に頗る多い。主として其中堅を爲す者は日本に留學したるところの青年であるが、之を中心として此類の青年愛國者は全國に瀰蔓して居る。彼等の間には別に必ずしも組織的の連絡があるのではないけれども、期せずして皆舊來の弊習に反抗し、一大革命によつて祖國を衰亡の禍より救はんと欲して肉を躍らし血を湧かしつゝあるのである。其一部分の發現は現に今度の南支那の動亂に之を見るのである。南支那の動亂其物は、未だ天下の青年全體の後援を得て居るのではないとしても、同じ思想は動亂に關係あると否とに論なく、天下の青年に通有するところたるが故に、假令今度の動亂が不幸にして敗亡に歸しても、青年支那的思想其物は決して之と共に滅亡し去るものではない。革命はたゞに武力の戰爭ではない。また實に思想の戰爭である。此思想の廢れざる限り、支那は結局に於て青年支那黨の手に歸すべきものである。而して今や青年支那黨の一部は、舊思想の代表たる袁世凱に對して大に氣焔を擧げつゝあるのである。最近に至り我國の政客も漸く此點に留意するやうになつたけれども、從來はどうも此方面を閑却した氣味がなかつたらうか。殊に高等政客の間にあつては、此等の青年の勢力を無視すると云ふ傾はなかつたらうか。眞に支那に對して永遠の計を爲さんとするものは、支那の將來が青年黨の手に歸すべきものであると云ふことを忘れてはならないと思ふ。

然しながら又他の一方から考へて見るに、政治は餘りに眼前の事實に遠ざかることを許さない。如何に將來の支那が青年支那黨の手に歸すべきことが明白であつても、今日事實上の實權を握つてをるものが袁世凱であり、而かも袁世凱は其兵力其金力に於て、少くとも當分のところ、青年支那黨などの革命的運動を嚴しく制壓して行く丈けの實力を有つて居る以上、我々は全然彼を無視して政策を立つることは出來ない。加之、青年支那黨の結局に於て支那の主人公となるべきことは道理上疑なしとするも、彼等の成功が何の日にあるかは、今日のところ茫漠として分らない。且つ又青年支那黨は、其破壞的方面に於ては相當の力ありとしても、其建設的方面に至つては案外に弱きこと、恰度夫の青年土耳古黨等と其趣を一にして居る。彼等は等しく熱烈なる愛國者である。祖國の急を救はんがためには、命を鴻毛の輕きに置いて悔ゐない。舊思想を打破し、舊習を覆す爲めには如何なる犧牲をも辭せない。之れ丈けの覺悟があるのであるから、彼等の一度革命の旗を翻すや、舊制打破に成功するだけには左までの困難を見ない。よしんば二度三度失敗しても決して悔ゐ且つ挫折するものではない。其意氣誠に盛なるものがある。けれども彼等は其舊制打破の運動に成功した後、果して如何にして新國家を組織し之を經營すべきやの問題に至れば、概して殆んど深く慮るところがない。破壞に急にして建設を思ふに遑あらざることは、蓋し凡ての改革家の通弊である。之れ彼等が一旦舊制打破に成功して而かも往々再び陰險狡猾なる舊人物の乘ずるところとなる所以である。斯くして第一革命當時の青年愛國家は、袁世凱の乘ずるところとなつて、マンマと漁夫の利を占められた。して見れば實際の問題としては、青年黨が愈々確實に實權を收め、國家の中心的勢力となるまでには、ナカ／＼時がかゝるものと見なければならない。是れ實際政治の問題として我々が尙更袁世凱の如き舊勢力を容易に無視し得ざる所以である。其上今日の如き列國競爭の激甚なる支那に於ては、之と利害關係の尤も密接なる國として、我が日本は一刻の油斷をも許すことは出來ない。專ら青年黨に望をよせて呆然として其成功の日を俟つて居るやうなことでは、其間に他の國はドン／＼日本を置き去りにし、袁世凱によつて獨り其の勢力の擴復を計るであらう。されば我々は對支外交の舞臺に於ては、右に於ては青年黨と何等かの交涉を保ちつゝ、左に於ては

袁世凱と事を共にするといふ巧妙なる措置に出でなければならぬのである。

もう一つ之に關連して對支政策の根本方針を定むるについて見逃すべからざるは、支那國民の頗る妥協的精神に富んで居ると云ふことである。例へば今日の所では蔡鍔の一派は袁世凱と全く兩立せざる主義の下に對立抗爭して居るのであるが、我々から見れば、此兩者は一見到底相和すべからざるものと思ふのであるけれども、彼等は何日何時妥協するか分らない。之れ一つには人民の戰亂を忌むの情の强きにもよるが、一つには徒らに內紛を重ねて居ては爲めに外國の乘ずるところとなりはしまいかと云ふ所謂外勢壓迫に對する過敏性からも來て居る。尤も今度の爭は、よく〱袁世凱の賴み難きに懲りた上の事のやうであるから、容易に妥協はしないだらうと思ふけれども、曾ては革命派が妥協の道によつて袁世凱に一度最高の地位を讓つたと云ふ歷史もある。元來袁世凱にして若し當初より實權を一身に集むるの野心を去り、其專制主義を捨てゝ自分は大統領として大體の方針を定むるに止め、青年有爲の人物を擧げて直接政治の衝に當らしめ、又國家の元勳の如きは之を遠ざけることなくして、却つて中央に集合せしめ、斯くして一定の任期間忠實に國家統一の爲めに計り、任期終らば其地位を後進に讓つて、自分は國家最高の元老として道德的聲望を一身に集むるといふ態度に出でたりしならば、彼は事實上支那の中心勢力として、青年黨の反抗を受くることなく、永く其名聲を維持することが出來たであつたらうと思ふ。然るに事玆に出でず、遂に今日の動亂を見たのであるが、是れ畢竟彼が一身の野心の爲めに、或は短見なる專制主義の爲めに、青年政治家の妥協的精神を蹂躙したからである。故に袁世凱に對しては、或は輕々しく妥協するを肯んじないだらう。然し本來の性として彼等は一體大に妥協的精神に富む者なるが故に、今日の如く、袁が大に妥協によつて局を結ばんとするの熱心あり、それに英吉利までも後援して居るといふことであれば、妥協の話が何時となしに持上らないとも限らない。斯ういふ立場から考ふれば、支那に於ては如何に新勢力の勃興する際と雖も、舊勢力が他國に於て見る場合よりも、尙比較的長き生命を持つと云ふ現象を見ることがある。斯ういふことを考へ合はして見れば、我國の外交は、結局に於ては將來の支那の中堅たるべき青年支那黨の怨みを買はざることに周到の注

意を拂はねばならぬと共に、又現在に於て袁政府との關係を紛更せざることに多大の注意を拂はねばならぬと思ふ。一見矛盾の政策を同時に取れといふが如くであるが、茲が即ち專ら外交家の手腕に俟たねばならぬところである。

五

尚之に附け加へて一言したきは、支那に於ける日英の關係である。支那に於て日英兩國の利害の相反せるもの多きは勿論のこと、在支兩國人民の感情の疎隔に至つては更に極めて甚だしきものがある。就中在支英人の排日思想に至つては、實に名狀すべからざるものがある。此事が日英同盟によつて達せんとするところの兩國の利害の一致、感情の融和をどれ丈け妨げて居るか解らない。近時我國に於て日英同盟に多少の疑を挾むの議論の頻々としてあらはるゝのも、主として之が爲めである。日英同盟にして之を繼續せしむるの要なくんば即ち止む。之を維持することを以て我國の必要事とする以上は同盟の親誼を妨げる原因は一々之を除去しなければならぬ。中にも其最大因なる日英人の反目疎隔の如きは最先に之を解決しなければならぬものである。されば支那に於ける日英兩國の關係は、今日の儘に之を放任すべからずと思ふのであるが、更に此問題の適當なる解決は、袁世凱政府と我國との關係の上から見ても必要である。何となれば袁世凱の排日的態度の一面の理由は、彼と英國との關係にあるからである。袁世凱彼自身の排日的思想感情は今となりては容易に之を飜へし難きものがあるだらう。然しながら茲に若し彼をして此考を飜さしめ、又は少くとも之を緩和せしむるを得る何等かの方法ありとせば、それは英國をして袁の心を動かさしむることである。斯く觀れば支那に於ける日英兩國人民の融和といふ問題は極めて必要なことである。政府も茲に見るところありてにや、過般我國は英國をして一方には極東に於ける日本の優越權を認めしめ、他方に於ては極東に於ける英國の利益圏を劃定するの目的を以て協約を締結せんとしつゝあるといふことである。尤も之は二月八日の新聞に上海電報としてあらはれたのであつて、其眞否如何は今斷言することは出來ない。けれども斯くの如きは夙に起るべくして永く起らなかつたところのことである。實は從來は斯の如き協定を締める事は事實極めて困難であつたらう。英國が支那に於ける利權の擁護獲得に極めて熱心であつたといふことは言ふを俟た

ず、又日本から見てこそ英國は支那で傍若無人に振舞ふとは言ふて居るものゝ、實は英國人から見れば、後れ馳せに來た日本の方が、着々として彼等の繩張りを犯すので餘程侵略的に見えたのである。彼等は日本人の立場に立つて、對支外交の發展が如何に日本國民の生活の上に必要であるかといふことを、同情を以て觀て呉れることが出來なかつた。只漫然として日本の侵略的態度に憤慨したのである。其上に支那に居る英人は、國が近い丈けに支那と日本とを混同し、從つて又支那人と日本人とを同一視するの傾がある。普通一般の支那人が外國人の前に在つて意氣地がないのに慣れて、彼等は日本人も亦さうあるべきものと心得るに至つた。從つて支那人に對してはどんな亂暴をし、どんな侮辱を與へても構はないと同じ筆鋒を以て、時々在支日本人に接して來る。彼等はすぐ隣りの支那まで來て居りながら、其の日本人を解せざるの甚だしきは實に驚くの外はない。之れ畢竟彼等は支那人を以て日本人を想像するからである。故に我々の個人的交際上の經驗よりいふも、日本に居る英人よりは極めて懇篤なる待遇を受くるけれども、支那に居る英人よりは時にとんでもなき侮辱を加へられることがある。西比利亞鐵道などを旅行する際に、支那に關係ある英人から日本人の侮辱されたといふ話は屢々聞くところである。支那では外國人は相當の我儘を許されて居るので、下等な外國人などの中には、例へば三等の切符を買つて二等の車に乘つて平氣で居ると云ふやうな者が隨分あるが、此種の輩に限つて、日本に來ても同じ事をやり、偶々車掌の小言に會へば、支那に於けると同じく一喝して事が濟むものと心得、爲めに却つて時々面倒を起すことがあると聞いて居る。斯ういふ風で一般に支那に居る英人は、日本人の如何なるものなるかを解して居ない。而して日本人は事實支那人とは違つて、かゝる侮辱を受けて決して甘んずるものではないから、必ず彼に反抗する。又何等かの形に於て復讐を敢てすることもある。そこで英人は一轉して日本人は生意氣だといふ感情を持つに至つた。彼等は日本人と支那人とをもと／＼同一のものと見て居るのに、日本人丈けが獨り一人前の顏をして出しやばるのを、小面憎しと思つて居るのであらう。さういふ所にも、在支英人の排日思想の根柢が潜んで居る。甚しきは日本人を小憎らしく思ふの餘り、日本人は道德的にも社會的にも支那人よりも數等劣つて居るなどゝ極言するものが

ある。此事は去年十一月號の英國「十九世紀及其後」の誌上に載せたる「支那に於ける日本の政策」と題する論文に於てブランド氏も說いて居る所である。要するに斯くして支那に於ける日英兩國の葛藤は、從來頗る困難であつたのである。然るに今日は歐洲戰爭の結果全體として日本の英國に對する他位が頗る良好に向いて來た。殊に東洋に於て我國は著しく優越の地位を占むることになつた。今日は正に日英間に其關係の改善に關する交涉を進むべき、最好の機會である。從來は支那に於ける利害問題について、我國は餘りに英國に讓步し過ぎて居つたと思ふ。抑も支那に於ける日本の發展は日本存立の必要に淵源する。遠慮することの出來ない問題である。從來英國は、少くとも在支英人は、日本のこの大陸的要求の眞相を理解しなかつた。徒に日本の發展をは猜疑の眼を以て見て居たのである。之に遠慮したのは本來の誤である。今や我々は此上讓步すべきではない。萬一英國で强ひて故障を云ふならば、喧嘩しても飽くまでやるといふ位の態度を示しても差支ないと思ふ。外の方面は兎も角も、支那に於ては否が應でも我國に讓步して貰はねばならない。勿論從來とても此位の勢を以て英國に交涉すべきであつたと思ふのであるが、今や我國は此種の交涉をなすに最もよき機會に立つて居るのであるから、政府は正に速かに此方面に一步を進むべきであると思ふ。此點よりして予輩は前記上海電報の一片の風說に止らざらんことを希望するものである。若し日英兩國間に支那に於ける利害の限界が定まり、斯くして衝突の端を避けるとが出來かる、或は少くとも衝突の機會を減ずることが出來るとすれば、日英同盟の大に其効力を發揮するを得べきは勿論、又袁政府をして英國を恃んで、我國を蔑ろにすると云ふ方針をも改めしむることが出來やうと思ふ。

對支外交は寧ろ消極的なるべし

法學博士　末廣重雄

對支問題は對米問題と相竝んで、我が國の二大外交問題である。我が對米外交は一向振はず、何時になつたら解決が出來るか、殆んど見込のない狀態であるが、

對支外交も亦全く混沌として居る。我が歷代の內閣は必ずしも其の方針を一にして居らず、民論も亦區々、而して朝野の見るところ必ずしも一途に出でない。現に現內閣の行ふところと在野黨の主張するところと相扞格して居る。斯かる有樣では、我が國の盛衰存亡に關係ある此の大問題も、當分解決は出來まい。痛嘆の至りである。

抑も對支外交には積極的と消極的の兩政策がある。而して予は豫てより消極政策に贊成するものである。我が國が積極的に進みて、支那に對し政治上優越の地位を占むるには、支那は過大である。支那人は餘りに我が國を信用して居ない。列國の利害は餘りに錯綜して居る。故に我が國は支那に對する列國の野心を控制し、其の勢力の侵入を防遏し、消極的に支那を保全して、其の內部のことは外部より干渉せず、專ら支那人をして自家の運命を開拓せしむることが我が國の利益である。此事たる既に十五年前に、日英同盟の基礎として認められ、爾來對支外交の根柢を爲し來つて居る。今次の戰爭の結果、變化したる世界の事情に應じて、日英同盟を多少改訂する必要はあるが、其の根本義は變更するに及ばない。而して此の如くにして吾人の切望する日支親善は初めて實現せらるるのである。

之に對して殊に最近に至つて、反對論が盛にあるやうである。彼等の云ふところに依れば、消極政策の如きは既に時勢後れである。如何にしても積極政策を以て支那に對し政治上優越の地位を占めなければならぬ。斯くするとは極東平和の支持者たる我が國の權利であると同時に、義務であるのである。或者の如きは更に進みて、支那を併合前の朝鮮の如くせねばならぬ。支那を我が保護指導の下に置くは、極東平和の大目的を達する最大捷徑であると云ふのである。積極論者より觀れば、曩の日支交渉第五項の顧問及び武器に關する件の如きは、此の目的を達する第一步であるから、一時は撤回しても早晩再び提議して、支那をして之れに同意せしむるの必要がある。又今次の對支警告も頗る當を得て居る。之に依りて袁氏の聲望に一大打擊を加へ、將來支那の支配者たるべき革命派の味方することは、日支親善の一手段である。支那に對しては恒に高壓的に臨まねばならぬ。從來の我が國の態度は微溫的に失し、徒らに日支親善を唱へたから、却つて支那人の輕侮を招いだ。恰も米國に對し日米平和をのみ口にして、排日に遇ふも斷乎たる決心を示さゞる爲、米

國をして增長せしめたと同様である。對米外交と共に、對支外交の刷新も亦急務であるのである。

然し予は積極政策には什麼も首肯し難い。曩の日支交渉は如何であつたか。在野黨が云ふが如く決して無上の失敗ではないが、全體より觀れば現内閣が誇るが如く、之れを成功とは云ひ難い。殊に其の第五項の如きは提議すべきものでなく、支那人の排日思想を高め、日支關係を疎隔したことは非常なものである。日貨排斥は、北は滿州より南は南洋に至る迄、至るところに行はれ、此が爲に我が貿易は一大打撃を蒙つた。尤も排貨は、單に北京政府の使嗾に出でたに過ぎないと云ふ者がある。勿論支那政府の煽動使嗾もあつたであらうが、支那人全體殊に革命派が勢力を有する南方の支那人の自發的行動たることは否認することが出來ない。故に日支交渉の第五項の如き積極政策に基くものは、支那政府をして、益我が敵たらしむるのみでなく、一般支那人をして我より愈離れしむるものである。對支警告も亦非難に値する。目下支那より來る通信を見るに、革命軍に有利なる報道は頗る誇大して傳へられ、戰況の實際は正確に知り難いけれども、今日迄のところでは幾分か革命軍に强味があるやうである。此の戰爭が終局革命軍の勝利とならば、對支警告は我が國に不利を來たさないが、さりとて別に利益がない。之に反し萬一袁氏の勝利となつた時は如何であらう。袁氏は對支警告の爲に非常の打撃を受け、我が國を恨むこと甚だしいに相違ないから、我が國の立場は非常に不利となる。袁氏の在る限り日支親善は言ふべくして到底行ふべからざることになる。

予は積極政策を不可とするが、一歩を讓つて極東の平和と我が國の發展の爲に、對支政策は是非積極的でなければならぬ。世界は活物であるから、十五年前より傳はり來つた消極政策は既に陳腐となつたとしやう。夫れならば、夫れらしく遣らねばならぬ。支那に對して徹底的に活動せねばならぬ。然るに日支交渉は如何であつたか。其の第五項の顧問と武器の件は、積極政策の見地よりしては非常に重大なることであるから、現内閣は定めし愼重に利害を打算し、充分に決心を固めた後に提議したことであらう。此事たる當時我が國が支那を威嚇すべく滿洲に出兵したことに徴しても明らかである。然るに英米の態度が少しく面白くないと見るや、忽ち之を撤回したは何故であるか。英國の如きは、到底此の際、我が國、併かも種々なる關係

に於て少なからぬ援助を與へつゝある我が國に對し、斷乎たる妨害を加へることは出來まい。米國も今日思ひ切つた行動を爲し得ない事情がある。然るに彼等の態度の我に不利なるを觀るや忽ち主張を撤回し、支那をして日本は極東の覇者を以て自ら任じ乍ら、英米兩國には少しも頭が上らない、日本與し易しと、我が國を輕侮せしむるに至つたは遺憾千萬である。更に對支警告を發するに當り、何故に英佛露を誘ふたのであるか。我が國が英佛露と利害を同うし、何時迄も歩調を共にし得るならば、聯合運動も亦可なれども、然らざるにも拘はらず三國を誘ふて警告の仲間入を爲さしめたは何故であるか。支那に對して政治上優越の地位を占取しやうと云ふならば、而して占取するの實力ありと信ずるならば、何故に單獨行動を採らなかつたのであるか。

積極政策を採るならば、列國と利害の衝突が起つて、調和の困難のことが多々あるであらうから、平和の時代には思ひの儘に行動するは容易でない。然るに今日戰爭は酣であり、英佛露は極東を顧るの餘裕なく、米國も亦色々對歐州の關係があつて、目下支那問題に沒頭することを欲せない狀態にある。尚又戰後英佛露の創痍は容易に癒えず、獨逸も亦同樣であるから、當分のところ極東に於て我が國に對抗するものは獨り米國あるのみである。此の千載一遇の好機會に乘じて居るのであるから、積極政策を採るならば斷乎とした行動に出で、所謂鬼の留守の間に對支計畫の遂行を努むべきである。然るに現內閣の行動は優柔不斷頗る煮え切らない。動もすれば列國及び支那の輕侮不信を買ひ、而して、獲るところは極めて寡少である。是非ともより多く大膽に、徹底的にあらねばならぬ。徒らに列國の鼻息を窺ひ躊躇逡巡する位ならば、積極政策の如き危險の多い政策を拋棄して、寧ろ消極政策を守るの安全なるに若くはない。(二月十五日)

「漂泊の男、流轉の女」の一として「其の夜の氣持」と題し、松崎天民氏が毎夕退社の次第を細叙したもの、都合に依りて四月號にのばした。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎遞信省通信局長 法學士 田中次郎著

通俗 郵便物語

（四六判頗美本） 定價八十錢 （送料八錢）

口繪無線電信石版刷 寫眞四葉挿入

東京麴町三丁目
丁未出版社
（振替東京七八四七）

最新刊

著者十七年間の實驗を基礎として本書生る!!

外國電報の取扱方や、無線電話や、無線電信の現在と將來、それから我國における郵便の沿革より、小包、爲換、引替郵便に付いての一般の心得、鐵道郵便の話、電話の起源と其の我國における發達の歴史、そして電話に對する公衆一般の心得、支那、滿洲、朝鮮、臺灣などの通信事業の過去と現在と將來および通信事業と戰役の興味關係などを叮嚀に記述したものであるから、頗る實用的で豐富なる趣味があります。

故に此書は郵便局も會社銀行も學校も是非備付べき良參考書であります

□櫻井大尉著 **肉彈** 菊判上製 定價七十錢 送料八錢

□日向きむ子著 **銀と藍** 四六判美本 定價八十錢 送料八錢

□櫻井鷗村著 **英詩評釋** 四六判美本 定價一圓廿錢 送料八錢

（中付一の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載を謝絶す

巖谷小波著

新刊

目と耳と口

□題名既に奇、内容更に奇抜□定價金壹圓・税八錢・頗美本□

金色夜叉のモデル問題―渡米實業家の滑稽談を始めとして興味津々たる新隨筆集を奬む。

東京京橋元數寄屋町三ノ五
振替口座東京一七三〇九
電話新橋長二五七九番
耕文社

發賣所 東京神田表神保町 振替東京二七〇番 東京堂

縮刷（新刊）

家庭小説

野の花

黒岩涙香先生譯

■町田歌三氏装幀及畫■

總クロース貼分上製美本三色版口繪天金函入金文字伊太利亞式装幀總ポイント五百餘頁

定價金壹圓卅錢

送料金拾錢

發行元 東京京橋北槇町 振替一五四七七 扶桑堂

發賣所 東京神田 振替二七〇 東京堂

(中付一の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■早稻田大學講師　吉田絃二郎氏著　■四六版上製美本全壹冊

生の悲劇

正價金壹圓　郵稅八錢

■最新刊■

過去を知らず未來を知らずたゞ現實の靈と現實の肉とにのみ彼れの生命の凡べてを燃燒せしむることを充されたる者にとりてはそれが暗であらうと悲哀であらうと只現實を貪り現實を懷しみ現實を慈しむの心の他には何の希望もあり得ない。人間に與へられた運命が暗い淋しいものであるとしても自分はそれを呪はない。それが自身の生に對して與へられたる唯一つのものであることを想ふ時に私は一層その不具なる人類の運命を眑はらずには居られない—（著者の感想より）—

■稻毛詛風氏新著■　菊判半截本最上製美本　正價九拾五錢　郵稅八錢

心の叫

新刊

愛と眞理の王國は望んで愈々剎那も精進の歩を緩めざる若き人道主義者の僞らざる心の叫を聞かんとする人は來れ。永遠に自己の劣弱性を笞打つて飽く事なき眞熱なる現代人の嚴肅にして深刻なる思索と體驗と實感とを通じて人間生活のまことの悲しみと喜びとを味讀せんとする人は來れ。尊むべき眞人の感想錄は今や世に現はれたり。

■大同館發行■　東京市神田區神保町七番地　振替貯金口座東京八七二番

本間久雄氏新著

■婦人問題・貞操問題の喧傳せらるゝ今日萬人必讀の書　■正價九拾錢　郵稅八錢

エレンケイ思想の眞髓

人間の向上の爲に戀愛を高調し戀愛結婚の生活を謳歌し且つ女性の價値を力說するケイの思想をそれ〴〵その立論の樣式によつて解說したる手頃の入門書なり。所謂婦人問題とケイと近代文學との關係を論じケイの人物を紹介しまたケイに對する諸名家の批評をも摘載せり。—（萬朝報評）—

信用ある大書肆及び卑猥ならざる賣品の廣告掲載は謝絕す

（中付一の四）



『目白』の大御所

黒頭巾

吾輩、十年前、「目白」の大御所、日露戰役の勳功を以て、伊藤、大山と共に、公爵に陞叙せられし時、彼の人格、功業を評論して、彼の謹嚴、恪勤、規律的にして、一擧一動、軍隊の行動するが如く、小心、愼密、實に、古の霍光と相似たるものあるを言へり。今、十年の後、再び彼を評論するに當り、這般の觀察、また敢て變更すること無し。故に、此の半面に關しては、多く言及するところ無かるべし。

其一

◉公山縣の病むを聞く。彼は瘠軀、勁健、竹の如く、鶴の如く、老來、意氣、毫も衰へず。然れども今年、雨雪、太だ少く、暖にして乾燥、彼の如く呼吸機關の剛強ならざる者に宜しからざるべし。彼は廿年前、征清第一軍に司令官として從軍せし時、腸を害し、中途にして歸京の已む無きに到り、爾來、腸、弱く、微恙、薄熱も腸を侵すを恐る。

◉彼は瘠せたるが故に、弱しといふを得ず。元老功臣の中、意氣、尤も旺盛にして、頭腦の明晰、老衰の態を示さゞる者を求めば、彼を推さずんばあらず。彼は伯大隈と同年、而して後者は健壯にして局に當り、彼は、一年の過半を小田原に送るを以て、後者よりも頗る衰弱せる如くに見ゆるのみ。

◉伯大隈が公山縣よりも剛健に見ゆるものは、其の强軀と廣長舌とのみ。公山縣は口舌の間に、氣焔を吐か

ず。著々、實勢を占め、坐して大勢力を擁するは、則ち大御所たる所以。然れども彼を、强ひて起たしめば、尙ほ首相たるに堪へざるに非ず。唯だ彼は、攝生、以て心身の力を維持す。繁忙に、客に接し、酒宴に列するの、彼が呼吸器と、腸とを害するあらんを憂ふ。

◉或は、彼が、老後の思出に、自から政局に當らんの志ありと傳ふる者あり。侯松方は、如何にも老人らしく思はる。然れども政務を處理するの力、必ずしも大隈の下に在らず。演壇に登りて、議員と舌戰するは、固より長所に非ず。信望は却つて其の上に在らん。而して侯松方は、眞に、出廬の志あり。公山縣は到底、出廬の志あること無し。

◉今年、梅花、早し。彼は、古稀菴の梅花、盛開の頃、伯大隈の懇請に應じて、小田原を出で、目白に歸り、數日の間に、能く貴族院の大勢を動かし、隻手、狂瀾を回すの慨を示し、豫算通過の形勢、定まるの頃、彼は病牀の人となれり。

◉彼の攝生に厚く、而して精神氣魄の尙ほ旺盛なるを以て、彼は幾くもあらずして、病牀を出で、小田原に去らん。此の時、若し彼をして病を得ざらしめば、妥協の攻擊、彼にも及びしならん。今、攻擊の鋒、專ら伯大隈に集まりて、彼に及ばず。

◉十年前、日露戰役に、彼は總司令官元帥大山の出征を送りて「いつも先は、讓らざりしに、いくさ人、送りて祝ふ、身こそ老ぬれ」感慨淋漓たるものあり。彼は、腸を害するを以て從軍する能はず。然れども參謀總長の劇職に當り、日々、早朝、馬を驅つて登廳し、七十の老齡、鞍に倚つて、意氣を示す。

◉彼が時局に於ける、伯大隈に對して、また這般の感慨無くんばあらざる可し。伯大隈は十の力を十二に發揮するを好む者、公山縣は十の力を以て、八に當らん事を期する者。これを以て、事々、彼には餘裕あり。彼は、二の手無き計畫を立てず、後詰無き戰を爲さず。つねに力を蓄へ、鋭を養ひ、急がず、騷がず、悠々、隱忍、耐久、以て、最後の全勝を理想とす。彼の養生に於けるも亦た全く此の如し。彼は、時に病むも、耐忍、保全して、衰弱に陷らず。自から百廿五歲を標榜すること無しと雖、其の壽康、恐らくは測る可らず。

其二

◉彼が貴族院の大勢を動かしたるは、世人をして今更、彼の大勢力を驚かしめずんばあらざりし。內閣を破壞

するの實力、彼の掌中に握られたること、明白となりぬ。

◉彼が現首相に對して、多く好意を有する者に非るは、疑ふ可らず。而して彼が敢て、貴族院をして、妥協の一途に出でしめたるは、彼が用意の愼密なる所以、兵器賣却問題、或は基金還元問題を以て、内閣を倒すの、名分、慊らざるものあるを思ふ。則ち破壞の實力を占めつゝ、滿を持して發せざるなり。彼は今に於て、手を下さずとも、勝利の實勢は、彼の掌中に在り。

◉吾輩を以て見れば、貴族院が内閣破壞の責を受くること、必ずしも不可なりとせず。現内閣の與黨は、貴族院が、衆議院の豫算先議權を蹂躪すと論ずれども、此の論必ずしも正大ならず。唯だ與黨に在つては、此の如く言はざる可らず。かく言ふは、與黨より見れば、一の正當防衛ならずんばあらず。

◉衆議院の先議權、尊重す可きは勿論なり。然れども二院制度に於て、貴族院が衆議院と意見を異にする場合あるは免れず。貴族院、若し、衆議院の議決に盲從すべしとせば、始より二院の必要あること無し。

◉衆議院の議決、若し、つねに貴族院を通過す可しとせば、政府、多數黨を衆議院に率ゆるの間、如何なる豫算も通過す可らざること無し。此の如き憲法政治ある事無し。衆議院に多數を占むと雖、貴族院に少數を得るの内閣、自から倒る可きは、自然の數なり。必ずしも之を以て、責を貴族院に嫁するを得ず。

◉大浦問題を以て、貴族院が、政府に肉薄し、之を以て、内閣の更迭を促したらんには、貴族院として、堂々の態度たるを失はず。然れども貴族院、既に、此の一擧に出でず。兵器、還元二問題を以て、内閣を追究するを得ると雖、これを以て、貴族院が内閣更迭を迫るの旗幟としては慊らず。公山縣が、居中調停の勞を執れるは、此の爲にして、此の事、彼は寧ろ貴族院の爲に謀る所以にして、必ずしも現内閣の爲に謀す所以に非るべし。

其三

◉公山縣が、伯大隈の懇望に應じ、居中調停の勞を執りたるの眞意は、新天子、登極以來、豫算が、未だ一回も、正式に成立したること無しといふに存せずんばあらざるべし。若し、今、内閣更迭するに至らば、豫算の正式成立、何の時を期せん。更迭後の政局、未だ容易に逆睹す可らず。

◉彼は、現代に於て、第一元老を以て、自から任ず。則ち聖世の爲に不祥事を避くるは、彼の責任にして、彼が忠誠を致すは、此に在りと爲すなるべし。必ずしも政府の態度と豫算案に同意するに非ず、内閣の更迭を希望するの念無きに非るも、爲に、累を、聖德に及ぼすあらん事を恐る。彼が、謹愼、隱忍、以て、居中調停の功を全くする所以の志、此に在り。

◉貴族院の附帶決議といふもの、悉く彼の方寸に出でたりや否を知らず。然れども附帶決議の形式、遺憾無く山縣式を發揮し得て、感興淺からず。豫算通過に同意すと雖、不信任を表白し、言外に、事後更迭を迫るの意あり。而して漫に、更迭を迫るに非ず。附帶決議の内容、來年度の豫算案を、豫め制裁して、次期議會に到るまでの内閣を監視するの効力を有す。

◉此の如く多くの附帶決議を付して、總豫算の通過するを得たるは、憲政創始以來、始見の現象とす。「高遠の理想」を以て自から標榜する伯大隈は、議會後に於て、自から處決するところ無かる可らず。或は、彼は、元老を操縱し得たりと思ふやも知れず。然れども附帶決議は則ち不信任案なり。附帶決議を付して總豫算の通過したるは、則ち豫算と不信任案と並び通過したるなり。威信を失すること此の如くして、尚ほ内閣の長壽なるを得るの理無し。

◉伯大隈は、公山縣に、居中調停を依賴するに當り、議會後の辭職を口約したりといふ者あり。或は、妥協成立後、伯大隈は、辭職を口約せしこと無しといひしと說く者あり。吾輩を以て見れば、口約せし事無しといふを以て事實とすべし。

◉伯大隈が、特に、公山縣を起して、調停を依賴する時、九死一生の窮境に在り。必らずや彼は、其の才華を以て情理に訴へたるを疑はず。而して議會後、辭職の口氣を漏らし、事もあるべし。然れども謹愼なる山縣は、決して内閣更迭を私約することある可らず。

◉此の如き場合、辭職の條件は、伯大隈より見れば、一場の權宜とするも、敢て差支あること無し。他日に到り、彼に、履信の責任あらず。況んや彼が政權に執著するの深きを以て、辭意の實現、彼て於て、淸水の舞臺を飛下するよりも困難なるものあるに於てをや。

其四

◉伯大隈は、屢、壯語して、伊藤も山縣も、吾輩より後輩なりと言へり。明治初年に於て、伯大隈が、公山

縣よりも、早く參議となりしは事實なり。然れどもこれを以て、當時、伯大隈の實力、勢望、伊藤、山縣の上に在りしとするを得ず。

◉維新政府は、薩長、土肥、四雄藩の代表者を擧げて内閣を組織したり。薩長には先進者多し。伊藤、山縣松方、大山の諸人、未だ代表者たるを得ず。肥には先進者少し。伯大隈は乃ち伯副島と共に、代表者として、大西郷、木戸、大久保等と、廟堂に伍するを得たるのみ。其の實力、勢望に至つては、始より伊藤、山縣の上に出るを得ざりしなり。

◉然りと雖、伯大隈の才華燦爛たる、其の位を辱しむるものに非ず。三傑の亡後、彼は、伊藤と共に、政壇に覇を爭ひ、伊藤の薨後、山縣と、對峙するの形を爲すも、彼が山縣と爭ふは、實は、伊藤と爭ふよりも苦戰ならん。

◉大隈と山縣とは絕好の對照たらずんばあらず。大隈は華に、山縣は實、大隈は才、山縣は力、大隈は集散し、山縣は蘊蓄す。華、才、集散の絢爛たる、大隈の如きは得易からず。然れども集散の華やかなるは、山縣を驚かすに足らず、蘊蓄の大なる、山縣の如きは大隈の敵し易からざるところなり。

◉山縣の蘊蓄力の偉大なるは、維新以來、其の比を見ず。財界に於ける安田善次郎は、僅に相似たるものなるべし。然れども安田の力、唯だ財に留まる。人物、規模、固より山縣の匹敵に非ず。大隈は株式界の雄なるが如く、或は、善く集むと雖、忽ち空しき事、中村道太の如く、唯だ彼の才の雄なるを以て、馬脚を露はすこと、中村の如くなるに到らず。

◉筧の水は、點滴、聲を爲して注ぐ、集積するところ知る可きのみと雖、若し、堅牢の大桶を以て、之を受けて漏らさゞりせば、其の大を爲す事、必ずしも遠きに非ず。山縣の政壇に立つ五十年、かくの如くにして、蓄積するところ、想像するに餘あり。況んや、筧と桶と共に甚だ、大なるに於てをや。

◉大隈は大なる漏斗の如し。其の口、極めて廣大にして、集容力に富むと雖、其の集容するもの、概ね後口より退き去る。彼の一生は、譬へば、瀑布の直下に大漏斗を置くが如し。其の大水を集容するの盛、壯觀とするに足る。然れども一刻も集容せざれば、大漏斗底一水を留めざるべし。彼が五十年來、彼が營々として奮鬪し、讀書し、辯論するもの、此の大漏斗の如くならずんばあらず。

◉今の內閣は、伯大隈の蘊蓄の全部を暴露するものなり。彼が、維新以來、政壇に雄飛するを以てして、蘊蓄するところの勢力、家子、郎黨、僅に此に留まる。公山縣が勢力蘊蓄の由來は、維新前、奇兵隊の昔に在り。其の蘊蓄するところの勢力、人物、嶄乎、牢乎として、今日に於て、其の根柢を動かすこと難し。

◉政治上に於ては、伯大隈は「其の日暮らし」の極めて雄大なる者ならずんばあらず。年老に到ると雖、尙ほ自から手足を勞して働かざる能はず。公山縣は則ち居然たる大富翁、番頭、手代を頤使しつゝ、優に金利の利殖を樂しむ者なり。蓋し、此の如き、政治上の大富翁は、吾が國史に於ては、家康と山縣の外、對比するを得る者無し。古今、「大御所」の好對ならずんばあらず。

其五

◉伯大隈は、嘗て、故の侯井上を月旦して、「猛獸遣ひ」と爲せり。此の評、確に、一隻眼を具するものなり。星亨、伯陸奥、市川團十郎の如き、剛强、不逞の徒を驅使すること容易なりしを見れば、侯井上の人物、一種、精勁、非凡の力ありしを知るに難からず。

◉公山縣は、侯井上の如くに、「猛獸遣ひ」には非ず。彼は猛獸を好まざるべし。彼は、徒手、檻中に投じて、猛獸を御することを能くせずと雖、又た能く、安然として猛獸を制するの術を解せり。彼は、先づ猛獸の爪牙を奪ひ、猛獸の形を爲すと雖、危害を加ふる能はざらしむ。

◉彼が人物を養ふは、譬へば鶴を養ふが如し。鶴の羽翼を伸ばさしめ、其の軀幹を束縛すること無し。極めて其の自由に任ぜしめて、之を檻中に入れず。而して之を放ちて狹庭に養ふ。之を放飼す雖、鶴は、狹庭に在つては、高飛し去るを得ざるなり。

◉劍法より見れば、彼の態度は、つねに中段に構ふるものなり。威壓せずと雖、間隙の乘ず可き無し。難攻不落の形勢は、中段に在り。伯大隈は、好んで大上段に構ふ。體勢壯大、劍を知らざる者、爲に壓迫せらると雖、善劍者より見れば、間隙、到處に有り。畢竟、虛喝の擊劍にして、戰場に用ふ可きものに非ざるべし。

◉伯大隈の劍は、竹刀の心地あり。之を揮ふこと活潑自由なるも、劍の「刄」と「峰」とを擇ばず。往々にして「刄」其の身を傷くることあり。公山縣は竹刀を揮ふに、眞劍の氣分を以てするが故に、劍法、地味なり

といへども、確實、精練、容易に、其の壘を拔く可らず。

其六

◉彼が伯大隈の内閣を授くること、時勢の變遷といふと雖、胸中、ひそかに無量の感慨無くんばあらざるべし。泉下の公伊藤にして知るあらば、果して何とか言はんや。

◉明治十四年、彼は、伊藤と聯合して、大隈を逐ひしより、三十一年、憲政内閣の組織に至るまでの間、彼は、伊藤と固く結托し、大隈を政敵としたるのみならず、中心、實に、大隈の思想、精神を以て、國家に不利なりとすること、宋朝の忠臣が、秦檜を惡むが如くなりき。廿三年、條約改正問題の時、大隈案の死命を制したるも彼なり。

◉彼は、勉强家にして、讀書家なり、然れども思想、自由ならず、學問該博ならず。彼は極めて、社會主義の思潮を惡み、且つ恐れて、邦家の前途の爲に、これを以て杞憂と爲すと雖。實は、社會主義なるものを深解せず、幾多の誤解を交ふるものあり。而して彼は、大隈を惡み、これを排斥すること、社會主義を見るが如くなりしならずんばあらざりき。

◉三十一年の六月、伊藤、内閣を投出し、大隈を奏薦するに及び、彼は、極力、之に反對したり。彼は全く意外の感に打れて、驚き、且つ憤れり。彼は、伊藤の大隈觀も亦た彼と同じかるべしと思ひ居たり。非、此に至りて、彼は、伊藤の志操如何を疑ひ、且つ、自から伊藤に賣られたるの思を爲せり。

◉此の時、彼と伊藤との間に、溝壑を生じ、從來、伊藤に提携し、其の下に立つの觀ありしもの、此に至つて對立するに至れり。此に於て、伊藤と大隈との間は稍、疎通するものありしも、此が爲に、山縣を敵とせざるを得ざるに至り、伊藤の政治的生涯に一大障碍を將來せり。而して山縣と大隈とは、依然として、舊來の反感を持續したるなり。

◉公伊藤が、自から野に下りて、政友會を組織したるは、山縣との間の溝壑を深くせしめたり。政黨に對する二人者の觀念、全く相同じからず。當初は、ともに超然主義を持したるも、既にして、伊藤は、政黨の必要を知り、自から模範政黨を作らんと期し、山縣は飽くまで政黨を抑へんとせり。一は進步的にして、一は保守的なるの相違なり。

◉政治家としての伊藤は、寛大、自由、進歩的なるを以てして、一旦、反目したりし政敵と、再び和睦、握手すると、必ずしも難きに非ざりしも、山縣の堅固、頑强、保守的なるを以てして、四十年間、敵視したりし大隈を、援助するに到りし事、已むを得ざるの勢なりしとは言へ、老來、鋭鋒の鈍りしに依る乎。或は、大隈を諒解するに到りし乎。抑、彼は伊藤を回憶して、如何の感慨を爲せしぞ。

其七

◉山縣は、責任の觀念、極めて篤き人。大隈は薄き人なるべし。大隈を以て、無責任、不信義なりとするは、ひとり山縣のみに非ず。井上、大山、松方諸卿も亦た山縣に讓らず。而して是等の諸元老、一致して、大隈を推選したるは何ぞや。

◉諸元老、自から起つて時局を收拾するの勇ありせば、彼等の好まざる大隈を推選するの必要は無かりしなり。而して諸元老、勇氣無し。侯井上は病軀、固より其の任に當る可らず。山縣も亦た持病あり、强ひて起たしめば侯松方なるべし。是、亦た言ふ可く、行ふ可らず。

◉此の場合に於て、侯井上、進んで推選の任に當りしは、彼の率直、磊落の性質を見る可く、山縣が、元老の首坐に在つて、協賛の地位に立ちしは、彼の智術ある態度を徵するに足らずんばあらず。

◉今の三元老に、伊藤、井上を加へて、五元老ありし時、伊藤は、自から議長の地位に在り。勢望、元老の中に秀出す。伊藤、薨後、山縣、隱然、第一位に居ると雖、井上、對峙して必ずしも相下らず。井上、薨後、則ち山縣、顯然、第一元老となり、「大御所」の名實、ともに備はる。

◉吾輩は、伯大隈の出處進退に遺憾無き能はず。大隈が、老來、首相たるは、優曇華(ウドンゲ)の花なり。優曇華の花は、長く咲かずとも可なり。彼は、時局を收拾するの後、直ちに飄然として去らば、流石に、第一流者たるを失はず。或は、元老の班に列す可かりしなり。

◉大隈は、其後、去年、選擧終了後に去らば、猶ほ其の聲價を失はず。大浦問題に當り、居据るに及んで、金箔、悉く剝落す。然れども、御大典後に、決然として掛冠せば、旣に、平凡に、落つと雖、尙ほ居据の辭柄を爲すに足るものあり。豫算通過の困難なるに及んで、終に、山縣の庇蔭に立つに到る。大隈は、足元の

明るき中に退くことを知らず。其の智、到底、山縣に及ばず。

其八

◉井上角五郎、蟹甲將軍を以て知らる。蟹甲將軍の一語、彼の人物、風采を象徴するに足らずんばあらず。人相家、石龍子、彼の風采を相して、非常の大處、非常の小處、混交し、其の大處のみを以てすれば總理大臣たるに餘あり。其の小處を以てすれば、學者たるを失はずといふ。

◉彼は、兎に角、非凡の處あり。議會に於ける辯論、異彩を發する、既に、世人の知悉するところ、若し、彼をして、試みに、將來の倫理、道德問題を論ぜしめんか、條理明暢、新見を披瀝し、卓拔、斬新、或は、世の倫理學者の、未だ想到せざるところを道破するものありと聞く。

◉彼は、顏面平濶、頭蓋、太だ大にして、頭周二十三吋、遠く常人を凌駕す。石龍子の所見を以てすれば、彼が腦量、必らず莫大なる可く、其の大處、小處、畢竟、英雄の性質と學者の性質と、油と水と雜處する如くに、混交して在り。若し、此の二性質をして、渾然、調和せしめば、彼も亦た一箇、出色の偉材たるを失はざるべしと爲すに在り。

◉吾輩、石龍子の蟹甲觀に對して、頗る感興を催うす。世間、大頭にして、蟹甲將軍に類するもの必ずしも少からざるべし。其の多くは畸人となり、地平線上に出現し來らず。故の侯井上の如きは、恐らくは此の種の人物の傑出せるものならずんばあらざるべし。

◉侯井上は畸形の英才なりき。其の大處、小處、ともに遠く蟹甲の上に出づ。英雄的力量、餘ありて、缺陷も亦多し。突發の力、親分たるに足り、而して持久の力「大御所」たるを得ざるものあり。

◉吾輩の所見を以てすれば、公山縣は、其の大處、少處を極めて能く調和せる頭腦を有する人物ならずんばあらず。彼は讀書、研究の力、細微に入り、學者たるを得可き天分あり。さればとて曠世の大家たるべしと思はるゝほどにもあらず。其の大處は、身を以て邦家の重に任じ、志、一世を蓋ふ。さればとて大西郷の如く、天空海濶の宏量あるにも非ず。これほどの大人物としては、寧ろ狹量に見ゆるところあり。然れども大處、小處、相助けて狹量の缺點を暴露せず。

◉彼は小頭にして、其の大なる頭腦力を何處に藏しつ

いゝあるやを疑ふ。然れども彼の頭腦は、大處、小處、調和、整齊して、其の表現は、渾然として、常識的にして、把持し、持久するの力あり。彼が「大御所」たるを得る所以、此に存在せずとせんや。

◉公山縣は謹嚴の人。蟹甲將軍に比較せらるゝは、恐らくは其の好まざるところなるべし。然れども彼の偉なる所以を發見せんとせば、吾輩は、端無く、蟹甲將軍を聯想するの、已むを得ざるものあるなり。

其九

◉彼は趣味の人に非ず。歌を善くし、書を能くすれども、其の人、詩趣無し。彼の身邊、すべて『健全なる常識の氛圍氣』を以て、包圍せられつゝあり。

◉彼は趣味の人に非ずと雖、圍碁を好み、盤上の石戰に、日を移すを嫌はざることあり。然れども公伊藤の如くに、碁に淫する者に非ず。多しと雖、三戰、四戰、則ち兵を收む。彼の碁は笊碁なり、戰法、遲重にして、鋭邁のところを見ず。碁は、兵機を寓するものなりせば、彼は、兵機に神なる者に非ず。

◉藤田東湖も笊碁なりき。隣家の畫工に負けし時、一笑して、「東湖は碁で、卿に負けるとほりの人物と思ふなよ」と言へりと聞く。公山縣の碁も、東湖の如くなるべし。然れども東湖の碁には、奇鋒、流露せしを想像するを得る。彼の碁は、すべて常識的なり。

◉彼は藝術に志あるにも非ずと雖、古人の筆蹟を尊重するを忘れず。謠曲を好み、清元を好み、ともに堂に入ると雖、毫も自家の機軸を交へず、一意、師授を敬重すること彼の如きは、世間、極めて稀なるべし。

◉彼は、趣味の爲に、時間を費すこと無し。然れども庭園に、意匠を有し、殊に水を好み、椿山莊、古稀庵、無鄰菴、すべて水の趣味に非るは無し。水無き處に、彼は家を作らず、水無ければ、即ち水を引く。古稀菴の如きは、其なるべし。

◉彼は、身を持し、身を處すること、すべて清潔の一語に盡くるに似たり。然れども強ち潔癖といふにも非ず。清潔の中、自から寬厚、自由の氣分を帶ぶ。

◉彼の歌は作家の域に入る。其の歌、其の人の勁健なるに似ず、頗る優婉の調あり、痩肉の字を以て書くに適はし。彼の衣帶の、甚だ整齊なる如くに、其の歌も亦た聲調、甚だ整齊なり。

◉「趣味の公山縣」を論ずれば、尙ほ玆に盡きず。畢竟、彼の趣味、第一、水に在り。水を驅使する時、彼は、

詩趣を流露す。目白の椿山莊は、離落、邱に倚つて斜に、叢竹、折伏し、自然の畫趣に任かせて、頗る濕潤の意あり。彼が靈犀一點、詩人の性情、此に微見す。

●餘事は暫らく措く。彼が、つねに水を驅使し、水を樂むを見れば、彼の人格、其の趣味に現はるゝものは、水なり。智者は水を樂むといへり。趣味に見たる彼は、智者ならずんばあらず。

其十

◉目白の大御所は、駿府の大御所よりも既に、遙に年長なり。家康は老健の人なりしと見ゆ。堅忍、持久、辛抱強きこと、彼の如きは史上に稀なり。但し、大阪攻の一事を見れば、老來、氣短かになりし事、爭ふ可らず。今の大御所は、尙ほ政戰に、遠捲の態度を失はざるを見れば、未だ老人短氣の特徵を示さゞるなり。公山縣は家康よりも遙に長壽たるのみならず、其の堅忍持久も彼に優れるものあるにや。

◉公山縣と伯大隈と、同庚にして、八十に垂んとし、其の老健、ともに古今人に超ゆ。歐米の老宰相に比すとも遜色ある事無し。吾輩、吾が近世の人物に求めて壯剛、彼等を驚かす可きもの一人を得たり。

◉天保年中、則ち此の二卿が誕生したる頃の、勘定奉行に岡本花亭あり。詩書を以ても一時に聞えたる人なり。元と小祿の計吏たりしが、二分金改鑄の議に反對し、建白せしも省せられざるを憤りて、官を辭し去る時、既に五十餘。古人、隱居の年なり。詩あり、先生老病去㆑官時。無㆔復餘金嫁㆓女兒㆒。堪㆑笑卅年爲㆓計吏㆒。未㆔曾一算及㆓家私㆒。

◉花亭、隱居すること廿年。水野越前守、閣老となるに及び、其の人物、廉吏たるを識り、拔擢して代官となし、累進して、遂に勘定奉行に進む頃、八十歲、抑、勘定奉行は今の大藏、內務、司法、農商務、遞信諸大臣を一括して兼務するにも當る。舊幕政府に於ける尤も樞要の劇職、實は、閣老、上に在りと雖、天下の政治、勘定奉行の手に在りといふも可なり。花亭、五十歲以後、隱居すること廿年、卒然、起つて其の職に堪ゆといふ事、頗る非凡なり。老來、壯剛、氣力、才識、少しも衰へざるを想見するに餘あり。

◉花亭、還暦にして、齒、全く脫落し、七十を過ぎ、再び三四齒を生ず。これを齯齒と稱すといふ。此の事、栗本鋤雲、記するところ蓋し事實なり。山、隈二卿、或は齯齒を生ずるの慨無くんばあらざるべし。

◉吾輩、花亭を標出する所以のもの、一は、伯大隈、漫に老健を誇るを戒め、一は、以て、公山縣、ますく加餐、保全するあらん事を祈るの微意に外ならず。

其十一

◉公山縣、瘠軀なるを以て、老弱と想ふこと勿れ。彼の腰を見よ。彼の軍服、洋服、和服に論莫く、體勢、堅確、つねに備あるの構を爲す。彼が故意に備ふるあるにも非るべし。彼が壯年、槍術に精練し、體得するの致す所ならずんばあらざるべし。

◉彼の體勢は槍法の構へなり。彼は、槍法を體得するのみならず、深く心得す。彼の兵法、其の人に對し、政敵に對する所以のもの、吾輩を以て見れば、すべて槍法より得來らざるは無し。彼は『槍の權化』なり。

◉彼は槍を好み、武藝を好み、武を談ずれば半日と雖、娓々として倦むを知らざるの慨あり。彼は、壯年、槍法に苦心し、第一流の槍術者たるの自信ありしと傳ふ。明治維新の來ること遲く、彼をして風雲に際會するの機無からしめば、彼は槍術の大家として、一世に、名を爲す可かりしなり。此の點に於ては、昔の「大御所」は、今の「大御所」に及ばず。

◉彼は、屡、謙遜して、自から「一介の武辨」といふ。「一介の武辨」の語、今の彼より出れば、却つて多少の嫌味無きに非ず。此の如きは、彼の逆法螺といふものなり。然れども彼が飽くまで武道に熱心し、武士の面影、潑溂たるを見れば「一介の武辨」の一語、また彼の半面を表白するに足らずんばあらず。

◉彼は非常の攝生家にして、能く食物を、叮嚀に咀嚼し得て、口に取るもの、必らず彼の血肉を爲すならんと思はるゝほどなり。彼の學びたるもの、渾べて彼の人格、精神を爲せり。彼が創業の大器に非ずして、守成の偉器なる事も、亦た此の間に微見す。師授を堅守して、猥りに、敢て、我見を出すこと無きも、一旦、攝取したる有形、無形の食物、すべて之を消化し、同化せずんば已まざるなり。

◉彼が老來、瘠軀にして、其の實、堅剛なるを得るもの、壯年時、武道の鍛練に本づく。彼は、規律、攝生、強志、力行、而して小心翼々として、壯年時の堅質を保全すること、百練の名刀を包むに、純精の眞綿を以てするの慨あり。

◉彼が、其の得たるすべてのもの、且つ、占めたる地歩を保全し、日を重ね、年を積んで、蘊蓄するの態度

は、悉く此の如し。

其十二

◉吾輩を以て見れば、賴朝、家康、公山縣は、人格、態度、尤も善く相似たる大人物なり。就中、家康と山縣と老來の態度、酷似するものあり。賴朝も、「大御所」となる可かりしやも知れざれど、早く歿し、時政、稍、「大御所」の觀無きに非ず。今日以後、元老は續出するやも知れざるも、公山縣の如き大勢力ある元老、「大御所」の再現を想像し易からず。

◉風貌は人物の象徴なり。此の意味に於て、人物の風貌、研究の興味、津々たるもの無くんばあらず。世人は、公山縣を以て、家康に似たりと爲し、公伊藤を以て、寧ろ秀吉を聯想しつゝあり。而して、風貌は之に反し、伊藤の豊滿は却つて家康に似て、山縣は秀吉の肖像に彷彿たるものあり。其の筆蹟までも相似たるものあるは、一奇とすべし。

◉吾輩の知るところを以てすれば、公山縣の崇拜する古英雄は、即ち秀吉なり。筆蹟に至つては、彼が秀吉に私淑したりしや否を知らず。秀吉は多く假名を書けり。假名は、二人者、善く相似たり。但し筆法は、山縣、勝れるは勿論なり。而して彼が秀吉の筆蹟を愛重して措かざるは事實なり。

◉山縣は國學に造詣せし丈けに、其の假名、秀吉の天縱、豪放の筆致には及ばず。然れども彼の筆、蒼勁、雄健、利刄を揮ふが如く、武人の能筆たるを失はず。昔の「大御所」の筆蹟の豊厚、肥俗なるとは似ず。

◉秀吉を猿といふの說は、史家、議論あり。暫らく措く。吾輩、玆に一說あり。秀吉を猿といふは、其の骨相より觀て、强ち酷評なりとは爲す可らず。秀吉を非常の小男とするは俗說なるべし。然れども五尺四五寸には過ぐ可らず。山縣は老來、五尺六寸五分、修然たる長軀、壯年時には七寸に及びしならん。固より秀吉よりも頗る高かるべし。

◉秀吉の風貌は、隆準、稍、長顏にして、前額、及び頤、著るしく後方に退走す。吾輩は、此の意味に於て、彼の骨相、猿に似たることありといふ。隆準は全く猿と相反す。隆準、長顏、前額、頤の退走の三點は、山縣、尤も能く秀吉と相似たり。而して古今の人物、此の二人者ほど、酷似する者は、他に有らざるなり。

◉此の二人者は顴骨の突張せるも同じ。眼も亦た相似たり。此の二人者は、背、寧ろ揚りて、數條の皺を帶

ぶ。上瞼が、山形を爲せるを以て、眥(マナジリ)下(サガ)れる如くに見ゆるのみ。而して山縣の眼の特徴は、眼と眼と、著るしく接近せるに在り。此の點、秀吉、亦た相似たるらし。二人者の鼻は、意思の確然たる事を象徴す。

其十三

◉秀吉と山縣と相似たりといふは、其の前面を見るのみ。秀吉も瘠せて、肉附は相似たる可し。山縣は後頭隆起して帽子を支ふ。秀吉の背面の肖像、傳はらざれば、後頭は知る可らざるも、其の前面の構造より推せば、或は、相似たるやも知れず。

◉彼等ほどの人物にして、前頭の小さきは甚だ奇なり。顳顬(コメカミ)のところ、峭立して削るが如し。顳顬の豐厚にして、前頭の廣大なるは、近世の英雄、大西郷に若く者無し。公伊藤も前頭、發達し、公桂は殊に顯著なりき。男後藤新平は、自から誇稱して、前頭の構造、大西郷に酷似すといふと聞く。

◉公山縣は、頗る異相なりといふべし。輓近の名士、一人の相似たるものを見ず。彼は其の父に似たる乎、母に似たる乎、彼の親戚に博士中村精男、彼に似て溫柔。則ち彼の血統に、早く此の風貌あるを知るべし。

◉山縣も秀吉も、其の前面より見たる時、尤も莊重なるべし。若し、側面より見ば、中心著るしく突起して、隆準の鼻、山脈の如くに聳ゆ。朝鮮の使者、秀吉の風貌を語りて、他の奇無し、唯だ眼光、巖下の電の如きのみと言へり。山縣を仔細に看ば、異相たるを失はずと雖、一見、何等の奇を見ず。何處に、彼の智慮を藏するやと思はる。唯だ其の眼は、彼の人物を表現す。

◉秀吉と山縣と、共に小頭にして、前頭退走す。彼の肖像を造る者、表面より、終に、其の智慮を探求するを得ず。其の大腦、小腦の位置、關係、蓋し醫學者、心理學者の考究に値せずんばあらざるべし。

◉公山縣の肖像を造りし者、大熊氏廣、新海竹太郎、本山白雲の三人あり。大熊は吾輩知らず。新海は材料を造ること頗る綿密、目白に、小田原に、七八回、「大御所」をモデルとなして研鑽す。時には對坐、或は逍遙、共に居ること半日を過ぐ。而して彼が些の倦怠の色を見すること無かりしを驚嘆す。

◉小倉惣次郎が公伊藤、長沼守敬が侯井上の肖像を造りし時、此の二卿の我儘なるに驚けり。彼等は三十分と雖、モデルたるに堪へず、或は僅に五分時にして、突然、書齋に歸り去る。公山縣の如く、謹愼、忠實、

身を以て研究臺上に委して、厭はざる者は、世間、比類少かる可く、新海も未だ嘗て此の如き人に遭逢したる事無しといへり。但だ彼は、非常の長時間に渉る時、時に、中音、以て、謠曲を低唱することあるのみ。

◉吾輩、本山白雲と語るに、彼は、秀吉像を造るの志あり、好モデルを得るに苦心すといへり。吾輩、乃ち公山縣の肖像を參取すべきを勸む。秀吉像を造るに、是程適當の好モデルは有らざるべし。山縣の風采、和服、或はフロックコートも亦た太だ謹嚴、然れども軍服、殊に、舊式の肋骨服を、吾輩の見たる中、尤も詩趣、畫趣ありとなすべし。

◉白雲は、日露戰の時、雪の朝、椿山莊に往き、始めて公山縣に見ゆ。白雲、階下の應接室に入るに、人あるを豫期せず。天、曇り、室も亦た薄暗し。忽ち見る。大暖爐の火、活々として、炎、輝く前に、火を背にして、肋骨服を著けたる長身、瘠軀の參謀總長、立てり。此の背景に映出する威容の莊嚴は、白雲をして、我を忘れて、佇立、諦視せしめたりといふ。

其十四

◉公山縣は自から「大御所」を以て居らずとも、軍閥勢力の地盤に立ち、小田原に、或は目白に、遜居しつゝ、坐して天下の勢柄を執る。現代の「大御所」たらずといふを得ず。「大御所」晩節の覺悟、如何。

◉吾輩、「大久保武藏鐙」の一書を讀み、昔の「大御所」の偉大なる所以を思ふ。武藏鐙は大久保彥左衞門の忠節、識見を敷衍するもの、著者の名を明らかにせずと雖、此の書、往々、識力の見る可きあり。升平の世相、士風の弛頽を諷刺し得て、剴切を極む。定めて家康の遺意に合するものたるを疑はず。

◉家康に彥左衞門あるは彼の誇なり。今の「大御所」も大戰亂、大艱難を閱歷して、老來、治平に居る。彼の幕下に、大久保彥左衞門ありや。將た彼自ら、新天子の爲に大久保彥左衞門たるを得るや。

◉武藏鐙の一書は、彼が閑餘の抄讀に適せずと爲さず。謹嚴なる彼をして破顏微笑せしむるものあらん。彼は多く武士の書を讀みたれば、既に陳套に屬するならん乎、彼が質素、武健の逸事、往々、彥左衞門の志と、古今、相類するもの無きに非ず。然れども吾輩、今、公山縣を論ずるに當り、改めて此の一書を、彼に推薦するの情を禁ずる能はず。

公山縣は一代の大人物、論述す可きもの固より此に盡きず、暫らく

其の一斑を擧ぐるのみ。郁門、梅花、水仙盛開の時、二月十六日、風の夜、　　黑頭巾再記。

殺人實記

山中未成

○

右に揚子江がながく＼／と流れてゐた。左に鄱陽湖がひろ＼／とひらけてゐた。その江と湖との界をなして繊い岬が東から西に連亘してゐた。岬は西するに從つて漸く高く、駱駝の背なかに肖たやうな山脈が、ゆら＼／と幾趣幾樣の曲線に天を劃つて延びてゐた。その谷あひの底にちかく、低い甃の小部落が一つ、揚子江の岸に沿ふてそゝくさと固まつてゐた。部落の端の庇のしたに、淡黝い水牛が三匹ばかり、赭い泥土のうへに蹲まつてゐた。

岬の山の背のうへから、彼は甃の列と水牛とを瞰をろしてゐた。携へてきた地圖のうへを探せば、その小部落は『回峰磯』と謂ふのであつた。

彼が佇むでゐた頭のうへに、大きな櫨の樹の厚い綠葉が高く層つてゐた。その幹の根に腰を下して、彼が右手に提げてゐる地圖を仰ぎながら、他の一人が葉卷を悠るく燻ゆらしてゐた。彼も他の一人も、白麻の輕快な支那服を着てゐた。

彼も他の一人も日本人であつた。たゞ他の一人は朝鮮に生れ、『洪子考』と稱へてゐた。洪は朝鮮の無政府黨員の一人であつた。伊藤博文氏を哈爾賓で手にかけた下手人の李を善く識つてゐることを話の始めとし

て、洪は嘗て日本の帝國大學の法科に遊び、韓國合併と前後して朝鮮に歸り、民心覺醒の刺戟のために總督暗殺の密計に與かつたこと、その一味徒黨が哈爾賓に首尾よく奏効した後は、更に又第二の新しい暗殺を企てゝ忽ち暴露したこと、さうして捜索の手の普く嚴しきに居たゝまらず、潜かに支那に遁走してきたことなどを、「湖口」要塞の司令部で、洪は一夜詳さに彼に說いた。

その洪子考は、自ら廣東人と詐稱して、支那人の中に交りながら、普通の支那語は使ひ得ずに、極めて巧みな日本語ばかりを縱橫無碍に操つてゐた。且つ我から獨りで司令部の軍政署の椅子に着き、國際公法などを查べてゐた。

司令部は討袁獨立の宣言直後で、幕僚達は徹宵して忙殺されてゐた。その忙しさの裡に、洪の前後の姿態を、竊かに氣にとめてゐた彼は、一方に廣東語を話し得る支那人を、ある夜、誰彼のうちから漸く索め出して、その「卓」なる人と共に、やがて洪の前に近づいて行つた。

敏くもそれと察した洪子考は、遂に自身の國籍を自ら明かして、由來の經歷さへも彼に落ちなく陳述した。さうして革命を補けたいほかには別に他意なき事を晨ちかくまで力めて說いた。

二三日は其のまゝ過ぎた。司令部の中心にゐた李烈鈞は、洪の處理する軍政署の畫策を、敏捷且つ周到などゝ讃めてゐた。然し其の參謀の誰彼は、洪が竊かに袁軍所在地の「九江」に幾度か打電してゐる旨を、彼に敎へて訝り懼れた。彼は未だその時は現役の士官であつた。ある新聞の特派通信員とは詐つてゐても、彼自身の本體が敵の北京に知れることを、國際のうへから無上に畏れ氣配つてゐた。そのために洪の打電の內容を查べてみるのに彼は當然腐心し始めた。

湖口の電信局から、洪の發した電報用紙を取寄せてみると、洪は四回の長電報を、或は九江の支那旅館に、或は武昌の副總統府にまで打つてゐた。その本文は元より暗號を編みあはせてゐた。然し武昌の黎元洪の手

許にまで、打電してゐたそのことが、彼を激して畏れさせ同時に極度まで憤らせた。更に彼が「朝鮮の無政府黨――敵の間諜――自分の本體」などゝ聯想した刹那に――その咄嗟の隙に、むら〳〵と渦をまいて縺れ上るやうな昏い殺氣が、洪の肉體を對象にして、彼の全意識を凝然と集注させてしまつた。その時に、彼は机の上で電報用紙を復た始めから一葉ごとに、左から右へとうちかへしながら、墨の痕のいかにも鮮やかな洪の手跡をしみ〴〵と瞶めてゐた。猶「無きものにする」といふ語が、實によく殺人犯の殺意をそつくりと表はしてゐることに氣がついた。現在に洪思考を殺し了らうとする心は、いかにもそのまゝ「洪を無いものにしてしまはう」といふ意識であつた。其は只だそれだけの意識であつた。格別に悽愴といひ或は惡逆といふべきほどの其の種の感覺は、そこに毫しも萠してゐなかつた。たゞ所謂他を「無きもの」にすべき意識が自分全部の根柢から靱强に凝結してゐた。さうして、一旦眞に殺意の起きてしまつたうへは、苟くも其の後にそれを飜へすことは、已になか〳〵容易でないのが我ながら確かに肯定し自覺された。

○

彼は洪の用いた電報用紙のうへに頰杖をつきながら、さま〴〵に思ひ廻らした末に、「この唾棄すべき洪の仕業を、李烈鈞に告げて、李君から部下に命じさせ、洪を血祭にあげてやるのに聊かも造作はない。――然し、己は何としても外國人なのだ。己の發意で、同志のうちに殺したり殺されたりすることは、或は延いて味方の內部を相互に攪亂させるやうな、極めて愚拙な現象を惹起さないともいはれない。これは愚策だ。乃ち最も良いことは、己が自身で人知れず、洪を殺して無いものにして了ふのだ。その後に此の電報用紙を、司令部の幹部達に開示してやりさへすれば、一切がそれで終るのだ。――殺人罪を犯してやらう」と、忽ち强く決心してしまつた。それは眞に瞬間に、發作的に決意された且つ至純な一念であつた。

その翌日の夕ちかく、彼は故らに防禦配備の地形を

偵察する爲と稱して、小さな蒸汽船を仕たてさせた。且つ洪子考には、船舶拿捕の手續法則を、砲臺附近の實地に就いて質したいからなどゝ欺いて、彼は洪とたゞ二人、鄱陽湖の上をとほつて、岬の影の砂原に着き、回峰磯なる部落のうへの、山の背にまで登つてきた。

彼が着てゐる支那服の、右の内かくしに、七連發の拳銃が密かに挿まれてゐた。それは片手の掌に、全體がすつかり隱されてしまうほどの、極く小型のブローニング自働拳銃であつた。その日の朝に、彼は件の拳銃を携へて、要塞の背後に聳えてゐる「松樹山」の麓に獨りで行つた。さうして、其處に築かれてゐた極く不完全な射的場で、二十發ばかりを始めて試してみた。拳銃の性能は悉く善かつた。引鐵を押へさへすれば、迸るやうに彈丸は、響と共に切々と銃口を顫はして、腕に傳はる反撞の快さに、彼はそゞろに微笑した。彼方に着けた照準たがはず土煙が、小さく高く跳躍するのを眺めながら、「よし、土と肉との違ひだけだ」と、獨りで强く首肯いた刹那に、截然たるすが〳〵しい快感が、彼の全部を掩ひつくして餘りあつた。

楡の樹蔭に佇むで、彼は地圖と現在地とを照應しながら直ぐ右脇の樹の根もとに、低く腰を下してゐる洪子考の、小型な體格の且つ骨つぽい輪廓を私かに胸に描いてゐた。

既に小蒸汽船に乘り移るまへに、彼は右手を密かに忍ばせて、内かくしに藏してゐた拳銃の、安全栓を爪の尖で脫してしまつてゐた。彼は現在に洪の燻ゆらしてゐる葉卷から攢がつてくる香を、何故か心ゆくばかりに嗅いだ。猶、楊子江の彼岸に、低い楊が遠く横に連つて、淺い綠を吐いてゐる、杳かに淡い一抹の彩りを眺めてゐた。さうして今や現實に生殺與奪の權を、彼自身がまさしく的確に掌握して、そこに人の生を無くし得る力の、如何にも輕微なことを考へてゐた。實に其は彼にとつて一擧手一投足の業であつた。――彼が右手に提げてゐる地圖を、故意と土のうへに滑して、洪が其に咄嗟の注意を投げた刹那に、此方は空いてゐる右手に素迅く衣囊の拳銃を取り出すや等しく、洪の

左の顳顬に近く銃口を眞直に差しあてゝ、引鐵に當てた右指に力を添へさへすれば、たゞ其だけで一人の生は蠟燭の炎が吹き消されたやうに、永く何處かへ往つてしまふのであつた。「はゝあ、此の分では何でもないな」と、彼は思ひながら、近く葉卷の香を嗅ぎ、遠く楊の緑を眺めてゐた。

彼の意識は其のとき穩やかに澄むでゐた。彼は更に楊子江の褐色に濁つてゐる江面を眺め亘しながら、幾度か微笑の浮いてくるのを覺えた。

そのうちに、彼は自身の然うした舉動と意識とが、如何にも卑劣なものに考へられてきた。身に寸器も帶びぬ洪その者の、然も油斷を覗つて、恰も一擊に其を斃さうと企らんでゐる自分の内部が、我ながら先づ嫌忌しなければならぬやうに思はれて、自己の屈辱と怯弱とが、そこに歷然と示現されてゐるやうな感じが、漸く彼に萠し始めた。

彼は東京を出發するまへから、上顎の左右の奧齒に一つゝゝ、齲齒の深い洞を病むでゐた。その左の最も奧深い洞が、何等かの刺戟をうけて、恰も激しく疼き始めた。既に餘ほど前から、齒痛の爲に殆ど惱まされきつてきた彼は、今も疼き始めた左上の齲齒の神經が、未だ猶ほ疼痛を愈々鋭く昂進してくるのを豫知して、忽ち畏れ且つ煩つた。さうして、自分の隨意には決してならぬ齒痛が、復たも勃然と自身を惱まし始めたのに、彼はまた一途に激しく焦燥し始めた。

○

その焦燥と齒痛とが、交々縺れて益々錯綜し、彼の意識は其の爲に、全く不規則に動搖し續けた。左の片頰を其のまゝ剝落させて、大地に戞然と抛げつけてみたいやうな、或はまた上齒と下齒との端を橫さまに摩りあはせて、ぼろぼろと口中に壞ち落してみたいやうな、其等の妄らな想像ばかりが、彼の動搖する意識のうちに顫へて混淆し始めた。さうして、彼は忽ち右手の地圖を、其のまゝ叩きつけるやうに力強く落してしまつた。同時に激しく右に振回ると、全身を硬直しきつたまゝ、兩腕を正しく垂れて、

「洪君、立ちたまへ、ちよつと」と、士官が各個教練の時に、一人の兵卒に號令をかけるやうな態度になつて、叱咤するやうに洪に呼びかけた。

洪は激しく身を起した。その姿勢は忽ち豹變して、嚴しく自身を警戒してゐる氣配に掩はれた。猶雙方の拳を握りしめて、明かに反抗し又威壓してくるやうな一味の氣勢をも現はしてゐた。そこに相互の視線は眞直ぐに遭遇したまゝ、二人は息を塞めて、瞳が瞳を凝視してゐた。

洪の然うした異常な氣勢は、彼を竊かに愕かせた。たゞ洪を激しく呼びかけたばかりで、對手が然く咄嗟に亢奮し反撥したことが、彼には當面に意外であつた。さうして、對手が雙拳を堅めて、明かに反抗すべき決心を、既に十分に示してゐるのが、また彼に溢れるばかりの反感を忽ち激成させた。

以上の總てが咄嗟のうちに起きてゐた。

彼は烈しい反感と共に、一切を省みる餘裕なく、無意識のうちに漲る如き殺氣に塞ざゝれてしまつた。さうして其の刹那に、「決行」とばかり思ひ閃めいた。同時に彼は右手を動かした。拳銃を拔き出す爲であつた。猶又、洪の心臓に銃口を指口して、最も卒直に其の罪狀を數へてやらうとばかり、彼の唇も動きかけてゐた。

然し、危くも其の隙はなかつた。彼が右手を動かすや否や、洪の全身が跳躍すると見た瞬間に、洪は彼の胸さきに殺到した。さうして、洪は彼の兩腕もろともに、犇と彼の全身に獅噛みついた。その驀然として强烈な全幅の力に抱きしめられて、彼は二三歩洪と一しよによろめいた。それと同時に、彼も洪も異樣な唸り聲を發した。

彼は自身に粘着した洪の體軀――肉塊そのものに、極度の憎惡を一時に感じた。殊に右の肩胛に激しく衝突した洪の額――その頭の毛髮全體が、最も强く彼の印象に刻みついた。

二三歩をよろめくと共に、彼は憎惡する洪の肉塊に對して、其咄嗟始めて敵愾心を烈しく感じた。同時に

或は其の直前に、彼は殆ど無意識に胸を右斜めに纔かに向きを變へた。それは對手の全體の重心が、右の方に僅か偏してゐた爲に、それを回避しやうとした彼が自然の術策であるらしかつた。猶、右手の自由を恢復したい意識も、勿論そこに生じてゐたのに相違なかつた。然し、彼の右手は、對手に機先を制せられて、既に自由を失つてゐた。

洪は彼に獅嚙みつき抱きしめたそのまゝ、彼の右手の全部に、胸から下を密着させて、殊に彼の上膊が痺れるばかりに、そこに全身の死力を集中してゐた。

彼が自身の胸を右斜めに纔かに躱はしたと思ふや否や、洪の右手は忽ち颯然と轉じて、彼の右の手頸を緊しく握みしめた。同時に彼は「拳銃を奪らうとするのだ」と思ひ閃めくと、忽ち絶大な恐怖に搏たれた。刹那に彼はズックの白靴を穿いてゐた右脚をあげて、對手の股間を一蹴した。それは無効であつた。相互の身軀が悉く密接してゐた爲に、彼は蹴あげるための距離を有つてゐなかつた。

彼は自由になつた左手の肱を怒張して、隙を置かせず對手の喉頭を、横さまに握みしめた。そのぬる〳〵とした熱い喉頭の眞中に、是こそと思ふこり〳〵した氣管が拇指の爪に觸ると共に、洪は其の首を激しく搖つた。然し彼の左手は毫しも其處を離れなかつた。顎の根に深く拇指の力を込めて、彼は絞るやうに洪の喉頭を、折れよとばかり緊壓した。と共に、彼の右手に加はつてゐた洪の全力が俄かに然し纔かに悠るみを帶びた。そこに彼は自己の氣力が猛然と對手の氣力を掩ふのを覺えた。對手も氣力の制壓をまさしく感受したことをも、彼は併せて的確に認識した。「勝つた」と、彼は忽ち意識した。彼は滿身に汾湧する新しい力をあげて、洪の肉塊を壓迫した。

對手は其の時、意外にも脆かつた。彼の身力が餘るほどに、洪は寧ろ蹌踉としてよろけた。彼は更に間隙なく洪の軀體の上に、そのまゝ距離を置かせず全身を傾倒して襲迫した。その動作が三四歩ほども續いた。さうして、洪は遂に腰の力が碎けたやうに、卒然と土

のうへにべつたりと蹲まると、彼の右手に縋りつきながら、頽然とした低い姿勢を、彼の胸の下に現はして、寧ろゆつくりと眞面に彼を振り仰いだ。

洪の顏には何の異常な表情も現はれてはゐなかつた。たゞ昏い悄然とした、何等かの妄想に深く耽つてゐるかのやうな纎長い面貌の、瞳を開いて極めて暗鬱さうに彼の何處かを凝視しながら、唇ばかりが著しく横に緊張して、汗に掩はれた其の滿面が、日射病の患者のやうに極度に赧く充血してゐるばかりであつた。

其の洪の顏を視ながら、彼の感觸には何の動搖も起きてこなかつた。對手の對抗力が迅速に頽れると見ると、直ぐに彼は右手を引き解いて、其の自由を奪ひかへさうとした。それも容易であつた。洪の兩手には殆ど惰力さへもなく、直ぐに彼の膝頭のあたりに觸れて下ちると、其の身體の重量は僅かに彼の左手に加はつてきた。

全く自由を恢復した右手に、彼は素迅く衣囊から拳銃を拔きとると共に、對手の喉頭を終に緊しく攫むでゐた左手を割愛するやうに放して、また其と共に、拳銃の正確な照準を、直ぐ下の洪の前額に着けてしまつた。此の時に、洪はおぞくも土のうへに兩手をついて、既に悉く生氣を拔かれた骸のやうに、ぐつたりと首を俯せて、彼の脚下に唯だ一個の肉塊を提供してゐるのにすぎなかつた。

○

彼は洪が其の極端な從順によつて、彼の憐愍を哀訴するものと、先づ最初に思ひついた。更に洪の前額の赭い皮膚が、漸く蒼く褪つてゐるのに氣づくと、「死」の一事を烈しく意識した。然し、それは現在する洪そのものゝ死を思つたのではなかつた。自他の關聯なしに、只だ「死」なる名づけ難い至純な觀念が、當面に彼を强迫したのであつた。さうして、そこに何の畏怖もなく、また其を忌避しやうとする意識も起つてゐなかつた。そのまゝ彼は拳銃射擊の正しい姿勢を、我知らず何時の間にか取り了つて、たゞ凝然と洪の前額を一途に瞶めて立つてゐた。

洪は然し絶息してゐたのではなかつた。土のうへに兩手を突くと少時くして、洪の兩肩が著しく痙攣し始めると、切々と大きな息を吐き始めた。

彼は其の咄嗟に、あはや拳銃の引鐵を押へやうとした。が、直ちに何等かの發作が彼の内部に忽然と起きた。――彼が右の食指を曲げやうとする其の一意識を、的確に拒絶し否定する別の意識が眞に力強く彼を當面に制止した。彼は其の爲に忽ち一切を直下に躊躇しなければならなかつた。同時に倏忽として「今此奴を救つてやれば、どんなに此奴が悅ぶだらう――救つて置けば己は德とされて恩人として、此奴に無上の記念を貽すのだ」といふ意味が、歴然と彼の意識に上つた。洪を救ふことが、宛も偉大な事業であるやうにも、それから直ぐに聯想せられ結論せられて、彼は自身の暴動を否定し拒絶する新しい意識を、また飜つて肯定し許容しさうになつた。さうして、洪の吐く息に引く息の音も加はつて、切なさうに首を上下するのを、未だ凝然と熟視しながら、拳銃の照準を纔かに動かさうとした。彼は悶えるやうな氣分を、そこに覺えた。

然し、それも終に果されなかつた。彼の意識は更に飜つて猶別に「復讎――仇敵」なる觀念に逆轉した。それは彼自身を對象とする洪の將來の復讎を、最も深刻に憂懼した爲であつた。その瞬間であつた。彼は何の省慮も置かずに、遂に引鐵を押へてしまつた。

一つの響と僅かな淡青い煙とが、そこにあつた。さうして、洪は右手を振りあげて、自身の前額を押へると、そのまゝ右後に胸を旋した。と、延びあがるやうに其の胸を著しく反らして、右脇を下に横に仆れると共に、左手をばたりと土の上に伸ばしきつて、土を握むだ。更に胸を眞下にして、長くなつた全身が地上に一轉した。そのまゝ動かなかつた。

彼は洪の然うした所作を、はつきりと視さだめた。洪が動かなくなつたのを見ると、裏がへしになつた其の黏革の靴の底が、最も近く自分の脚下に延びてゐるのを知つた。その自身に最も近い洪の靴底が、彼の存在に端的に矛盾してゐるやうに、たゞ一途に直感され

た。さうして、彼は何かは知らず極めて細心になつて、拳銃を靜かに衣嚢に藏してしまうと、直ぐに身を躍らして、洪の脇腹に兩手を當てゝ、我ながら大膽に、洪の全體を前方に押しやらうとした。それは確かに死骸になつてゐた。さうして意想外に重量を有つた死骸は、彼に押されて、僅かに地上を摩つて位置を換えた。彼は只だ叱咤し痛罵するやうな氣分に掩はれて、更に起上ると再び洪の靴底を視た。その靴底の輪廓が、新しく彼の瞳に深く收まつた。

二分間ばかり、彼は地上の靴底を熟視してゐた。さうして、洪の死骸を谷あひに拋棄すべき、最初からの豫定を劃然と斷念した。

○

彼は獨りで小蒸汽船に乘つて、司令部に歸つてきた。さうして、直ぐに幕僚達に一切を告げた。何子奇は彼の左肩を叩いて、哈々と笑つた。黄愃は深く苦笑した。

「死骸をこさへてやつた」とのみ彼は思つてゐた。自分でさへ鈍感と思はれるまでに、彼は洪を殺害した自身の所業を、「死骸をこさへてやつた」と思ふ他に、何の刺戟も感じてゐなかつた。その夜は諜電や命令文等の整理の爲に、殆ど徹夜して、晨にちかく二時間あまり熟睡した。睡るまへに、拳銃を取出して、枕の下に挿む時にも、洪のことには何の感覺も惹かされずに、そのまゝ枕についた。一切の律則に就いて、罪惡觀念の伴はぬときに、殺人も別に何の事はないのであつた。

翌日に、黄愃が兵卒を連れて、洪の死骸を埋めに行つた。

彼は廊下を通りかゝつて、軍政署の室のまへで、偶然に昨日まで洪の凭れてゐた空椅子を認めた。

「居なくなつた」とのみ彼は思つた。たゞそれだけであつた。

○

東京に歸つてきた後に、彼は義兄の命日だといふので、若干の供物を、小石川の吉祥寺の玄關に、屆けに

行かせられた。寺僧にそれを届けて歸るときに、境内の細い敷石のうへを通りながら、彼はくすりと自笑した。その日の天は好く晴れてゐた。彼は敷石のうへで二つ三つ跳躍してみたいやうな氣になつてゐた。吉祥寺には病死した義兄の骨が納めてあるといふことであつた。

妾の會つた男の人々

(野依秀一、中村孤月印象錄)

伊藤野枝

野依秀一氏

この人は、思つたよりも底の淺い人です。正直で小膽な處があります。子供らしい可愛さがあります。此人は何時でも豫想外な突飛さで人をおどかして、その隙に飛び込んで來やうとする人のやうに思はれます。殊にその突飛さが非常に不自然なと云ふ範圍を何處までも出ないので、少し落ちついてあしらつてゐますと、馬鹿氣きつた空々しい處があります。

思つたことを遠慮なく云ふことは氣持のいゝ事です。野依さんは眞實さう云ふ氣持のいゝ處がありますが、ともするともう一歩進んでそれを殊更に衒ふやうな傾きがあつて馬鹿々々しくなつて來る事があります。併し野依さんが自分ひとりいゝ氣になつて、とん

でもないことを、喋舌つてお出になつても少しも反感が起つて來ないのは不思議です。けれどもそれは或は反感を起す程度にも相手を引き立てゝ考へないからかもしれません。非常に可愛らしい處のある氣持のいゝ人ですが氣の毒な事には、その唯一のおどかしは凡ての人に役立つ丈けの深味も强みも持つてはゐません。隨分世間には氏を惡黨のやうに云つてゐる人もあるけれども決して惡黨でも何でもないと思ひます。惡黨處か善人なのだと思ひます。善人が頻りに虛勢を張つてゐると云つた格です。

氏の顏から受ける印象から云つても決してすれつからした惡人じみた處はないやうです。氏の眼は何時でも笑つてゐます。そのひたいは陽氣に光つてゐます。陰影と云ふやうなものは殆んど見ることが出來ません。たゞ大變に快活な可愛らしい處のある顏です。態度から云つても惡人と呼ぶだけの落ち付きもしぶときもありません。何時でもやんちやな小僧のやうに浮ついてゐます。私には何處から云つても惡人らしい印象は少しも受ける事が出來ませんでした。野依さんの頭はまた、決して立派なものではなささうです。話してゐる相手と云ふものに就いて非常に考へなければならないやうな場合にもさう云ふことには全く無頓着のやうに見受けます。相手がどの程度に自分の話を受け取つてゐるかと云ふやうな事を少しでも考へると云ふことは殆んどない事と考へられます。それが野依さんの貴い所でまた拔けてゐる處だと思ひます。そのくせ話すときに、何處までも相手を釣つて行かうとしたり、あてこみがあつたり、絕えずしてゐます。處がその技巧が非常に下手で何處までも相手に見透されるやうな拙劣さです。併し御當人は一向平氣のやうです。私が會つた時にも初めから終りまで何かしら私の困るやうな突飛な質問を發してその答へを種々に待ちかまへてからかふつもりだと云ふことは明かによめました。さう云ふ氣持で一つ〳〵の問を聞きますと實に馬鹿々々しくなつて來て仕舞ひました。私は再び會つてその空々しさを耐へる氣にはとてもなり得ません。もう少し

本當に惡人であることを私は望みます。その方が會ふにも話をするにもずつと氣持よく取り處があると思ひます。野依さんに、もつとしぶとい腹があつたらと思ひます。また深味と强みが態度の上に出て來るといゝと思ひます。さうしますとあのふわ〳〵した何の手ごたへもない大言が、もうすこしはしつかりした力のあるものになるでせうと思ひます。私は善人の虛勢はいやです。いつそ、それよりも、本當の惡人が好きです。野依さんは、どうしても善人です。子供らしい無邪氣と向不見な勇氣をもつてゐる人です。人から好かれると云ふのはその點より以外にはないやうです。

私は野依さんに一度きりしか會ひません、一度あつた位の印象はあてには決してなりません。私の迂濶からどんな大事な處を見おとしてゐるかもしれませんがまづこの位の處です。私自身で感じた事だけはそのまゝに書いたつもりです。

中村孤月氏

私が竹早町に居ました時分此の指ヶ谷町の家を見つけて明日にも引越さうとして混雜してゐる夕方私の名を云つて玄關に立つた人がありました。紡績飛白の着物を裾短かに着て同じ地の羽織で胸方に細い小い紐を結んだのがそのぬうと高い異樣な眼の光りを持つた人には非常に不釣合に見えました。その人は鳥打帽をぬいで私が「どなたです」と云ふのに答へて早口に「中村孤月と云ふものです」と低く答へてそれから話をしたいと云ふのでした。私は孤月と云ふ名をきくとその玄關の格子を一尺ばかり開けて無作法にその柱と格子に曲げた兩腕を突つかかつて其處に體の重味をもたして氣味の惡い眼付きで私を見てゐる人をぢつと見返しながら急に反感がこみ上げて來ました。併し何か物に臆したやうな何處かおど〳〵したやうな物馴れないやうな調子にいくらか心をひかれながら、いま取り込んでゐるから引越しをした後に尋ねて欲しいと云ふことを云ひました。そうして引越しをしたら直ぐに通知をしやうと云ふことを云つてその人の宿所を聞くと矢張り

早口に云つてしまふと體を格子からはなしてガタンと閉めて門を出て行つて仕舞ひました。

一二年前に始終物を評する度びに他人の惡口を必ず云つた人、それから早稻田文學に、「さうすることを思つた」「何々を思つた」と云ふやうな妙な創作を出した人としてもよく私は覺えてゐました。そして私はずつと前の靑鞜でその人のことを反感のあまりこつぴどく批難したことも確かに覺えてゐた。それが幾度も、その人の不法な批評が私達のグループで話題になつたりしたこともありました。私はこの寒中に足袋もはかないで、ぬつと私の前に立つた孤月氏の氣味の惡い眼付きと格子戸にもたれて無作法に口をきかれた樣子にすつかりその人が、何だか恐くなつたのでした。それから此處に引越してから私は約束どほりに、はがきを出しました。すると、朝早くまだ私が食事の支度の最中に來ました。私は大變當惑して仕舞ひましたが、それでも斷はれずに會ひました。私の反感はなをと強くなりました。何かこちらで云ふのをジロリとあの氣味の惡い本當に氣違ひじみた眼――で見られるのに一々ゾッとして私は體がふるえる程いやでした。この人は口をハキ〳〵きかないのも嫌でたまらない私の神經を焦立せました。頑丈なやうなかぼそいやうなちつとも落ちついてゐない長い體がまた私の氣になりました。體を變にひねつて物を云ふ癖が非常に目立ちました。語尾を消すのもそれから何か云ひかけて途中で切つてしまつたりするのも一つ〳〵私は氣にしないではゐられませんでした。初めての時に、私はこの人を非常に神經の鋭い同時にまた思ひ切つて鈍な半面があるのを見のがせませんでした。頭の透明な處があるかと思ひますとまた何か少しも解らないやうな處があるやうな氣がしました。幾度も〳〵會ふ内にそう云ふ點がだん〳〵に私にはつきり會得が出來て來ました。併し非常に人のいゝ處もだん〳〵出て來ました。けれどまた其處が私にはなをのこといやになりました。何時も人の顏色を見て話すと云ふことは私の大變きらいな事の一つであります。孤月氏に、よくそんな態度が見え

ること、それから執拗らしい處もいやでした。私は自分の性質として、すべてに淡泊な黒白のハッキリした云ひたい事でもずば〳〵云へる人が好きです。孤月氏は私の最も厭やな部類に屬する人でした。この人のすることは一つ〳〵私の氣に障らないことはありませんでした。孤月氏はまたそれをよく知つてゐられました、で其後用があつても何時でも大抵格子の外から用をたしてゆきました。けれどそれがまた私の氣に入りませんでした。これは要するにどう云ふことをしても私の氣には入らないことになるのでした。けれど私はそんなに孤月氏を厭つてはゐましたけれども何時でも後になると向ふの人の眞實をふみつけにしたやうな不快な自分の態度を責めました。私はたゞ孤月その人から受ける直接の印象が徹頭徹尾いやなのでその人から離れてゐれば別に何でもないのでした。ですから私の眼の前に孤月氏が姿を現はさなければ、私は何時でもその人にさう不快なものを持たなくても濟むのでした。あの無氣味に光る氣狂ひを連想させる眼と、色の黒い瘦せた顔と、細長い體單にそれ丈けでも充分私の神經をおびやかすに足るものです。その上にその動作が一つ一つ私とは全で反對でした。好きな人と厭ひな人をハッキリと區別をたてることの出來る程好惡のはげしい私には孤月と云ふ人は實に耐らない人でした。併しこの頃では馴れが少しは私の神經を和げました。それと、以前はこの人の云ふことに依つて何時でもこの一番私の嫌やな人とつながつて他人の口に上つたり聯想されるとはなほ一層堪えがたい腹立たしさでありました。それが猶更私の神經を一層焦立たせました。けれどもこの頃は漸くいろ〳〵私のいやがるやうな處が少しづゝ失くなつて來たやうに思ひます。あんな氣味の惡い眼付をすることがなくなり、それから、體をゆするくせも、また、妙にはにかんだやうに固くなつたりせずに、ゆつくりおちついて話が出來るやうになつた丈けでも私の張り切つた神經をゆるますことが出來たのです。併し孤月氏の足は非常に遠くなりました。そしてその方がずつと、不快なものがこだはらずにいゝのです。

甲州の女の方との交渉がどうなつた事ですか、私は終りに孤月氏がはやくその方の承諾を得て幸福な、健全な家庭生活をなさることを祈ります。それが、今一番彼の方を幸福にする事であるやうな氣がします。

紙の話

印刷局技師　中村恒

歐洲戰爭の勃發以來、染料、藥品、鐵類の缺乏に次いで本年に入り、紙價暴騰の聲を聽き、今にも紙の饑饉來ると叫ぶ。一方には、一時世間を騒がした石川縣投票用紙の問題で、今まで名も知られなかつたパルプとか、西ノ内とか泉貨とか云ふ名稱が、人口に膾炙する樣になつたのは注目すべき現象である。多くの人は紙と云ふ言葉に餘り馴れ過ぎて、紙の意義用途等を明かにしない。之は紙其物が流行を追はず、世間に認められない日常品で食物などと共に等閑に附せられて居た爲めであらう。今素人に紙と云へば日本人なら薄い白い柔かな、字が書け、印刷も出來、鼻紙にも、紙撚りにもなる、萬能的な普通の半紙、美濃紙類を念頭に浮べる。併し此印象は甚だ狹義なもので、今日知られて居る紙の種類は多種多樣にして、新聞用紙、雜誌書籍用紙の如き、ノートブックの紙、簿記用の紙、或は紙幣公債などの有價紙から、厚き板紙、羅紗紙の樣なものに至るまで、其用途と性質とは、昔の日本紙とは大に其趣きを異にする樣になつた。從て今日では人情薄きこと紙の如しなどの言葉は其意味が薄弱になつたかの感がある。然らば吾々が紙の定義を如何に下して

然るべきかと云ふに、先づ次の様に考へれば大過なからうと思ふ。

紙とは植物纖維を主成物として離解したる小纖維を水中で糜狀となし不規則に搦み合せた後壓搾し乾燥して水分を除いたものである。

現に近頃では車輛、板床敷、水管、瓦斯管などにも紙を應用したものが、あつて見れば、吾々が從來印象に留めた、障子紙や、半紙などのみを紙といふ事の狹義であることを知るであらう。

紙の起源

サテ紙の起源に就て探ぬるに、其發明者は筆墨と共に支那人に歸する。即ち後漢和帝の頃（西暦前百二十三年）蔡倫が麻楮の如き靭皮纖維を用ゐて、製紙を行ふたことが記されてある。勿論其以前から書料に用ひられて居るものはないではない。太古では木を植ゑ、石を建て、粘土板などに象形文字を記した事蹟は、考古學者の稱道する所で、東洋でも結繩疊石のことは、口碑に傳へられ、又竹帛を用ふることも皆この紙が出來る以前のことであつた。

西洋で紙と云ふ言葉は彼の神聖なるナイル河畔の沼地に、數千年以前から繁茂して居る沼草の一種パピラス Cyperus papyrus の幹を重ね合せて、壓し潰し乾したパピラス πάπυρος から起つたもので、此パピラスは埃及時代唯一の書料で近く十世紀頃まで行はれて居た。

一方小亞細亞及波斯地方ではコーラン經典等に山羊や羊の皮を使用して居る。之れは西曆前三百年頃からパーガモン王國に起つたので、其名を採りパーチメントと云ふが此書料はパピラスに次いで歐洲に傳はり、八—九世紀の頃其製造最も盛んで支那の製紙術が傳播する十五世紀頃まで歐洲に於ける須要な書料であつた。

支那の製紙術は其後一は西漸してアラビヤ人波斯人の手を經て歐洲に傳播され、一は東方朝鮮を經て我國に傳はつたのである。

我國に製紙術の傳へられたのは、推古天皇の御宇、即ち一千三百餘年前、聖德太子が楮皮を原料とすることを創められ、爾來時に盛衰があつたにしろ、平安朝文化の普及は、斯術を諸國に擴め、更に德川幕府の封建制によりて、各藩に紙の自給策を講ずることとなりたる爲め、其遺法は今日各府縣に行亘つて居る次第である。シカモ其遺法たる、一千年來何等の改良進歩を見ることなく、舊法を墨守踏襲し來つたものであるから、之れを一方西方に傳はり世界を一週して來た歐米式の製紙術と再び相逢ふた今日、工業としての地位は、雲泥の差違で、一は大工場組織となり、一は百姓家の片隅に暗く閉ぢ込んで居る狀態である。

製紙術の西漸

支那の製紙術が歐洲に傳はつた始めから、今日の發達に至るまでの經路は五期に分つことが出來る。

一、東亞に於ける最初の製紙業から、泰西製紙術の發達まで、
二、アラビヤ人、ムーア人(八世紀頃)の傳播時代、
三、中古(十三世紀頃)の手漉時代、
四、襤褸を使用する機械漉の時代(十九世紀)、
五、木材其他の植物繊維を使用する現代(千八百七十年以後)。

アラビヤ人は支那の製紙術を支那人の捕虜から習得したもので、專ら襤褸を原料として、紙の製造をなし、新術を深く秘して居たが、十字軍が起り始めて、西班牙人に傳はり、西暦千三百年から千五百年の間に歐洲各地に傳播し製紙業を起し、襤褸を原料として手漉紙を盛んに製造する樣になつた。

併し此時代から印刷術も興隆して、千四百五十二年頃には、彼のグーテンベルクの印刷術の發明があり、智識界を啓發し、紙の需要が益々繁くなつたけれども、當時は未だ手工藝であつて、僅かの紙を得るにも、頻雜な手數をかけて居たものであるが、やがて原料を離解する、今日のホーレンダーの機械を和蘭人が發明して以來、水車、風車、を利用して運轉する樣になり著しく其生産額を增した。

機械で紙を漉くことは、十八世紀の終りに佛蘭西人ルイ・ローベル Louis Robert が巴里の郊外にて發明し、爰に漸く手工藝と放れたのであるが、其後千八百〇四年に英吉利でブライヤン・ドンキンが始めて此發明による機械を製作し、次で佛蘭西(千八百十五年)獨逸(千八百十九年)墺太利(千八百二十七年)等にも行はれ今日に至つた。其間に發明者の機械に色々に改作せられたけれど、大體の構造に就ては依然として、ルイ・ローベルの考案と違つた所はない。

斯の如くホーレンダーが出來、抄紙機が發明せられ、一方印刷術も長足の進歩をして來るに從ひ、今まで唯一の原料として居た襤褸は忽ち不足を來して、紙價は騰貴し、一般の智識慾は益々熾んになつた。其當時何人も支那の製紙術が植物繊維から得られることを知らず、又千七百六ー七十年頃クリスチアン、シエツフエル僧正が、植物繊維から紙を造つた事實も忘れて居たが、千八百四十四年に織物機械の發明家ゴツトフリード・ケルレルが、蜂の巢から考案して、木材を潰り碎して今日の所謂砕木パルプを作り、漸く紙の饑饉の難問を解決することが出來た。之れに次いで千八百五十四年には藁紙料を製造し、千八百五十八年から六十三年頃には木材を蒸煮して所謂化學的パルプの製造が發明された。當時から盛んになつたアルカリ工業は製紙界に苛性曹達や、晒粉を供給して、今日の盛況を見るやうになつたものである。

製紙原料としての木材

紙の主原料は植物繊維である。故に植物であれば如何なるものでも紙の原料となるべきである。併し爰に注意すべきは、永久の材料があつて、多量に存在し、相當な繊維を有して、其原料が安價に得られ、且つ其製造費が經濟的であらねばならぬ。斯く條件を附ける

と、紙の原料たるべきものは、甚だ制限せられる。從て十八世紀まで唯一の原料であつた襤褸が缺乏する様になつてから、紙の新原料の發見には色々苦心した跡があり、其結果提供された新原料は無數で、今日でも年々其報告を齎らすけれども、實際工業的に行はるるものは甚だ稀である。今日襤褸以外多く用ゐらるゝ、主なる製紙原料は次の數種に過ぎない。

木材、
藁稈類、
反古紙及截落し、
エスパルト其他、

此内でも木材は製紙原料全體の八割を占めて居るので現今の紙の多くは木材で製せらるると見做される。併し木材の内でも、紙の原料となる種類は、技術上經濟上甚だ制限せられ、我國では樅、栂、トドマツ、エゾマツの類に限られ、外國でも唐檜、白楊樹、松樹等に過ぎない。

斯の如く木材は現今唯一の製紙原料とも稱すべきであるから、從て富林國は常に製紙工業に於ける優勝の地位を占めて居る。今各國の製紙に供する木材の消費高を概算するに左の通りである。

木材の消費高

國名	碎木パルプ（噸）	化學的パルプ（噸）	合計（噸）	豫定森林地積（萬エーカー）
獨逸	三一五、〇〇〇	三二〇、〇〇〇	六三五、〇〇〇	三、五〇〇
諾威	四二一、〇〇〇	二七〇、〇〇〇	六九一、〇〇〇	一、七〇〇
瑞典	七八、〇〇〇	五一〇、〇〇〇	五八八、〇〇〇	四、九〇〇
芬蘭土	六九、〇〇〇	五二、〇〇〇	一二一、〇〇〇	五〇、〇〇〇
北米合衆國	八六八、〇〇〇	九八八、〇〇〇	一、八五六、〇〇〇	四〇、〇〇〇
加奈陀	五六五、〇〇〇	一七二、〇〇〇	七三六、〇〇〇	八〇、〇〇〇

此表で見る如く、現今の大製紙國は米國であるが、同國は既に年々製造する紙の四分一は加奈陀から木材を輸入するの狀態で、森林地積に富める加奈陀と雖も、經濟的に使用し得る木材は、或る時期には缺乏するであらう、此問題に就ては前大統領タフト氏なども屢々論じた所である。

貯藏森林と共に、製紙工場に缺くべからざるは、豐富なる水量を貯ふべきことで、國或は地方に於ける製紙工業の盛衰は、木材及び水利に豐富なるか否やに歸すると云ふも過言でない。此點に就てはスカンヂナビヤ諸國及び芬蘭土は製紙工業の寵兒と云ふべく、瑞典諾威は現今の世界的パルプ市場の重鎭となり、芬蘭土は將來木材パルプの世界的供給地となるであらう。

我國の木材は內地國有林三千四百萬尺締、御料林七

百萬尺締、北海道五億一千萬尺締、及び樺太の十七億萬尺締、總計二十三億五千萬尺締に及び、此內經濟的に輪伐法に據り、使用し得る製紙用材は、毎年千五百萬尺締なりとし、之れから得るパルプの量は、無慮五十萬噸の多きに達し、之れを大正四年に使用した木材百十四萬尺締から得た一億七千萬封度、及び舶來パルプ七千三百萬封度の合計よりもなほ約八倍の紙が得らるることとなる。

現今製紙場に優勝の地位を占めて居る北海道は五億一千萬尺締の內、百六十年輪伐として、年々三百二十萬尺締が得らるるも、實際經濟的には約百萬尺締位と見らるべし、然るに目下道廳が拂下ぐる高は百五十萬尺締位であるから、紙の需要が年々一割五分宛の割合で增加するものとすれば、此蓄積額は今後三十年間で盡くることとなる。併し我が新領土樺太には無慮十七億萬尺締の處女林を有して居るから、同地は今後歐洲に於ける、スカンヂナビヤ半島或は、露領芬蘭土の地位を占むることであらう。

其他の製紙原料

製紙工業の發達は、各國共獨り天然の恩惠にのみ依るべきでなく、斯業に精勵の結果は、他の工業と同じく、發展すべきである。其實例は英吉利に學ぶことが出來る。英國の森林地積は全面積の四プロセントに過ぎざるも、原料をスカンヂナビヤに取り、或は地中海沿岸地方に産出するエスパルトと稱する草を集めて、優等の紙を産出し、歐洲にては獨逸に次ぐ大製紙國である。獨逸が英國の上に位するは、森林の天惠に據ると認めらる。

斯の如く製紙原料は獨り木材にのみ頼るべきでなく、年々歳々に得らるる、稿秆の如きも大に研究すべきものであらう。我國稻藁の産額は之れを米の收穫高から換算すると、一年平均三十億萬貫目の藁が獲れることとなる。然るに今日我國で、稻藁を紙の原料に使用する高は、板紙用千二百萬貫目と白紙用一千萬貫目、合計二千二百萬貫目で、實に全量の〇、七四プロセントに外當らない。今例へば越後國長岡に在る北越製紙會社は信濃川流域を利用し、一億萬貫目の藁が便利に得らるるに係らず、其製造する板紙は一日十五噸であるから、藁を利用する所は僅かに二・五プロセントに過ぎぬ。若し此藁を更にパルプに製造すれば、木材パルプは大に補助し得らるるのであるが、今日まで藁パルプは我製紙界に古くから用ゐらるるにも係はらず、一向に進歩しない。之れは一は木材パルプが安價に輸入せられて、便利なると、一は藁に使用する苛性曹達が、高價なるが爲めであるが、此苛性曹達の高價なる點は、今日使用曹達の廢液から曹達を回收して製産費を減ずることを得るも、此方法は未だ我國で印刷局抄紙部の外、他の工場にて行はない、彼の生産調査會では一昨年來、此問題に就て討議されたと聽く故、今後有望な製紙補助原料の一となるであらう。

我國に昔から和紙の原料として使用する、楮、三椏

馬皮の繊維は、製紙原料の統計に擧げらるべき數量ではないが、特殊なる紙を得る點から、世界に有名な製紙原料である。

以上擧ぐる諸原料の外、爰に見逃すべからざる一補助原料は、反古紙、截落し等の紙屑である。此等は製紙家が常に切望する所で、襤褸と共に絶えず得らるるものであるが、其採集は襤褸より一層困難で、家庭の多くは之れを放棄して顧みず、僅かに下婢の小遣錢となるに過ぎない。併し此等は優に自家使用の紙の一部を補ひ得るものであるから紙價暴騰の今日、主婦の一顧を價することと思ふ。此外製本所、印刷所等から出づる截落し、官衙旅館等の反古紙等は一時に採集し得る便利な原料である。

パルプの製造

紙の原料たる植物は木材、藁、反古紙、又は襤褸でも、皆一度パルプにした後、パルプから紙を製するのである。故にパルプとは紙の半製原料品と見做さるるものであつて之れを紙料と稱へて居る。

襤褸を原料とする製紙工場では、自ら襤褸パルプを製造するが、木材、藁のパルプは漸次獨立した工場で製造せらるる傾向で、現に獨逸にては襤褸のパルプ専門工場までが經營されて居る。我國の製紙工場では襤褸は勿論、藁、木材に至るまで自らパルプを製造し、紙を抄造して居たものであるが、近頃は樺太に於けるが如く原料地にパルプ専門の工場が設立せらるると共に、一方需要の盛んなる都會附近に、製紙専門の工場を見るやうになつた。パルプ即ち紙料を製造する方法は、原料が襤褸であるか、藁であるか、或は木材なるかによりて、異なれるは勿論であるが、同じ木材でも紙の種類によつて、製法を異にする。例へば襤褸は石灰で蒸煮し、染料や油類などを除くを目的とするが、木材や藁の場合には其骨格を成せる、纖維を得るが目的であるから、其取扱法も全く違つて居る。

木材パルプは木材を機械的に分つた碎木パルプと化學藥品を用ゐて纖維を取る化學的パルプとに分つ。

碎木パルプは水面上に迅速に回轉する研石（グラインドストーン）の面に、剝皮した木材片を壓し付けて機械的に碎くもので、其水量の多い時は冷碎パルプとなり、水量を一定に保てば、木片は石面と摩擦の爲めに熱せられて、粗糙な熱碎パルプを得らる。此等は何れも碎木機（グラインダー）と云ふ機械で作業するの

で、其一臺を運轉するに二百乃至三百馬力の動力が要せらるるから、此事業は原料材と共に安價な動力の必要なる所以である。斯く水と共に碎木機から流れ出たパルプは、木片、裂片などを除き、水を絞つた儘市場に出す。之れが碎木(グラウンド)パルプである。故に其の性質は原料たる木材と何等の變化が無いのであるが、新聞紙等には、パルプの粗大で抄紙機で早く水と分れる樣な、熱碎パルプを作り、書籍用紙等には、之れに反して冷碎パルプを用ゐ、紙面をよくするに努むるものである。

化學的パルプは木材の中にある非纖維物を化學藥品で溶解し、纖維素ばかりを得るが目的であるから、獨り木材のみでなく藁等にも應用さるるものである、之れに亞硫酸法と、曹達法とあつて、前者は亞硫酸パルプを得、後者からは曹達パルプを作る。

（亞硫酸法）、一作業に木材二拾噸を容れ得る鋼鐵製の釜に、内側を耐酸煉瓦で裏張りし、之れに藥液を入れて八—九時間、八—九十封度の蒸汽壓で煮る。藥液は硫黃或は黃鐵礦を燃燒して、亞硫酸瓦斯を作り、之れを濕つた石灰に通じて得た亞硫酸石灰と遊離亞硫酸とを含んだ液である。適當に煮へた時釜から出して、纖維は水洗し、木節、不蒸解物等はスクリーンと云ふ篩で分たれ、除水機で水を絞り、紙の形にして乾燥し、製紙工場に送られる。

亞硫酸法の他の方法は緩かに煮ることもある。之れに長時間に渉り、高き蒸汽壓を用ゐて煮るから、前の急煮法の樣に粗糙なものでなく、上等な紙に用ゐらるる強靱な纖維が得られ、又急煮法では漂白が六ケ敷が、緩煮法によれる纖維は漂白し易ひものとなる。

（曹達法）、此法は苛性曹達を使用して、木材又は藁を蒸煮しパルプを得るので、褐色パルプは不晒のまま紙となし、或は漂白して白き上等印刷紙を抄造するに用ふるのである。曹達で蒸煮した廢黑汁と、其洗滌水とは、普通多効式眞空蒸發罐で蒸發し、曹達を回收して再び使用す。此法の有利なるは亞硫酸法の如く特殊の木材に限らず、各種の原料に應用し得らるることで、其纖維で作つた紙は印刷に適する。曹達法の別法と云ふべきは、硫酸曹達と苛性曹達との混合物で、蒸煮する硫酸曹達法と云ふのがある。此法はパルプが甚だ安價に作らるるも、其欠點は蒸煮排瓦斯が工場の附近に、甚だ厭ふべき惡臭を及ぼし、住民に忌まるる恐れがある。

パルプ工場が水力の便利な所では、電氣漂白を行ふて多大の利益を得て居る。之れは安價な食鹽の溶液に安き電流を通じて電氣分解をなし、一方に苛性曹達を得、他方に鹽素を發生せしめ、苛性曹達は曹達パルプに利用し、鹽素は通常の晒液として漂白に用ひられる。此方法によつて相當に安價のパルプを製造する所がある。

新聞用紙

今日の新聞用紙は殆んど木材パルプであつて碎木パルプと亞硫酸パルプと混用したものである。兩者の割合は紙の價格によつて差違があるも、普通安き新聞用紙は碎木パルプが七割、亞硫酸パルプが三割である。

今千噸の新聞用紙を製造するに要する材料を概算するに

碎木パルプ(含水量五〇プロセント)	千五百噸
亞硫酸パルプ(急煮法)乾量	二百五十噸
石炭(紙一噸に付千二百六十斤)	七百五十噸
白土(十乃至十二プロセント添加)	百二十噸
松脂、明礬及化學藥品	二十噸
用水(紙の四百倍)	二十萬石

されば石炭の河岸揚げ、在庫パルプの輸送等は、最も此種製紙工場の設計に苦心する所である。

工場に到着せる此等のパルプは再び水に解きて纖維狀となす爲め、ホーレンダー機中に投じ離解さる。ホーレンダー機は普通ビーターと稱し、速かに回轉する列齒のロールと承齒とを供へた槽で、其中に碎木パルプと、亞硫酸パルプとを入れて、三―四十分間叩解す、襤褸の場合には此叩解に八―九時間を要するので、爰所にも大なる動力の必要が起る。

白土を加へるのは纖維の間を塡充する爲めで、且つ重量を與へる一助ともなる。此外パルプの黃味を調和する爲め青色の染料を加へる。目下米國で黃色の新聞紙を發行することは、此染料に缺乏したからである。

松脂は紙にインキの滲透を防ぐ爲め、松脂サイズと稱し松脂と曹達とで作れる松脂石鹼を入れ、之れに更に明礬を加へて松脂を纖維の上に沈澱附着せしむ。斯の如きパルプや藥品の配合をしたものは、始めて抄紙機にて一卷數里の長さもある無限の捲取新聞用紙に漉き上げられるのである。

現今の抄紙機は、之れを百年以前ルイローベルが發明した、當時のものと比較すれば、其機構の精巧なること驚くばかりで、最新式の抄紙機は、一時間に三里の速さで幅十五尺の紙が流れ出るものであるから、恰も數千丈の瀑布が落つるが如き壯觀を呈する。しかも其製造力は一時間一噸、一年八千五百噸の多額に上り之れを擴くれば一日三十六萬坪、一ケ年晝夜連續の作業とすれば、斯の如き一臺の抄紙機は無慮一億三千萬坪の廣さで、東京市の五倍の面積を蔽ふて尙ほ餘りある能力を有して居る。

抄紙機の漸次大型となることは、軍艦が弩級、超弩級と製作せらるるが如く、漉き幅を增し、抄造速度を早めて、生産額を增すことに努力して居る。我國で新聞紙用抄紙機の最大なるは、王子製紙株式會社の北海道苫小牧工場にある、漉幅百四十二吋、抄出速度四百五十尺の機械三臺で晝夜連續作業して居ることは意を

要ふするに足ることとである。

今斯の如き大抄紙機運轉作業の大略を說かんに、配合せられたパルプは、適宜の水で稀釋せられ、塵、木片、等は回轉する篩(スクリーン)の中を通る間に除きて、印刷する際紙の中にある塊り等の爲め起る危害を豫防し次に無端の金網の上に流れ、金網と共に進む間に、漸次水を搾り取られ同時に金網の上にて適當な纖維の配列をなし、濕れたまゝの紙葉は連續して毛布(フエルト)の上で壓搾脫水せらる。此の作業に用ふる金網は眞鍮に適宜の混和物を加へて硬く且つ撓め易きものとし、摩擦に耐え、强靱なるものたるべく、從て其價格も、壓搾に供する毛布(フエルト)と同様、甚だ不廉なものである。

斯くして絞つたる濕紙疋は、大なる三拾箇乃至三拾六個の乾燥圓筒に卷き乾かされて、カレンダーロールの間にて光澤を附せられ、仕上がれる紙は抄紙機の末端にある捲取機に卷き取り、包裝して新聞印刷所に送られる。

新聞社の企業

近年新聞用紙の傾向は、用紙の供給を安全にせんが爲め、新聞社自ら製紙工場を經營して新聞用紙自給の策を計るものが尠くない。獨逸は勿論のこと、英國に於ても二―三の大新聞社はスカンヂナビヤ半島から木材を輸入し、或は遠く芬蘭土に製紙工場を設立して、自家の用紙を製造するのみならず、傍ら未開地の開拓を兼ね、大森林地帶を所有し、市價の變動に關せず、安全なる營業を持續し、相當の配當を得る方針を立てゝ居る。されば我國現今の如き、海外輸出販路擴張の好機に際し、徒らに自家目前の利害に鑑み、紙價抑制策を提出するが如きは我が製紙業の發達を阻害するも甚だしきもので、國家百年の長計を誤るものとして遺憾とする所である。

既に說きたる如く、我國勢は決して製紙原料に欠乏せるにあらずして、森林國たる天惠を享け、一大製紙國たるべき素因を備へて居るものであるから、此點は英國と大に其趣を異にし、寧ろ此際斯業の發達に激勵する所があつて貰ひたい。國家の選良も亦深く考慮を此方面に傾注せんことをも、併せて玆に希望して止まぬ次第である。

近世の印刷用紙

抄紙機の產出額は單に其量を示すに留まるもので、紙の品質に至つては何等の意味がない。新聞紙の如き下等の紙は、碎木パルプ七割以上も加へられたもの

故、木材と其性質何等の區別がなく、日光に照せば黄變し、年月を經て脆弱となり、四十人の回覽に供することは出來ない。從て永久の記錄又は圖書館等には全く其用をなさぬと云ふべきである。目下の大勢を觀るに英獨兩國は此等の紙質の昂上に勉めて居る。

今我國の大正四年に抄造した紙の大勢を見るに、其約半數は新聞用紙で、實に全量の四十六プロセントに及び、之れに次で普通の印刷用紙十五プロセント、然るに上等印刷紙は十三プロセントに過ぎず、之れを獨逸の上等印刷紙二十三プロセント英國の二十二プロセントに比すれば、甚だ劣つて居ると云はねばならぬ。

上等印刷用紙は印刷術の發達に從て改良せらるべきもので、爰に極端な例は一は小說本等に見る樣な、輕き、疎な、嵩さある紙と、他は雜誌の口繪等に見るアート紙の類である。此兩者は同一の原料であつても、全く異なつた取扱を受くるが爲めに起る差違で、技術上の巧拙が如何に上等印刷紙に關係するかゞ窺はれるであらう。

手漉紙

更に我國で古來より踏襲し來れる手漉紙の槪要を說くことは無益でないと思ふ。三椏皮、楮皮などは其皮を取り傷痕汚物などを小刀で除き、木灰、苛性曹達又は生石灰を加へ釜の中で煮て、打盤の上で打棒で叩き晒粉などで漂白して白く仕上げる。此仕上げた纖維は水と適宜に混じ漉船の中に入れ、ネリ又はノリと稱する植物性粘液を混ぜて、カキ交せ、細き竹簾様の漉簀に汲み取つて纖維を配列せしめ紙とするのである。此濕つた紙は壓搾して一枚一枚張り板に貼りつけ、日光で乾燥するものであるから、如何に巧者なものでも一日四百枚位を得ることは容易でない。併し近頃は小形の抄紙機を用ゐて生產力を增したものがある。

元來日本紙は洋紙の如く印刷用、筆記用、包裝用等、用途により區別した製造法があるではなく、唯寸法の大小、外觀の差違から名稱を異にするものが多い。從て先般問題となつた投票用紙の如き不完全な規定となつて、間違を起す素因を作つたのである、今日では產地や原料の如きは全く混同されてしまつた。

併し和紙が洋紙と異なる特色は一、强靱なこと、二、揉折に耐ふること、三、吸收性なること、四、縱橫の差大なること、五、紙質の柔軟なこと等で之れが爲め和紙は萬能の役を勤め、障子紙となり、筆記用となり、紙撚りとなる等は皆此等の特性を應用されたに過ぎない。此特長と共に缺點を云へば、日常の消耗品として其價が餘りに不廉なことで、西洋紙は紙幣證券用紙、化學分拆用濾紙等が一封度一圓以上、凹版印刷用紙、煙草卷紙等優等紙が四－五十錢位で日常の筆記用紙は三十錢位、普通上等紙と稱する部類のものでも其價格は十錢內外で新聞用紙の如きは五－六錢代であるにも係は

らず、日本紙は普通品が三—四十錢で平均三十三—四錢に相當するから、佐伯博士の說の如く、日本人の日常消費する半紙、美濃紙の如き五分三の地位を占むる所のものを十一—二錢の品（機械漉の紙）に代へて使ふ時は、全國に一千萬圓の節約を與へる計算となると說かれたが、如何に和紙が不廉で同時に又警戒の餘地があるかゞ知られる。

紙檢定の必要

碎木パルプを含んだ紙が永久保存に適せないことは、其發明の當時から知られて居て、紙が漸々惡しくなることを防ぐ爲めに、西曆千八百八十七年に獨逸ではマルテンス博士が硏究の結果、紙を次の四種に分けた。

甲、礦物質二プロセント以下混入の襤褸製の紙
乙、襤褸と化學的パルプの混合せる紙、礦物質五プロセント以下
丙、同上、礦物質五乃至十五プロセント入
丁、下等紙特に碎木パルプを含める紙

現今では各國官衙共一定の標準を規定して、用紙を檢定し使用するのであるから、需要者ばかりの便利でなく製紙家も、紙商も共に安心して取引が出來、用途に適する紙を供給することが得られる便利がある。

紙の試驗は技術上多少の熟練は要するけれども之れが爲め相互に利益する所は僅少でない。其主な事項は一連の重さ、厚さ、紙の强度、伸張度、耐揉度から或種の紙は其透明度をも見られる。顯微鏡の檢査では其纖維原料の何たるを知り、灰分を見て紙質の良否を檢し、其他サイズの强弱酸アルカリの有無等は化學的試驗に據つて知らるる。此等は甚だ煩雜なる如きも簡單なる機具で試驗せられ正確な成績が得らるるものである無からな濵莶來費を省くことが出る。

紙の消費量

國の文明は石鹼と紙との消費量で知られると謂ふが、今我國の文明を紙の消費高に據りて測定し、之れを歐米諸國のソレと比較するに、大正四年の統計に據れば、日本人一箇年に消費する紙の高は十封度であつて、之れを十年前の四封度に比較すれば、其進步の度は實に偉大なものであるが、之れを米國の八十封度、英國の七十五封度、獨逸の五十四封度等に比較すれば我國の文明も未だ及ばざる點が多い。併し此統計は洋紙のみに基きて計算したものであるが、我國には固有の和紙があつて、其用途は廣く、從て其數量も莫大なるかに思へるも、明かな統計が得難いが、恐らく六千萬封度に過ぎざるべく、即ち洋紙の五分の一の數量である。シカモ其價格に至つては二千萬圓の巨額に達し洋紙の金額と大差なき有樣である。之れに由るも吾々が日常如何に不廉な和紙を消費して居るかゞ知らるゝであらう。

刻下の紙價問題

歐洲大戰亂は我が製紙界にも變調を來し、今や內地各印刷出版業者は、紙及びパルプ輸入の杜絕、內地製紙高の不足より、紙價の暴騰を來し、甚だしく苦境に陷

り、之れを自然に放任すれば遠からずして紙の饑饉の慘狀を實現すべしと慮り、紙價調節を叫ぶに至った。寔に紙は智識の泉源、文明の媒介者として、其需要の範圍廣大緊切な日用品たるは論を俟たぬ所で、其需給關係は國家的に解決すべき重大問題である。併し現今紙缺乏の聲は、果して幾何の數量に對するものなるやを諸統計に照して考究するに、紙類の殆ど半數を占むる新聞用紙は內地の需要を充して餘りあり。唯上等印刷用紙及び其他の特種の紙に於て約壹割二・三分の不足を呈して居る。之れに年々紙の需要增加の平均割合一割五分を加ふるとするも、猶ほ饑饉を叫ぶまでには至らない。現に大正三年上半期に於ける紙界の不振は增設並に新設會社の生產過剩と相俟て各製紙會社の自衞策として、生產制限の決行を決議せんとせし程の狀況にありたるとなれば、今回時局の影響により幾分の缺乏は遁れずとするも、饑饉を叫ぶまでには至らない。

然らば本年に入り紙價暴騰の原因は如何と見るに、大體次の五項に歸することを得、

一、パルプの騰貴
二、藥品染料等の騰貴
三、抄紙用具金網、毛布等の拂底
四、輸入紙の減少、輸出紙の增加、
五、奸商の思惑的買占め又は賣止、

パルプの騰貴は、主として船腹の不足に歸すべく、供給不定なるが爲めと、主要輸出國たる瑞典がパルプ輸出禁止の打擊に基くものである。併し幸に樺太に於ける三井家のパルプ工場及び樺太工業會社の成功に繼で日本化學紙料會社の設立あり、前二者は既に製品を市場に出し、後者も完成の曉は年々三萬二千噸の化學的パルプを供給し得べく、此等の會社は更に生產額の倍加を計畫中なれば、近く輸入パルプを驅逐し、爰に全く製紙業の獨立自營の途が實現されることゝなる。斯の如きは實に戰亂の賜物と云ふべきである。

藥品染料等の騰貴及び抄紙用金網毛布等の拂底は全く前途の暗澹たるもので、內地製作品は甚だ拙劣なるが爲め製紙家の均しく憂ふる所である。

輸入紙の減少、輸出紙の增加に就ては既に說きたる所なるが、今回紙價暴騰の主原因は、奸商の相場を法外に奔騰せしめたに基くものである。から先づ之れを調制すべきである。

之れを要するに時局の影響は、製紙界に、一般他の工業と同樣、產業の發達を促進し紙の需要に對し多々益々辯ずるのみと云ふてよい。（完）

來るべき後繼內閣の組織者

▽寺內後藤を中心とせる睨みの利く內閣

仲小路廉

後繼內閣の組織に就いて意見を述べよとのことであるが、我輩から言へば斯う言ひたい。君は（記者を指して云ふ）常に氣の早い先生だが、あんまり早過ぎるぢやないか。今直ぐに後繼內閣云々と言ふのは機敏を通り越して、少し早計に失して居るといふべきものだらうと思ふ。大隈さんも遣る丈け遣つて見たらよいぢやないか。又遣らせる丈けは遣らして見るもよからう。不可い事があれば公然攻擊するもよいんだ。之は或意味から言へば鞭撻とも云ふべきものであつて、總ての事柄を白晝堂々、公然の所置を取るのが所謂憲法の第一義であると思ふ。此意味よりして又我輩は後繼內閣の事を論ずるのも、世間の小膽者はそりや又後の事と言つてビク〳〵する者があるかも知れないが、それも間違つて居る。如何なる內閣と雖も百年も二百年も續くものではない。今よりして後のことを考へて置くのに何の不思議がある。實は多少國家に志ある者は、乃公出でずんば蒼生を奈何せんとする位の意氣あつて然るべきではないか。我輩は餘りに事柄を紆餘曲折、齒に衣着せて物を云ふやうなことは甚だ面白くないと思ふので

ある。寧しろ眞率に、卒直に、自分の信ずるところを世上に公言して其批評を受けるのも亦男子快心のことではないかと思ふ。

今や世界の大亂に遭遇して世は戰國の時である。之を大平無事に、何事に就いても平和々々と唱へて、醉生夢死に其日を送る時ならば格別、此世界の大亂に遭遇し、且つ隣邦支那の事と言ひ、其外東洋方面殊に新太平洋方面に於て、此多事の時に際しては、自ら此時代に適當する人を得なければならないのである。殊に今日の急務は、世人もよく口にする所の所謂滿蒙の開發經營の實も擧げて行かなければならぬし、又東洋方面に於て殖産興業あらゆる事物の開發をも試みなければならない時である。此時代に際してはよろしく此時勢に適すべき人物でなくてはならんのである。それを只あの顔付（つらつき）がどうしたとか、あの頭の恰好がどうだとか、そんなことで假りにも一國の宰相たるべき人々を品隲せんと考へて居るといふのは間違の甚だしきことゝ思ふ。我輩は極めて卒直に物を云ふのである。今日の時代に於ては寺内、後藤は缺くべからざる人物であると。何が故に斯く云ふ。我輩は敢て自分の好むところに偏する譯ではない。心から深く信ずるからである。何となれば先にも云ふ如く今日の此の激烈なる時代に於ては、何處までも睨みの利ける人物でなくてはならないのである。又一面には他國人に對する經驗と計畫を有する者でなくてはならぬと思ふのである。寺内が單に一介の武辨であつたといふ時であるならば、我輩は敢て斯くは言はない。さりながら彼が已に陸軍大臣の當時に於ても、政治上幾多の經歷を經て來て居るのみならず、大命を奉じて朝鮮統治の事に當つてよりも、已に五年有餘の星霜を經て居るのである。固より其間に於ての事績は悉く完全なりとは言はない。さりながら併合以來、隨分内外困難の時に當つて兎も角も一糸紊れず統治の實を擧げ、此五ケ年間に於て殖産工業の上に於ても少からぬ治績をも擧げて居るのであり、殊に彼は我日本人以外朝鮮人支那人等に對しても一通りは之を統治する經驗を得て來て居るのである。殊に滿洲蒙古等の關係についても一方ならざる調査研究をも盡くして居るのである。一面に於て相當の威嚴をも全うして居るに拘らず、曾て外國人について變な感情をも惹起して居らないのである。又其人物の上に於ても近來は餘程の圓熟を加へ來り、其包容するところも決して前日の三角頭ではない。之をして其所を得て十分に其技倆を振はしむることが出來たならば、確に今日の場合に於ては内外の聲望を博すること、決して六ケしくはないと思ふ。又後藤の如き固より我輩は之を指して完全な人物とは言はない。缺點もあらうし、短所もある。さりながら之も亦曾ては臺灣の民政長官となり、或は南滿洲鐵道の總裁ともなり、今日の我國の必要なる所謂支那人の統治についても少からぬ經驗を經て居るし、又著しき治績をも擧げて來て居るのである。之れ亦同様將來支那の開發經營についても自ら一種の成竹をも有して居るのである。さすれば今日の場合に於て多少對外的の經綸をも施し、我帝國をして將來發達し得る素地を作らんとするについては到底も尋常一様の人物を以て目立ちたる成績を擧げ得らるゝものではない。多少は批難もあるにもせよ、少くとも此等の人物を用る

て其技量を發揮しむる丈けのことはなくてはならないと思ふ。其外今日の場合に於ては決して黨派の異同を問ふべきものではない。何れのところよりしても有爲にして有能の人物ならば、何の遠慮を要することはない。國民黨であらうが、政友會であらうが、將た又同志會であらうが、更に進んで貴族院議員であらうが、民間の實業家であらうが、此者は一仕事の出來やうと思ふ人物ならば、よろしく之を網羅して各々其技量を發揮しめて然るべきものであらうと思ふ。最早や今日は下らぬ情實に囚はれて居る時代ではない。無能者を用ゐてそれで都合がよいなどゝ言つて居るといふ平穩無事の時ではない。飽くまでも積極的に有爲な人物を舉げて其技量を振はしめ、剛健にして生氣溌溂たる有爲の內閣を造る外には道のないことを思ふ。我輩は時の遲速は知らないが、必ず斯かる時機の來べきものだと信じて疑はないのである。

▽後繼內閣の首相

鐵　拳　禪

一

後繼內閣の首相に、何人を擬うるの可なるかは各自の胸中に判明すと雖も、何人の据るべきかを豫測するは、宛然迷宮に入るの感なくんば非ず。

大隈內閣の幾度か倒れんとして倒れざるは、伯大隈が內閣を支持するの頑強且執拗なるに由ること論なきも、後繼內閣を組織すべき首相其人を得難きも亦其の一因ならざるを得ず。少しく眼界を濶うすれば、首相其人を得る必ずしも至難にあらずと雖も、元老には元老の氣儘あり、政黨には政黨の我儘あり、其の利害關係の錯綜し、感情の纏綿紛糾するもののあるが故に、其の人選容易ならざるのみ。一言以て之を蔽へば、元老は超然內閣を贊襄し、政黨は政黨內閣を主張する所に、枘鑿相容れざるものあるに由る。而も其の枘鑿相容れざるを糊合し、一時的糊塗狀態にありて、新內閣を組織し、政權を均握せんとす。如何なる妙匠を拉し來ると雖も、其の困難は依然たり。是れ政府爭奪の野心滿々たるも、自ら進んで首相たるを肯んずる者なき所以。

薩長交々內閣を組織せる時代にありては、首相其人を得る、さしたる難事に非ず。唯薩の、若くは長の擅私せんとするに際し、勢力の衝突を譲せるのみ。多數黨を基礎とし、偶ま政黨內閣を組織せる時代にも、首相の何人なるべきかは豫想の外に出でず。然るに、大正政變後は、政界漸く亂調を呈し、群雄割據若くは群衆橫行の觀あり。一個の藩閥、又は一個の黨首を以て、其の勢力を統一する能はず。不本意、不徹底ながらも、一の勢力と他の勢力と妥協苟合せざるべからず。政友會の薩派と結び、同志會の長閥と親しむ、畢竟政權授受の便宜より來れり。

彼等黨人にして眞に政黨政治を理想し、超然內閣を絕對に否認し、之

を援助せざるに於ては、元老如何に蠻勇を揮ふと雖も、大勢に逆行し得べきに非ず。然るに當人の政權を握るに焦燥する歩調と妥協苟合し、若くは元老に迎合するを捷徑となすが故に、到底其の理想を實現する能はず。政權爭奪の爲めに躍起運動を試み、其の爲めにのみ苦悩困憊するの愚劇を演じつゝあり。後繼内閣の組織、多數黨を基礎とせば、男加藤高明は其の首相たるべく、加藤にして不可ならば、其の反對に立つ所の原敬、犬養毅の聯立内閣を當然とすべきなり。然るに前陣の事情に依り、前陣の愚劇を演じつゝある間に、此の當然を實行すべく其の距離餘りに遠しと謂はざるを得ず。

二

男加藤は自任自信極めて高く、大正外交界の第一人者なりとの自負を有す。其の自恃に過ぎて、思はぬ失策を演ずる所、稍伯大隈に肖たりと雖も、伯の如く放言の快に陶醉せず、言責を重んずるの謹愼はあり。時に國民外交を云々し、時に祕密外交を實行し、自家の功名乃至都合の爲めに外交を玩弄するの傾向なきに非ざるも、其の量未だ自負の程度に達せざるが故に、對手國の外交家に飜弄せらるゝの致す所。彼れ自身は、失敗も尚成功なりと議會に抗辯するが如く、實際しか信じ居るやも知るべからず。彼れ一たび口を開くや、論調透徹、舌鋒鋭利、政敵を揶揄し、諷刺し、他の骨髓を抉らずんば已まざるの概あり。此の傲岸にして爭氣ある人格は、統帥の器に缺くる所ありと雖も、抵敵に强く、策士輩の險なきは、又一方の首領たるに適せずとせず。彼れが幾たびか同志會の反感を買ひ、幾たびか排斥せられ、幾度か内訌の焦點となれるも、依然總裁の地位を占むるは、彼れに多少の包容力あり、同化力あり、將來あるに由らずんば非ず。

男加藤の、何人にも毛嫌さるゝは、其の傲岸と自恃とにあり。而して彼れの何事かを成し、若くは成さんとするの長所も亦茲に存す。既に傲岸にして自恃あり。夫の幇間の如く阿諛面從せず、昂然として自家の主張を固執す。籠蓋は其の特技に非ず、進んで之を威壓せんとす。弱者の反感は茲に萌し、先輩の憎惡も亦茲に發す。侯井上、公山縣等の彼れの態度に快からざりしは、全く是に原因せり。伯大隈は狡猾なり、巧みに元老を籠蓋す。縱令元老の苦情を持ち込み來るも、殊更に耳を遠近し、聲調を抑揚して、之を誤魔化し去るを常とす。然るに彼れは、伯の耳なく聲調なきが故に、相槌を打ちて迎合し、詭辯を以て瞞過し去るの藝當を演ずる能はず。元老の不機嫌を買ふ毎に、冠を掛けんとせしこと一再に非ず。彼れが伯の居据に同ぜず、子大浦と連帶責任を負ふの意味に於て辭職を決行せるは、責任の觀念に基くこと勿論なりと雖も、亦元老に對する一種の面當（つらあて）ならずと謂ふ可からず。男加藤の立憲的行動に關し、奇怪にも同志會中に喜ばざるものあり。元老も亦彼れの外交を不安とする所なれば、伯大隈と如何の默契あるにもせよ、當分政局の要樞に座すべしとは想ふ能はず。

原敬は、隈閣の外交に深憂を抱く點に於て、元老の深憂と鼓動を一にす。其の深憂の、果して國家の爲めの深憂なるや、政爭の爲めの深憂な

るやを知らずと雖も、此の深憂を抱くが故に隈閣を倒さざる可からずと敎聞き居るは事實なり。彼れは男加藤に比すれば、策あり略あり、冷熱あり。又策士の才あり。已れ首相たる事能はずんば、首相の器を物色し來りて、之を推戴し、若くは妥協苟合するを辭せず。彼れの策する所は、自家の經綸抱負を實行する前に、如何にして政權を握らんとするかにあり。彼れは此の策の爲めに、或は公松方に流眄し、或は伯寺内の一派に策應するを否む者に非ざるなり。現に彼れは、妥協苟合の前科者なり。一再長閥と情意投合し、後藤派と通じ、長く臺閣に列せるは普く人の知る所なり。されば原の深憂と鼓動を一にすと雖も、之を眞面目に受取り、協心戮力、一致以て事に當らん者、甚だ尠きを思はざるを得ず。

始め公山縣は政友會の横暴を惡み、伯大隈をして其の絕對多數を打破せしめたるも、伯の政權を緊握するの執拗を見るに及んで、多少藥の利き過ぎたるを後悔し居るも、卒然從來の惡感を一掃して原と握手すべしとは信ずる能はず。加之、公は、原及び加藤を小兒視し、未だ首相の器に非ずと獨斷するに似たり。彼等初めて首相の印綬を佩びたる當時を回想せば、原の六十一歲、加藤の五十七歲は、寧ろ餘りに老いたり。而して、其の進歩せる思想より云ふも、憲政運用の手腕より見るも、大臣たるの經歷より云ふも、政黨總裁たる點より見るも、彼等に比して優りこそすれ、決して遜色ある者に非ず。唯彼等の怖るる所は、其の未熟に非ず、外交の深憂に非ずして、寧ろ自家勢力の失墜にあり。公桂の故智を學ぶに非ずんば、兩個の總裁が如何に黨人を率ゐると雖も、後繼内閣の死命を制し得るや疑なき能はず。

三

齊しく元老と云ふと雖も、其の勢力の中心は公山縣にあり。大正政變の當時、元老の勢力は政界の表面より一掃し去られたるの觀ありしも、憲政擁護熱の終熄すると共に、再び其の勢力を恢復せり。殊に山本内閣が貴族院の鋭鋒に突き崩され、清浦内閣流産し、隈閣の成立以來、軍閥漸く猛威を逞しうし、公山縣の勢力鬱然として加はり來れり。されば内閣起仆の權、一に彼れの掌中に歸せるが如く、其の筋書も亦彼れを中心として書かれつゝあり。貴族院の多數が、減債基金問題を以て隈閣に迫り、之を倒壞し去らんとせしも、公山縣周圍の策士の方寸に出でたり。公が伯の請を容れて一たび出馬し、居中調停を試みるに至りて、あれ程の騷ぎも遂に妥協に局を結べり。是れ公が急遽倒壞するを好まず、自ら窮地に陷りて其の自滅するを待たんが爲めなり。頻りに民意のある所を喋々し、民意を以て唯一の盾とする所の伯大隈を責むるは、彼れが信望の余緒が悉く剝落し了るの日を以てするを得策となせばなり。人或は政治の中心の貴族院に移動するの傾向あるを云ふも、其裏面を觀じ來れば、是れ皆公山縣の籠弄し、操縦しつゝあるの結果に外ならず。

黨人にして公山縣の勢力に快からざる者は、毒を以て毒を制するの勝れるを思ひ、元老増加論を唱説せり。蓋し其意、子高島、子三浦、侯西園寺の徒を加ふるにあり。以て公の勢力を控制すると同時に、子高島を首相に推すの下地を作るにありき。然れども此計畫は、子高島の最近に

よりて靈前に廟せり。子爵島の死は、政友會乃至國民黨の失望する所なるに相違なきも、之が爲めに長閥の勢威益々旺盛を致せるは爭ふべからず。

公山縣は、彼れが最後を飾るべく、如何の途を取らんかに考慮を廻しつゝあり。一時は周圍者の擁する所となり、政局の難關を引受け、以て其の最後の花を飾らんの意なきに非ざりしも、時勢の不可なるを見て斷念せり。實際侯松方を推すも、公山縣を起たしむるも、其の老朽の點に於て何の擇ぶ所がある。强ひて彼等の蹶起するあらば、忽ち國民の咒咀する所となりて、壽命克く幾許を保ち得べき。是れ公山縣の、最後を飾る所以に非ざる也。

四

縱令公山縣の蹶起せざるも、後繼内閣の長閥勢力圏内の者たるや多言を要せず、今や世人は限閥の放恣に厭き、無責任に驚き、民意を抑壓するに呆れたり。是に於てか、限閥倒壞を急とし、倒壞に手段を擇ばざらんとす。見よ政界は神經過敏となり、自暴自棄となれり。曩に政黨内閣を主張せる者も、一時の變體として超然内閣の止むなきを力說するに至れり。超然内閣の成立は、最早免るべからざるの運命となれり。

其の運命の暗示によりて、首相に擬されたる者に、伯芳川顯正あり、子平田東助あり、伯寺内正毅あり、曾て流產せる子清浦の如き、今尚倒閣の陰謀に加擔し居るを見れば、未だ斷念せりと見るべからず。一たびある事の、二たびあり、三度ある習なれば、或は彼れの如きも亦桂冠を戴くなしとせず。

伯芳川は、現下樞密院議長たり。年齒七十有六、數度臺閣に列し、何種の大臣となるも能く其の椅子を保てりと云ふの外、特に政治的手腕の優秀なる人物に非ず。唯彼れが長に善く、薩に善く、薩長兩閥の連鎖となり、楔子となり、調和者となる點に於て、其の人物を稱せられたるに過ぎず。政界混亂の今日、彼れに指目せるは、其の無難を利用せんとするに非ざる乎。

子清浦は、曾て八國の小學教師たり。中頃、貴族院の飛將軍として名聲あり。其の雄辯と機智とは、儕輩推重する所なりしも、近年多く煙霞の裡に悠游せり。其の材業より小ならずと雖も、伯芳川の圓滿と餘裕とを有せず。覇氣あり。圭角あるも、又頗る如才なき所ありて、剛愎を露出せず。伯芳川の鄙吝なるに比し、淡白なる所あり。黨人を操縱する、案外功を奏するやも測るべからず。

曩に清浦内閣の流產せる、政友會の操縱意の如くならざるにありと云ふも、宗像政は謀士にして豫定閣員の一人なりき。當時政友會に黨籍こそ無けれ、總裁原とは呼吸の通ふものあり。其の黨情を融和する、必ずしも難しとせず。又其の流產の原因を、海相其人を得難かりしにありと云ふも、或種の手段を講ずるに於ては絶對不可能事に非ざりしなり。然るに遂に流產の餘儀なきに至れる事情は何ぞ、曰く公山縣の清浦に聲援を惜みたるが故のみ。若し公山縣が伯大隈に顧眄するなく、極力彼れを援助するあらんか、中途表面の二因の爲めに脆くも瓦解するものに非ざ

りしたり。

然らば伯芳川の起つと、子淸浦の起たざるとは、一に公山縣の推薦、乃至擧拔の如何によりて決す。吾人、其の裏面の情事を見る毎に、一種の不快を感ぜずんば非ず。

五

四人中、最も呼聲の高きは、子平田なり。彼れは公山縣の縁故にして其の懐刀なりと稱せらる。彼れは法制局長官より進んで、第一次桂內閣の農相となり、次に第二次桂內閣の內相となり、政界の指目を惹くに至れり。世多く彼れを以て君子となすも、彼れは尋常一樣の君子に非ず。其の報德宗を宣傳せるは、眞に報德宗を信ずるが故に非ずして、彼れが産業政策の方便に供せられたるなり。今日も尙之を鼓吹すべく努力する所に、彼れの浮氣ならざる性格を發見すと雖も、彼れの政策の人たるは蔽ふべからず。

子平田の、公山縣に愛せらるゝ所以は、此の君子と見えて策士たるにあり。謹直に裏むに機略を以てするにあり。加ふるに彼れは學あり、才あり、趣味ありて、品格自ら備はれるものあり。夫の小慧狡猾の策士、若くは我利是れ追ふの徒に比すれば、固より雲泥の差あり。少くとも彼れは至誠を以て事に當り、理智を以て判斷し、小疵あるも大過なきを得るところ、何程か公山縣の性格を髣髴するもの無くんば非ず。而して彼れは貴族院に勢力あるを以て、公山縣の之を操縱する、必ず彼れの手を用ゐるを常とす。今次の調停の如き、又彼れを勞せしこと論を俟たず。

内閣倒壞、乃至組織の談議に、彼れの擬を必とするに、一言の理由く甚くなり。

彼れは必ず謀議に參すと雖も、首相たるの野心ありと見るべからず。彼れ近年健康を害し、劇職に就くを避くるの風あり。公山縣の就任を屈要するに於ては、或は身を以て國事に殉せんの意氣を示すべけんも、臨勢を見るに怜悧なる彼れは、容易に起つこと無かるべし。彼れが子淸浦の如く調子に乘らず、愼重熟慮する所に彼れの彼れたる所以あり。現に反限派中には、政黨非政黨に論なく、思を伯寺內に寄する者尠からず。此の形勢より察する時は、曾て非立憲なり、憲政の逆轉なりとして排斥せる寺內內閣の成立を見んも知るべからず。政界人心の歸向、眞に測る可からざるものあり。

伯寺內は軍閥精神の結晶なり。彼れに憲政の進歩を求め、政黨の發達を望むが如きは、要求する者の誤なり。彼れの公伊藤の有せざる寶物を有し、克く之を統治し、今日の朝鮮となしたるに徴するも、武斷政治の手腕家たるを知るに足る。彼れにありては論壇の雄辯は雄辯に非ず、武斷は唯一無二の雄辯なり。斯の雄辯を以て、彼れは同志會に當れば必ず同志會の多數を打破し、難關に遭遇すれば其の難關を突破するに躊躇する者に非ず。

彼れは理論家に非ず、手腕家なり。雙手以て何事をか成し得んと非難する者なきに非ざるも、彼れは雙手を以て實務に鞅掌し、所信を斷行し、今日の功業を贏ち得たり。性剛愎にして人に下らず、動もすれば傲慢し、

威服せんとするの傾向あるも、他を慴伏せんとするの怜悧はあり。若し夫れ事に當らんか、精力絶倫、些の倦怠と疲勞とを感ぜず、之を遂行せずんば已まず。斯の精力絶倫、元氣旺盛なるの點、或は首相の器となすに足れり。知らず伯寺内は、如何の經綸抱負を以て首任の印綬を佩びんとするや。

(備考)年齢一覽

松方　正義(八二)	山縣　有朋(七九)	大隈　重信(七九)
芳川　顯正(七六)	平田　東助(六八)	清浦　奎吾(六七)
西園寺公望(六七)	寺内　正毅(六五)	犬養　毅(六二)
原　敬(六一)	伊東己代治(六〇)	後藤　新平(六〇)
加藤　高明(五七)	徳川　家達(五四)	

▽犬養を閣僚とせる加藤内閣

關和知

大隈内閣に次いで來るべき後繼内閣の問題は決して新規の問題に非ず。實を云へば大隈内閣組織の當時より議せられつゝある問題である。元來大隈伯の出盧は山本内閣瓦解後の紛亂せる政局を收拾すべきもの朝野に通じて之を見出す能はず、退隱三十餘年一世に豪嘯せる早稻田の一老雄が圖なくも此局面に立つを餘儀なくせられたるものにして、伯に於ては素より權勢榮達の野心に出でたるに非らざることは天下の等しく認むる所である。當時伯は吾人に語るらく、這般の大任は四圍の狀勢によりして他人之を爭はんと欲して爭ふ能はず、我之を棄てんと欲して棄つる能はず、所謂之れ天の使命なるべきかと。實に伯の内閣は斯の如くにして成立つたのである。されば政局一度定まりたる後、後繼内閣を組織すべき然るべき者の發見せらるゝ限り、伯は何時にても廟閣を去ることを辭せざる考にて、吾人伯の門下に在るものは勿論苟くも伯一身の爲めに計つて忠ならんと欲する者は、八十の老軀君國に捧ぐるの忠誠を諒とすると共に、一日も速かに其終を完ふして再び早稻田の閑雲野鶴に伴ふ事の安全にして幸福なるを思はざる者は無いのである。不幸にして國家内外の事端容易に伯の引退を許さず、聖上の信頼國民の輿望切に伯に厚きものあり、以て今日に臻れるは寔に已むを得ざるの事情である。頃來内閣對貴族院の關係より延ひて還元問題に對する妥協成立に伴ひ、此間早くも政權授受の風說を生じ、政界は更にさまざまなる揣摩を事にするの有様を呈して來た。吾人は妥協の結果として果して政權授受の事あるべきや否やを知らずと雖も、大隈内閣の存立既に滿二年に及び、既往内閣の平均年齢を以てすれば寧ろ之に超ゆるの今日、人心の移り易き動もすれば局面の變化を思ふの狀これ無きに非ず。且つ曠古の御大典を終り伯が一生の光榮ある任務を果したる際、本議會に於ては大正初年以來初めて時運に適應せる豫算の成立を見、國務の運行其常軌に復したる折柄、内閣の更迭を以て寧ろ好機と爲すもの尠からざるやうである。勿論

吾人の眼を以てすれば、一面に於て伯を煩はす事の餘りに長きは伯の爲めに酷なる事を思はしむると同時に、一面に於て此世界的大難の局を善處す可き政治家として、伯以外遂に其人を見出す能はず、已むを得ず伯の餘生を君國の犧牲に爲すの外なかる可きを信ずるものなれ共、今若し幸にして後繼者の適當なるもの有之とせば政局の變化は必ずしも非とするものには非ず。然らば世上の所謂後繼內閣を組織すべき適才は果して何人なるべきか、暫く世上の風評に基いて一二の觀察を試みて見よう。

後繼內閣として世間に指目せらるゝ者、加藤內閣、寺內內閣若しくは平田內閣、更に甚しきは芳川內閣、淸浦內閣、松方內閣等の滑稽談を耳にすと雖も、予の私見よりすれば、就中加藤內閣を以て最も有望にして且つ適當なるを思ふのである。勿論予の所謂加藤內閣なるものは其內容に於て、同志會、中正會、公友俱樂部及び國民黨を包容する所の內閣を意味するものである、卽ち此內閣の成立に對しては加藤、犬養の提携を必要の條件となすものである。斯く言はゞ同志會對國民黨、加藤對犬養の關係より見て、寧ろ出來ない相談たるべしとの非難を免かれぬであらうけれ共、とは加藤犬養兩氏の果して政治家たるべき自信の存するものならしめば、決して至難と見るべからず。兩者は既往の經歷に於て朝野獨ふ所を異にしたりと雖も俱に大隈伯と密接の關係を有する同 系統の政治家にして、其立憲的主張若しくは反閥族的思想に於て決して相合はざるものに非ず。大隈內閣組織の當時伯唯一の希望は、加藤、犬養、尾崎の三子を率ゐて、所謂國民的內閣を組織するに在りし事は世の熟知する所である。

當時一種の行きがかりと特に大浦若槻等に對する犬養の個人的惡感情ありしが爲め、遂に犬養の離反となりたるは寔に遺憾とする所なりしが、今日の事情は全く當時と異にして、犬養としては如何に彼の偏執を以てするも、大隈伯の後を襲ふて加藤と共に竝び立つに於て深く拘泥する必要は非らざるべし。況んや今日の同志會は其中心勢力を占むる者、多くは皆當年國民黨否改進黨以來の舊友である。其他官僚出身者と雖も、今は純然たる政黨政治家である。加ふるに中正會を率ゆる尾崎あり、更に當年犬養の親友たりし高田早苗も間に介在するあり、隈伯系統の此等の諸星手を執つて大局に當るに於ては、今日の事態內外に對する信用頗る鞏固なるもの有るべく、衆議院の基礎の安全なるは勿論、貴族院と雖もまた其前に抗爭する事は絶對に不可能である。これを加藤の立場より察するも、彼の力量、手腕、識見、閲歷は優かに當代群を拔くの器たるに相違なしと雖も、其上下に對する資望單獨を以て內閣組織を爲さん事は猶未だ足らざるの憾みあり。幸に犬養尾崎高田の如き現に同志會の圏外にあるものを包容して、事を俱にするの雅量を示さん事は、彼に取て其政治家的資質の大を加ふるものにして、斯の如くして初めて首相の貫祿を見るに足るのである。一方犬養の立場よりするも、彼が逆境卅年苦節を守るは多とするに足ると雖も、今日三十に足らざる少數黨の領袖を以て處り、動もすれば空言放語の壯士團體の親分を以て終らんことは眞に惜しむべきの限りである。彼にして巖穴の奇士を以て終生を甘んずとせば卽ち止む。苟も經世の才を實地に施すの政治家的抱負を存する以上は、加藤に對し同

憲會に對する若しくは閥官僚系に對する區々の少感情を以て其趨舍を爲すが如きことあるべからず。況んや帝國現下の情勢は寔に千歳の大機にして一片國に志あるの士宜しく自ら任じて立たざるべからざるの秋に於ておや。惟ふに加藤と犬養とは兩者共に倜儻にして尊大である。唯一、は餘りに英國的にして一は餘りに東洋的寧ろ支那的なるの點に於て、自ら思想感情の扞格を見るは兩者の提携に於て一の憂たらざるを得ざる所である。然れ共兩者共に國家に對し、時局に對し、互に政治家的本分の何たるかを相諒解するに於ては其提携は必ずしも深く憂ふべきでは無い。犬養の最近に於ける動もすれば政友會と相近づき、之と事を共にするの風ありと雖も、是れ彼が窮餘の氣まぐれのみ。政友會と國民黨、原と犬養との關係の相異り、相容るべからざるは、之を彼と加藤若しくは同志會に對する關係に比較すれば到底同日の談に非ず。政友會と提携するは、犬養の原に降伏するの時にして、國民黨は全く三十年の宿敵に併呑せらるゝの時である。此に於ては舊友相携へ脣輔相結ぶを得べきも、彼に於ては斷じて斯の如き事は期すべからず。況や原と結びて內閣を組織するの望みの如き、近き將來に於て決して望むべからざるに於ておや。若し犬養にして加藤と携ふる能はずとせばその原と携へ能はざる事は更に明瞭なる事態たり。彼等苟も政治家を以て自任するに拘はらず、徒に個性を制抑する能はず、加藤何爲るものぞ、犬養何爲ものぞと、倜儻自ら守り、尊大自ら處り、天下の爲めに同して而て和せざるが如きは、斷じて彼等共に孑々たる小丈夫の譏りを免かれぬのである。加藤犬養の二者幸に大悟一番せば、內に於て有力なる立憲的新內閣を組織し、議會に於ては全く政友會を孤立せしめて天下の大勢を定むるに足る可く、外に於ては國策を一定して國威の發揚に力むる事を得べし。斯の如き內閣を以て貴族院に對抗せば、貴族院の官僚派は立ち所に屏息すべし。而して是れ立憲政の一大進歩には非ずや。斯くて大隈伯退くと雖も猶其後有るものと謂ふべく、伯が政治的の圓滿なる終局を結ぶ事が出來るのである。

若しも加藤內閣にして遂に成功の望無しとせば、勢は遂に寺內若しくは平田內閣を現出せずとも限らざるべし。寺內、平田の內閣は言ふまでも無く所謂長閥內閣にして、之の再現は寧ろ憲政の逆轉と云はざるべからず。彼等は議會に何等の基礎を有せずして、大正の今日再び超然內閣を歩みるものである。舊式なる政黨操縱によりて一時を彌縫せんとするものである。斯の如き內閣の存立は到底半歳の久しきを保つべからず。或は政友會と結ばんか、原一派の如きは之に迎合せんも政友會の多數恐らくは之れに甘心せざるべし。同志會と結ばんか、或は一部を縱致し得んも黨を擧げて之れが盲從を望むべからず。然かも閥族官僚の餘類を集めて最後の奮鬪を試みるの勇氣ありとせば、之れ寧ろ時とに取りて歡迎すべき政治上の一變象なるべきか。思ふに彼等到底斯の如き勇氣あらざるべし。若し夫れ松方內閣に至つては政友會の一派に於て逆境の煩悶を自ら慰むべく、自ら畫ける幻影たるべきも、今日藩閥復興を現ずる事の困難は長閥復興の困難よりも更に甚だしきものがある。芳川、淸浦內閣說に至つては全然問題以外である。

斯の如く觀察し來れば加藤內閣は大隈內閣の後を襲ふべき當然の內閣たるべしと雖も、若し四圍の事情不可なるものあり、包容の大なる國民的內閣を作る能はず、依然たる同志會及び其他離群索居せる與黨を以て今後に處するに於ては、勢ひ貴族院の輕侮と而して在野反對黨の乘ずる所となるを免かれず、或は已むを得ず官僚分子と提携して、一種變態の內閣を作り、不滿足なる妥協的態度を維持するに止まるの外は無い。斯の如き半上落下的不徹底なる內閣は吾人の理想とする所に非ず。願はくは加藤たるもの、犬養たるもの、其他尾崎高田更に武富箕浦の諸氏大處に着眼して、舊友同志歡然手を執つて此大局に任ずるの奮發覺悟あらん事を望む。而して之れ實に諸氏が國家憲政に對し且つ以て大隈伯の志を濟すべき唯一の途たるべきを信ずるのである。

▽寧ろ官僚內閣を歡迎す

早川鐵治

大隈伯も一昨年久し振りで政權を握つた。平生の伯を熟知して居る我輩なぞは定めて思ふ存分政治上の宿弊を矯め、外交の刷新を計り、內治の改善を力めて貰へる事と思つて居つた。所が遺憾ながら在職今日に至るまで著るしい御功績のあられたやうにも思はれぬし、又同伯を扶けて內閣に入られた諸公も、平素在野中に呼號して居た主義綱領を打忘れ、世間から變節とか無定見とか云つて指彈されて居るのは時勢の變化の然らしむる所か、或は實際其局に當つて見るとなか〳〵平常の主張を貫く事が出來ないのか。學者として大學に在つては立派な言說を吐いた者も、一度廟堂に立つて國務を施行するとなると其說を實行する事は駄目なのか。何しろ內閣諸公の無責任不見識なのは遺憾千萬である。先頃漸く妥協が成立した貴族院と政府の論爭でも、公債五千萬圓の還元問題だとか或は兵器賣却が會計法に違ふとか云ふ取るに足らぬ些細な點であつて、大切な外交問題に付いて攻擊すべき事を忘れたのは貴族院としては隨分拙い遣り方だつたと思ふ。恁んな些事であつたがため妥協が出來、曲りなりにも今議會を無事に通過し得たのは政府に取つて極めて幸であつた。然しながら現內閣が此上政權を安んじて持續しては行けないし、又持續して行つた所で面白くもない。人心を離れて政權にのみ噛り付て居るのは好くない。我輩は今猶大隈とは親善であるから、此際飽くまで見苦しく政權に噛り付て居れとは云はない。寧ろ今議會を無事に濟ましたら圓滿に辭職せん事を、大隈伯の爲めを思つて切に希望するものである。

扨伯の後繼として次の內閣を組織する者は誰か。加藤君などは外交上で甚だ得々として居るが、我輩などから見ると加藤が始末もせずに後に殘した責任は甚だ大なりと思ふのである。彼が在職中歐洲に動亂が勃發し日英同盟の約を履んで我國は青島に兵を出したが、其後始末は如何する了簡なのか。又支那に對しても惡感情を殘したる彼の政策の甚だ拙劣を極めたるには呆れ果てる許りである。斯の如く後に大なる責任を及ぼ

したる加藤に、果して國民は安んじて内閣を依賴するであらうか。加藤君の總理大臣は考へものである。と云つて政友會も單獨で内閣を組織する力が無い。政友會共者の歷史が惡い上に今日と雖も政府に對し、外交に對し如何云ふ對策があるのやら判らない。だから現内閣に次いで起るものは、どうして政黨内閣以外の、云はゞ擧國一致内閣とも云ふべき政黨政派を超越した官僚内閣が出來やう。時局を收拾する上に付ては、從來の政黨者流の遣り方も人心を離れて來た今日官僚内閣の復活は當然だと思ふ。素より官僚内閣に弊もあるが政黨内閣に比較するとまだ尠い。政黨に屬して政黨を認むる我輩ではあるが、政黨者流の中には此際時局に適した仕事を遣れるものが無いやうだ。誠意と云ふ事については、これまで正直な單純な生活を送つて來た官僚者の方が政黨者流より多分に持て居る。近頃の學校出身の者には個人的思想が勝つて居て國家的な觀念に乏しい者が尠くない。今日のやうな場合では、國家觀念に富み誠心誠意一死以て國に報ゆるの志あるものでなければ天下は委されぬ。唯政權爭奪を事とし、因循姑息一時を彌縫して其日逃れの政策を弄するものでは、昔の鎖國時代には適して居るかも知れないが今日のやうに貧乏ながら一等國となつて列強と廣く交つてゐる時代には、國内の政權爭奪のみを事とするものでは駄目だ。だから官僚者流に天下を取つて貰ひたい。所が然う云ふ人は寔に尠ないから遺憾である。山縣公の身邊に居る人達は誠に用意周到、思慮深く國を思ふ念の多いものが尠くない。が彼等は死生を賭して政權を取る勇氣が無い。公の身邊に在つて公を扶ける中老仲間には公程のヤリの有るものは尠ない、一體御一新以後の人にはヤリのある者の尠ないのは事實だ。近來政界は凡て不眞面目になり、群衆を煽動して燒打すれば政權を移動し得ると思ふやうになつた。今後政權を握るものは國務を執行するに於て、デマゴーグが燒打や示威運動を爲たら嚴格な處分をし、議會を二度でも三度でも解散するやうな覺悟が無ければならぬ。其爲めに爭が起り、國務大臣が倒れるかも知れぬ。けれども暴動を恐れ生命を惜しむものでは天下が取れぬ。又そんな者には天下を取らしたくない。斯かる覺悟のある者は政黨者流にも、今の學校出身の官僚系の者にもない。只二三の殘存して居る中老仲間にのみこの覺悟の勇氣がある。學校出の小僧上りの政治家では物にならぬと思ふ。我輩には必ず斯う云ふ人が將來天下を取ると云ふメドが無いではないか、强ひて今其名を指すにも及ぶまいから、唯單に現内閣に次いでは當然官僚内閣が復活するであらうと云ふ觀測を述べるに止めて置かう。

▽立憲的にして善政を行ふ内閣

慶應義塾々長　鎌田榮吉

私の思ふに、誰が内閣の首班に立たうが、それは問題ではない。只立憲政治であるからは、立憲的に進退する人でなければならぬのは言ふま

でもないが、立憲的な人でさへあれば、要するに人は誰でもよいといふことになる。内閣は餘り古くなつても不可いが、或年限の間は續く方がよい。さう無闇に取換へたからとて、良い内閣が出來る譯のものではない。要するに國是を進めて行くやうな内閣ならばよいので、國是を進めて行く爲めには或年限の間は内閣が續かなければならぬ。今日の場合、誰が出たからとて、さう名案もある筈が無いのだから同じなことである。本氣で眞劍に遣る内閣ならば、私は何の内閣にでも贊成する。大隈内閣も結構である。只胡麻化し内閣は不可い。内閣を持續せしむるのは良いことであるが、内閣を持續するのは善い政を行はんが爲めであつて、其地位を維持する爲めに維持するのであつてはならない。

我々が内閣を攻擊するのは、決して其内閣を倒さんが爲めでない。善政を行はしめんが爲めである。内閣を倒したからとて善い政治が出來るものではない。要は誰でもよい、立憲的にして善政を行ふ人でさへあれば。

▽新舊勢力を調和せる聯合内閣

男爵　田健治郎

私は元來天下を治めるのには、諸種の勢力をして鬱屈せしめないのが根本義であると思つて居る。以前藩閥の勢力が強かつた時には、殆んど藩閥内閣の時代が續いた。之は怪しむに足らぬことで、維新の偉業を成功せしめた藩閥の人が天下を支配したのであつて、勢力の最も大なるものが政治の局面に立つのは當然で、天下之に抗敵するものが無かつた。其後政黨が起り之に對抗して藩閥打破を唱へたが、其力は極めて微弱でとても維新の功業を成した藩閥其ものに對して、いくら足掻いても何等其結果を見る事が出來なかつた。明治二十三年議會が開設されて、茲に形勢一變の種子が蒔かれた。議會なるものは申す迄もなく民意を代表するものである。而して憲法上に之を認められたるもので、素より頗る有力なものでなければならぬ。が然し天下の事は形式又は外觀だけでは其効力を發揮することが出來ぬ。矢張り實力が備らなければ實際に其力を現はす事が出來ぬ。であるから議會開設前に唱道して騷いだ政黨者流は議會によつて輿論として民論の勢力を提げ藩閥と戰つて見たが、然し藩閥が實際に血を流して得た勢力は、筆や舌の先で掌を飜すやうに打破して乘取る譯には行かない。明治三十二三年頃までは議會が開設に成たにも拘はらず、依然として政黨者流の所謂藩閥内閣が維持されて居た。其間に三十一年に板隈内閣などと云ふ純政黨内閣だと稱するものが起つたけれども、僅々四ケ月にして忽ち自ら瓦解した。これ明かに政黨なるものゝ勢力が未だ微々として、とても天下の實權を握る事の出來ぬのを證明するものだ。其後に出來たものは山縣内閣で、矢張り純なる藩閥官僚の内閣であつた。私は當時「政權消長の樞機を論ず」と云ふ論文を書いて

公にした事がある。一篇の主意は、どうしても政治は實際の勢力ある者の、意思の疏通を圖つて事を倶にするのが根本主義である。法律的に云へば議院が出來て漸次一つの勢力となり、實際的に云へば政黨が一種の勢力と算すべき地位に進んだ以上は、之を抑壓し之を除外しては天下を治める事は出來ない。だから政黨に對して漸次幾分の政權を分配するのが可いと云ふのが當時の立論である。伊藤公も其處に氣が付たか其後間もなく所謂政友會なるものを自ら進んで形成つて、之で遣つて行かうと圖られたが、然し之が矢張一の政黨の形と成つたが故に、舊勢力即ち官僚とか藩閥とかに衝突すると云ふ事になつて、伊藤公も充分に其勢力の調和を計つて行く目的を達せなかつた。それは何が病根かと云ふと舊勢力と新勢力即ち藩閥官僚と政黨とに向つて勢力の適當なる分配を爲して、双方の勢力の調和を圖るに缺如して居つた事である。伊藤公は矢張新勢力に許り重を置いたのである。公の末路は寧ろ政治上の勢力の覇權を失ひたる爲め失敗したと云はねばならぬ。そこで次に其後を承けた人が桂公であるが、これは寧ろ舊勢力即ち藩閥とか官僚とか云はれて居る勢力を集中して、新勢力即ち政黨を操縱するとか、之と提携するとか云ふ趣向で、二次の内閣を維持した。其間に日露戰役と云ふやうな當然擧國一致を要求する事件が起つたから、桂公は其お蔭で永く其地位を維持する事が出來た。若し當時日露戰役なかつせば、あゝ永くは變則的に内閣を維持する事が出來なかたらう。そこに於てや桂公も第三次内閣を組織する時には、あゝ云つた提携妥協等の變則では可けぬ事を自覺して、伊藤公が數年前に失敗した覆轍を踏んで自ら政黨組織に着手した。此時の桂公は未だ舊勢力の反抗を受くるまでに到らずして、新勢力の攻撃に由つて失敗し遂に悲慘な末路を取つた。此桂公の末路は寧ろ變體で、彼の第二次西園寺内閣の倒れた事が陸軍との衝突に起つて、其反動的餘炎を受けて所謂新勢力同志の爭となつて、桂公の新政黨は新勢力の爲めに壞されたと憲政史上にはなつて居る。が、寧ろ偶然起つた政治上の大波瀾に遭遇したから起つた事で、若し然う云ふ偶發的事情が無く、新勢力を組織して内閣に立つに成功したなら、桂公は必ず舊勢力の包圍攻撃を受けて、伊藤公が明治三十四年頃に遭遇したと同じやうな失敗に陷つたかも知れない。要するに此政治上の權力の消長は只一時の形式に由つて定める事は出來ぬ筈で、矢張り實質的勢力の備はれる者に向つて政權の分配其宜しきを得る事に爲なければ、永く政治上の平和を得て行く事は出來ぬ。此點から論ずると舊勢力は昔に比べれば餘程衰へたやうに思はれるけれども、然し現に元老とか樞密院とか貴族院とか或は陸海軍とか云ふ、世の所謂官僚と稱する所の實勢力と云ふものには政權の分配上に於て侮るべからざる勢力が殘存して居る。今日の新勢力と云はるゝ所謂政黨と云ふものの勢力は、十年若しくは二十年以前に比較したならば餘程有力な人物も段々參加して、實際の勢力は大に加はつて居るに相違ない。けれども其力たるや、猶之を英國とか米國とか云ふ政黨政治國の政黨の勢力に比して見れば、まだ〳〵遙かに微弱なる點に在る事は疑ひない事實である。今日に在ては政黨を無視して舊勢力のみを以て政權を掌握して、

圓滿に平和に國務を料理して行く事の至難なると同時に、一切の官僚勢力を除外して新勢力即ち政黨のみの力を以て、國政を圓滿に平和に運用して行く事も亦至難に屬する。これは何うしても私の三十一年に發表した論文に書いた通り、諸種の勢力に對して政權の適當なる分配が必要である。この事實は今日益々明かに證せられる。是に於てや論結は、今後に組織せらるべき內閣は新舊勢力に向つて政權の分配其宜しきを得ると云ふのが、憲政の運用に於ける努むべき要訣であると云ふ事に歸着する。約言すれば新舊勢力より成立つべき聯合內閣を組織するのが、一番今日の實際に適應したものであると云ふに歸着する。

之までは理論である。私は單純な學術上又は法理上の理想を云ふものではない。當然今日の實際に應用すべき理論である。左よりながら今日の實際に應用して私の理論は果して實行の効を收め得るや否やは疑なきを得ない。今日大隈內閣が退いたとして、後に何んな內閣が出來るかと云ふ事に成つて見ると、即ち事實論に成つて見ると、現存する所の政治上の形勢如何を顧慮せねばならぬ。世に所謂擧國一致內閣は理想としは面白いが、事實に於て行はるゝや否や。元老、樞密院、貴族院等の官僚を代表する閣員と、又一方に政黨を代表するもの即ち同志會、政友會、公友俱樂部、國民黨等を代表するものとが聯合內閣を形成すると云ふ事が實際出來るや否やと云ふ事になると大に疑を生ずる。と云ふのは一昨年世界的大戰に日本が參加した場合、大隈首相が進んで擧國一致の實を擧ぐる事を圖り政治上の形勢を其方向に利導すること、當時の英吉利又は佛蘭西に於ける如くであつたなら、今日或は擧國一致內閣成立の功を奏する事を得るかも知れなかつたのである。黨爭の極めて激烈にして、歷史的に政黨政派の區別確然動かすべからざる程に出來た英、佛でさへ、全然擧國一致內閣を造る趨勢にならんとして居る。況んや我日本で擧國一致內閣を造る方に政治上の風潮を利導して居たならば、容易く擧國一致內閣の實を擧げ得たかも知れない。所が大隈首相は平生の大言に似合はず其襟度案外に褊狹にして此方針を採らずして、あべこべに世界的戰爭に從事する機會を利用して一層進んで反對黨即ち在野黨の撲滅に掛かつた。斯う云ふ風に政治上の趨勢を趣かしめた結果として、今日に在つて現に在朝黨たる同志會などゝ、在野黨なる政友會國民黨とは殆んど不俱戴天の親の仇でもあるかの如く互に相疾視して居る實況ゆゑ、打つて一團にして一つの聯立內閣を造るなどは、殆んど云ふべくして行ふべからざる空中樓閣說に陷つて終ふ。だから擧國一致內閣は當分の所言ふべくして行はれ得ざるものと云ふに歸着する。是に於てや後繼內閣論となると、私の所謂有力なる勢力を連合したる聯立內閣を造る事の理論も、事實に於て行き惱やまざるを得ない。何うしても其點から論ずると、私などの希望して居るものに到着するには、到着すべき道行を作るべき間の過渡時代の內閣を組織するの已むを得ざるに至りは爲ないかと云ふ論が起る。それは近頃まで世間で多少言はれて居た元老內閣論である。元老と云ふ、諸種の勢力に向つて聲望を有する人をして一時此難局に當らしめ、諸種の勢力が相互に非常な抗敵心を懷いて居る心理狀態を緩和して

他日是等の諸勢力が互に相融和し相提携する所の途を拓いて、然る後に諸勢力から成立つ聯合內閣を造る地歩を爲すが好いと云ふ說である。或は又元老內閣に非ずとも、一種の不偏不黨所謂黨爭の外に超然たるやうな內閣を造つて、此激甚なる黨爭を緩和し險惡なる政治上の趨勢を除去するを今日に適應な手段と論ずる人もあらう。或は一歩進んで、今日の政黨たる、何れも獨力を以て民論を代表すると認むるものは一も無いけれども、其中の一二と舊勢力即ち世の所謂官僚分子とを連結して、一種の聯合內閣を造るを可とするものもあらう。要するに政治上の云爲と云ふものは朝夕を測らぬ程に轉變するものだから、是等の何れを取るかと云ふ事は其時に臨んで見なければ、豫め必ず此を推すべきもの、或は斯う云ふ事を期待すべきものであると論定する事は出來ぬと思ふ。

終に臨んで一言附加せねばならぬ一事がある。夫れは昨年七月大隈內閣の總辭表を呈せし頃より近頃に到るまで、一部人士の間に行はるゝ說にして、現內閣は既に人心を失ふこと明白なれ共、後繼內閣を組織すべき適任者なき故、寧ろ此儘据置く方安全なるべしとの說である。此說は、獨り大隈內閣贔負の人の間に唱道せらるゝのみならず、公平なる政治家の間にも往々之を口にして憚からざる人がある。隨て世間には之を以て大隈內閣繼續の最大理由なりと評する者あるに到る。實に滑稽の至り天下恐く此程の愚論はあるまいと思はる。「元來四時の序功を成すものは去る」は天地間生物界の原則で、大隈伯が如何に寵愛らるゝ共人に百年の壽なきは明かなる事實である。左すれは元老なども深く此理を考へ、迅くの昔より少しの遺り惜みなく、ドシ〳〵若年の政治家をして大局に當らしめしならば、決して今日の如く首相候補者の缺乏を訴ふるの憂なかりしならんに、謀之に及ばす、桂公既に沒し、西園寺侯隱退し、山本伯蹉跌せし今日に於て、忽ち首相候補の飢饉を感じ後繼難を憂ふる如きは、實に愚の骨頂と云はねばならぬ。天下決して人才の種切れを憂へす、駸々たる後進政治家中には、十の伊藤公、百の桂公も存在すること疑なし。唯之を試用せずして發見する能はざるのみ。此點より論ずれば。寺內伯可なり、平田子可なり、淸浦子伊東子可なり、加藤男原敬氏可なり。一層新陳代謝の妙機を活用せば、其他可なるもの多く之れあるべし。私は此等の人々を以て悉く適任者なりと保證する次第には非ざれ共、政界進轉の順序として、順次此等の人々をして大局燮理の任に當しめば、優勝劣敗の天則、適任者は充分其本能を發揮して、天下の重に任じて恥ざるに到るべく、不適任者は自ら劣敗して沒落すべし。是れ人間自然の淘汰の理法にして此間何等の顧慮すべき理由あるを見ず。然るに世の俗論に耽る者は此の理法を察せずして動もすれば曰く彼れは貫目が足らぬ、是れは髯が生へぬと是れ政治家を骨董視し庭石扱にするものにして天下の愚論之に過ぎたるはなし。一言蒙を啓くの止を得ざる所以である。

▽武斷主義の擧國一致內閣

法學博士 戸水寛人

大隈內閣は內政に於て甚だしく失態を演じ、外交についても少からざる失策を爲したのであつて、最早や國民一般の飽く所となつて居るから、近き中に內閣の更迭あることは人々の期待して居る所である。元來斯の如き內閣が倒るべきものであると云ふ事は、今日の輿論の如く見受けられて居つたけれども、後繼內閣に適當なものが無からうと言ふので內閣の更迭が豫想外に延引した如く見受けられるのである。然しながら只今となつては、是非今回の內閣を倒して後繼內閣を造らなければならぬといふ狀勢になつたと思はれる。然らば如何なる內閣が適當であるかと言ふとについては、多少歐羅巴に於て行はれた所の內閣の更迭を參考にするの必要があると思ふ。昨年英國に於て內閣を改造して所謂擧國一致內閣なるものを作つた。其他の國々に於ても內閣に對して多少の改造を加へたのであるが、斯う云ふ所を見れば所謂擧國一致內閣を造ると云ふは一種の流行物の如く看做さるゝの思がある。然しながら內閣の更迭した所以の根柢を考へて見るといふと、之等は一時の流行物と見ることが出來ないので矢張其時の必要に迫られたものと言はねばならぬ。英國に於ては戰爭の起つた當時には自由黨內閣であつて、其首相がアスキスであつた。けれども戰爭の起る頃には保守黨が自由黨內閣に反對して居る。又愛蘭土のアルスター問題についてはカーソン等が現內閣に反對して居る。斯の如き狀態で歐羅巴の大戰亂に加入すると言ふ事は、英國の爲めに不利益であつたのだから、在朝在野の政治家が英吉利の國王の爲めに招かれてラウンドテーブル(圓卓)を圍んで互に打明けて相談をした。圓卓を用ゐた所以は私はよく知らぬけれど、多分席に上下を設けないといふ意味であつたらうと思ふ。斯の如くして相談をした結果、首相の地位は依然としてアスキスが之を維持すると云ふ事にして、保守黨のバルフォールが海軍大臣の地位に就き、統一黨の首領たるボナー・ローは殖民大臣の地位に就き、大藏大臣であつた所のロイド・ジョーヂが新らしく出來た所の軍機大臣の職に就いた。カーソンも亦內閣員の一人となつた。其後カーソンは內閣を退いたけれども、所謂擧國一致には亳末も影響を及ぼさなかつた。斯の如くして內閣を改造して、之までの黨派の爭を當分の間烏有に歸せしめて、國民相協力して强敵獨逸と戰ふ事にした。歐羅巴の他の國に於ても內閣に多少の改造を行つたけれども、其中で前述べた所の英吉利の事例は殊に列國の注目を惹いたのであつて、或程度に於ては模範とせられて居る。斯の如き更迭は眞に今日の狀勢に伴つて出來た所のもので、日本に於ては大いに參考としなければならぬと思ふ。

日本は之まで絕東に於て何事を爲るについても列國の制肘を受けて、意の如く日本の志す所を行ふ事が出來なかつた。然るに今回歐羅巴の大爭亂に際しては、歐羅巴諸國は絕東に力を伸ばす事が出來ない。此機會に乘じて日本が絕東の永遠の平和を計らんが爲めに適當な處置を執らなければならぬと思ふ。私は日本が此際に飛躍を爲なければならぬと言ふ事をいふのではないけれども、然しながら日本の爲めのみならず支那其他の國の爲めに、東洋永遠の平和の基礎を築くといふ事が日本の使命であ

ると考へる。之を遂行するについては日本國内に於て些々たる、小さい詰らぬ問題について種々の黨派が相爭ふといふ事は望ましき狀況ぢやない。暫時なりとも在來の行掛りより生ずる所の黨爭を止めて、右述べた日本の使命を全くせんが爲めに大いに相協力した方が可いと思ふ。此等の理由によつて私は此際所謂擧國一致內閣を造つた方が可いと思ふ。初め大浦子爵が失脚した時に大隈伯に擧國一致內閣を作るの考があつたならば、之は爲し得たものと思ふ。然るに大隈伯が此事に氣附か無かつたのであるか、或は之を輔佐して居る人物か之を好まなかつたのであるか、理由の何たるに拘らず遺憾な事である。然しながら既往は追ふ可からず。今回內閣の倒るゝに際して堅固なる擧國一致內閣を造つて好いと思ふ。

右述べた所の使命を全くするには、私は武斷主義の內閣を造らなければならぬといふ考を持つて居る。從來日本の內閣は列强に遠慮し過ぎて居る。殊に英國及び米國の鼻息を窺ふが如き態度に出でたのであつた。けれども斯くあつてはとても東洋永遠の平和の基礎を造るといふ事が出來ないから、從來の內閣よりも異つた所の武斷的行動に出づる所の內閣を造るといふ事は今日の急務であると思ふ。斯の如き見地からして山縣公爵の健康が若し之を許すならば、公爵自身が其地位に就くがよいと思ふ。若し山縣公爵の健康が之を許さゞるならば、公爵の代理となるべき所の人物、例へば寺內伯の如きを首相としても差支無いと思ふ。けれども斯の如き人が自分の黨派即ち長閥に私するやうな考ならば、此際には首相と爲ないがよい。斯の如き大切な時機に於て首相となる以上は、何處までも私を捨てなければならぬと思ふ。

外務大臣に如何なる人物が必要か、之は今日の時機に於て最も大切な問題と思ふ。私の考では從來の外務省出身の人物を擧けて外務大臣にする事は不得策と思ふ。外交の技師としては皆相當の手腕があつても、所謂武斷主義を斷行する內閣に取つては不適當だと思ふ。私は澤山の人物を知らぬから如何なる人を擧げるかは躊躇するが、今迄知つた中では後藤男爵の如きは適當な人物と思ふ。然し外に之れ以上適當な人物があるかも知れぬ。大隈派の人物も一人位は內閣に殘る方がよいと思ふ。之には高田文部大臣の如きは適當な人である。敎育制度の改革は何人も必要とする所であつて、之を爲すに適當な人物は甚だ少ない。高田氏の如きは學識もあり才力もあるんで此任に當るに適當な一人である。其外に政友會からも同志會からも國民黨からも適當なる人物を入閣せしめて、種々の黨派が之までの黨爭を廢して極力絕東問題の解決に當るやうにしたらよからうと思ふ。絕東問題の解決方法に就いては多少議論なきに非ずだけれども、內閣の組立てとは直接の關係の無いことであるから今は述べない。

▽後繼內閣種々觀

司法省參政官　田川大吉郎

◎大隈內閣は議會終了後に果して引退するだらうか、或はそれを以て既定の約束の如く噂し、觀測し、主張する人もあるが、僕は尙疑ひを抱いて居る、それに就ては後に述べる。

◎後の首相其人を物色するには、第一に大隈伯に代つて現內閣を統督する人を求めるのか、將た大隈內閣を倒して、新たなる主義、政見、勢力の內閣を作るのかが先決問題と爲る。

◎若し現在の勢力を基礎として、即ち衆議院の多數黨なる同志會を基礎として、內閣を組織する趣意なら內閣員の顏觸は多く變換さす必要はあ

るまい、即ち大隈伯に代る他の首相を以てすれば結局足るのであるから、此場合には、大隈伯に代る何人が同志會を總攬し、兼ねて與黨三派を統率するに一番適した閲歷、力倆あるかを考ふればいゝことに爲る、左すれば問題は稍簡單に爲るけれど、さうで無く、大隈內閣全體を變へて、衆議院の勢力の分野に頓着なき更迭を試みんとするのなら、それは極めて複雜した面倒な問題と爲つて殆んど豫想が着かない。

◎左ればと言つて、此先決問題を決するは、其の人、其の境遇、其の時勢の要求に由ることとて、其の時勢に關する分は、僕にも容喙の資格があるだらうけれど、其の人、其の境遇に屬することは、僕には一言たりとも容喙し得べきで無いから、こゝでは一切それらを略して進まねばならぬそれだけ本記述は漠然たる推想に止まる、それは已むを得ない。

◎先づ山縣公は如何であらう、老人だとか、長閥だとかいふことは拔きにして、どこにか重望のあるやうに想はれ、物の締め括り、抑へ、捌きが着くやうに想はれて居る、但、その重望のあり、勢力のありと言はるゝのは、貴族院、樞密院、宮內省、乃至一般保守派の範圍に限られ、而して陸海軍を其の根據として居る、故に山縣公首班たるの內閣は、何と言つても保守派の內閣、貴族院の內閣と想はねばならぬ、國民の多數はそれに甘んずるか否やは固より問題であるが、今日の政局は動もすれば山縣公一派の支持する所で、大隈內閣は其の肝煎に依つて成り立ち、其の骨折に依つて障礙を排し、ガタ／＼辛ふじて微動しつゝありと評する者が少くない、果して然らば、その實權あり實力ある者の出で、表面の衝に當るは立憲政治の本則であるから、此く言ふ人は、此く希望するのであらう、たとへ希望せざるまでも之を甘んずるであらう、甘んずるにせよ、甘んぜざるにせよ、事實は如何ともし難し、山縣公を推し立てゝ、その思ふ儘、信ずる儘に行動せしむることが、實際上の便宜であり、又必要であらうかと思はるゝ、僕の之を賛成するか否やは無論別の問題である。

◎山縣公の外、兎も角も、纏めの着く人は德川公だらうかと思ふ、僕は其の人に近づかないから其の力量、抱負、見識に就ては、何も知る所は無いが、其の貴族院の議長としての信用、才幹、勢力から考へると、公は存外に人を纏める力に富んで居られるやうに思ふ、或はその議長振りを專制に過ぐると難ずる聲も聞へるけれど、專制に過ぎたる態度を以て終始議場を無難に導き往く才氣、力量は之を多とせねばなるまい、而してどこにか重望がある、それが潛んで居る、潛んで居るどころでは無い、それが幾分露れて居る、德川公首相と爲られたと聞いたら、天下は其の主義政見は別として、必らず多大の敬意を以て迎へるに相違ない、其の閣僚を統率し、一般の吏僚を指揮する手際も、屹度十分の重味を示すに相違ない、それが首相としての一大利器であり、大切の資格である、公も亦首相として考へらるべき將來の一人であらう、事實、貴族院議長として將た衆議院議長として、既に才幹、器量を發揮した人は適當なる首相の候補者では無いか。

◎衆議院の最大黨が同志會である以上は、其總理たる加藤男はどうしても首相候補者の一人であらねばならぬ、或は同志會を政友會に較べて、其の品質、程度が劣つて居るやに觀測する者のあるのは、何かの偏見であらう、僕は少しも左樣に感じない、或は加藤男を原氏に較べて、原氏には首相たる器量があり、加藤男にはその器量が無いやうに言ふのは、又餘りに偏した不明の觀察であらう、僕は加藤男を以て首相に適した才略あり、閲歷あり、趣味ある一人だと信じて居る、而して適ま同志會の首領たり、事情も亦鬼に金棒、工合好く出來て居ると信じて居る、然し乍ら我國の政黨は、未だ政黨獨自の力を以て直に內閣を組織し得るまでに發達して居ない、貴族院の勢力あり、樞密院の勢力あり、宮內省の勢力

あり、将た院外浪人の勢力あり、各種の勢力に旋ね亙つた包容力あり、德量のある者で無ければ到底首相たるに堪へない、此點に於て加藤男には未だ足らざる所あり、若くば未だ足らざる所ありと疑はれ、嫉がられ、けちつけられて居るのは、甚だ遺憾である、男は尙待つ所あらねばなるまい、但、氣力は十分である、見識も十分である、閲歴も十分である、男は十分持重すべきであると思ふ。

◎政友會が凋落したゝめ原敬氏の前途が既に塞がつたと言ふのも亦間違ひであらう、政友會の衆議院に於る勢力は目下一百名そこ〳〵であるが、然し乍ら貴族院でも三十名足らずの政友會はある、微力ではあるが、日本の政黨で貴族院に根據を有して居るのは政友會だけである、これは政友會の非常の强味である、他の同志會も國民黨も全く味ゐ知らざる特種の强味である、政友會の力を測る者は、獨り衆議院に於るその百餘の頭數を算するだけでは可けない、それは政友會の力の半面のみを觀る者である、併せて貴族院に於る頭數をも算せねばならぬ、然らずんば其の全力を測ることは出來ない、特に貴族院に於ては其の頭數を算するだけでは足りない、若し頭數だけを算すれば、僅に二十名か、三十名か、指を屈するだけの數である、然も貴族院に於てはこれが政黨の萌芽である、その基礎である、貴族院に於る政友會の基礎は既に定まつた、之に對し非政友派は未だ其の基礎を有たない、即ち貴族院に於ては、政友會の有に對し、非政友派は無である、一を以て二に對すれば其の一は少數であるが、若し零を以て一に對すれば其の一は絕對の大數である、其の數は如何に大なるか測り知られない、同志會は衆議院だけの政黨で、政友會は貴衆兩院に亙つた政黨である、これ政友會が本年の議會に較々人目に聳へる活動を爲し得た所以である、既に此勢力あり、若くば因緣がある、政友會は未だ以て輕視することが出來ない、原君の前途は尙塞がつたとは思へない、但、加藤君に若し首相たる器量が無いと言ふなら、原君にもそれは出來ない、原君にのみその器量があつて加藤君にそれが無いと言ふのは誤りであるけれど、僕は原君にも、加藤君にも齊しく其の器量があると信じて居る、考へて見玉へ、首相といふ仕事に何の特別の難い所があるか、大抵の人なら大抵にやれる筈である。

◎寺内伯、平田子の名も屢々聞へる、僕は前の如く大抵な人には大抵やれると信ずるから、寺内伯でも平田子でも、其の人と爲りは皆以て十分だと思ふて居るが、但、平田子は曾て桂公から首相になれと勸められた時、自ら其の器に非ずと辭退したと聞いたことがある、寺内伯は雄心落々たりとの評判の反面に、一介の武辯を以て任じ、朝鮮、滿洲、邊外、の事に其の興味が逐々熱しつゝあるやに聞いて居る、而して二君とも、貴族院、樞密院、宮内省あたりの感じは稍いゝとしても、その衆議院の政黨に對する受けは到底加藤男原氏の比に非ず、加藤男原氏にして之に手古摺るといふからは、二君は尙更手古摺るべきである、勿論、この場合には、政友會にも、同志會にも、尙御用黨の競爭は起るであらうが、左りとて加藤男は固より原氏といへども、その大隈伯と共にし、西園寺侯、桂公、伊藤公等と共にした場合の如く、素直に二君の指命を奉ずる譯には往かない、此點に於て兩君の首相たるには著大の弱味がある、加藤男の出で、原氏の出でゝ首相たるよりも、兩君の立場に弱味がある。

◎僕は略ぼ以上の如くに觀ずる、隨つて大隈伯を引退せしめ、新内閣を作現するもいゝが、以上の如きは餘りに換り榮の無い内閣だと思ふ、ものゝ一年持續するかどうか、その一年、國民の嚮望を繫ぎ得るかどうか、それが疑はしいと思ふ、折角に變へるなら、換り榮のある、もつときび〳〵した、はつきり自力の上に立つ内閣に爲つて欲しいと思ふ、左樣にしたいと思ふ、左樣にする工夫は無いかと思ふ、而してそれを工夫し組み立

てることが今日に大切なる務めで、特に憲政の發達に心ある者の最も注意し戒愼すべき點だと思ふて居る、

◎大隈内閣は議會後に沒落するか、敗退するか、それは未だ分らない、然し乍ら足下のお問を招いただけ一部政界には其の樣の噂がある、それだけ大隈内閣の聲望は一部の間には落ちた、僕自身すら殘念に飽かず思ふ所は多々ある、況や世上反對者に於てをや、去り乍ら僕は議會を終へて直に去る内閣を無責任の内閣と思ひ、立憲の常軌を解せざる内閣と思ひ、二十餘年の昔、例へば松方内閣の如きが、此くして去つたのを非常の失態なり變態なりとして攻擊したことを今も尙正理と信じて居る、既に議會を終へた、その議會の協贊を經たその施設上の責任は當然に大隈内閣に在る、大隈伯はよし老たりといへども、其の責を辭すべきで無い、伯は尙踏留まつて報效を期すべきであると思ふ、萬一伯老いて今後の負荷に堪へずとならば、例へば廣翁がローズベリー卿を擧げて其の任を卸した場合の如く、自家の政見を繼ぎ之を遂施する平生の主張あり、領會ある者を擧げて代らせねばならぬと思ふ、左すれば其の後繼者は固より原氏にあらず、又寺内伯でも、平田子でもあるべからずと思ふ、加藤男は比較的それに近い人である、然し乍ら前述の如き嫌ひがある、已むなく伯を留めて、男の成熟を急ぐより外ないと思ふ、然らずんば反對派の力を以て正面より大隈伯の内閣を打ち壞すのみである、さて、さらなると反對派に其の實力があるかが疑はしい。

◎議會を開かねば已む、既に議會を開いた以上は内閣の進退は議會で決すべし、議會以外で決すべきで無い、既往の勢力家は此理を悟らず、悟らねでは無つたらう、悟つて居ても過去の惰勢に驅られ、内閣の進退を暗處で私議して來つた、これが既往の弊であり又現今の弊である、これぞ我國の立憲政治が人民の興趣を惹き起し得ず、その活力を喚發し得なかつた所以である、勉めて此弊を矯めねばならぬ、大隈内閣を此際に辭せしむるとはその趣意に悖る甚しきものである、此の如きは議會に信用のあり勢力のある内閣を、議會に關係なくして去らしむる扱ひである、理不盡の甚しきものである、非立憲の甚しきものである、僕は大隈内閣が議會以後に倒るゝことに同意を表し得ない。

◎世にはそれを貴族院との約束の如く言ふ者もあるが、貴族院は何時左樣な意思を表明したか、表明せざるその意思に幾何の權威があるか、僕は左樣なことは憲政時代に云爲すべきものでは無いと思ふ、大隈内閣は有力にせよ、微力にせよ、若くば無力にせよ、進退の機は只一つ、議會の公然たる形勢若くは議決の上に繫くべきである、又それに繫けて居ると信ずる、その點から言ふと、大隈伯若くば大隈内閣の議會後に辭するといふことは有るまじき事のやうに思はれる、のみならず、有らしむべからざる事のやうに思はれる、僕は、大隈内閣を尙留めて其の責任を果させたいと思ふ、これは僕が大隈内閣に若干の緣故があるから、それに惹かれて申すのでは無い、反對派も、此際大隈内閣の更迭を急がずに、その實勢力を涵養すべきであると思ふ、反對派の實勢力成り、議會の形勢さへ定まれば、大隈内閣は其の時に辭する、それに未練は無いが、今日は決して其の時機で無い、僕は憲政進化の理法が、此時に、もつと冷かに研究されんことを希望する。

▽有力なる内閣を希望す

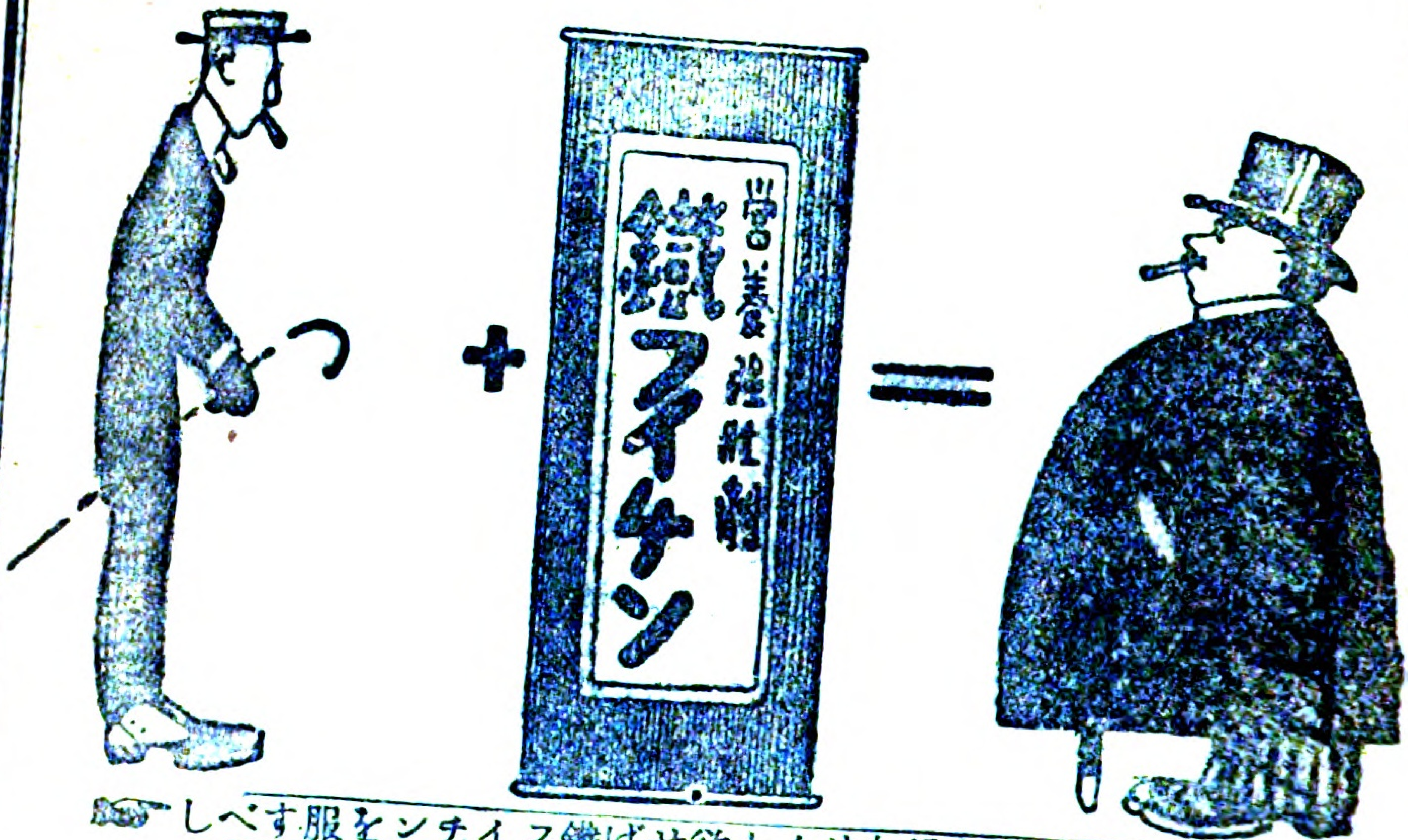
小川平吉

日本の近來の政變の場合に於て、新らしく出來る内閣と云ふものが、六

體は世人の豫想とは違つて頗る意想外の内閣が出來るのが例である。桂公の第一次内閣を組織した時などは、大變に行惱んで一月も掛つてやつと出來上つた。又一昨年の如きもいろ／＼に變化して遂にお鉢が廻つて、世人の豫想しなかつた大隈伯が飛び出して來た。若し今回も政變かあつて大隈内閣が罷めても來るべき新内閣を組織する人は何人であるか一向に豫想が着かぬ。之を當てる人は政治家よりも寧ろ易者であらうと思ふ。故に未來記としては私は全く想像が着かない。斯う云ふ事は一體政治上に於て餘り喜ぶべき現象ではない。何となれば之は政治に關する國民の思想に一定の標準もなく、又法則もない證據と思ふ。之は立憲政治でも專制政治でも、政治上耻づべき事と思ふ。凡て法則なり標準なりがある以上は、國民全體の希望なり想像なりが有るべき筈だ。獨り政治のみならず、法則や標準は世の中の凡てのものに有るべき筈である。然るに日本の政治界に於ては事實上之が無い。具體的に云へば政治界に横はつて居る力が種々様々で、或は元老と云ふもの或は政黨と云ふもの或は官僚と云ふもの或は樞密院と云ふもの、いろ／＼の異分子が雜然として不規律に横はつて居つて、其不規律の力が各方面に向つて又不規律に働く。其結果として内閣が出來るのであるから、詮り時の拍子によるので、豫め分らぬのである。之を例へば英國あたりの政治は規律正しい軍隊の如きもので、日本のは百姓一揆の如きものである。鎧を着たもの、鐵砲を持つもの、飛行機に乘るもの、草鞋を穿くもの、靴を穿くもの、甚だ亂雜を極めて少しも整頓して居らぬ。山て政權の何處に落着くかは全く其時の成行によつて決する事になつて居る。

然し吾々の希望としては國家の政治について、主義主張を持つて論爭をして居るものある以上、一方の人間が罷めれば反對の人間が代つて其主義主張の實行を試みると云ふ事が立憲政治の常道であり、否寧り立憲政治のみならず凡ての政治の大原則であらうと思ふ。此大原則から云へば、今の内閣の反對たる政友會なり國民黨なりが内閣を組織するのが政治の常道である。そして其他の隱れたる力であるとか、又彼方此方(あちらこちら)に散在して居る力となつて居るもので、凡て主義主張の類似したものはその政黨を援けてやるのが當然の事と思ふ。然しながら今日我日本の政界は之とは反對で、表面に立つて正々堂々國家の爲めに主義主張を立てゝ來たものが内閣を組織せずして、隱れた力だとか諸方に散在して居つた力だとかが、かゝる場合に俄かに飛び出して内閣を組織すると云ふやうな事が無きにしも非ずである。之は前にも云へる如く、日本の政治界の不規律に原因するもので、當り前から云へば斯かる問題が雜誌の題目となると云ふ事が既に我政治界の進歩しない證據で甚だ慨かはしい事であると思ふ。

若し前述べたやうな政治上當然の大原則大法則が行はれぬとならば、せめては此世界の大變動に處して國家の面目を一新して、百年の大計を立てまた今日まで内外に對して失つた信用を恢復し、殊に隣邦支那の我に對する一般の思想を變化せしむるやうな有力なる内閣が欲しいのである。之は憲政の常道とは多少筋道が違つても、日本の如き變體の政治組織の國に於ては、殊に今日の如き内外に對して力ある内閣を必要とする場合に於ては、先づ止むを得ざる事として之を許さゞるを得まい。何となれば内外に對する信用を恢復し國家の基礎を固めると云ふ事が、今日の我國の最大急務である以上は、政治組織の議論は一時休んでも力ある内閣の出現を希望せざるを得ないからである。然し之は呉々も云ふ通り立憲の常道を選む能はざる我國現下の政狀に制せられたる、止むを得ざる措置たる事に言ふを俟たたい。



腦力及體力を増加せんと欲せば鐵フイチンを服すべし

神經衰弱
身體衰弱
生殖器衰弱

特効新藥

鐵フイチン

鐵フイチンは食欲を進め身體の榮養を佳良となし體重を増加し殊に神經系の疾患及生殖器衰弱を治癒し服用後短時日にして著しく身體全般の健康を増加す

定價一罎（百五十瓦入）十七日乃至廿五日分　金貳圓四拾錢

説明書は神戸市江戸町百四番地瑞西バーセル化學工業會社日本學術部より無代進呈す

發賣元
東京日本橋區岩附町　友田合資會社
大阪市東區道修町　武田長兵衛

全國の有名藥店に販賣す萬一品切の節は直接發賣元宛御注文を乞ふ

(中付二の四)

内外時事評論

法學博士 古川學人

貴族教育の刷新

一月廿二日宮内省令を以て學習院評議會規定なるものが公布せられ、翌廿三日評議員廿名の任命を見た。其中一名は學習院長で、宮内省の高等官及び同待遇職員中から三名、有爵者中から十名、教育に經驗ある者から六名、合計廿名である。會の目的は宮内大臣の諮問に應じ、學習院に關する重要事項を討議し且つ意見を述ぶると云ふにある。法令にあらはれた表面の目的は左の如く極めて漠然たるものであるけれども、思ふにかゝる新規則を設けた根本の精神は、此際貴族教育の一大刷新を圖るといふにあるのではあるまいか。

學習院は貴族教育の唯一の機關である。莫大の金を投じ、あらゆる便宜を集めて、最も贅澤に經營せられて居る。然るに從來之にも拘らず何等誇るべきの成績を擧げて居ないのは我々の甚だ遺憾とする所であつた。之を他の教育機關に見ん乎。ともかくも帝國大學は社會の諸方面に幾多の人才を出して居る。高等各種の專門學校も亦それ〲有要の人才を出してをる。而して學習院からはどれだけの人才を出して居るか。加之、學習院にはいろ〱の積弊があつて容易に之れを拔く事が出來ないと聞いて居る。此弊害を矯正する爲には先帝陛下のお鑑識に協ふて院長の重職を辱ふした流石の乃木大將すら多大の困難を經驗したといふことである。要するに學習院の教育的實蹟は從來毫も擧つてゐない。其處に學ぶところの子弟の何等貴族らしい豪邁の氣象なく、風俗徒らに華美に流れ、意氣日に銷沈して、其學術的成績も亦概して極めて劣等である。無論多少の例外はある。けれども學習院に於て優等生といへば、多くは平民の子弟の學習院に入學を特に許されたものに限つてをるといふのが一般の有樣ではないか。而かも學習院の優等生にして平民と競爭して、例へば高等學校の入學試驗に合格すると云ふが如きものは極めて少く、偶々入學することを得ても、中以上の成績を以て大學を終るものは極めて少い。大學などに於ては、學習院出身といへば成績の最も劣等なることの表徴となつてをる。斯くの如くして學習院は能く其設立の目的を達したりといふことを得べきや。否、其

存在の理由を有するや否やと疑はざるを得ない。是れ學習院の教育的施設の上に、今や一大刷新を加ふるを急務とする所以である。

學習院は何の爲めに設けられたか。曾て某法學博士は、學習院設立の趣旨を次の如く説明したことがあつた。曰く、我國に於ては貴族は法制上種々の特權を有してをる。否、見様によつては種々の特別義務に服して居るといはなければならぬ。例へば公侯爵は成年に達すれば當然貴族院議員になる。伯子男爵も亦同族の互選によつて貴族院に列する。是れ權利であると共に又公けの義務である。斯の如き特別義務を負擔して居る以上、貴族はまた其義務を適當に盡すに足る丈けの特別の教育を受くるの權利がある。是れ學習院存在の理由であると。議論としては随分得手勝手の説明であるが、然し貴族に特別の教育を與へ、貴族らしい人物を造ると云ふが本來の趣意であることは、固より一點の疑はない。して見れば、學習院は即ち貴族を養成するところである。然らば貴族とは何かと云ふに、國家に於て最も優等なる人格であらねばならぬ。故に學習院本來の目的は、國家に於ける最優等の人才の養成に在らねばならぬ。

元來國家が貴族といふ制度を設けた趣意は、啻に國家に功勞のあるものを厚く待遇するといふ奬勵的の意味に出づるのみのものではない。更に彼等を特別なる階級に置き、之に附帶して各種の特權便宜を賦與し、啻に一代間永く國家に於ける優等人格たるの名譽を與ふるのみならず、又個人的に備はる才德並びに其他位に伴ふ特權便宜を子孫に傳へて、子々孫々長へに國家を指導するに足る優等階級たらしめんとするにある。遺傳の法則に誤なき限り、偉人の子の血管には偉人の血が流れて居るべき筈である。健全なる社會は常に偉人の指導を俟つことを必要とし、而して國家は常に偉人の養成を怠るべからざる限り、最も多く偉人になり得る資格を有する偉人の子弟に十分教育を與ふるといふことが、偉人を作るの一番の近道である。加之偉人が子孫相繼ぐ時は、自ら其人に貫祿が備はり、社會一般を服する威嚴が重くなる。徒らに門閥によつて人を上下し、爲めに其器にあらずして人を命令するの地位に上るが如き事になれば、自ら社會に不平も起り、又世の中の治りもよく付かないものであるが、社會的に又歴史的に國民の尊敬を受くる、即ち歴史的社會的の權威を有する門閥の子弟が、更に教育の力によつて實

際世の尊敬を受くるに足る丈けの才識と品格とを備ふる事になれば、彼等の社會に於ける精神的指導の効果は極めて深甚にして、社會の治りは理想的につく。斯ういふ意味に於て貴族の地位は社會に於て之を尊敬し、之を擁護すべきものである。貴族は其新華族たるものは勿論、舊華族と雖も、皆偉人の家柄である。故に子弟は大體に於て教育さへよければ、偉人になる素質を有するものであるから、國家は之を教育するに當つて、一つには父祖の勳功を追懐して大いに忠君愛國の思想を錬らしめ、又社會に於ける自家の責任の重大なることに想到して大いに自ら重んずる所あらしめねばならぬ。學習院は即ち此使命を以て貴族の子弟を教育し、彼等をして名實兩つながら貴族たるの體面を備へしむるものでなければならぬ。即ち貴族の子弟をして、顧みては父祖の勳功の赫々たるを懐ひて自ら期せずして激勵する所あらしめ、進んで將來を見れば國家の彼等に期待するところの極めて大なるに感激し、彼等をして大に發憤興起せしむる所なければならない。國家の與ふる厚遇は、彼等に勉學上あらゆる便宜を供給する。社會は又彼等の地位に多大の尊敬を拂ふて、自ら彼等の自重を促がす。斯くの如くんば貴族の子弟は、自ら俊秀非凡の資格を備へざらんとするも得ぬ譯になる。彼等に比較すれば何等の便宜、何等の特權を有せざる平民の子弟は、到底彼等と競爭は出來ない筈である。平民であつては其最も俊秀なる子弟と雖も、貴族の子弟を競爭するは、恰かも長きハンデキャップをつけられて同一距離を走るが如きものと云はざるを得ぬ。されば學習院は一面に於ては國民元氣の源泉であり、道徳的品格の模範場であり、而かも最も秀でたる青年の集まる所でなければならぬ。西洋の貴族教育の機關は實に皆斯くの如きものである。英吉利のエートン及びハローの中學校、又ケンブリッヂ、オックスフォードの兩大學の如き皆此例に屬する。近年まで英國の歴史的人物は必らず此等の學校の供給するところであるといはれて居つた。獨逸は貴族教育の爲め特別の大學はない。けれども各大學に於ける貴族子弟の「團體」の如き、其剛健なる風格に於て實に獨逸青年の誇りである。中學校に至つては、無論日本の學習院などゝは其組織を大に異にするけれども、自ら貴族の子弟の專ら集まるところがあるが、此等は其智育に於て德育に於て將た體育に於て、獨逸に於て最も勝れたる學校となつて居る。金があり、幾多の便宜があつて、欲するところ

のもの悉く得られざるなく、理想的に學校の經營が出來るのであるから、其生徒の性質が惡くならう筈があり得ない。然るに不幸にして我國に於ては、此あり得ざる現象が普通當然の出來事となつて居る。學習院といへば最も劣等なる學生の集る所、貴族富豪の子弟といへば必らず低能なる學生と極まつて了ひ、人偶々學習院の教育的効果を談ずれば、對者多く嘲笑を以て之を迎ふるといふのは、世人之を當然として毫も怪まないが、之れ程不合理なことはない。多大の金を使ひ、最も贅澤に資本をかけて、出來た品物が極めて劣等であるとは、之れ程不思議な現象はないではないか。之れ抑々何が故に然るか。是れ識者の大いに研究を要する問題ではあるまいか。而かも此問題は單に貴族教育の効果が其努力に比して甚だ擧らないといふ丈けの問題ではない。貴族教育の効果擧らざるが爲めに國家の蒙る禍如何に大なるかを思ふ時は、之は帝國將來の健全なる發達進歩の爲めに決して等閑に附すべからざる大問題である。之れ貴族教育が今に於て一大刷新を必要とするといふ所以である。

貴族教育の効果擧らず、學習院の供給する貴族の子弟が殆んど總て不肖の凡才であることは、結局は第一に貴族といふ地位に自然と備はる因襲的權威に對して一般人民が自ら鼎の輕重を問ふといふことになる。其結果社會が中心を失ひ、ドングリの背競べになつて收まりがつかなくなる。幸に其仲間の中に非常に勝れたものでも出ればよいが、然らざれば利益勢力の爭を醸して社會が大いに紛亂する。今日我が國の自治制の効果擧らざるが如きは、專ら茲に原因する。西洋で自治制の成功して居るのは、田舍にあつて基督教牧師と小學校教師の進んで社會風教の中心となつて居ることにも原因して居るが、然し主としては昔封建時代に其地方の小大名であつたものゝ子孫が、貴族として夫れ自身多大の尊敬を受けて居る外、尚其貴族たるに背かざる品格を以て其地方を抑へて居るからである。我國政界の先輩は只徒らに自治制の形式を輸入するに急にして、此點に着眼することを怠つたのは甚だ遺憾であつた。若しも此等の小貴族の教育に留意して、彼等をして各々其地方に於て眞に人民の心服を得る者たらしめしならば、自治制は首尾よく成功したであらうと思ふ。獨り地方の自治制ばかりではない。一般に貴族が名實相副ふの優等の人物であれば、我國の社會が今日の如く亂雜を極めなかつたらうと思ふ。而かも我國に於て

は、貴族といふ地位に彼の各種の特權の結果として、其器にあらざるものも平氣で高い地位を冒して居る。其結果は一方には地位の惡用、從つて腐敗、他方には人民の之に對する不平反抗となり、一には社會の風教を墮落せしめ、二には社會の秩序をして益々亂雜ならしむる。我國今日の狀況は、正に如斯ものがあるのである。

貴族の子弟が本來必ず平民の子弟よりも優れねばならぬ譯は、先にも述べた通りである。現に西洋諸國では、大體に於て優等なる青年は富裕なる貴族の子弟に多いといつてよい。然るに獨り我國に於て貴族の子弟の概して劣等なるは如何なる理由に基くであらうか。一つには、我國の貴族には一般に最近の祖先に何等誇るべき偉人がなかつたといふことにもよるだらう。新華族については固よりいふを俟たぬが、舊華族についても、自己の祖先の名を竹帛に垂るゝものは、公卿にあつても、大名華族にあつても、數百年以前の人々に多く、德川氏時代に至れば、政府では其覇業を固むる爲めに大名や公卿の發達を抑へるを必要とした爲めにや、三百年の治世の間に此等貴族の人物が餘程下落したやうに見ゆる。故に少數の例外を除いては、藩祖以外には餘りエライ人物がないといふ有樣になつた。されば彼等は貴族といふ地位に置かれても、振り返つて自己の祖先を追想し、其家系に連る幾多の偉人より無言の教訓を受くるといふことがない。此點が我國の貴族の子弟をして平凡ならしむる一つの理由であらう。然しそれよりも大なる原因は、今日我國の貴族社會が一般に子弟の教育について眞面目の考がないといふことに歸すると思ふ。貴族社會の多くのものに、家庭紊亂の事實を聞くは珍らしいことではない。少しく體のよいのでも、主人が骨董や能樂に沒頭する位が關の山で、子弟の教育などゝいふ眞面目の問題を眞面目に考へて居るものは極めて稀れである。固より彼等は我が子弟の惡しかれと望むものは一人もない。けれどもよくしたいといふ希望丈けあつても、如何にして子弟を導くべきやの正當にして且つ熱心なる考に頭を費さずしては、到底子弟の教育を全うすることは出來るものではない。多くは浮薄にして傲慢なる考を以て學校などに對するが故に、教育者の方でも從來思ひ切つた教育が出來なかつたやうだ。學習院に於ける弊害の一つは、當事者の方で嚴格に教育せんとすれば、何時も父兄の方から故障が起るといふことにあつたさうだ。即ち父兄は、自分の子弟に對しても學校の教官が貴族の

禮遇を以てせんことを要求するのである。詰り父兄が惡いといふことに歸する。教師が斯くの如き制肘を父兄から受けては、到底思ふ通りの教育は出來るものではない。今の儘に放任しては、學習院は子弟に卑近なる智識を流入する不完全なる工場に過ぎないものとなる。學習院の教師は、我儘なる坊ちやん孃ちやんに對し、恐る〱物事を教へる卑屈なるモリに過ぎない。斯くして將來の貴族を養成せんことは、木に據つて魚を求むるよりも難い。此時に當つて宮内省は學習院評議會の制を定めて貴族教育の刷新を計らんとせるは、遲いながらも頗る時弊に適切な處置と言はねばならぬ。予輩は此組織より諸般の改革が生れんことを希望し且つ期待する。中にも評議會に對して吾人の切望に堪えざるは、偉大なる精神的教育家を擧げて之に教育の全責任を一任し、之に對する父兄側の干渉を全然排斥する方法を講ぜんことである。更に進んで若し與ふべくんば、總て通學を廢して寄宿舍に入れ、嚴重なる監督の下に最も堅實なる教育を施すべきである。貴族のことであるから金はいくらかゝつても差支はあるまい。然らば寄宿舍に於て五人か十人に一人位の監督者をつけて、最も嚴重に最も親切に教導せしむるの方法をとつたらばどうか。斯の如きは我輩一個の空想のみではない。現に予輩が獨逸プロシアの或貴族學校に於て之を目撃したことがある。何事も獨逸の遣方に驚嘆する我國の識者は、軍國主義の形式ばかりでなく、かかる教育的施設の方面に於ても獨逸を學んで貰ひたい。

南支昨今の形勢

前號『南支那の動亂』の起稿以來、南支の形勢に異常の變化はない。北京政府が聲言した如く、動亂は忽ち鎮定するだらうといふ形勢のあらはれざるは論を俟たないが、獨立軍の景氣も亦此派の聲言するが如く盛な發展を見るに至らない。只今日までのところ大體に於て南方の軍容は些か北軍に比して優勢を示して居る。只彼等は此優勢を何時まで繼續し得るか又此上更にどれ丈け發展することが出來るかは將來の成行に徴するの外はない。

北京政府の派遣せる討伐軍は今日何處まで進んで居るか。北京政府は先に長沙より湘江を遡つて廣西に入るとか、又は江西の軍隊を廣西へ進むとか聲言したのであつたけれども、此方面には今日までのところ更に

兵を動かして居ないやうだ。之は湖南軍を廣西に分つことが出來なかつた爲めか、或は江西の李純を動かして政府の用をなさしめ得なかつた爲めか、よく判らない。事によれば廣西軍未だ起たざるが故に別に討伐軍を差し向くるの必要がない爲であるかも知れない。孰れにしても此方面には政府軍は何等の發展を示して居ないが、只之が爲めに吾々は廣西の向背は北京政府にとつて毫も心配はないと見る譯には行かない。予輩をして想像を逞うせしむれば、廣西に兵を入れないのは、入るゝ丈けの兵がない爲めであるかも知れぬ。廣西は大丈夫起たないといふ見込の定つた爲であるか如何か。ウッカリ兵を入れては却つて廣西を驅つて敵に就かしむる怖れある爲めでなからうかとも考へらるゝ。

次に洞庭湖の西岸常德から阮江を遡つて貴州を衝くといふ北京政府の聲言は、幾分實現されて居る。一月廿七日の漢口電報は、大兵已に常德を出發すと報じて居る。けれども阮江を遡航して大兵を送ることの不可能なるは、前號に於て委しく說いた通りである。果して政府は大した兵數を送つて居ないらしい。爲めに却つて湖南省の西境は貴州軍の侵入を蒙り、二月十日頃の電報によれば、湖南の晃州、阮州の二市は早くも其の占領するところとなつた。氣早の上海電報の如きは湖南も亦日ならずして獨立を宣言すべしとさへ傳へて居る。二月上旬北京政府は、南軍の全力を四川方面に傾注して居る間に貴州方面より其虛を衝き一擧にして獨立軍の根據を粉碎せんと聲言して居つたが、實のところ此方面に派遣せる兵數は割合に少く、其目的も敵を衝くにあらずして、精々境上の警備を整へて湖南省內部の動亂を防がんとするにあつたらしい。然し此目的すら今や段々破られて居るやうに見える。只南軍とても其勢に乘じてドン／＼進出し能はざる事情にあることは、之を見逃してはならぬ。

之に反して四川の方面には、北軍は餘程力を入れて居るやうである。楊子江を遡つて兵を四川省に入るゝことの困難は、之れ亦前號に之を說いた。それにも拘らず北京政府は重慶に討伐軍の本據を置いて南軍の進擊を邀擊するの方針を立て、あらゆる困難を凌いで大兵を此方面に送つたらしい。一月十八日の電報には曹錕軍の先發隊百餘名十五日夜を以て重慶に入るを報じ、次いで二月五日の電報は、張敬堯兵三千五百を率ゐて二月一日重慶に着すとあつた。二月十四五日瀘州附近に於て南北の激戰があつたといふことであるか

ら、北軍は重慶を本據として瀘州の邊まで出張つて居るものと見える。此戰爭にて南軍は敗れて納溪に退却したとあるから、南北兩軍は川を隔てゝ瀘州と納溪とに相對して居るものと見える。過般重慶の陷落を報ずるものがあつたけれども、此地丈けはまだ安全なものと見える。要するに此軍は全力を四川に注ぎ、重慶を固守して四川の死命を敵に制せられざらんと努めて居るやうであるが、いかに防備には勝利を博しても、五千や一萬の兵隊では、更に進んで雲貴軍の本據に進擊するといふことは不可能であると思ふ。故に北軍は勝つた所で大したことは無い。

然らば北軍に對する南軍の形勢は如何。之れも實は豫期の如く振つては居ない。當初獨立軍の宣言によれば、今頃は南方の五省を連ねて兩湖方面までを席捲して居るべき筈であつた。貴州は一月十七日を以ていよ〳〵雲南と事を共にすることになつたといふが、廣西の去就は今尙明白でない。廣東の如きは態度最も曖昧である。只僅かに意を强うするに足るものは、貴州軍の一部が湖南に進出して全省の人心を幾分動搖せしめ得たことゝ、四川省に於ては緩漫ながら着々成功して遙かに重慶と成都とを壓するの地位を占めて居ることゝである。四川に於ける獨立軍は、一方は重慶を目標とし、他方は成都を目標として進んで居るやうである。重慶に向へる一隊は一月卅一日に途中永寧府の師團長劉存厚の內應するに會して、更に勢を增し、以て瀘州に迫つたのである。一說には已に瀘州を占領したといふけれども、少くとも對岸の納溪までは進んで居るやうである。又成都に向へる一隊は、一月廿日江上の要都叙州を占領し、廿三日には鹽の產地として天下の富を集めたりと稱せらるゝ自流井を占領し、更に岷江を遡つて二月八日頃嘉定附近を占領したとのことである。此上何處まで進むかは容易に斷言し得ざるも、第一次革命當時重慶にあつて四川省內に絕大の勢力を扶殖せる熊克武の、南軍一方の將として來れる爲め、四川軍の旗を飜して之に內應するもの頗る多しとのことであるから、此方面に於ける南軍の勢力は、蓋し侮り難きものがあるだらうと想像さるゝ。若し重慶にして南軍の手に歸せんか、四川は即ち北京政府のものではない。成都にして南軍の手に歸せんか、其武器工廠は南軍の軍備に大に加ふるところがあるだらう。只然しながら、今日までのところ、南軍の成功して居るのは北軍の實力の及ばざる方面に限つてをる。北軍の守

備嚴としてをる地方にあつては、南軍は殆んど一指をも染むることが出來ないのではあるまいか。なぜなれば南軍は將卒如何に勇猛なりとしても、武器と彈藥とに著しく缺亡してをるからである。南軍の武器彈藥に缺亡してをることは、始めより解つて居ることであるが、更に彼等が獨立以後に於て全然武器輸入の便を缺くことを思ふ時に、如何に此事が彼等を苦めてをるかゞ想像せらるゝ。假りに雲南軍が外部より武器の供給を受くるを得たりとして扨て輸入の道はと言へば南佛領よりするか、又は北楊子江よりするかである。而して此兩道共に武器の密輸入に對する警視嚴重を極むとすれば、殘る唯一の道は廣東よりする外はない。然るに廣東の態度や實に甚だ曖昧である。故に南軍は獨り四川に於て着々成功を見ることの外、更に廣東を手に入れずんば、容易に豫期の如き一大躍進を見ることが出來ないのである。尤も最近の報道は頻々として獨立軍の成功を傳ふる、曰く貴州軍の進出の爲めに、湖南が動搖し始めたと。眞に湖南が動搖し始めたとすれば由々しき大事であるが、然し之は實際は左ほどではあるまい。曰く山東陝西に反袁運動起り、殊に後者の動搖は大に北京政府を苦しむと。二月十七日の新聞にあらはれた電報によれば、所謂鐵血救國團なるものが全國の各方面に人を派して反袁運動を煽つてをるといふが、山東陝西の動搖は其結果であるかも分らない。此種の動亂は南軍の勢力と共に日を經るに從つて加はることであらう。けれども當分のところでは、此等の運動と雖も、南軍其ものがもつと聲容を盛ならしめ得るにあらずんば、十分纏つた勢力とはなり得まい。而して南軍が此上大いに振ふといふことの爲めには、どうしても廣東の策應を必要とするのである。廣東起たずんば、廣西も亦之に制せられて容易に起つことは出來まい。從つて南方に對する物資供給の道も杜絕さるゝのであるから、要するに廣東の去就は南北對峙の形勢の上に極めて重大なる關係を有するのである。

然らば結局廣東の去就如何。廣東將軍龍濟光は今後果して如何なる態度をとるであらうか。之れ今日我々の大いに刮目して見るを要するところである。今日までのところでは彼は極めて曖昧なる所謂觀望的態度をとつて動かない。けれども表面彼は未だ忠實なる袁の部下と見られてをる。是に於て或人はいふ。彼は本來岑春煊にも恩義があるが、又袁世凱にも恩義がある。故に革命軍に對してどれ丈けの決心を以て對抗するか

は解らないが、然しまた袁世凱に對しても反噬せざること丈けは疑ない。現に彼は新たに袁世凱より雲南査辦使に任せられたる兄の龍觀光に、手兵二千を授けて一月廿五日を以て廣東を發し雲南の境に近き百色（廣西省）方面に向はしめた。之れ固より必しも雲南討伐の決心を語るものなりと見るべからざるも、少くとも彼が革命運動の飛沫廣東に侵入し來るを防がんとするに意あることは、之によつて明であると。此説は二月十一日の本邦新聞にあらはれたる電報「龍觀光は貴州の南寧に於て陸榮廷と會見し、雲南軍の侵入を防ぎ以て協力して省内の秩序を維持することに一致し、更に北京に向つては公納金の中止を求むることに相談せり」との報道に照應する。南北兩軍の間に立つて中立を守り、自家の領域を兵燹の災から免れしめようといふのが多分彼の本音であらうと思ふ。けれども一方には又彼を以て極端な袁派となし、南軍の勢力を挫き共一致を攪亂せんが爲めに彼は現に極力運動してゐるといふものもある。曰く、彼は雲南軍の一方の將張子貞と姻戚の關係あり、之を手蔓として盛に辛辣なる苦肉の計を弄して獨立軍内部の攪亂に餘力を殘さない。陸榮廷の如きも確かに彼の買收するところとなつてをる。故に若し假りに雲南軍にして不幸にして内訌の爲めに自滅するが如きことあらんか、そは必ずや龍濟光の陰謀の結果であらねばならぬと。而して此説は二月十一日の上海中華新報にあらはれたる「李烈鈞の軍南方百色方面の廣東軍に向ふ」といふ報道と相照應するやうに見ゑる。予は龍濟光の態度は斯くまで北方袁に傾いて居るとは思はないけれども、之れも或る一部の有力なる社會に信ぜられて居る説であるから、一説としてこゝに掲げて置く。

之に反して又龍濟光を次の如く見るものもある。曰く、彼は暫く袁の命に從ひ、百色まで兵を出したが、固より鬪志あるにあらず。彼の暫らく北方政府の命を奉じたのは、爾かせざれば上海の楊善徳の軍の來攻を蒙るの恐あるが故である。若し夫れ陸榮廷に至つては、南軍討伐を名として公然廣東を經て兵器彈藥の輸入を受け、時機を見て鋒を逆まにして雲南軍に應ずるものであらうと。此説は廣東廣西の態度を以て、少くとも南方に對する好意的中立と見るものである。二月十日廣東發として新聞にあらはれた電報によれば、龍、陸の二氏は中立を守るに決し、連署して南方討伐の命に應じ難きを北京政府に電報し、若し飽くまで出征の命

に服するを迫らるゝに於ては、態度を一變して獨立を宣言すべき模様なりと報じて居る。之は前の報道と矛盾するやうであるけれども、强ち無根據の説とのみ斷ずることも出來なからう。若し夫れ二月十五日上海電報として時事新報にあらはれたる「劉顯世が陸榮廷の招ぎに應じ、相談の爲め南寧に急行した」といふ報道の如きは、眞否頗る疑はしきも、斯くの如き報道の現はるゝを以て見ても、龍濟光と共に表面中立を聲言した陸榮廷が、他方に於て貴州の劉將軍と氣脈相通じてをるといふやうな想像は、最早已に世人の絶對に排斥せざるところであるといふことが解る。斯くして予一個の考としては、廣東は形勢觀望の態度をこゝ暫くは改めずして、而かも密かに南方の誘拐を必ずしも避けないといふ態度を維持することと思ふのであるが、然しそれにしても、其去就の明白にならざる以上は、南軍にとつては確かに一つの心懸りであるに相違ない。

廣東の態度の曖昧なると共に、更にも一つ南方革命軍の憂とするところは、革命派の大同團結の完成せざることである。袁政府の精神的に已に孤立して居ることは先きにも述べた。けれども袁政府に反對するものは、總て皆今度の運動に共同して居るのではない。無論袁世凱に反感を有するものは、總て今度の運動に同情して居ることは疑はない。けれども積極的に此運動に參加するや否やは、いろ〳〵の考、いろ〳〵の行掛り、又色々の事情等があつて、必ずしも單純に決せられないのであらう。從つて此運動に對しては、有力者中、別に反感を表せざるも、進んで積極的に加擔するまでに至らざる者決して絶無でないのである。如何なる種類のものが此運動に加擔し、如何なる種類のものが參加を肯んぜないかといふ詳細のことは、予輩のまだ詳かにせざるところなるも、密かに信ずべき筋より聞くところによれば、革命主義者中の大立物なる孫逸仙の一派は、未だ十分に打解けて今度の運動に馳せ來らないといふことである。然るに孫逸仙派の加はると加はらざるとは、革命派の成功に非常な大關係がある。孫逸仙が餘りに空理空論に馳せ、實際政治家としての試驗には見事落第したとは、我々の已に四年前の革命に於て目撃したところである。以來支那に於ける氏の聲望は、此意味に於て大いに落ちた。大多數の青年支那黨からも、稍々愛惜をつかされた傾に見える。此點に於て支那の革命は、彼なしに十分に成功し得るのであるが、只茲に彼に於て見逃すべからざるは、彼

が海外在留の支那富豪の間に有する絶大の勢力である。彼が殆んど生れながらの革命家として五十年來死生の間に彷徨し、一身一家を忘れて主義の爲めに盡くした其の至誠と、又其渾然無私の愛すべき人格とは、人をして殆んど迷信的に彼を革命の神として崇拜せざるを得ざらしめて居る。故に彼の名を以てするにあらずんば南洋や亞米利加の方面から思ふ通りの金が集らないといふ事である。黄興が四百萬兩を有つて居るとか李烈鈞が二百萬兩を有つて來たとか言つても、兎も角も袁世凱を向ふに廻して革命運動に成功しやうと云ふには、之れ位の金は大海の一滴にも當らない。最後の勝利を得るまでに必要なる莫大の資金はどの道容易に之を得難いが、假りに之を整ひ得る見込ありとすれば、そは必ず孫逸仙の名を以てするものでなければならぬ。支那の戰爭に於て金の多寡が如何に有力な働きをなすかは、是れ亦第一次第二次革命當時に於て我々の實驗したところである。革命戰爭の勝敗は單純に兵員と武器との爭と思ふならば誤である。武器の代りに黄金を放射することが亦勝利を得る最大捷徑なることを忘れてはならぬ。なぜなれば、支那の兵隊は敵味方共に謂はゞ一種の傭兵である。傭はるゝ者は多くは苦力である。所謂愛國の至誠に燃ゆる革命主義者は主として將校以上の階級に屬し、手足となつて働く一般の兵卒には國家の爲めも社會の爲めもない。只約束の給料を貰へばよろしいのである。故に若し如何に精鋭の武器を備へ、豊富な彈藥を蓄へて居つても、期に於て拂ふべき給料の準備がなくんば、兵隊は踵を接して我を去るものと覺悟せねばならぬ。單に之ばかりではない。甲の軍隊に於て日給三圓であるといふ時に、乙の軍隊が假りに五圓を以て募集すべきを觸れ出したとすれば、甲の軍隊に於ては忽ち逃亡兵士相繼ぐを見るであらう。是れ從來屢々經驗したところである。斯くして金は革命運動の成功に缺くべからざるものである。而して其金の集ると集らざるとが、實に孫逸仙の態度によること多しとすれば、今度の運動を企てたものが如何にもして孫逸仙を起たしめんと焦慮するのは無理もない。然しながら聞くところによれば、何故か孫逸仙は容易に之に應じないとの事だ。予は其の何故なるかを知らぬ。只近年孫逸仙の一派と他の革命派との間に反目があつたといふことを耳にして居るし、又今度の運動については豫め何等孫逸仙の一派に謀るところなかつたとも聞いて居るから、此等の事情も固より有力な理由の一つであらう。然し之ばかりでもあるまい。尙いろ／＼複雜した情實の存することゝ思ふ。それ丈け又孫逸仙を動かすに骨の折れるものと見えて、現に岑春煊は此爲めに日本に來て居る。上海の新聞の傳ふるところによれば、彼は一月の二十三日春日丸に乘つて上海を發し、二十六日神戸に着き、翌日東京に赴いたとある。東京では已に數回彼は孫逸仙と會見したらしい。日本人で此間に立つて頻りに斡旋して居るものも

あるやうである。二月上旬以來、我々は片唾を飲んで此兩雄の會見の如何なる結果を持ち來すべきやを見て居つたのであるが、今日までのところ尚また成功しないやうである。支那革命主義者にとり誠に遺憾に堪へぬ。

斯の如き形勢なるが故に、今日のところでは、袁政府にしても、南方軍にしても、急に捗々しき進捗を見ることは出來ない。若し持久の狀態が永く續けば、一方に於ては益々天下の動搖が攪つて、北京政府は困るだらうが、又他方に於ては南方も漸次戰に疲れて困憊するだらう。恰度歐洲戰爭が敵味方を段々疲らすが如く、支那の士俵に於ても南北の兩鬪士は日に／＼共疲れとなることであらう。而かも袁世凱にしても南方にしても、我から進んで讓歩することは出來まい。是に於て自ら所謂妥協の說がある。尤も今日のところでは心中眞に妥協を希望するものは袁政府であらう。新聞の傳ふるところによれば、彼は先に熊希齡を招いで南方に對して調停の言葉を發せしめた。彼は曾て梁啓超と共に時務學堂に教鞭をとり、從つて蔡鍔とは師弟の關係がある。此關係を利用して調停を計つたとのことである。而して彼の仲介の功を奏せざるを見るや、袁世凱は轉じて英國公使に縋つた。即ち英國公使の肝煎に賴み、南方の首謀者を說いて袁の體面を傷けざる範圍內に於て圓滿に事を收めんとしたものらしい。此等の運動は總て日本の態度が嚴として動かざるが爲めに皆畫餅に歸したやうである。是に於て袁世凱は得意の奥の手を出し、日本の壓迫を說いて以て南方青年の愛國的感情を釣らんとして居る。一月二十六日亞米利加を經由して傳はつた報道には、日本は復た支那に對して其獨立を危うすべき要求を提出せりと報じ、又二月十三日北京發として傳へられた電報は、日本政府は新たに支那に對し滿洲蒙古及び福建省に於て土地の割讓を要求せりと報じた。之れ恐らくは袁政府の言ひ觸らしたものではあるまいか。上海邊の新聞では現に袁政府の發せる中日離間策なりと明言して居るものもある。袁世凱は曾て第一次革命の時、日本禍を說いてマンマと南方革命主義者を籠絡した。今度も亦此種の流言を放つて彼は巧みに妥協に成功せんと夢想して居るのではあるまいか。

此際我々の甚だ懸念に堪へぬ事柄は、二月十六日に本邦諸新聞にあらはれた對支出兵說である。十五日朝大隈首相は石井外相と田中參謀次長とを隨ひて葉山に至り、親しく天顏に咫尺して外交上の重要案件を奏上した。其中には露西亞の要求にかゝる軍器賣却の件などもあつたが、主としては南方支那動搖の狀況と、之に對する前後の措置が主題であつたといふ。南支動亂の發展につれて、帝國政府の取るべき適宜の措置については、十四日の閣議に於て決定する所あり、山縣公邊の同意をも得て、十五日陛下に奏上し奉つたと、新聞紙は註解をつけて居る。而して其所謂適當の措置と

は、即ち居留民の保護を目的とする若干兵員の派遣であるといふことであるが、果して然らば予輩は政府に向つて最も愼重なる態度を以て此の事に當らんことを希望せざるを得ぬ。なぜなれば輕卒に出兵のことを斷行せんか、即ち神經過敏なる支那の民心を刺戟し、袁政府に好個の口實を與へ、青年支那黨の素志をして水泡に歸せしむるの恐あるからである。予は必ずしも絶對に出兵を不可とせぬ。只之が斷行には非常に周密なる注意を要するといふのである。若し夫れ二三新聞の論ずるが如く、動亂の長江沿岸に蔓延すると共に、我國は當然出兵せざるべからずなど丶主張するに至つては、其不謹愼も亦極れりといふべきである。

二月十一日北京發の電報は唐紹怡、伍廷芳、趙爾巽、張勳、梁啓超、湯化龍等は上海に國民の代表者を招集して南方動亂の始末をつけんとするを報じたが、此のことは頗る注目に値するものである。勿論國民の代表者と云ふても、如何にして之を選むか、又今日の場合如何にして全國から之を集めることが出來るか。細かいことを云へば、殆ど空論に屬するやうであるけれども、然し以上の支那に於ける元老とも見るべき大政治家が、國民代表の名の下に多數團結する時は、之れ確かに內外に對して一大勢力たることを失はぬ。此勢力は今の儘では何等具體的に物を言ふ地位に立つのではないけれども、若し南北對峙すること久しく、双方共に疲弊困憊を招き、之に加ふるに多少でも日本などの壓迫もあつたとすれば、差當り此難局を切り開いて支那の局面を展開するの任務は、期せずして此等の團體に歸するではあるまいか。即ち袁世凱は勢窮りて自ら國民の代表者に讓るの名の下に大統領の位を退き、南軍も亦上海元老の集會に全權を托すと稱して戈を戢むることになりはしまいか。予は南北對峙の大勢は今後如何なる出來事により如何程に變化するかを計り知らざれども、若し今の儘にして進むものとすれば、最後に上海の元老が飛び出して局を結ぶのではあるまいかと想像するのである。只斯くして爲し得たる解決は、表面は双方の面目を立てる譯ではあるけれども、事實袁世凱の勢力の覆滅であることは素より云ふを俟たない。何となれば是等の政治家は皆悉く袁世凱の專政を最も不快に感じて居る連中であるからである。

▽中央公論 春期大附録號豫告△

四月一日發行

天下一に定らん……山路愛山

英國の東洋政策……法學博士 吉野作造

新一元論……文學博士 醫學博士 富士川游

開境展地の第三期……竹越與三郎

政治を支配する精神力……早大教授 大山郁夫

無題錄……內田魯庵

漂泊の男・流轉の女……松崎天民

內外時事評論……法學博士 古川學人

思潮評論……中澤臨川

文藝時評……正宗白鳥

▽中央公論 春期大附録號豫告△

定價六十錢 稅四錢

は解らないが、然しまた袁世凱に對しても反噬せざること丈けは疑ない。現に彼は新たに袁世凱より雲南査辦使に任せられたる兄の龍覲光に、手兵二千を授けて一月廿五日を以て廣東を發し雲南の境に近き百色（廣西省）方面に向はしめた。之れ固より必しも雲南討伐の決心を語るものなりと見るべからざるも、少くとも彼が革命運動の飛沫廣東に侵入し來るを防がんとするに意あることは、之によつて明であると。此説は二月十一日の本邦新聞にあらはれたる電報『龍覲光は貴州の南寧に於て陸榮廷と會見し、雲南軍の侵入を防ぎ以て協力して省内の秩序を維持することに一致し、更に北京に向つては公納金の中止を求むることに相談せり』との報道に照應する。南北兩軍の間に立つて中立を守り、自家の領域を兵燹の災から免れしめようといふのが多分彼の本音であらうと思ふ。けれども一方には又彼を以て極端な袁派となし、南軍の勢力を挫き共一致を攪亂せんが爲めに彼は現に極力運動してゐるといふものもある。曰く、彼は雲南軍の一方の將張子貞と姻戚の關係あり、之を手蔓として盛に辛辣なる苦肉の計を弄して獨立軍内部の攪亂に餘力を殘さない。陸榮廷の如きも確かに彼の買收するところとなつてをる。故に若し假りに雲南軍にして不幸にして内訌の爲めに自滅するが如きことあらんか、そは必ずや龍濟光の陰謀の結果であらねばならぬと。而して此説は二月十一日の上海中華新報にあらはれたる「李烈鈞の軍南方百色方面の廣東軍に向ふ」といふ報道と相照應するやうに見ゆる。予は龍濟光の態度は斯くまで北方袁に傾いて居るとは思はないけれども、之れも或る一部の有力なる社會に信ぜられて居る説であるから、一説としてこゝに掲げて置く。

之に反して又龍濟光を次の如く見るものもある。曰く、彼は暫く袁の命に從ひ、百色まで兵を出したが、固より鬪志あるにあらず。彼の暫らく北方政府の命を奉じたのは、爾かせざれば上海の揚善徳の軍の來攻を蒙るの恐あるが故である。若し夫れ陸榮庭に至つては、南軍討伐を名として公然廣東を經て兵器彈藥の輸入を受け、時機を見て鋒を逆まにして雲南軍に應ずるものであらうと。此説は廣東廣西の態度を以て、少くとも南方に對する好意的中立と見るものである。二月十日廣東發として新聞にあらはれた電報によれば、龍、陸の二氏は中立を守るに決し、連署して南方討伐の命に應じ難きを北京政府に電報し、若し厭くまで出征の命

に服するを迫らるゝに於ては、態度を一變して獨立を宣言すべき模様なりと報じて居る。之は前の報道と矛盾するやうであるけれども、强ち無根據の説とのみ斷ずることも出來なからう。若し夫れ二月十五日上海電報として時事新報にあらはれたる「劉顯世が陸榮廷の招ぎに應じ、相談の爲め南寧に急行した」といふ報道の如きは、眞否頗る疑はしきも、斯くの如き報道の現はるゝを以て見ても、龍濟光と共に表面中立を聲言した陸榮廷が、他方に於て貴州の劉將軍と氣脈相通じてをるといふやうな想像は、最早已に世人の絶對に排斥せざるところであるといふことが解る。斯くして予一個の考としては、廣東は形勢觀望の態度をこゝ暫くは改めずして、而かも密かに南方の誘拐を必ずしも避けないといふ態度を維持することと思ふのであるが、然しそれにしても、其去就の明白にならざる以上は、南軍にとつては確かに一つの心懸りであるに相違ない。

　廣東の態度の曖昧なると共に、更にも一つ南方革命軍の憂とするところは、革命派の大同團結の完成せざることである。袁政府の精神的に已に孤立して居ることは先きにも述べた。けれども袁政府に反對するものは、總て皆今度の運動に共同して居るのではない。無論袁世凱に反感を有するものは、總て今度の運動に同情して居ることは疑はない。けれども積極的に此運動に參加するや否やは、いろ〳〵の考、いろ〳〵の行掛り、又色々の事情等があつて、必ずしも單純に決せられないのであらう。從つて此運動に對しては、有力者中、別に反感を表せざるも、進んで積極的に加擔するまでに至らざる者決して絶無でないのである。如何なる種類のものが此運動に加擔し、如何なる種類のものが參加を肯んぜないかといふ詳細のことは、予輩のまだ詳かにせざるところなるも、密かに信ずべき筋より聞くところによれば、革命主義者中の大立物なる孫逸仙の一派は、未だ十分に打解けて今度の運動に馳せ來らないといふことである。然るに孫逸仙派の加はると加はらざるとは、革命派の成功に非常な大關係がある。孫逸仙が餘りに空理空論に馳せ、實際政治家としての試驗には見事落第したとは、我々の已に四年前の革命に於て目撃したところである。以來支那に於ける氏の聲望は、此意味に於て大いに落ちた。大多數の青年支那黨からも、稍々愛措をつかされた傾に見える。此點に於て支那の革命は、彼なしに十分に成功し得るのであるが、只茲に彼に於て見逃すべからざるは、彼

が海外在留の支那富豪の間に有する絶大の勢力である。彼が殆んど生れながらの革命家として五十年來死生の間に彷徨し、一身一家を忘れて主義の爲めに盡くした其の至誠と、又其渾然無私の愛すべき人格とは、人をして殆んど迷信的に彼を革命の神として崇拜せざるを得ざらしめて居る。故に彼の名を以てするにあらずんば南洋や亞米利加の方面から思ふ通りの金が集らないといふ事である。黄興が四百萬兩を有つて居るとか李烈鈞が二百萬兩を有つて來たとか言つても、兎も角も袁世凱を向ふに廻して革命運動に成功しやうと云ふには、之れ位の金は大海の一滴にも當らない。最後の勝利を得るまでに必要なる莫大の資金はどの道容易に之を得難いが、假りに之を整ひ得る見込ありとすれば、そは必ず孫逸仙の名を以てするものでなければならぬ。支那の戰爭に於て金の多寡が如何に有力な働きをなすかは、是れ亦第一次第二次革命當時に於て我々の實驗したところである。革命戰爭の勝敗は單純に兵員と武器との爭と思ふならば誤である。武器の代りに黄金を放射することが亦勝利を得る最大捷徑なることを忘れてはならぬ。なぜなれば、支那の兵隊は敵味方共に謂はゞ一種の傭兵である。傭はるゝ者は多くは苦力である。所謂愛國の至誠に燃ゆる革命主義者は主として將校以上の階級に屬し、手足となつて働く一般の兵卒には國家の爲めも社會の爲めもない。只約束の給料を貰へばよろしいのである。故に若し如何に精銳の武器を備へ、豐富な彈藥を蓄へて居つても、期に於て我拂ふべき給料の準備がなくんば、兵隊は踵を接して我を去るものと覺悟せねばならぬ。單に之ばかりではない。甲の軍隊に於て日給三圓であるといふ時に、乙の軍隊が假りに五圓を以て募集すべきを觸れ出したとすれば、甲の軍隊に於ては忽ち逃亡兵士相繼ぐを見るであらう。是れ從來屢々經驗したところである。斯くして金は革命運動の成功に缺くべからざるものである。而して其金の集ると集らざるとが、實に孫逸仙の態度によること多しとすれば、今度の運動を企てたものが如何にもして孫逸仙を起たしめんと焦慮するのは無理もない。然しながら聞くところによれば、何故か孫逸仙は容易に之に應じないとの事だ。予は其の何故なるかを知らぬ。只近年孫逸仙の一派と他の革命派との間に反目があつたといふことを耳にして居るし、又今度の運動については豫め何等孫逸仙の一派に謀るところなかつたとも聞いて居るから、此等の事情も固より有力な理由の一つであらう。然し之ばかりでもあるまい。尙いろ〱複雜した情實の存することゝ思ふ。それ丈け又孫逸仙を動かすに骨の折れるものと見えて、現に岑春煊は此爲めに日本に來て居る。上海の新聞の傳ふるところによれば、彼は一月の二十三日春日丸に乘つて上海を發し、二十六日神戸に着き、翌日東京に赴いたとある。東京では已に數回彼は孫逸仙と會見したらしい。日本人で此間に立つて頻りに斡旋して居るものも

あるやうである。二月上旬以來、我々は片唾を飲んで此兩雄の會見の如何なる結果を持ち來すべきやを見て居つたのであるが、今日までのところ尚まだ成功しないやうである。支那革命主義者にとり誠に遺憾に堪へぬ。

斯の如き形勢なるが故に、今日のところでは、袁政府にしても、南方軍にしても、急に捗々しき進捗を見ることは出來ない。若し持久の狀態が永く續けば、一方に於ては益々天下の動搖が擴つて、北京政府は困るだらうが、又他方に於ては南方も漸次戰に疲れて困憊するだらう。恰度歐洲戰爭が敵味方を段々疲らすが如く、支那の土俵に於ても南北の兩鬪士は日に〳〵共疲れとなることであらう。而かも袁世凱にしても南方にしても、我から進んで讓步することは出來まい。是に於て自ら所謂妥協の說がある。尤も今日のところでは心中眞に妥協を希望するものは袁政府であらう。新聞の傳ふるところによれば、彼は先に熊希齡を招いで南方に對して調停の言葉を發せしめた。彼は曾て粱啓超と共に時務學堂に敎鞭をとり、從つて蔡鍔とは師弟の關係がある。此關係を利用して調停を計つたとのことである。而して彼の仲介の功を奏せざるを見るや、袁世凱は轉じて英國公使に縋つた。即ち英國公使の肝煎に賴み、南方の首謀者を說いて袁の體面を傷けざる範圍內に於て圓滿に事を收めんとしたものらしい。此等の運動は總て日本の態度が嚴として動かざるが爲めに皆畫餠に歸したやうである。是に於て袁世凱は得意の奥の手を出し、日本の壓迫を說いて以て南方靑年の愛國的感情を釣らんとして居る。一月二十六日亞米利加を經由して傳はつた報道には、日本は復た支那に對して其獨立を危うすべき要求を提出せりと報じ、又二月十三日北京發として傳へられた電報は、日本政府は新たに支那に對し滿洲蒙古及び福建省に於て土地の割讓を要求せりと報じた。之れ恐らくは袁政府の言ひ觸らしたものではあるまいか。上海邊の新聞では現に袁政府の發せる中日離間策なりと明言して居るものもある。袁世凱は曾て第一次革命の時、日本禍を說いてマンマと南方革命主義者を籠絡した。今度も亦此種の流言を放つて彼は巧みに妥協に成功せんと夢想して居るのではあるまいか。

此際我々の甚だ懸念に堪へぬ事柄は、二月十六日に本邦諸新聞にあらはれた對支出兵說である。十五日朝大隈首相は石井外相と田中參謀次長とを隨ひて葉山に至り、親しく天顏に咫尺して外交上の重要案件を奏上した。其中には露西亞の要求にかゝる軍器賣却の件などもあつたが、主としては南方支那動搖の狀況と、之に對する前後の措置が主題であつたといふ。南支動亂の發展につれて、帝國政府の取るべき適宜の措置については、十四日の閣議に於て決定する所あり、山縣公邊の同意をも得て、十五日陛下に奏上し奉つたと、新聞紙は註解をつけて居る。而して其所謂適當の措置と

は、即ち居留民の保護を目的とする若干兵員の派遣であるといふことであるが、果して然らば予輩は政府に向つて最も愼重なる態度を以て此の事に當らんことを希望せざるを得ぬ。なぜなれば輕卒に出兵のことを斷行せんか、即ち神經過敏なる支那の民心を刺戟し、袁政府に好個の口實を與へ、青年支那黨の素志をして水泡に歸せしむるの恐あるからである。予は必ずしも絕對に出兵を不可とせぬ。只之が斷行には非常に周密なる注意を要するといふのである。若し夫れ二三新聞の論ずるが如く、動亂の長江沿岸に蔓延すると共に、我國は當然出兵せざるべからずなどゝ主張するに至つては、其不謹愼も亦極れりといふべきである。

二月十一日北京發の電報は唐紹怡、伍廷芳、趙爾巽、張勳、梁啓超、湯化龍等は上海に國民の代表者を招集して南方動亂の始末をつけんとするを報じたが、此のことは頗る注目に値するものである。勿論國民の代表者と云ふても、如何にして之を選むか、又今日の場合如何にして全國から之を集めることが出來るか。細かいことを云へば、殆ど空論に屬するやうであるけれども、然し以上の支那に於ける元老とも見るべき大政治家が、國民代表の名の下に多數團結する時は、之れ確かに内外に對して一大勢力たることを失はぬ。此勢力は今の儘では何等具體的に物を言ふ地位に立つのではないけれども、若し南北對峙すること久しく、双方共に疲弊困憊を招き、之に加ふるに多少でも日本などの壓迫もあつたとすれば、差當り此難局を切り開いて支那の局面を展開するの任務は、期せずして此等の團體に歸するではあるまいか。即ち袁世凱は勢窮りて自ら國民の代表者に讓るの名の下に大統領の位を退き、南軍も亦上海元老の集會に全權を托すと稱して戈を戢むることになりはしまいか。予は南北對峙の大勢は今後如何なる出來事により如何程に變化するかを計り知らざれども、若し今の儘にして進むものとすれば、最後に上海の元老が飛び出して局を結ぶのではあるまいかと想像するのである。只斯くして爲し得たる解決は、表面は双方の面目を立てる譯ではあるけれども、事實袁世凱の勢力の覆滅であることは素より云ふを俟たない。何となれば是等の政治家は皆恐く袁世凱の專政を最も不快に感じて居る連中であるからである。

▽中央公論春期大附錄號豫告△

四月一日發行

天下一に定らん……山路愛山
英國の東洋政策……法學博士 吉野作造
新一元論……文學博士 醫學博士 富士川游
開境展地の第三期……竹越與三郎
政治を支配する情力……早大教授 大山郁夫
無題錄……內田魯庵
漂泊の男・流轉の女……松崎天民
內外時事評論……法學博士 古川學人
思潮評論……中澤臨川
文藝時評……正宗白鳥

▽中央公論春期大附錄號豫告△

定價六十錢 稅四錢

は、即ち居留民の保護を目的とする若干兵員の派遣であるといふことであるが、果して然らば予輩は政府に向つて最も愼重なる態度を以て此の事に當らんことを希望せざるを得ぬ。なぜなれば輕卒に出兵のことを斷行せんか、即ち神經過敏なる支那の民心を刺戟し、袁政府に好個の口實を與へ、青年支那黨の素志をして水泡に歸せしむるの恐あるからである。予は必ずしも絕對に出兵を不可とせぬ。只之が斷行には非常に周密なる注意を要するといふのである。若し夫れ二三新聞の論ずるが如く、動亂の長江沿岸に蔓延すると共に、我國は當然出兵せざるべからずなどゝ主張するに至つては、其不謹愼も亦極れりといふべきである。

二月十一日北京發の電報は唐紹怡、伍廷芳、趙爾巽、張勳、梁啓超、湯化龍等は上海に國民の代表者を招集して南方動亂の始末をつけんとするを報じたが、此のことは頗る注目に値するものである。勿論國民の代表者と云ふても、如何にして之を選むか、又今日の場合如何にして全國から之を集めることが出來るか。細かいことを云へば、殆ど空論に屬するやうであるけれども、然し以上の支那に於ける元老とも見るべき大政治家が、國民代表の名の下に多數團結する時は、之れ確かに内外に對して一大勢力たることを失はぬ。此勢力は今の儘では何等具體的に物を言ふ地位に立つのではないけれども、若し南北對峙すること久しく、双方共に疲弊困憊を招き、之に加ふるに多少でも日本などの壓迫もあつたとすれば、差當り此難局を切り開いて支那の局面を展開するの任務は、期せずして此等の團體に歸するではあるまいか。即ち袁世凱は勢窮りて自ら國民の代表者に讓るの名の下に大統領の位を退き、南軍も亦上海元老の集會に全權を托すと稱して戈を戢むることになりはしまいか。予は南北對峙の大勢は今後如何なる出來事により如何程に變化するかを計り知らざれども、若し今の儘にして進むものとすれば、最後に上海の元老が飛び出して局を結ぶのではあるまいかと想像するのである。只斯くして爲し得たる解決は、表面は双方の面目を立てる譯ではあるけれども、事實袁世凱の勢力の覆滅であることは素より云ふを俟たい。何となれば是等の政治家は皆悉く袁世凱の支最も不快に感じて居る連中であるからである。

新刊

久保田万太郎著

淺草物語

□菊判半截鳥の子表紙□
□五百餘頁全一冊□
□定價金九拾五錢□

久保田氏の筆法の輕妙なるは眞に驚くべきものありて存す。殊に氏が得意の「淺草物語」は一讀平々坦々たる文章會話の中に一味の哀愁晩霞の如くに流るゝ其の淡き淋しき情趣は、そも何の言葉を以て說明すべきにや。ウベなるかな。氏の作品が自然主義以後の文壇に特有の地歩を占め得たると。

永井荷風著

縮刷

荷風叢書

□各冊定價□
□金六拾五錢□

■新橋夜話
□掛取り□五月闇□風邪心地
□色男□松葉巴□わくら葉
□短夜□晝すぎ□名花□妾宅

■牡丹の客
□歡樂□春のおとづれ□曇天
□花より雨に□狐□牡丹の客
□深川の唄□新歸朝者日記

■冷笑
長篇創作

■現代東京文明の解剖■

永井荷風新著

日和下駄

□淫祠□樹□地圖□寺□渡船□露地□空地□崖□坂□夕陽

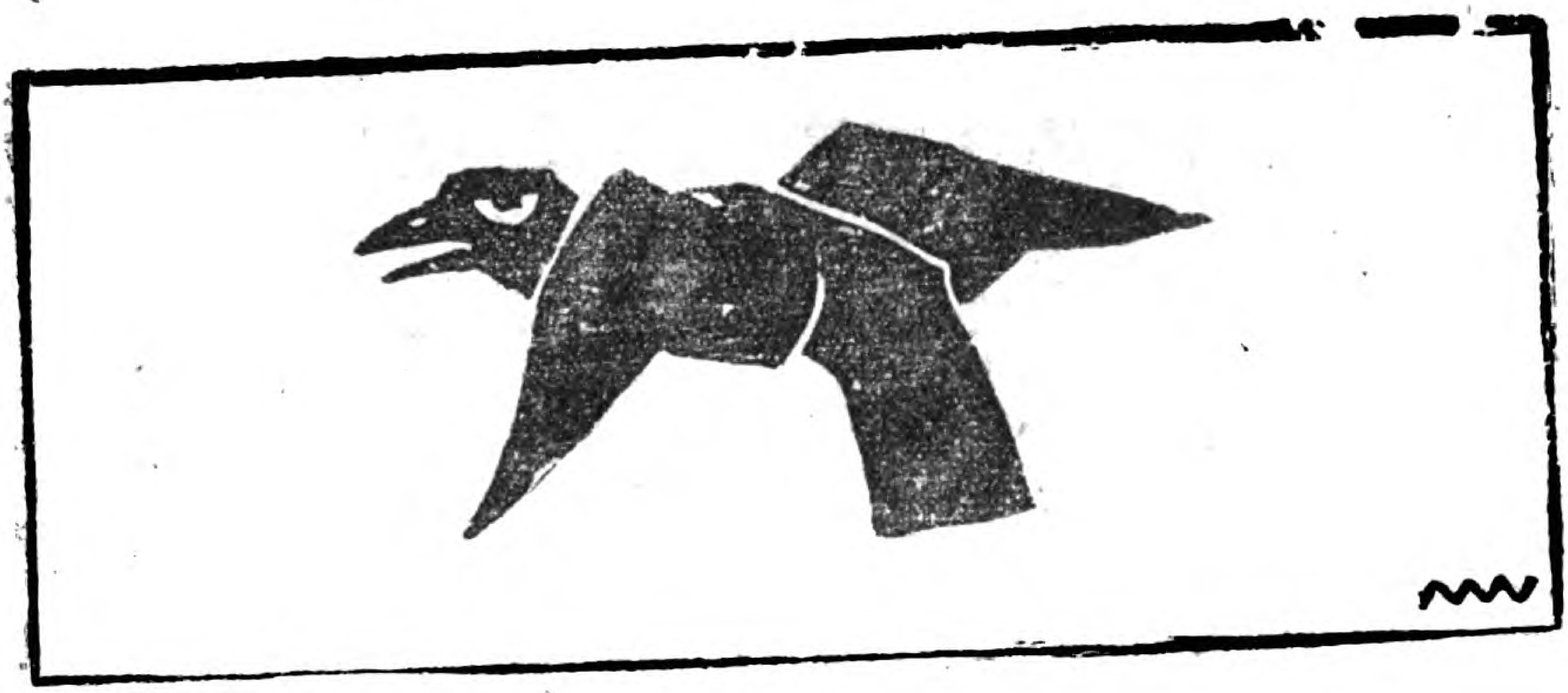
四六判美本□定價金壹圓

「東京散策記」

東京丸の内
三菱廿一號館

籾山書店

振替東京二四一七番
電話本局二三一二番



戯曲

恐怖時代(二幕)

谷崎潤一郎

人物

春藤家の大守　年齢二十七八才、殘忍にして血を好む大名

春藤靱負　大主の親族、春藤家の家老職、四十才ぐらゐ、奸譎なる佞臣

磯貝伊織之介　十八九才の恰悧にして武術に達し、眉目秀麗なる小姓、大守の寵臣

細井玄澤　春藤家の醫者

珍齋　甚しく臆病で剽輕なお茶坊主

氏家左衞門　近侍の武士、忠臣

菅沼八郎　同

お銀の方　播磨守の嬖妾、二十四五才、

梅野　お銀の方に仕ふる女中、三十歳前後

お由良　珍齋の娘、十六七歲、女中梅野の腰元其の他侍、女中等數人

時――何將軍の代の何年何月とも定かならず、唯大體に舊幕時代の出來事と覺しき言語風俗を用ふれば足る。

所――江戸の深川邊の、極めて宏大なる春藤家の下屋敷

第一幕

第一場――お銀の方の部屋、正面に床の間と違ひ棚、右側に書院の窓、其れに續いて萩戸が嵌まつて、戸の外は長廊下になつて居る。廊下の彼方には、宏荘な御殿の奥庭の、池だの築山だの燈籠だのが微かに見えて、西に傾いたまんまるな月が、丁度築山の松の梢の蔭に沈まうとして居る。部屋の左側は遣り水に菊の花を描いた絢爛な金襖。勿論其の金襖の向うにも、立派な座敷や畳廊下が數限りなく連なつて居るらしい。

夏の夜の大分更け渡つた刻限である。部屋の上手に七草の裾模様のある白綸子の蚊帳が釣つてある。蚊帳の中に、お銀の方が蒲團の上へうづくまつて、脇息に凭れたまゝ物思ひに耽つて居るけれど、はつきりとは動作が分らない。左手の萩戸をすつかり明け放つて、女中の梅野が鴨居際に團扇を使ひながら庭を眺めて据わつて居る。其の傍に蚊遣り火が焚かれて居る。廣い坐敷に燈は僅か一點、下手の金襖に近く燭臺がぼんやり灯つて居るのみで、其の外に光る物とては、沈みかゝつた月の明りと、庭先の廊下に置かれた大きな螢籠ばかりである。涼しさうな夜風が折々室内へ吹き込んで、蚊やりの煙と白綸子の蚊帳をはたはたと搖めかせる。

幕があくと間もなく、次ぎの間の時計がちい、ちい、ちいと九つを打つ。

(お銀の方、蚊帳の中より)……梅野、梅野、梅野は其處にお居やるか。

(梅野)はい、最前から此の通り、蚊に喰はれながらぢつと控へて居りまする。何ぞ御用でござりまするか。

(お銀の方)今の時計は、あれは何時ぢや。

(梅野)多分九つでござりませう。築山の彼方に見える月影が、もう直き西へ沈む刻限でござります。

(お銀の方)夏の夜は短いものと極まつて居るに、てもまあ今宵の待ち遠な。……どう遊ばした事ぞいなう。

(梅野)ほんにお部屋様の氣短かな、そのやうにお急

きなさらずと、やがてお越しになりませう程に、ちと縁先へお出遊ばして、涼みがてらに螢籠なと御覧じませ。

（お銀の方）いえいえ今宵はもうあきらめて、此のまゝ休んでしまうのぢや。どうせお越しがないものなら、螢籠も蚊やり火も皆片寄せてしまふたがよい。

（梅野）此の目印の蚊やり火と螢籠とを片寄せてしまうたら、お可哀さうに折角忍んでお出でなさる靭負様が廣いお庭の道に迷ふて、御難澁遊ばすでございませう。それでなうても今宵のやうな蒸し暑い夏の夜に、まだ九つではなかなか局の人々も寝靜まつては居りませぬ。かりにも男と名のつく者は、殿様の外に一人も還入れぬ奥御殿へ、掟を破つてお越しになるのは容易なことではござりませぬ。若しも誰ぞに見付かつたら、たとへ御家老の御身分でも命はないに極まつた譯、少しは時刻が遅れたとて、そのやうに仰つしやるものではござりませぬぞえ。

（お銀の方）命が惜しくば來ぬがよい。命を捨てゝの戀路とは、初めからよう知れて居る筈ぢや。

（梅野）あれ、あれ、御覧なさりませ。月がすつかり西へ沈んでしまひました。（庭も面も室内も更に一層薄暗くなる。）戀路の邪魔をする月影が、隠れてしまへばお庭は眞暗。忍んでお出でなさるには、丁度此れからが究竟の刻限でござります。

一陣の夜風がさつと吹き入つて、一と入強く蚊やりに波を打たせる。燭臺の火が頻りに明滅する。其の時何處やらで、風の音とも人の言葉とも判らぬやうなかすかな聲が聞える。

（聲）……梅野どの、……梅野どの。

（梅野）はい。（庭の方を屹と見つめて、合圖の螢籠を高く掲げながら上げ下げする。）……今のはたしかに、……もしお部屋様、お越しなされたやうでござります。早う此方へお出迎へ遊ばしませ。

（お銀の方）はて其のやうに騒ぐには及ばぬ。妾はお越しを待ちかねて、とうに寝入つてしまうたと、そなたからきつぱり断りを云ふて賜。情ないお方に用はないぞえ。

(梅野)もし靱負樣、……此處でござります。此處でござります。……

靱負が廊下の隅からこつそりと、這ひ上つて身を縮めながら部屋の中に這入つて來る。眞黑な布で覆面をして、細かい紺絣の上布に紗の羽織を着て、袴の股立ちを取つて居る。

(梅野)靱負樣、先程からお待ち兼ねでござんすわいな。

(靱負)し、しづかに、(覆面を脫いで袴の裾を下ろす。色白の、小太りに太つた、見るから凜々しい水際立つた男振り。につこり笑ひながら蚊帳の中を見入る。お銀の方は寢たふりをして居る。)……お部屋樣にはようお休み遊ばしておぢやな。……

(梅野)なんでお休みなさりませう。あまりお出でが遲い故、焦れて焦れて焦れ拔いて、空寢を使つておいでなさるのでござんする。早う御機嫌の直るやうに、此れへお這入りなさりませいなあ。

梅野、靱負の手を執つて、蚊帳の方へ導からとする。

(靱負、梅野の手を振り切る。)いやいや、今宵はそれところではござるまいに、かねて手筈を定めて置いた大事を前に控へながら、お部屋樣にも梅野どのにも、なぜそのやうな氣樂を云ふておいでなさるのぢや。

(梅野)その一大事があればこそ、お部屋樣には猶更お越しを待ち憧れて、御案じなされてゞござんする。……それ、あの約束の時刻には、まだ一時あまりも間がござんする。(再び手を執つて、誘はうとする。)

(靱負、梅野の手を拂ひ除けて蚊帳の外に畏まり、お銀の方の枕許へわざとらしく慇懃に兩手をつく。)お部屋樣にはまだお眼覺めになりませぬかな。はしたない痴話喧嘩は下樣の女子のすることでござります。昔の誰かならば知らぬこと、卑しい藝者娼妓のやうに不貞寢をなさるとは何事でござります。……そのやうなお心がけで、殿のお家を傾ける、一大事は遂げられますまい。(お銀の方、此の言葉にびつくりして、蓐の上に起き直る。)さてさて、賴みがひのないお方ぢや。

(お銀の方)靱負どの、又してもそのやうな嫌味ばつかり。……劍の刃を渡るやうな、危い戀路の樂みがあ

れぱこそ、そなたの惡事に加擔をするのでござんせうに、どうせ妾は素性の卑しい女ゆゑ、藝者上りが惡ければ、嫌はうと捨てようと殺さうと、そなたの自由になさりませ。お家の乘取る謀が、そなた一人の力で成就するものなら、妾を殺して下さりませ。(蚊帳の外に出て、靱負の前に立て膝して据わりながら、銀の長煙管で煙草を吸ふ。)もし靱負樣、今更あまりなお言葉でござんすぞえ。

(靱負、ます〱慇懃に頭を下げて、低い聲で輕く笑ふ。)あはゝゝゝ。今のはほんの戲れでござります。誰がお前樣の素性などを疑ふ者がござりませう。昔の事を知らぬでもない拙者奴までが、そのお立派なお姿には、勿體なくて自と頭が下りまする。

(お銀の方)そのやうな媚び諂ひは聞きたうもないわいの。嫌なら嫌と仰つしやつて下さりませ。

(靱負)ほんの一時の戲れを、さういつ迄もお氣に障へられては拙者が難儀いたしまする。これ梅野どの、どうぞ其方から宜しきやうに、お取りなし下されい。

(梅野)妾風情の取りなしよりも、靱負樣のお言葉一つで、直きにお部屋樣の御機嫌が直りまする。……したが、大事の前の小事とやら、もうお戲れはよい程にして、お二人樣ともお仲直りを遊ばしたがようござります。何ぞ密々の御談合でもござりまするなら、妾は一と先づお次ぎの間へ御遠慮いたして居りませう。

(靱負)これ梅野どの、今も拙者が申した通り、遠慮するとは意地の惡い御氣遣ひぢや。每度ながら、其方の智慧を借用したい儀もござる。是非とも今宵の相談に與つて頂かねばなりますまい。……何は兎もあれ、廊下の雨戸が開いて居ては無用心、憚りながら彼處を締めて下さらぬか。

(梅野)畏まりました。

梅野立ち上つて、左側の庭に臨んだ廊下の雨戸を靜かに締めて、釜籠と蚊遣り火とを奥へ運び去る。それから右側の金襖を悉く明け放ち次の間の樣子を窺つた後、燭臺を室の中央に据えて蠟燭の心を剪る。室内が急に明るくなる。

(梅野)さあ、かうしてしまへばもう大丈夫でござり

ます。お屋敷内でゝ殊更遠くかけ離れた此のお局のお庭先へ、こんな夜更けに誰も參りはいたしませぬ。どうぞ御安心遊ばして、何事なりととつくり御相談なさりませ。

（靱負お銀の方の前へ兩手をつく。）お部屋樣にはまだ御立腹でござるかな。あまりおむづかりなされては、又梅野どのに笑はれる事でござらう。よい加減にして拙者をお赦し下さらぬか。

（お銀の方、笑ひながら冗談のやうな調子で、）赦し難い奴なれど、大事な話とあるからは、今宵はゆるして進ぜませう。……さうして相談と仰つしやるのは、どのやうな事でござんすぞえ。

（靱負）その相談は先づゆつくりとくつろいでお話し申すでござらうが、今宵に限つて酒がなうてはあんまり淋しい。なう梅野どの、とてもの事にもう一つ心配しては下さらぬか。

（梅野）ほんに忘れて居りました。宵のうちから御酒の用意は整へて置きました程に、唯今此れへ持つて參りまする。……（立ち上る）さうしてせいせいするやうに蚊帳を外してしまひませう。

梅野蚊帳を外して次の間へ持ち去り、唐草の金蒔繪の膳に酒肴を載せて捧げて來る。お銀の方と靱負は坐を改めて席をひろげる。

（梅野、兩人の間へ膳部を置き、靱負に緞子の坐蒲團をすゝめる。）さあさあ、此れへお直りなさりませ。お酒が出れば御斟酌には及びませぬ。お仲直りのお印に、妾のお酌で、先づお部屋樣から一こんお乾しなさりませ。

兩人酒を飲み始める。お銀の方も男に負けず杯の數を重ねる。

（靱負）してお部屋樣には、今宵の手管にもお手ぬかりはござりませぬな。……

（お銀の方、不愉快らしい顏つきをする。）靱負どの、話の腰を折つては濟まぬが、今宵に限つてさういつ迄も改まつて、「お部屋樣」と仰つしやるのはお止めなされて下さりませ。ほんにほんに窮屈な。……

（靱負）あはゝゝ、そのお許しが出たからは、「お部屋樣」は止めにいたさう。……さうして先夜の話の事

はうまく運んだでござらうの。

(梅野) お氣づかひには及びませぬ。お部屋様の御云ひ附け通り、妾がすつかり彼の玄澤を云ひくるめて、納得させて置きました。……今宵丑の刻を合圖に時を違へず此の長廊下の東の隅の床下へ、そつと忍んで參るやうに、申し付けてござります。

(靱負) はてさて其れは御苦勞千萬。……大丈夫とは存じて居つたが、てもあの玄澤め、よくも容易く承知いたしたものでござるわい。

(梅野) 一大事を打ち明けた其の後で、若しも納得しなければ斯うする (右の手で人を殺す意味を暗示する。)積りでござりましたが、つね／＼から慾深で女好きの玄澤ゆゑ、恐々ながら納得して、御注文の毒藥を、今宵手づからお部屋様へ差し上げると申しましたわいな。

(靱負) 成る程それはさうでもござらう。……ならお銀の方、味方が殖へて結構ぢやが、此の御家中でそなたの昔を存じて居るのはあの藪醫者と拙者ばかり、年、は取つても相手が色事師の玄澤では、どうやら拙者も氣がゝりぢや。

お銀の方眉をひそめて默つて靱負を睨めつける。

(梅野) おほゝゝゝ、そのやうな御心配は御無用でござんすが、あの玄澤はかね／＼から身の程も知らないで勿體なくもお部屋様へ横戀慕をして居る様子、それ故にこそ今度の事も納得したのでござりませう。藥の調合に事寄せて、せめてお側へ近づきたいのが、彼奴の腹でござんする。——後でどのやうな難題を云ひ出さぬとも限りませねば、お部屋様にも御用心遊ばしたがようござります。

(靱負) それでなうても口說上手なあの玄澤、拙者も用心せねばならぬて。

(お銀の方) えゝ又しても愚かしい惡推量……かりにも大望をお抱きなさる靱負殿がそのやうな狹い御了見では覺束なうござんすぞえ。ちとおたしなみなさりませいなあ。

(靱負) 此れは强いしつぺい返し、そのお言葉には拙

者一言もござらねど、さて色戀の道ばかりは男も女も愚かになるが當り前、ましてそなたと玄澤では、つい惡推量もしたくなるでござらうが。……

（お銀の方）ほんに憎らしい舌の根ぢや。好い程になさらぬと、もうもう今度は許しませぬぞえ。（火のついた煙管の雁首の先で、男の太股をぐいと突く。）

（靱負）はてまあ御許し召されい。今のはあれは冗談でござる。あはゝゝゝ。

（お銀の方）つまらぬ邪推をなさらずと、若し玄澤が無體な事を云ひかけたら、後とも云はず斬り捨てゝおしまひなさるがようござります。

（靱負）仕儀によつたらさう致すより外はない。しかし此の先どのやうな役に立たうも知れぬ男、成る可くならば慾と色とを餌にして、當分釣り寄せて置きたうござる。

（お銀の方）それを妾も知らぬではござんせぬ。慾に眼のないばつかりか、身の程知らずの横戀慕が此方の附け目、今宵此の場へ參つたなら、手管一つで操なして、裏の裏を掻いてやる妾の腕前を、まあ物蔭で御見物なさりませ。

（靱負）そなたの凄い腕前なら、拙者の胸にも覺えがござる。見物せずとも大丈夫ぢや。……

（梅野）それはさうと、その毒藥が手に入つてからの大事な仕事は、誰の役目でございませう。

（靱負）さあそれぢや。今宵の相談と申すのは、其の事でござるわい。……誰ぞ奥方のお側に侍る衆のうちに、頼める人はござるまいか。梅野どのにはよいお考へもござらぬかな。

（梅野）妾もそれには苦勞いたして居りまする。お側の衆は多勢居ても、迂闊に頼めはいたしませぬ。……はて、何ぞよい思案はござりませぬかなう。

（お銀の方）そなたは妾の智慧袋ぢや。何ぞよい工夫をして賜らぬか。

（梅野）おゝ、よい事がござります。（ふと想ひ付いたやうに膝頭を打つ。）妾が長年召し使うて居りまする、腰元のお由良の父親——あのお茶坊主の珍齋をお頼み

なさりませ。あの親父めを威嚇かしたら、必ず嫌とは申しますまい。

（籾負）いかさまお茶坊主の珍齋なら、勝手氣儘に誰の傍へも馴れ近づいて、可愛がられる剽輕者、仕事をするに便利はござれど、てもあのやうな臆病者では‥‥

（梅野）たよりにならぬと仰つしやるのでございまするか。

（お銀の方）梅野とした事が、不思議なことを云ふではないか。臆病で剽輕で輕口ばかり叩いて居る、珍齋のやうな男の數にも這入らぬ者に、めつたな事は明かされまいぞえ。

（籾負）女子供の相手をさせて、坐興を添へる道具には、至極重寶な人間なれど、云はゞ下樣で幇間などゝ申す輩に同じこと、大事を頼むはいかゞでござらう。‥‥それとも梅野どのには、何か彼の男に見どころがござるかな。

（梅野）さあ、取り柄と申すではござりませねど、人に知られた臆病が此方の見つけものでござります。たとへどのやうな惡事でも、刄物を見せて威嚇かしたら、命惜しさに必ず承知いたしまする。

（籾負）承知はするにいたしても、輕口ばかり叩くのが商賣の珍齋、其の上あれ程臆病では、又外の者に威嚇されて、我等の大事を口外せぬとは限りませぬわい。

（梅野）此方の頼みを引き受けて、一旦惡事を犯した上は、それも罪に墮ちる譯、うつかり喋舌りはいたしますまい。

（籾負）そこが珍齋ではさう參らぬ。たゞ目前の命が惜しさに、何處へ行つても威嚇かされゝば、直ぐぺらぺらと白狀するは必定ぢや。

（梅野）どうせ道具に使ふだけの人間でござんする。長い間にはそのやうな心配もござんす程に、一度お役に立てた後、こつそり片附けてしまつたなら、別段面倒はござりませぬ。その後始末は妾がきつと引き受けますれば、どうぞお任せなさりませ。それとも籾負樣には珍齋の外に、お心當りがござりまするか。

（籾負）さて格別に、心當りはござらぬが、‥‥

(梅野) そんなら猶更妾にお任せなさりませ。——珍齋を除いては、お側の衆は皆奥方に忠義な者ども、それでなうても我々を鵜の眼鷹の眼で睨んで居る、油斷のならぬ人たちばかりでござんすぞえ。

(お銀の方) 成る程梅野の云ふ通り、あの珍齋を威嚇かすより外に工夫は見あたらぬ。こゝは一番梅野に任せて、仕終ふせて貰はうではござりませぬか。

(靫負) いかさまなう、外に思案のない場合、それも強ち惡うはござるまい。隨分危い計略ながら、上手に行けば此れ程都合の好いことはござらぬて。……惡事にかけては一枚上の梅野どの、そなたの御意見に從ふ事といたさうかの。

(梅野) 憚りながらきつと手落ちのないやうに、仕遂げて御覽に入れませう。殊に妾は娘のお由良を、幼い折から召し使うて居りますれば、旁々珍齋とは主從の間柄、決して嫌とは云はせませぬ。

(お銀の方) したが梅野、其方どのやうな折を窺つて、珍齋に話をしやる。なんぼ相手が臆病でも、たゞ威嚇かしや義理攻めでは、やす〳〵承知しまいがの。

(靫負) 迂濶な時には話せぬが、さればと云ふてうか〳〵うかしては居られまい。もう奥方のお産の日も、大分迫つて參つた樣子、時機がおくれては一大事ぢや。

(梅野) 手筈の定まる上からは、早いに越したことはござりませぬ。明日とも云はず唯今お由良に云ひつけて、密かに連れて參るやうに致させませう。今宵此の場でお部屋樣の前へ呼びつけ、靫負樣を始めとして妾も玄澤も共々に、口を揃へて威嚇かして、散々膽を冷やさせたら、必ず利き目がござんする。

時計が八ツを打ツ。

(梅野) おゝ、今のは八つ時、……もう玄澤が參る時分、……

(靫負) はて、拙者はこゝに斯うしては居られぬが、……

(梅野) きつと約束の場所へ來て、待つて居るでござんせう。妾は此れから玄澤を迎へに行つて參りまする。靫負樣にはお次ぎの間へお隱れなされて、樣子をお聞

きなされませ。

（靱負、何事か腹に一物あるやうな句調で）、いやいやこゝらにうろついて、若しも彼奴に見咎められては却つて事の破れる基、玄澤も珍齋もそなたたちにお任せ申して、拙者は今宵は歸るといたさう。（立ち上る。）

（お銀の方、男の袂を捕へながら、）もし、お待ちなされませ。急にそのやうな事を云ひ出して、どうした譯でござんする。まだ其方には話もある。どうぞ物蔭に隠れて居て、樣子を聞いて賜ひなう。

（靱負）あまり其方の傍にへたばり着いて、狹い了見と笑はれるのも心苦しい。話があらば明日の夜の事、兎に角お暇申すでござらう。

（お銀の方）さつきの話を根に持つて、又そのやうにお拗ねなさるのでござんせう。どうでも妾は歸しませぬぞえ。

（梅野）お部屋樣があのやうに仰つしやるものを、此のまゝお歸りなさるとはあんまりでござんする。もし靱負樣、われ／＼二人であの玄澤をあやなすところをまあお慰みに見屆けておいでなされませいなあ。

（靱負）見屆けずとも拙者充分に安心いたした。――斷つて歸りたうはござらぬが、今日此の頃の短夜に、ぐづぐづして居て空が白んで參つたら一と難儀……願望成就するまでは、大事な上にも大事を取つて、用心せねばなりますまいに、惡くお取りなされては、拙者甚だ迷惑いたす。何卒御ゆるし下されい。（輕くお銀の方の手を拂ひ除けようとする。）

（お銀の方）そんなら今宵はどうあつても、……

（靱負）はてまあ、お放しなさりませい。（手を振り切つて廊下に出て、前の如く覆面をして改まつて鴨居際に兩手をつく）。さやうならばお部屋樣、梅野どの、明日の夜更けに又重ねて、……

（お銀の方）きつとお越しを待ちますぞえ。

靱負廊下の左方に立ち去る。

（お銀の方）些細な事を胸に含んで、何ぞと云ふと意地の惡い靱負どの、どうやら機嫌を損じたさうな。

（梅野）大事な用事を拾て置いて、俄かにお歸りなさ

れたには、仔細がありさうでござんする。
(お銀の方)いづれにしても其方は此處を片附けて、早う珍齋を呼びにやつたがよいではないか。
(梅野)ほんにさやうでござります。それに大方玄澤も妾の迎ひを待つて居る筈、お由良を使ひに出した上で、唯今直きに此れへ連れて參りまする。
(お銀の方、梅野が立つて行かうとするのを呼び止める。)あ、これ梅野、待ちや。
(梅野)何御用でござりまする。
(お銀の方)ちよいと妾に耳を借しや。……
(梅野傍へ寄つて耳をつけながら、聞いて居たが、そのうちに少し顔色を變へて心配さうに四邊をぢろぢろ見廻し始める。)成る程、成る程、それも御尤もではござりますが、しかし先の御相談では、……
(お銀の方)えゝまあ其のやうな理窟を云はずと、妾の云ふ通りにしやいなう。
(梅野、何か非常な事を覺悟したらしく、)さう仰つしやれば詮ない事、えゝようござります。
(お銀の方)そんなら早う。……必ずぬかつて賜るなや。
(梅野)心得ましてござりまする。

梅野は坐敷の内を片附けてから膳部を持つて次ぎの間へ退る。お銀の方は鏡臺に据わり、やゝ暫く化粧に念を入れてから、一と入輝くばかりに美しくなつて、再び元の席へ就く。程なく梅野が、外の廊下の右手の方から玄澤を案内して這入つて來る。

(梅野、玄澤と共に廊下に畏まつて平伏する。)申し上げまする。仰せに從ひ細井玄澤を、唯今此れへ召し連れましてござりまする。
(お銀の方、故らに威儀を繕つて、)おゝ玄澤が參つたか、こんな夜更けに大儀なことぢや。早速此れへ通るがよい。
(玄澤)はゝッ、恐れ入りまする。

玄澤、梅野に導かれて坐敷へ這入り、下手に据はる。頭を海坊主の如くくりくりと剃つた、色の青黒い、年齢の割りにでぶでぶ脂濃つた狸のやうな男である。

(玄澤)お部屋樣にはいつも御機嫌美はしう、恐悦至極に存じまする。

(梅野、急に可笑しさうに笑ひ出す。)おほゝゝゝゝ、これ玄澤今宵はいつもと評が違うて、お部屋樣と妾の外には、此のお局の居まはりに誰も聞いては居らぬ故、そのやうな堅苦しい挨拶は止めにして、砕けた話しをしたがよいぞえ。

(玄澤、狡猾らしい、勿體振つたお辭儀をする。)あははゝゝ、相も變らず御如才のない梅野さま、忝う存じますする。

(お銀の方)今は主從の間柄でも、其方と妾は昔馴染、何も遠慮はいりませぬ。

(玄澤)さやうな事を仰せられては、此の玄澤ゃ冷汗が流れまする。

(お銀の方)また梅野とても其の通り、妾の事は常日頃から何一つ隱さず打ち明けて、姉妹のやうにして居る者ぢや、決して氣づかひせまいぞや。

(玄澤)いや、お部屋樣にはよい片腕をお持ちなされて、結構な事でござります。男も及ばぬ智慧才覺が備つて、度胸の据はつた梅野さま、頼もしいお人でござりますわい。

(お銀の方)ほんに其方の申す通り、妾に梅野の半分も智慧才覺があつたなら、まあどのやうに嬉しからうと羨ましう思はれる。

(梅野)飛んでもないことを仰つしやいます。妾はまたお部屋樣の半分も美しい器量になりたいと、お羨み申して居りまする。

(玄澤)此れはしたり梅野さま、成る程お部屋樣は格別ながら、あなた樣とていつ見ても若々しう、お綺麗なことでござります。——まあ此處だけの話でござるが、あなた樣の御器量は、御家中の若侍の間でもなかなか評判でござりますぞえ。

(お銀の方)それはさうと此の間、人知れず梅野に頼んで渡した筈の妾の文を、其方は讀んでくれたであらう。

(玄澤)へゝゝ、勿體ないことでござります。憚りながら拜見いたしたればこそ、此の玄澤も命がけで、斯うして忍んで參りました。——御覽なさりませ。(懷から

文を出して見せて、直ぐ又懐中へ收める。)此の通り、肌身放さず所持いたして居ります。

(お銀の方) それを聞いて妾も滿足、ほんに喜ばしう思ひますぞえ。

(梅野) さうして其方はお文の外にもう一つ、頼んで置いた品物を、持つて來てはくれなんだか。

(玄澤) 持つて參らぬではござりませぬが、たとへお部屋樣のお頼みでも、うかとは差し上げられぬ品、どうしたものかと、思案に餘つて居りまする。

(お銀の方) これ玄澤、其方は呑み込みの惡い男ぢや。萬事は妾が承知して、惡いやうにはせぬ程に、まあ其のやうな事を云はずと、素直に出したがよいではないか。

(玄澤) あはゝゝゝ、どうせ乘りかけた船でござれば、拙者も今更臀込みはいたさぬつもり、――次第に依つては隨分お渡し申しまする。

(お銀の方) したが梅野、その相談は後でゆつくり聞くとして、何はともあれ酒がなうては話が乘らぬ。昔馴染の玄澤に、妾が手づから酌をして取らせう程に、何か馳走をしたがよい。

(梅野) 成る程さやうでござりました。唯今直ぐに支度をして參りまする。

梅野退場

(お銀の方) なう玄澤、其方はやつぱり昔に變らず、大酒を飲むであらうなう。

(玄澤) 昔に變らず嗜みまする。しかし、酒に性根を奪はれて、うか〳〵一杯喰はされるほどまだ耄碌はいたしませぬ故、其處は御承知を願ひたう存じまする。

梅野再び膳部を運んで來る。

(梅野) 何を申すも夜更の事、格別馳走もないけれど、昔語りをお肴に、打ちくつろいで頂戴したがよいわいの。

(玄澤) これはこれは思ひ掛けないお心づくし、遠慮なく頂戴いたすでござりませう。

(お銀の方、親ら玄澤に酌をしてやる。)其方とかうして酌み交はすのも、今宵が丁度八年目、ほんに久しい

ものぢやなう。
(玄澤) あの節お生み遊ばした照千代様が、早や此の頃は腕白盛りの御若君、さうして見ればもう八年にもなることでござりませう。
(お銀の方) 其方はあの頃に比べても一向年を取らぬ様子、いつも元氣でめでたい事ぢや。
(玄澤) 拙者は以前に變りませぬが、お變りなされたはお部屋様。慮外ながら、昔地上に咲き出でゝ、谷間の花と人に愛でられたお身の上が、今は天上の星と輝き榮え給ふ御仕合せ、御品威と云ひ、御ものごしと云ひ、あの時代の御俤はござりませぬ。御運がよいと申さうか、お羨しいと申さうか、思へば思へば拙者などは、意氣地なしの骨頂でござりますわい。
(お銀の方) 妾が此のやうに立身したも、元はと云へばみんな其方の骨折りぢや。なう玄澤妾はいまだに其方の親切を忘れては居ぬわいなう。
(玄澤) へゝ、さう仰つしやつて下されば、まあ忝うござります。したがお部屋様、あの節骨を折りましたのは拙者ばかりではござらぬ筈、先づ第一に御家老の靫負様、あの御人の御親切は、なか〱お忘れにならぬいと見えまする。
(お銀の方) なに靫負どのの親切ぢやと?……おほゝゝほ、ほんにまあわつけもない、何を云ふて居やるのぢや。成る程あの方の親切を忘れては濟まぬ譯なれど、どうしたものか妾は靫負どのが嫌ひ故、めつたに思ひ出しはせぬ。
(玄澤) ふん、はゝゝまあ左様でもござりませう。
(梅野) ほんにお部屋様は、靫負殿が大のお嫌ひでござんすぞえ。やゝともすれば御家老の威光を鼻にかけ昔の事を恩に着せて、考へて見ても嫌らしい、思ひありげな色目使ひ、二た言目には何のかのと、あてつけがましい事ばつかり仰つしやつて、てもまあ薄氣味の惡いお人ぢやわいな。
(玄澤) その大嫌ひなお人と、よう御別懇になされまする。——御酒は頂戴いたしても、拙者いさゝかも酩酊いたしては居りませぬ。失禮ながら下世話に申す蛇

の道は蛇とやら、近頃格別なお部屋様と御家老との御仲を、氣付かぬ程の玄澤ではござりませぬて。(お銀の方と梅野とが顔を見合せて、密かに驚く。)あはゝゝゝ

(梅野)酒に醉はぬと威張つて居ても、醉うたればこそ其のやうな惡推量――一體其方は何處からそんな噂を聞きやつた。證據があるなら、兎も角も、めつたな事は云はれまいぞえ。

(玄澤)はて、何處からも聞きはいたしませぬ。拙者の外に誰も知つては居りませぬ故、まあ御安心なさりませい。――證據を云へなら申しませうが、それでは罪が深過ぎていさゝか興が醒めまする。御自分の胸にお尋ねなさるが一番確かでござりませう。もしお部屋様、此の玄澤を味方に附けるお積りなら、そのやうな淺はかなお手際では、先づ覺束なうござりまするぞ。此れ程までに申し上げても、やはり隱し立てをなさりますかな。

(お銀の方、暫くうつむいて相手の言葉を味つて居たが、やがて決心したやうにきつと面を擡げる。)成る程玄澤の云ふ通り、妾が惡うござんした。――昔の事は其方もあらまし知つてゞあらう。あの後圖らずも殿のお情を蒙つて、今の身の上となつてから、靱負どのとはふつつり切れて居たなれど、つい此の間奥御殿でお能拜見のあつた折、一た言二た言口を利いたが緣となり、今宵忍んで行く故に是非とも會つてくれとの難題、いやぢやと云へば八年前の内證事を洗ひ立てると威嚇されて、しやう事なく妾は納得したものゝ、何で眞實あの人に心を許して居ようぞえ。――現に今宵も此處に來て、つい今しがた戻つたばかり、ほんに妾の迷惑を、少しは察して賜ひなう。

(梅野)お可哀さうにお部屋樣は、惡い蟲につけ狙はれて免れる道のない御災難、四五日前から靱負殿には夜な夜な此處へお通ひなされて、今宵が丁度四度目の逢瀨、心の中では妾も共々口惜し涙にくれて居るぞえ。

(お銀の方)其方に隱し立てをするではないが、なまじ正直に打ち明けたら、却つて疑ひのかゝる基と思ふたばかりに、實は今迄默つて居たのぢや。

(梅野) さあ、もう此のやうに何も彼も打ち明けたら、其方の胸も晴れたであらう。

(玄澤) すつかり胸が晴れましたと申し上げたい處ながら、靫負樣との御仲が無理往生やら眞實やら、何で拙者に解りませう。八年前にも度び〳〵手管に繰なされて散々馬鹿を見た玄澤、今度は迂濶に欺されませぬ。

(梅野) おほゝゝゝ、まあ玄澤の疑り深い。其方を欺してよいくらゐなら、どうしてお部屋樣が先日のお文を、わざ〳〵其方に渡さうぞえ。よう考へて見やいなう。

(お銀の方) いやしい藝者稼業から、一足飛びに立身したが嬉しうて、浮氣はふッつり止めませうと心に誓つて居たもの〻、先達靫負殿に口說かれたのが病み付きで、以前の其方の親切が煩惱の種になり、堪(こら)へ切れずに書いたあの文、決して決して僞りではないぞえ。なう玄澤、どうぞ妾をみだらな女と笑うて賜んなや。

(玄澤) ……

(お銀の方) これ程云ふても疑ぐるなら、其方に聞かせる事がある。——其方や、八年前に妾が生んだ、あの若君の照千代樣を、誰の種ぢやと思うて居やる。高い聲では云はれぬが、あれは殿樣のお子ではないのぢや。

(玄澤) さゝ、それも拙者はあの時からうす〳〵疑うて居りましたが、さてはやつぱり推量に違はず、……

(お銀の方) まことを云へば照千代樣は、——これ玄澤、何を隱さう其方の子ぢやぞえ。

(玄澤) えゝ、何と仰つしやります。(一旦は非常に吃驚したが、直ぐ用心して再び皮肉な笑顏になる。)はゝ、途方もない事を仰つしやります。殿のお子でおはさぬからは、てつきり靫負樣のお種でござりませう。

(お銀の方) 成る程其方がさう思ふのも無理はない。己惚れの強い靫負どのが自分の種ぢやと思ひ込んで、行く行くお家を押領したいばつかりに、妾を此のやうに引き立てゝくれた故、その積りにさせては居れど、まことを云へば照千代樣は其方の子なのぢや。

(玄澤) 拙者も一時は己惚れから、さうではないかと

迷うた事もござりますが、今ではそんな妄想を夢にも抱いては居りませぬ。それにまた、たとへ拙者の子にしてからが何の役にも立たぬこと、無駄な詮議でござります。

（お銀の方）さあ其處ぢや。――其方は妾と心を協せて、惡企みのある靱負どのを道具に使ひ、お家を乘つ取る氣はないかえ。お旅の前にあの奥方をないものにして、照千代樣に御家督を取らせたいとは思はぬかや。

（玄澤）いかさま其れもお部屋樣には面白うござりませう。照千代樣が全體誰の子供やら、そこの秘密を御存知なのはお部屋樣だけでござります。うかと惡事に加擔して、首尾よく事が運んでも、靱負樣と玄澤では、どちらが道具に使はれるのやら、心もとなうござりますわい。

（お銀の方）其方のやうに拗れて、さう何處までも邪推しては、埒のあく時はないわいの。――そんならいつそ其方が安心するやうに、先づ邪魔者の靱負殿を殺してしまひ、二人で事を謀らうではないか。なう玄澤、これまで云ふても不承知かや。

（玄澤）お部屋樣、そりやほんたうのお言葉でござりまするか。

（お銀の方）何で僞を云はうぞえ。どうせ長くは生かせて置けぬ靱負どの、幸ひ恐ろしい藥の利き目を試しかた〴〵、其方が手づから一服盛つて、そつと飮ませてしまつたら何の造作もいらぬこと、……

（梅野）それには丁度都合のよい事がござります。靱負殿には明日の夜も忍んで來るは必定故、其の折其方はお次ぎの間へ隱れて居て、妾が運ぶ銚子の中へ藥を交ぜてくれたなら、誰にも知れずに片づくわいの。

（お銀の方）奥方の方はわれ〴〵二人が引き受けて、必ずそつのないやうに仕遂げて見せるぞえ。

（玄澤）ようござります。それで話が拙者にも面白うなつて參りました。もう此の上はお部屋樣の一味に加擔いたした印に、お約束の藥三服、たしかに進上いたしまする。

（梅野）そんなら玄澤、きつと承知をしてくりやるか。

（玄澤）はて、御念には及びませぬ。

（お銀の方）妾もやうやう安心したわいの。

（玄澤、懐中から薬の包を取り出しながら、）此の粉薬は憚りながら拙者が秘傳の世に類ひない激しい魔薬、一服飲めばまたゝくうちに五體が痺れ、體中の肌の色が紫になつて眼と云はず鼻と云はず、あらゆる孔から毒血を吐き出し、手足を藻掻いて悶絶するは必定でござりまする。先づ手始めに靫負殿を、明日の夜拙者が試して御覧に入れませう。

（お銀の方）そんなら此の薬は、妾がたしかに貰つて置くぞえ。（三包になつた薬の袋を受け取らうとする。）

（玄澤）あ、もし、暫くお待ちなさりませい。――三服と云ふ御注文ではござつたが、靫負様を仕止めるは拙者の役目、奥方の方は一服あつたら澤山でござりまする。御用があらば又差し上げる事にして、殘りの二服は拙者がお預り申して置きませう。

（梅野）したがいつ何時役に立たうも知れぬ品、奥方ばかりか此れから先、どのやうな邪魔者が出て來ないとも限らぬ故、まあ用心にそれだけ寄越してくれた方が、まさかの場合に重寶であらうぞい。

（玄澤）いかさま其れも御尤も、然らばたしかにお預け申すと致しませう。

（お銀の方、薬を受け取つて梅野に渡す。）梅野、此れを妾の手文庫の底へ、しつかり收つて置いたがよい。

（梅野）畏まりました。（違棚の下の地袋を開けて、手文庫の中へ收める。）

（お銀の方）ついでに其處から、先日整へて置いた物、此方へ出して玄澤に渡してくりやれ。

（梅野）畏まりました。（三寶の上に金子の包を載せて、玄澤の前へ持つて來る。） これ玄澤早速ながら、かねて約束の二百兩、當座の褒美にお部屋様から下さりまする。頂いて置きやいなう。

（玄澤）はゝッ、有り難う存じまする。折角の思し召し、忝うはござりますが、此の御褒美は大望成就の曉に、いづれ纏めて頂戴いたすでござりませう。

（梅野）はてまあ、それはどうした譯ぢや。

(玄澤)もしお部屋樣、拙者は此の金子より外に大事なお願ひがござりまする。

(お銀の方)身にかなうた事ならば、何でも聞届けて進ぜませうが、さうして其方の賴みとはえ?

(玄澤、安心したせゐか、だんだん醉が廻つて來て、言葉だぞんざいになつて來る。)はゝゝゝ、もしお部屋樣、今更改めて申さいでも、大概おわかりになりさうなもの、はゝゝ、もし、さう玄澤を焦らさずと、よい程にして喜ばせて下さりませい。

(梅野)何やら知らぬが其方はほんとに可笑しなお人ぢや。謎のやうな眼つきをして遠廻しに持ちかけずと、はつきり云ふたがよいではないか。

(玄澤)いや梅野さまの性惡な。何も彼も御承知の癖にしてそ知らぬ振りをなさるとは、お情なうござるわい。お願ひと申すは實はその、其方が居てはちいつとばから都合が惡うござりますが、あの、それ、先日のお文に書いてござつた、金子の外のもう一つのお約束、——あの事でござりまする。

(梅野)おゝその事なら妾がちやんと心得ては居るけれど、生憎今宵はお茶坊主の珍齋が參る故、明日まで待つたがよいであらう。かう話がきまつた上は、それ程急ぐには及ばぬわいなあ。

(玄澤)なに珍齋が參りますとな。して今時分何用あつて、あの男がかやうな席へ?

(梅野)さあ、其の話は其方に今迄せなんだが、今宵ひそかにあの臆病者を呼び寄せて、三人がゝりで威嚇しつけ、奥方へ藥を上げる大事な役目を引き受けさせうと云ふのぢやわいな。

(玄澤)成る程此れはよい思ひつき。しかし彼奴は平生から口數の多い人間故、役目を果した其の後では、靱負樣同樣に、一服盛つてしまはねば面倒でござりませうぞ。

(梅野)それも手筈がきまつて居る。大事な藥を使はずとも、珍齋ならば妾ひとりで器用に仕止めて見せまする。

(玄澤)敵に廻せば油斷がならねど、味方にすれば頗

んに頼もしい梅野さま、此れから後は何かにつけて、拙者の爲めにもよい片腕、心丈夫に存じまする。

(梅野)その片腕の妾が言葉に從つて、今宵一と夜は辛抱したが、お二人樣のお爲めであらう。

(玄澤)寶の山に入りながら、何とやら云ふ例もござるが、さう云はれては拙者も手出しがなりませぬ。ても明日の夜が待ち遠でござるなあ。

(梅野)おほゝゝゝ、年にも似合はぬ氣早やな玄澤、止めては見たが氣の毒な。その待ち遠さは察して居るぞえ。

(お銀の方)これ梅野、玄澤ばかりを氣の毒がらずと、少しは妾の胸を察して賜るがよいわいの。八年振りの思ひのたけを打ち明けて、誰憚らず積る話がして見たう、明け暮心に祈つて居た今宵の逢瀨、そのうれしさを堰かうと云ふは、えゝまあほんに焦れつたい、其方はあんまり酷うはないか。玄澤が承知しても、妾はなかなか不承知ぢや。

(梅野)これはしたり、お部屋樣から其の仰せでは、妾が困つてしまひまする。

(お銀の方)何の其方が困らうぞい。いつもいつも分別臭い事を云ふて、人の戀路の邪魔ばかりする天の邪鬼、赦負どのとは譯がちがうて、今度は妾も本氣ぢやぞえ。

(玄澤)此れは此れはお出來しなされたお部屋樣、さうなうてはかなはぬところぢや。あの性惡な梅野さまを、たんと懲らしめておやりなされい。あはゝゝゝ。

(梅野)えゝ其方までが一緒になつて、たわいのない事を云ふではない。

(お銀の方)まだ珍齋の見えるまでには時刻があらう。せめて其の間に玄澤としんみり話がしたい故、梅野はあの、おゝそれそれ、紅葉の間の廊下のあたりへ行つて、珍齋の來るのを見張つて居やいなう。

(梅野)はてまあ是非がござりませぬ。どうとも御意に入るやうに致しませう。(次ぎの間へ下つて、直ぐに再び熱燗の調子を携へて出て來る。)さあ玄澤、熱いところを其方に一つお酌をして、妾は遠慮するわいの。

(玄澤) あはゝゝ、梅野さまにはいかい御迷惑いづれ御禮はいたしまする。

(梅野、冷やかに微笑する) さやうならばお部屋様、お樂しみはさる事ながら、どうぞ御油斷なきやうに、くれ〴〵もお願ひ申しまする。

(お銀の方) もうもうわかつて居る程に、いらぬ心配しやんなや。

梅野退場

(玄澤) さあかうなれば誰憚からぬさし向ひ、お一ついかゞでござります。拙者のお酌も滿更ではござるまいて。

(お銀の方) いゑいゑ妾は醉ひ過ぎて、先程から少し頭痛がする樣子。昔は其方と飲みくらべをした仲なれど、もう此の頃ではとんと意氣地がないわいの。——さゝ、妾がお酌をするほどに、其方こそたんと飲んだがよいぞゑ。(ぐつと擦り寄つて、片手を玄澤の膝に載せ、片手で銚子を奪ひ取る。)

(玄澤) いや、忝うござります。命がけの仕事の積りで忍んで參つた此の玄澤、却つて壽命が延びまする。

(お銀の方) 其方や、そのやうにうれしいかや。

(玄澤) うれしうなうて何といたしませう。全く今宵は夢のやうで、空恐ろしうござるわい。

(お銀の方) 忍んで來るのが命懸けなら妾の方も命懸け、このやうな空恐ろしい罪を妾が犯すのも、みんな其方の爲めではないか。なう玄澤、此れから後は必ず必ず浮氣をしてなりませぬ。

(玄澤) 浮氣どころか拙者は又——もし、お部屋樣、あなた樣の方が心配でござりまする。

(お銀の方) 何で浮氣をしようぞい。かうなるからには妾は一生、其方と離れはせぬわいなあ。

(玄澤) しかし斯うして居りますと、失禮ながら昔のあなた樣の意氣なお姿が、ありありと浮んで參りまする。それ、いつぞやあの柳橋の茶屋の一と間で、拙者の端唄にあなた樣が調子を合はせてお彈きなされた三味線の奧床しさ。しつとりとした撥の音を大川の流れに響かせたのも、丁度此のやうな晩でござりましたな

あ。

(お銀の方) ほんにあの頃の面白さ。今では殿のお情で、お部屋様とあがめられては居るもの丶、こんな窮屈な御殿に暮らして居ようより、自由な昔の身の上が、そゞろに戀ひしい折もある。

(玄澤) 殿様と云へば近頃はます〳〵あなた樣に御執心、夜も晝もべつちやりと、お側をお放しなさらぬと承つて居りましたが、今宵は全體どう遊ばした事でござります。

(お銀の方) あまり執拗く着き纏はれてうるさうてならぬ故、この十日程假病を使つて引き籠つて居るなれど、毎日のやうにまだ直らぬかとの御催促、噂に聞けば妾に會はれぬ腹立たしさに、例の癇癪をお起しなされて、昨日も近侍の侍をお手打ちに遊ばしたとやら、ほんにほんにくさくさするわいな。

(玄澤) いやはや毎度の事とて珍らしうもござらぬが、相變らずの御亂行、あのやうな氣違ひにおなりなされたも、皆お部屋様のお蔭ながら、まことにたわけた馬鹿殿樣でござるわい。

(お銀の方) 其の亂行が此方の爲めには却つて仕合せ、お家を思ふ忠義者は片つ端から手打ちにされて、殺されてしまふがよいではないか。

(玄澤) 先づあの分では殿の御壽命もあまり長うはござるまいが、次第に依つたら此の方も、靱負樣同様にしてしまはねばなりますまい。

(お銀) それも惡うはないけれど、一度にやつては嫌疑の種、よい潮時を窺つて、追ひ追ひに手を廻すのが上分別ぢや。

(玄澤、俄かに横腹を抱へて苦しみ出す。)あいた、あいた、あいた丶丶丶。

(お銀の方) これ玄澤、どうしやつた、何處ぞ加減が惡るいのかえ。

(玄澤) あいた、あいた、あいた丶丶丶。(忽ち激しい痙攣が五體を襲つて來たらしく、太つた、だぶだぶした頰の肉や唇の周圍をびくびくと歪め戰かせながら、物凄く呻吟する。)

（お銀の方、玄澤の傍から逃げるやうに飛び退つて、恐ろしく緊張した眼つきでぢつと苦悶の表情を凝視する。）これまあ其のやうに苦しみ出して、ほんにびつくりするではないか。生憎のこと梅野は居ず、妾一人で手の附けやうがないわいの。

（玄澤）うーむ、苦しい、……五臟六腑が煮えくり返つて、は、は、腸が掻き挘られるやうでござるわ。……さ、さ、さてはあなたは先刻の藥を、拙者にお飲ませなさりましたな。

お銀の方、死んだやうに堅くなつて、相變らず默然と凝視して居る。

（玄澤）ちえゝ欺されたか、殘念だッ。（云ふと同時に相手を眼がけて組み付かうと試みたが、四肢が痺れてしまつたと見え、ばつたり臀餅を舂いて四つ這ひに倒れる。やがてひいッと悲鳴をあげたかと思ふと、兩腕を突張つて上半身を棒のやうに撥ね起す。見ると鼻の孔や口元から血が夥しく吐き出されて、たらたらと頤の邊を流れて居る。更に一層猛烈な痙攣が來てのたうち廻つて居るうちに、今度は仰向けにのけ反つて、手足を藻掻きながら腰の骨を中心に分廻しの如く疊の上を轉り出し、甲走つた聲で絶叫する。）畜生！だ、だ、だれか來てくれ！ひ、人殺しだ！

（お銀の方、不意に大聲を出されたので、狼狽しながら玄澤の傍へ近寄り、頭の所に佇んだまゝ相手の顏をつく〴〵と見下ろした後、冷やかににつこりする。）欺されたのを今知つたとて遲いぞえ。もう大人しく觀念しや。

（玄澤）ひ、ひとごろしい……

お銀の方、靜かに帶の間から懐紙を取り出して玄澤の口を塞ぐ。相手はだんだん力が弱つて來て、まだ機械的に手足をふるはせて呻つて居る。舞臺廻る。

第二場

場面――舞臺の左方に梅野の部屋、部屋の前には疊廊下がついて居て、くの字なりに右側へ繞り、眞直ぐに奥の方の暗闇へ走つて居る。その暗闇のつきあたりの所が丁度お銀の方の部屋らしく、襖の隙間から燈の影が洩れて居る。それ以外には舞臺に一點の火光もない。前の場面と同じやうに白綸子の紋帳が一と張り、室内の右手寄り

に吊られてある。蚊帳の中には誰も寢て居ないのであるが、萬一寢て居たところで明りがないから、外より様子はわからない。その他、部屋の中の調度は凡べて朦朧と闇に浸つて居る。

暴廊下の左の方から、腰元のお由良がお茶坊主の珍齋を伴うて出て來る。右の手に雪洞を携へ、成るべく光が散らぬやうに左の袂で蔽うて居る。いかにも正直で賢さうな、うら若い愛らしい娘である。父の珍齋は、此れも娘の親とは思はれない程に顏も心も若々しい、色白の、水々とした青坊主である。著しく剽輕で臆病だと云ふ事はその眼つきを一見すれば直ちに頷かれる。

（珍齋）はて此のやうに眞暗ではさつぱり様子が判らぬが、……これ娘、（廊下の中程へ來て、お由良の手を摑んだまゝハタと立ち止る。）そこにふらふらと薄氣味惡う動いて居る物は、あれは何ぢや。

（お由良）えゝ何處でござります。何もそのやうな氣味の惡い物はござんせぬ。

（珍齋）それ、それ、そこを見やいなう。何ぢや知らぬが暗闇に白い物がふらふらと、動いて居るに違ひない。

（お由良）おほゝゝゝ、まあ父様の臆病な。あれは蚊帳でござりませうが。

（珍齋）成る程〳〵、さう云はれゝば蚊帳らしいが、どなたが休んでおいでになるのぢや。

（お由良）こゝは梅野さまのお部屋でござんすわいな。

（珍齋）なに梅野さまのお部屋ぢやと？これはしたり、何しろかやうな眞暗闇でとんと見當がつかぬ爲め、飛んだ疎忽をいたしてござる。（廊下に畏まり、蚊帳に向つて叩頭する。）へゝゝ、もし梅野さま、お召しに依つてお氣に入りの珍齋めが、唯今罷り出でましてござりまする。

（お由良、雪洞で蚊帳の中を照らして見ながら）蚊帳の中は空つぽなのに、父様何をして居やるぞい。大方梅野さまは、まだ奥の間でお部屋様の御相手を勸めて御いで遊ばすのでござんせう。暫くこゝにお待ち申して居ようわいの。

（珍齋）なんの事ぢや。また此の蚊帳に欺されたか。あはゝゝゝ。

（梅野）もし、お靜かになさりませ。お聲が高うござ

んする。
(珍齋、あはてゝ口を抑へる。)どつこい、油斷がならぬわえ。頓興な聲は地聲故、ついつい調子が高くなる。
――それにしても此の夜更けに密々のお召しとは、どう云ふ譯であらうかなう。御用を承らないうちは何やら氣がゝりで溜らぬが、其方は様子を知らぬかの。
(お由良)どう云ふ譯か一向に存じませぬ。たゞ珍齋に至急頼みたい事がある故、今宵密かに連れて參れと梅野様のお云ひ附け、先刻私が寢て居たところを起されて、急にお使ひに立たされたのでござんする。
(珍齋)その密々の御用と仰っしやるのが、どうも私には腑に落ちぬて。
(お由良)父様は勿論私とても、今宵の事を口外したら許しはせぬ。事に依つたら命にもかゝはるぞと、嚴しいお達しでござんしたぞえ。
(珍齋)なに命にもかゝはると?、……う、う、嫌なこと嫌なこと、そんな恐ろしい御用には、係り合ひたくないものぢや。
(お由良)私も氣味惡う思うたなれど、お言葉に從はねば又どのやうな難儀にならうも知れぬ故、よんどころなく父様をお迎へに行つたのでござんする。
(珍齋)口外するなと云はれても、人一倍お喋舌りな私のこと、いつ何時うつかりと舌がすべらぬ物でもないが、それで命を取られては溜らぬわい。あゝ嫌なこと嫌なこと、思ひ出してもぞつとする。なう娘、何とかしてその話を聞いてから、今宵のところは御免しを願ふ譯には參らぬか。何だか足がすくんでしまつて、もう一寸も行かれぬわえ。
(お由良)どんな御用か聞かぬうちから、そのやうに恐ろしがつても詮ないこと、臆病も好い加減になさりませい。
(珍齋)これ、ちよいと靜かにするがよい。……氣のせゐか知らぬが、どうも不思議な呻り聲が遠くの方から聞えて來るやうぢや。
(お由良)えツ、呻り聲……
(珍齋)それ、それ、あれがお前に聞えぬかいやい。

兩人沈默して耳を欹る。奥の間の方から玄澤の苦しみうめく聲がかすかに響いて來る。

(お由良)おゝ、あれはたしかに呻り聲、……それではやつぱり推測通り、玄澤殿が……

(珍齋)なに玄澤ぢや、お醫者の細井玄澤殿が、今頃此處においでなさるのか。

お由良默つて何か考へて居る。呻り聲が又聞える。

(珍齋)これ娘、急にそのやうな仔細らしい顔つきをして、何を考へ初めたのぢや。一から十まで合點の行かぬ今宵の様子、譯を知つて居るのならそつと敎へてくれぬかえ。これお由良、まあ氣味の惡い、どうしたと云ふ事ぢや。

(お由良)もし父様、譯をそなたに敎へた事が知れたなら、私も大方命はないにきまつて居るが、たとへ敎へるなと云はれても敎へずには置かれぬ仕義、――お家の大事に係はること故、びつくりせずに氣を落ち着けて、よう聞いて下さりませ。

(珍齋)はて滅相なことを云ふ。それだけ聞いても私はもう體中がぶるぶる顫へて、動悸が早鐘を打つやうぢや。そのやうな空恐ろしい話なら、いつそ聞かずに置くとしようか。

(お由良)いえいえ聞くのが恐ろしうても、聞かせぬ譯には行きませぬ。常々から臆病な父様故、それを聞いたらどのやうに膽を冷やすことであらうと、今迄控へては居たなれど、遅かれ早かれどうせ一度はそなたの耳へ這入ること、覺悟をきめて私の話をとつくり聞いて下さんせ。

(珍齋)えゝそのやうな前置きは抜きにしてくれ。威嚇し文句は眞平ぢや。

(お由良)何で私が父様を威嚇かすやうな意地惡をしようぞい。しつかり心を落ち着けて、話を聞いて貰つた上、次第に依つたら父様も、お家の爲めに命を捨てねばならぬところでござんする。

(珍齋)えゝもう解つて居ると云ふに、私は覺悟をして居るから、さつさと話すがよいではないか。

(お由良)私とてもたしかな事は云へぬけれど、此の

間から様子ありげな話の模様を襖越しに聞いて居れば、お部屋様と御家老の靫負様とが一つになつて、お家を押領しようと云ふ惡企み、それには勿論梅野様も加擔人でござんする。——もし父様、あの三人はても恐ろしいお方ばかりでござんすぞえ。……

珍齋はすつかり元氣を失つて、生きた心地もないやうに俯向いたまゝ聞いて居る。さうして時々、返辭の代りに怯えた眼つきで娘の顔を睇へるが如く窃み視る。

右側の廊下を梅野が忍び足で歩いて來る。暫く暗がりに彳んで、お由良の話に耳を傾けて居たが、きつと思案をしたらしく、室内へ這入つて蚊帳の中に隱れてしまふ。兩人とも心づかず。

(お由良)詳しい事は知りませぬが、あのお部屋様の素情と云ふは、何でもお卑しい藝者上りで、御家老様とは昔馴染の間柄、——そればつかりか若君の照千代様は、あの二人の間に生れたお子さんでござんすわいな。

(珍齋)えゝッ、そんなら照千代様は、殿様の御種ではないと云ふのか。

(お由良)さあ、密談の工合ではさうらしうござんする。お部屋様には其の後長らく靫負様との御縁が切れて居たところ、どう云ふ譯かつい五六日以前から昔の縒が戻つた様子で、毎夜のやうに奥の間へ御家老様を忍び込ませ、不義を重ねておいでなさります。

(珍齋)あんまり思ひがけない話で、わしにはとても本當のやうな氣持ちはせぬが、其方はたしかに御家老様の御出でのところを見屆けたかな。

(お由良)それはたしかでござります。惡い事は出來ないもの、御殿の内で誰一人知る者はないと思ひの外、私がちやんと見屆けて居るのぢやわいな。不義密通はまだしもなれど、捨て置き難いは照千代様を種にして、お家を乘つ取らうと云ふ謀叛の相談——まあお聞きなさりませ、今度奥方が御妊娠遊ばしたのを殘念がつて、玄澤殿に毒藥を拵へさせ、お産の前にこつそりと母君諸共胎内のお子様をない物にしてしまはうと云ふ計略……

(珍齋)して見ると、玄澤殿はお部屋様の一味ぢやな。

(お由良)一味どころか玄澤殿もお部屋様とは昔馴染、切つても切れない惡縁らしうござんする。照千代

様は何を隠さう其方の子ぢやと、お部屋様にうまうま欺されて、あの慾深な玄澤殿が今宵ひそかに毒藥を持つて來たのはよいけれど、……まあ、あの呻り聲をお聞きなさりませ。

(珍齋)おゝ寒む、寒む、何だか私は體中がぞくぞくして來たが、もうその邊で話を止めぬかい。

(お由良)いゝえ父様、これからがほんたうに大事なところ、父様のお身の上にもかゝはる話でござんすわいな。……可哀さうに玄澤どのは、惡に與した天罰とは云ひながら、お部屋様の罠にかゝつて、自分が作つた毒藥を梅野様から御酒に混じてすゝめられ、ついうかうかと飲まされて、たつた今あの通り、狂ひ死に死ぬ最中でござんする。——あの藥さへ手に入ればお部屋様には邪魔者の玄澤どの、遲かれ早かれ殺されるにはきまつて居れど、こよひ此の場であへない最後を遂げたのは、よい見せしめでござんする。

(珍齋)それにしても私への御用と云ふのは何ぢや。餘計な事を喋舌らずと、梅野様が此處へお見えにならぬうち、早く其の方を教へてくれ。あゝいやな事になつたなあ。

(お由良)先程そつと奥の間の外の廊下で立ち聽きをした鹽梅では、玄澤殿の拵へた粉藥を、奥方の召し上る御膳部の中へ振り撒くのが、父様の御役目でござります。

珍齋、默つて唯ぶるぶると顫へて居る。

(お由良)それを聞かねば殺すと云つて威嚇しつけ、是非とも父様に引き受けさせると、梅野さまが仰つしやつておいでになりましたわいな。

(珍齋)……

(お由良)もし父様、そのやうに恐がつてばかり居るところではござんせぬ。私は父様の覺悟が聞きたうござります。今にも梅野さまがお召しになつて、奥の間へつれて行かれ、大事を明かして頼まれたら、まあ何となさりまする。

(珍齋)いくらお召しになつたとて、そんなところへ私は行かれぬ。此れで御免を蒙むる故、後はよろしく

其方に頼む。

(お由良、あはてゝ逃げ出さうとする珍齋の袂を捕へる。)まあまあお待ちなさりませ。此のまゝ逃げてよい程なら、私はわざ〱父樣を御連れ申しはいたしませぬ。

(珍齋) はて飛んでもない事を云ふ女ぢや。そんなら私に惡企みの手傳ひをさせる了見かの。

(お由良) いゝえさうではござりませぬ。お家の爲めに捨てゝ置かれぬ場合故、疾うから私は密告しようと考へては居るけれど、動かぬ證據を掴まぬうちに迂濶な眞似は出來ぬと思うて、差し控へて居たのでござんす。なう父樣、今宵そなたをお召しになつたはもつけの仕合せ、わざと頼みを引き受けたやうに見せかけて、一味徒黨の數はもとより、事情を殘らず捜つた上、私に知らせて下さんせ。まだ御家中にどのやうな加擔人があらうも知れず、無闇な人には明かせぬ相談、それで父樣にお願ひするのでござります。

(珍齋) 密告するのもよいけれど、若しその前に見つけられたらどうするのぢや。今も其方が云ふ通りどんな所にお部屋樣の味方が居ようも知れぬぞえ。年はも行かぬ娘の癖に、そのやうな危いことには近寄らぬのが何よりぢや。先づ止めにせい、止めにせい。

(お由良) では父樣はお家の大事を聞きながら、うつちやつて置く御所存かえ。

(珍齋) お家の大事も命には換へられぬ。もうそんな事は眞平々々。

(お由良) そのやうに頭から恐がらずと、よう考へて下さりませ。父樣の命も助かるやう、忠義の道も立つやうにしたがよいではござんせぬか。お部屋樣に頼まれたら、表向きは何處までも承知して、一味に加はる誓を立てたら其の場は無事に濟みまする。それから後で私と一緒に密告すれば、惡人たちは一と網に召し取られ、そなたは却つて御褒美に預るわいの。

(珍齋) それでもやつぱり裏切りをしそくなつて、見付けられたら大變ぢや。萬一首尾よく行つたところで、若し一人でも一味の奴が殘つて居たら、きつと意趣返

しをされるであらう。そんなあぶなつかしい藝當は、とても私には出來ぬわい。

(お由良)謀叛の裏切りをしたからとて、誰が意趣返しをしませうぞえ。ほんに父様の臆病は方途が知れませぬわいな。

(珍齋)いやいやなかなかさうであるまい。相手がそれ程の惡人では、定めて裏切りの出來ぬやうに、充分手配りが屆いて居ようぞ。そなたと私が密告したとわかつたら、たとへ御褒美を頂いても、惡人ばらに恨まれて、どんな風に讐を取られるか知れぬこと、わしは半日でもそんな苦勞をするのは御免ぢや。

(お由良)そんなら父様はどうしても、私の頼みを聽いてくれぬかえ。お家の爲めに忠義を盡す積りはないかえ。

(珍齋)忠も不忠も命あつての物種ぢや。……こんな物騷なところで、いつ迄其方と話をしては居られない。ぐずぐずして居て梅野さまがおいでになつたら百年目、何しろ私は逃げ出すから、後はよろしく頼んだぞ。

(お由良、再び珍齋を引き止める。)まあお待ちなさりませ。ようござります、これ程云ふても父様が嫌ぢやと云ふなら詮ないこと、もうお頼み申しませぬ。

(珍齋)頼むと云ふても頼まれはせぬ。えゝ早くそこを放してくれぬか。

(お由良)さう云ふ譯なら私も父様と御一緒に逃げまする、幼い折から大恩を受けた御主人の梅野さまを、見捨てゝは濟みませぬが、此の上御奉公をして居ればいづれ私も難儀を受けるにきまつて居る。怪我誤りのないうちに私を逃がして下さんせ。

(珍齋)うん、それがいゝ、それがいゝ。さうきまつたら寸時も早く一緒におぢや。……(急に考へ直して又立ち止る。)けれどもなあ、これお由良、其方(そなた)どうしても此の場を逃げる了見なら、私と別々に逃げてくりやれ。私がお前を唆かして逃がしたやうに、お部屋様から睨まれては大變ぢや。

(お由良)それは御安心なさりませ。此の場は一緒に逃げ出しても、私は父様に匿まうて頂かうとは存じま

せぬ。此れから直ぐに江戸を落ち伸び、お國表へ駈けつけて、謀叛のきざしを御城代へ訴へて出る所存でござんす。私獨りでする仕事ゆゑ、決して決して父様に御迷惑はかけませぬ。

（珍齋）やれやれ其方の忠義立てには困つたものぢや。先刻から口を酸つぱくして云ふ通り、萬々が一仕損じたら其方は愚か私の首まですつ飛んでしまふわい。いくら迷惑はかけぬつもりでも、やつぱり迷惑が掛つて來る。斷つてそのやうな眞似をするなら、親子の縁を切つてしまふからさう思へ。

（お由良）親子の縁は切られてもお家の爲めならせんないこと、どうぞ父様、お許しなすつて下さりませ。

（珍齋）えゝどうなりと勝手にせい。其方のやうな向う見ずの、大それた娘とは、もうちよつとでも一緒に歩くのは迷惑ぢやが、此の暗闇では廊下の方角がさつぱりわからぬ。直き其處邊まで案内をして貰うて、それから後は別々ぢや。さあさあ早うせぬかいな。梅野さまに見つけられたらおしまひぢやぞえ。

（お由良）ちよいと、もう一遍待つて下さんせ。證據の品を一つも持たずに逃げて行くのも殘念な、何かよい手がゝりはないものか知らん、……おゝ、さうぢや、さうぢや、いつも梅野さまの枕元に置いてある、嚴重な鍵のかゝつた蒔繪の手箱、あの箱の中は何か曰くがありさうぢやが、ひよつとして證據の品が這入つて居ようも知れぬ故、ついでに盗んで行くとしよう。

（珍齋）これ！馬鹿なことをしてはならぬ。

お由良、珍齋の手を振り切つて蚊帳の中に這入る。直ぐにきやつと云ふ悲鳴が起る。夜目にも眞白な綸子の蚊帳の面へ、ザツ、ザツと二度ばかり恐ろしく多量な血潮がはねかゝつて、花火のやうにパツとひろがつて流れ落ちる。同時に眞赤な、奇怪な、化け物のやうな容貌を持つた物體が仰向けに蚊帳の外へ轉り出す。それがお由良の死骸である。

一刀の下に眉間を割られたらしく、熱に溶けた飴のやうに顔の輪廓が悉く破壊されて眼球と歯と舌だけがにゆつきり飛び出て居る。僅かに鮮血が着物の肩から胸の邊を染めたゞけで、衣紋は少しも亂れて居ない。足袋にも埃は着いて居ない。蚊帳を掴んだ兩の手も釣合ひに生々しく奇麗である。顔と髪の毛を除く外は、凡べてが生き

て居た時の若々しい愛らしさを保つて居る。

(梅野、蚊帳の中から血刀を提げて現はれる、彼の女の方がより多く血を浴びて、殊に兩手が鷄の砂膽(すなぎも)のやうに粘(ねば)り光つて居る。)これ珍齋、其方の娘の死に様を見や。妾に裏切りする奴は、誰であらうが此の通りだや。わかつたかえ。

(珍齋)へ、へーえ。(と云つたまゝ、腰を拔かしてぺつたりと据はる。)

舞臺が廻つて、再び第一場のお銀の方の居間になる。

第三場

お銀の方が玄澤の死骸の傍にうづくまつて煙草を吸つて居る。屍骸は悶死した形のまゝ薄い夜着(かいまき)が被せられて、頭の頂と兩手の握り拳が僅かに端から見えて居る。其の他は第一場の通り。

梅野が左の襖を開けて獨りで這入つて來る。衣服を改めて體の血潮をすつかり拭つてしまつた様子。

(梅野)もし、藥の利き目はいかゞでござりました。

(お銀の方)ほんに首尾よう行つたわいの。世にも物凄い毒藥ぢやと、自分で効能を述べた通り、あの杯を一つ二つ重ねるうちに、見る見る顔の色が變つて、手足を悶え苦しんで、話に聞いたと寸分違はぬ死に方をしてしまうたぞえ。まあ此の姿を見やいなう。

さう云ひながらお銀の方が死骸の夜着を拂ひ除ける。玄澤は仰向けになつて、膝を上げ、兩腕を伸ばし、殆んど裸體と云つてもよいくらゐに着物の襟を掻きひろげ、肩先から胸板から兩股を露出して倒れて居る。總身が極度の紫色に變色し、眼と鼻孔と唇の周圍に吐血の痕跡を留めて居る。

(梅野)ても恐ろしい藥の利き目、まあ人間と云ふ者は、脆いものでござんする。

(お銀の方)さう云へば先刻(さつき)此奴が懷へ入れて居た妾の附け文、あれを此方へ取り出して賜れ。

(梅野)おゝ、よろしうござります。(屍骸の懷へ手を差し入れて文を取り返し、お銀の方に渡す。)

(お銀の方)此奴を欺しておびき寄せたいばつかりに、靱負殿には內證で心にもない附け文をしたものゝ、殺してしまへばあの御方のお疑ひも晴れるであらう。

……

(梅野)玄澤を殺すなとは仰つしやつても、實は殺し

てしまひたいのが靱負様の御本心、お部屋様がお手づから御成敗遊ばしたとお聞きになつたら、きつとお喜びなさりまする。

右側の廊下にみしみしと足音がする。兩人竦然として身構へをしながら音の方を見守る。靱負が再び以前の服裝で覆面を取つて這入つて來る。

(梅野)おゝ、あなたは靱負様……最前お歸りになつた筈が、どうして又こゝへ?

(靱負)はゝ、實は歸ると見せかけて、蔭に隱れて聞いて居りました。

(お銀の方)えゝッ、そんなら今の一分始終を?

(靱負)面目もない次第ぢやが、お前様の實意を疑うて、玄澤との話の模様を搜つて見たのでござります。

(お銀の方)搜つて見たら妾の實意は解つたであらう。其方をいとしう思へばこそ、妾が自ら玄澤を手にかけたのでござんする。なう靱負どの、もう疑ひは晴れたかえ。

(靱負)今となつては晴れましたが、實は先程廊下の外で聞いて居ると、やれ附け文を讀んだかの、照千代様は其方の子ぢやの、湯漬の中には拙者に毒を飮ませようのと、睦しさうに語らうて居るお前様の口振りに、玄澤ばかりか拙者までが欺されて、全くハラハラいたしたわい。

(お銀の方)おほゝゝゝ、容易なことでは手管に乘らぬ玄澤ゆゑ、わざと安心させる爲め心にもない其方の惡口やら附け文やら。どうぞ免してくりやいなう。

(靱負)さてもさても裏の裏かくお前様の手管の凄さ、今度はお許し申しますが、拙者にだけは其の手は眞平でござりまする。

(お銀の方)其方にだけは封じて居れど、若しも浮氣をした時は、どうなる事か知れぬぞえ。

(靱負)さうと聞いては猶のこと、浮氣などは出來ませぬ。したが梅野どの、首尾よう藥が手に入るからは、後の役目は珍齋ぢやが、彼奴(あやつ)はいまだに參りませぬかな。

(梅野)さあ其のことでござんする。實は召し使ひのお由良奴が、年はも行かぬ娘の癖にいつの間にわれわれの相談を嗅ぎつけたのやら、先程父の珍齋を妾の留守へ呼び入れて、餘計な入れ知慧をして居た故、よんどころなく其場で斬つて捨てました。
(靭負)えゝッ、して珍齋はいかゞいたした。
(梅野)娘の最後に膽を潰して氣を失うたのを幸ひに廊下の柱へ括り付け、逃がさぬやうにいたして置きました。
(靭負)さてさて其れは困つたことぢや。入れ知慧をされて居ては、尙更賴む譯には參らぬ。不憫ながら娘と一緒に片附けてしまはねばなりますまい。
(梅野)いゑ〳〵其れには及びませぬ。いくら娘が裏切りをするやうに說き勸めても、それはそれはおかしい程お部屋樣の御威勢を恐れ憚つて、たゞもう逃げを張つてばかり居た樣子。あの分ならばきつとおどしが利きます。
(お銀の方)おどすのもよいけれど、一旦承知して置いて、後で訴人をするやうな、ひよんなことにはならぬかえ。
(梅野)いゑ大丈夫でござります。訴人をしたらわれわれの一味の者にきつと讐を取られると、恐がり切つて居ります。あれでは此方が威嚇さぬ前から、もう充分に威嚇されて居るのでござります。
(靭負)いかさまあの臆病では、そのくらゐな事はござらうも知れぬ。兎に角此れへ呼び出して、とくと樣振りを見定めるといたさう。
(お銀の方)したが此のむごたらしい屍骸を見たら、又珍齋が氣絕をするであらうぞい。何處ぞへこつそり運んでしまふ手段はないか。
(梅野)それには一と先づお次ぎの間の、戸棚の奥へ隠して置いたがようござります。後程妾が葛籠へ入れて、目立たぬやうにお庭の古池へ沈めまする。もし靭負樣、憚りながらお手をお借し下さりませ。
(靭負)おゝ承知いたした。(梅野は屍骸の兩脇に手をさし込み、靭負は兩脚をかゝへて持ち上げる。)年は以

つても水々と狸のやうに太つた男、なか／＼重たうござるなう。

兩人次ぎの間へ屍骸を運び去る。靱負だけは直ぐに戻つて來る。

(靱負) つまらぬ男の意地づくから、八年前にお前様を張り合うて、今日まで拙者の色敵になつて居たあの玄澤、これでやうやう胸がすつきりいたしたわい。

(お銀の方) ほんに妾も惡魔拂ひをしたやうで、急にさつぱりしたわいなあ。

梅野、珍齋の縛めを解いて連れて來る。未だに土氣色をしてぶるぶる顫へて居る。お銀の方と靱負の姿を見ると、何かに打たれたやうにぎよつとして畏まる。

(梅野) お部屋様、御家老様、仰せに從ひ珍齋めを此れへ引立てゝ參りました。

(お銀の方) おゝ、此れ珍齋、もそつと近う寄りや。いつもの瓢輕は何處へやら、大さう萎れて居るさうなが、今宵に限つて遠慮するには及ばぬぞえ。

(珍齋) は、はあ。(微かな聲で返辭をして、先方の顔を見ないやうに唯お辭儀ばかりして居る。)

(梅野) お部屋様には其方に何やらお尋ねの筋がある筈ゆゑ、眞つ直ぐに御答へをせねばならぬぞえ。

(珍齋) は、はあ。

(お銀の方) たつた今、梅野に痛い仕置きを受けた召し使ひ、あのそれ、お由良とやら云ふ大それた腰元は、其方の娘に違ひはないか。

(珍齋) い、いかにも、わ、わ、わたくしの娘ではござりましたが、ま、まつたく、以て、大それた、あらう事かあるまい事か、勿體なくもお部屋様に弓を引かうとするやうな、不埒な奴ゆゑ、先程とうに勘當したのでござります。へい、もう其の事なら梅野さまが、蔭で聞いておいでになつて、よく御存じでござります。親子の緣は切れて居るのでござります。

(お銀の方) 親子の緣を切つたと云うても、繋がる血筋は爭はれぬ、其方は娘の最後を見て、きつと不憫に思ふたであらう。

(珍齋) それは少しは不憫……………でもござりますが、親の言葉を聽き入れず、娘に似げない生

意氣なことをする奴は、御成敗を受けまするのが當り前。もう私にさへお疑ひがかゝりませねば、それで結構でござります。結構どころか、一生御恩は忘れませぬ。

（梅野）したが珍齋、其方がどのやうに言ひ譯をしても、繋がる縁があるからは、なかなかお部屋様のお疑ひは晴れぬ道理。お由良と其方とは同腹ぢやと、推量されても仕方がないぞえ。

（珍齋）もし、梅野さま、それはあんまりお情ないござります。私が同腹であるかないか、様子を聞いておいでなされたあなた様が、御存知の筈ではござりませぬか。

（梅野）様子はすつかり聞いて居たが、お由良の奴がわれわれを謀叛人ぢやの惡人ぢやのと惡口をついた度毎に、其方も同意をして居たではないか。

（珍齋）な、なるほど、たゞ口先の惡口ぐらゐは同意をしたかも知れませぬが、御部屋様の御謀叛を密告しようの何のと云ふ、そんな滅さうな、恩知らずの惡企みには、決して決して同意をいたした覺えはござりませぬ。これはたしかでござります。もそつと正直なことを申しますと、私は非常に臆病もの故、御謀叛などと云ふ、まあ孰方(どち)らかと云へば、少し物騒な御相談に係り合ふのは氣味が惡い。……いえその、成る可くならば、係り合はぬ――方がよいと、かう申したゞけでござります。たとへお由良からどのやうな話を聞きましても、誰にも告げ口などを致すことではござりませぬ。もし、梅野さま、私はほんたうに嘘も掛け引きも何もない、正直正銘なことを申し上げるのでござります。どうぞお察しなされて下さりませ。同腹をしたなどゝ云ふお疑ひが晴れますやうに、お部屋様へお口添へをなさつて下さりませ。

（梅野）妾とても其方の正直は察して居るが、たとへ同腹の疑ひが晴れたとて、其方の命を助ける譯には行きませぬ。

（珍齋）ひえーつ。それはあんまり御無體でござります。お疑ひが晴れたのに殺すと云ふのは、非道うござ

ります。
(梅野)そりや非道いかも知れぬけれど、一味の外に一人でも此方の秘密を知つて居たら、たとへ告げ口をせぬからとて、生かしては置かれぬぞえ。氣の毒ながら其方の命は貰ひまする。
(珍齋)ま、お待ちなされて下さりませ。決して決して誰にも告げ口はいたしませぬが、それでもやつぱり、どうしても命はないのでござりますか。
(梅野)さうぢやわいなあ。
(珍齋)もし、さうあなた樣ばかりで獨りぎめになさらずと、御部屋樣や御家老樣にもよく御相談をなすつて下さりませ。
(お銀の方)はてまあ其方は往生際の惡い男ぢや。今も梅野が申した通り、敵でなうても味方でなくば、大事を聞かれて助けて置く譯には行かぬ。これ程因果を含めたら、もう好い加減に覺悟をしや。
(珍齋)そんならどうでも、私の命はござりませぬか。
(梅野)其方に恨みはないけれど、一味徒黨の掟ゆゑ是非に及ばぬわいな。
(珍齋)えゝ、そ、そんなら仕方がござりませぬ。どのやうな御用なりとも勤めまするゆゑ、どうぞ私を、一味にお加へなされて下さりませ。
(梅野)お部屋樣、珍齋が急にあのやうな事を申しますが、いかゞ取り計らひませう。
(お銀の方)味方に入れても頼みにならぬ臆病者、役に立つどころか、足手まとひになりはせぬかえ。
(靱負、其の時までわざと恐らしく默り込んで、ぢろぢろと珍齋を睨め付けて居たが、いかにも憎體な冷酷な句調で云ふ。)いかさま其の御心配は御尤も。これ珍齋其方やわれ／＼の味方になると申したが、命が惜しさに一時逃れを申すのであらう。
(珍齋)なか／＼以てさやうではござりませぬ。……
(靱負)いや／＼さうに違ひないわ。梅野どの、やつぱり此奴は殺してしまうたがようござる。
(珍齋)あ、もし、さう仰つしやらずにもう一遍考へ直して下さりませ。私の力で出來ます事なら、たとへ

どんなに物騒な、どんなに危い御用でもいたしまする。へい、そりやもう必ずいたしまする。

（お銀の方）えゝまあほんとにうるさい奴ぢや。ならぬと云ふたら黙らぬかえ。

（珍齋）ちとおうるさうございませうが、私も一生懸命でございます。此れも先程お由良から聞きましたのでございますが、現に今宵は私へ、仰せつけられる御用の筋がおありなされたのでございませうが。……どうぞその御用を私めに勤めさせて下さりませ。もしお部屋様、御家老様、お願ひでございます。御用の筋は承知いたして居りまする。必ず立派に仕遂げますれば、お任せなされて下さりませ。今更味方に加へられぬと仰つしやるのは、お情なうございますぞえ。

（お銀の方）いや一旦は其方に用事を頼む積りで居たなれど、愛憎のつきた臆病者、とても大事は任せぬ程に折角ながら断りまする。

（靱負）こりや珍齋、よつく承れ、成る程其方は今でこそ、立派に役目を仕遂げる覺悟で居ようも知れぬが、性得臆病な人間は、いかに勇氣を起しても、大事にあたつて狼狽へ廻り、必ず仕損じがあるものぢや。拙者は勿論お部屋様も其處を御案じなさるのおやぞ。われわれ一同其方の言葉を疑うではない。其方の正直は信じて居るが、其方の臆病には當惑して居る。生れ變つて來ぬうちは、とても其方にはやれぬ仕事ぢや。ぢやに依つて氣の毒ながら手討ちにいたさねば相成らぬ。

（珍齋）へい、御家老様の仰つしやる事は、ようく解つて居りまする。いかにも私は、それはもう、きついきつい臆病者でございます。かうなつたら全く嘘は申しませぬが、つまり私はたゞ殺されるのが嫌なのでござります。たとへ殺されると極まつても、一日でも二日でも一寸逃れに生きて居たいのでござります。唯今のところ、外に望みはござりませぬが、殺さずに置いてさへ下さりましたら、こんな有り難い御恩はござりませぬ。……

（靱負）それ見い、そのやうな臆病ものにどうして大事が勤まるのぢや。

(珍齋)……さあ、そのやうな臆病者故、生かして置いて下されば、死ぬのが恐さに却つて一生懸命になりまする。命知らずの勇者と違ひ、殺さるゝのが泌み泌み嫌ひな私ゆゑ、おどかされゝば本氣になつて働きまする。おかしな理屈でござりますが、こればつかりはたしかでござります。

(靱負)ふゝゝゝ、さてさて其方の臆病は重寳ぢや。死ぬのが恐さに働くまではよいけれど、死ぬのが恐さに裏切りをして、餘計な告げ口を致す事はあるまいかの。

(珍齋)いゑいゑ大丈夫でござります。私は臆病な代りに目先きは可なり利いて居りまする。なまじ裏切りなどを致せば、却つて命が危い事を充分存じて居りまする。へゝ、(何となく助かりさうなので、だんだん安心して來る。)お世辭ではござりませぬが、當時日の出の勢のお部屋樣、忠義なお方は片つ端からお手討ちにされて、お部屋樣のお言葉ならば邪が非でもお通しなさるお殿樣に、今更告げ口を致すやうな愚な私ではござりませぬ。もうその事ならほんたうに御安心なされて下さりませ。下世話に申す馬鹿と鋏は使ひやうで切れるとやら、臆病者も使ひやうではなかなかお役に立ちまする。どうぞ命をお助けなされて、ためしに一遍お使ひなされて下さりませ。一生のお願ひでござります。此の通りでござります。(兩手を合はせ拜む。)

(お銀の方)あれ程に云ふものを、聽かぬと云ふも不憫ぢやが、なう靱負どの、どうしたものでござんせう。

(靱負)さやうでござります。先程からだんだんと珍齋の申し譯、一應は道理のやうにも聞えまする。裏切りすれば命のないと云ふ事が、よく呑み込めて居りさへしたら、あながち一味に加へられぬと極まつたものではござりますまい。……

(梅野)これ珍齋、お二人樣があのやうに仰つしやるからは、次第に依れば其方に代つて、妾が命乞ひをして進ぜるが、必ず必ず其方や裏切りをしないかえ。

(珍齋)へい、こりや梅野さま忝う存じまする。今もあれ程申し上げた通り、裏切りなどに金輪際致すこと

ではございませぬ故、どうぞ宜しうお取りなしを願ひまする。あなた様は命の親、此の通り伏し拜んで居りまする。――(拜みながら思ひ出したやうに又附け加へる。)お部屋樣の御威光は、ようく解つて居りまする。

(梅野)その御威光が解つて居るならよいけれど、ほんに日の出の勢のお部屋樣。憚りながら此の御家中の御家來衆は、誰であらうが殺さうと生かさうと思ひのまゝ。たとへ謀叛の證據を握つて訴へる者があらうとも、肝腎の殿の御心はお部屋樣のお手の内にあるのぢやぞえ。どのやうにでも云ひくるめて、忠義立てする奴原が却つて御勘氣を蒙るやうに、取り繕ふのは造作もないのぢやぞえ。――それが解つて居るのぢやなあ。

(珍齋)へい、解つて居る段ではございませぬ。お部屋樣のお味方をしてさへ居れば、間違ひのない私たち、何を酔興に忠義立てをいたしませう。そのやうな馬鹿な眞似は、死ぬのが恐くない方々の、する事でござります。

(梅野)もしお部屋樣、御家老樣、まああのやうに申します故、今宵のところは妾に免じて珍齋めをお見逃しなされて下さりませ。その代り、少しでも不審なかどが見えましたら、その折こそは容赦なく妾が成敗いたしまする。

(靱負)別人ならぬ梅野どのゝお口添へ、まさかに否とも申しにくいが、してお部屋樣の御所存は?

(お銀の方)助けたうはないけれど、味方につけてもよい程な手柄を立てゝ見せるまで、命は當分梅野に預けて置きませう。

(梅野)おゝ、忝う存じまする。これ珍齋、暫く命はお助けなされて、何か手柄を立てたらばお味方に加へてやるとの有り難いお言葉ぢやぞえ。

(珍齋)へゝッ、有り難う存じまする。赦せぬところをお赦し下さるお部屋樣の御恩の程、必ず必ず忘却はいたしませぬ。いやもう今宵は最初から魂が動轉して、生きた心地もございませなんだが、急に安心仕がました。

(靱負)それそれ其方はそのやうな周章て者ぢや。お

部屋樣は其方の命を赦すとは仰つしやらぬ。何か手柄を見せたらば味方に入れても苦しうないが、それまで首を繋いで置くとかう仰つしやつたゞけではないか。安心するにはまだ早いわ。

（珍齋　氣が付いてわざと恐ろしさうな風をする。）な、なるほど、いえ私も安心をいたした譯ではござりませぬ。何か一とかどの手柄を立てゝ、一時も早くお味方に加へて頂くやうに、御奉公を勵みまする。

（梅野）そんなら御奉公の手始めに、先程お由良から聞いた筈の、大事な役目を云ひ附けるが、きつと仕遂げてくれるであらうな。

（珍齋）へえへえよろしうござります。悍りながら奥方樣にもえらいお氣に入りの此の珍齋、隙を狙つて細工をするのは譯なしでござります。

（靫負）その役目も四五日中に果たさねば、其方の命はないのぢやぞ。

（梅野）もしも首尾よう果たしたなら、命を助けてやる上に御褒美の下るやう、妾が計らうて進ぜませう。

（珍齋　ふと何事をか想ひ出して、今度は本當に恐怖に襲はれたらしく、）御褒美などは頂かずとも結構でござりますが、……ほんたうに梅野樣、もしも首尾よく參りましたら、命だけは大丈夫でござりませうな。玄澤殿のやうなことには、ならないでござりませうな。

（梅野）ほゝゝ、其方は目先が利いて居ると云ふたではないか。あの玄澤は勿體なくもお部屋樣へ無體な事を云ひ掛けた故、それで仕置きをしたのぢやが、何で其方をあのやうな目に會はせませう。心配せぬがよいわいな。

（珍齋）ではござりますが、立派にお役目を勤めた後で、もう其の方に用はないなどゝ、仰つしやられては大變でござります。どうやら私は氣がゝりでなりませぬが、大丈夫でござりませうな。

（靫負）大丈夫だと申すのに又してもうるさい奴ぢや。さ程に我等を疑ぐるなら斷つて其方に賴みはせぬ。あいや梅野どの、未だにこんな事を申すやうでは、此奴到底怪しうござる。一層此の場で拙者が手討ちに

致してくれる。

(珍齋、全く度を失つて、再び狼狽し出す。)あ、お待ち下さりませ。お待ち下さりませ。唯今申しましたことは、あれは私の思ひ違ひでござります。あなた様方をお疑り申すなど〻、どういたしましてそのやうな了見は夢にもござりませぬ。――へい、いえそりやもう、私の命はお部屋様へ差し上げたも同然故、今宵のところをお助け下さりましたらば、たとへ手柄を立てました曉に、萬一御都合でどのやうなお仕置を受けましても、一向不服はないのでござります。いづれその時になりまして、お味方に加へて頂くなり、お手討ちになりますなり、改めて思し召し通りに願ひまする。先づ兎も角も御用だけは私に勤めさせて下さりませ。ご、ご、後生お願ひでござります。……

(靱負)え〻、何とも彼とも云ひやうのない臆病者ぢや。命を差し上げたも同然ぢやと云ふ口の下から、直ぐ命乞ひを致し居る。拙者にはとんと此奴の了見が解らぬわい。これ梅野どの、かやうな奴に大事をお任せなされたら、後が面倒でかなはぬ故、斬つて捨てたらようござらうが。……

(梅野)まあさう仰つしやるものではござりませぬ。臆病ではござりますが、妾の眼からは見どころのある此の男、四五日中に必ず手柄を立てさせて、立派な御褒美が戴けるやうに、(御褒美と云ふ言葉を意味ありげに云つて、靱負に眼くばせする。)使つて御覽に入れまする。

(お銀の方)靱負殿の腹立ちは尤もながら、何かにつけて拔け目のない梅野の頼み、聽いてやつても仔細はないでござんせう。

(靱負)それ程までに仰つしやるからは、强ひて異存は申さぬが、返す返すも呆れた奴ぢや。

(梅野 帶の間から藥を取り出す。)そんなら珍齋、玫前玄澤の持つて來た此の藥を、一服其方に預けて置く。必ず共にぬかつてはならぬぞえ。

(珍齋 役目の恐ろしさと自分の運命に就いての憂慮とが、だんだん顯著になつて來て、總身に充ち溯る戰

慄を我慢しながら云ふ。）畏まつてござります。
（梅野）それから其方に話がある。近う寄りや。
（珍齋）はッ。（傍へ寄つて梅野の口へ耳を付ける。恐怖が絶頂に達したらしく、死人のやうな青ざめた血色をし　眼を閉ぢてしまふ。）
（梅野）これ、何故そのやうにふるへて居るのぢや。しつかりと、話を聽き取らぬかえ。
（珍齋、びつくりして眼を開き、胸をさすつて、）はい、畏まつてござります。
（靱負）ふゝゝゝ、（珍齋の樣子を見て微笑しながら立ちかける。）はてもう夜明けに程もあるまい。拙者は此れで御免を蒙りまする。
（お銀の方）おゝ、そんなら途中に氣を附けて、……
（靱負）後は宜しくお二人樣に、お任せ申すでござりませう。
（梅野）妾が其處までお見送り申しませうわいなあ。

靱負・梅野とが廊下に出る。去り際に三人顏を見合はせて氣味惡さうににつこりする。珍齋が厭ーなやうな、判じるやうな眼つきで

三人の姿を盗み見る。

第二幕

第一場——春藤家奥庭、右方に青々と芝生の生へた圓い築山、それに向ひ合つた左の方に池があつて、遠景に御殿の長廊下が見え、凡べて田舍源氏の錦繪風な配置。

舞臺の左端から池を越えて中央へ土橋がかゝり、土橋の袂から少し離れ、築山の前に亭がある、小姓の磯貝伊織之介が人待ち顏に其處へ腰を掛けて、池の向うを眺めて居る。前髮姿の、圓貞流のうら若い妖艶な美男子で、女のやうな優しい口の利き方をする癖のあるのが、何となく油斷のならない、狡猾らしい感じを與へる。袴も着物も恐ろしく派手でなまめかしくて、女性的の優雅と奸譎と、男性的の智慮と豪膽とが巧みに織り交ぜられた人間である事を想像させる。天氣の好い夏の日の午後。幕があくと程なく、梅野が微醉の眼もとをほんのりと紅く染めて、あたりへ氣を配りながら、急ぎ足に橋を渡つて來る。

（梅野、橋の中途に立ち止まり、身を屈めて亭の方を眺めやる、低い聲で、）伊織之介さま、そこにおいでゞござりまするか。

伊織之介、眼を細くして嫣らしく笑ひながら頷いて見せる。梅野、ちよつと後ろを振り返つて再び庭の樣子をうかゞひ、嬉しさうに馳せ寄つて男の傍へうづくまる。

（梅野、片手を伊織之介の膝に凭れ、甘へるやうに、）伊織之介さま、おそくなつて濟みませぬ。そなたは先から妾を待つて居たのかえ。

（伊織之介）さやうでござります。もう此れで小半時、おいでを待ち詫びて居りましたが、あまりお姿が見えぬゆゑ、どうした譯かと案じ暮らして居りました。

（梅野）それはまあ氣の毒な。かう云ふ時には得て意地の惡い、不意の御用が出來たため、思ひの外に遲刻をしたのでござんする。どうぞ許して下さんせいなあ。

（伊織之介）ほんに今日と云ふ今日は、此のやうな淋しいお庭の片隅に、たつた獨りで待ちくたびれて、業を煮やして居たなれど、かうしてお前さまのお顏を見たら、すつかり胸が癒えました。もし梅野樣、よくまあおいで下さりました。私はうれしうござんぞえ。

（梅野）いつもはそなたに待たされるのが妾の役目、たまにそなたを待たせたとて、そのやうに恨むものではござんせぬ。待たるゝ身より待つ身の辛さを、ちつとは覺えて置きやいなう。

（伊織之介）さうしてお前樣は、どうやら醉つておいでなさる御樣子ぢやが、何處ぞで酒を召しましたか。

（梅野）あいなあ、今日も今日とて殿樣が相變らずの御酒宴沙汰、妾もお部屋樣に侍いて席へ列んだばつかりに、少うしばかり强ひられたのでござんすが、おもての風に吹かれた故もう直き覺めるでござんせう。妾の息の臭いのが、そなたのお氣に觸つたら、暫く我慢をして賜や。

（伊織之介）氣に觸りはいたしませねど、お前樣と申し私と申し、お部屋樣から大事な御用を申し付かつて居る體、いさゝかなりとも酒に心が亂れて居ては、油斷の基となりまする。大望成就するまでは、どうぞ愼んで下さりませ。

（梅野）おほゝゝゝ、その心配はさる事ながら、僅かな酒に分別を失ふやうな梅野ではござんせぬ。醉つて

は居ても氣はたしか、……おゝそれそれ、大事な御用で思ひ出したが、今日はそなたにお部屋樣から、是非ともお頼み遊ばすことがありまする。幸ひ今頃女中たちは、一人殘らず御酒宴の席に侍つて、庭には誰も居ない樣子、話を聞いて下さんせ。

(伊織之介)もし、暫くお控へなさりませ。……(立つて行つて築山の周圍に人氣のないのを見定め、再びもとの席へ戻る。)してお頼みと仰つしやりますのは?

(梅野)そなたもかね〲知つてゞあらう。此の間御城代から江戸詰めを仰せ付かつて、お國表より出府した二人の邪魔者。……

(伊織之介)おゝ。それではあの、氏家殿に菅沼殿、あのお二人でござりまするか。

(梅野)いかにも。――あの二人は言はずと知れた御城代の廻し者、われ〱一味の隱謀を嗅ぎつけて、隙だにあらば證據を握り、訴へて出ようと待ち構へて居るお目付役、なか〱心は許せませぬぞえ。

(伊織之介)その事ならば私も前から氣が付いて居りまする。先達てから憚りもなく殿の御亂行を數へ立てて、執念深くお諫め申して居る樣子。早くお手討ちになればよいに、たゞ御勘氣を蒙つたばかりとは、ても運のよいお人たちでござりまする。

(梅野)先程珍齋が偵つて來た話では、今日も二人が申し合はせて、御勘氣の身も顧みず、此れから直ぐに御酒宴の席へ割つて入り、命を捨てゝも殿をお諫め申すのぢやと、互ひに相談して居たとやら。ほんにほんに、餘計な事をするではないか。

(伊織之介)したが、得て忠義者は命を惜しまぬ代りには、知慧の足りない方々ばかり、又懲りずまに諫言して、揚句の果てがお手討ちになるは知れたこと、お二人の最後は眼に見えて居りまする。

(梅野)さううまく行けばよいけれど、何を云ふにもあの氣紛れな殿樣のなさること、決してあてにはなりませぬ。どんなお氣に入りの御家來でも、急にお手討ちになるかと思へば、御勘氣を受けて居た方々が、忽ち御寵愛を蒙むる始末、あれでは二人の最後の程も、

いつの事やら案じられる。
(伊織之介) それではお前様は、あの方々を何とかして、殺してしまふ御所存でござんすかえ。
(梅野) 一日生かせば一日此方の邪魔になるゆゑ、人知れず討ち果たしてしまひたいとは思ふて居たが、知つての通りあの二人は御家中に名の響いた武藝の達者、其の上血氣の若侍では、容易に手出しがなりかねて、今日まで控いて居りました。なう、もし伊織之介さま、お部屋樣のお頼みと云ふのは、こゝのことでござんする。
(伊織之介) して、それはどのやうな儀でござりまするえ。
(梅野) 惚れた慾眼で云ふではないが、當時御家中の人々で、あの二人に勝つた腕を持つ者は、そなたより外にござんせぬ。それを見込んでお部屋樣が、早速そなたに頼みがあると仰つしやるのでござんすわいな。
(伊織之介、口では謙遜をしながら、何處やらに充分な自信を見せて云ふ。)はてまあ其れは及びもないことでござります、僅かばかりの武藝を習ひ覺えましても二十歳にも足らぬ子供の私、何であの方々に勝つた腕がござりませう。ようお考へなされて下さりませ。
(梅野) いえ〳〵そなたの腕前は、誰も知らぬと思ひの外、妾が見拔いて居りますぞえ。女のやうな優にやさしいお姿で、鬼神を凌ぐそなたの腕前、隱さうとても隱されぬ。外の人なら兎も角も、かりにも武藝の片端を心得て居る此の梅野、どうして其れを見逃しませう。もし伊織之介さま、折角のお部屋樣のお頼みをそなた聽いては下さらぬか。
(伊織之介) 聽かぬと申すのではござりませぬが、若しこつそりと闇討ちにでもなさるなら、お手傳ひぐらゐはいたしまする。
(梅野) さあその闇討ちは得て仕損じの多いもの、萬一相手を取り逃がして、世間へ知れたら嫌疑の種を蒔く道理、其れより今日の御酒宴のお座敷へ、二人が邪魔をしに來るのがもつけの仕合せ、わざと喧嘩を吹きかけて、その場を外さず眞劍勝負を願つて出たら、日

頃むごたらしい遊びのお好きな殿様ゆゑ、きつとお許しなさりまする。

(伊織之介)お丶、そんなら御前試合に事寄せて、あのお二人を討ち果たすのでござりまするか。

(梅野)いかにもさうでござんする。いつも御酒興が昂じては、血だらけな勝負事をお好みになる殿様ぢや程に、お部屋様と妾とが口を揃へて唆かしたら、横手を拍つてお喜びなさるでござんせう。その時こそはそなた一人で引き受けて、彼奴等二人を討ち果たして下さんせ。

(伊織之介)成る程御前試合なら、斬つて捨て丶も後の面倒はござりませねど、闇討ちとは譯が違ひ、餘程の技がないからは、お二人を相手にして打ち勝つ見込みはござりませぬ。猶更以て私などの及ばぬこと、平に御容赦願ひまする。

(梅野)これ、そなたまあ何を云やるのぢや。云はず知れた一つ違へば大事な大事なそなたの命じやからは

ることと故、妾にたしかな見込みがなうて、何で斯やうな

危い役目を頼みませう。謙遜るのもよい程にして置きやいなう。——それともそなたは、日頃のお部屋様のお恩を無にする御所存でござんすかえ。そなたと妾の不義のいたづらを、許すばかりか庇うて下さる御情に、背かうとなさるのかえ。

(伊織之介)なか〳〵以て、さう云ふ譯ではござりませねど、……

(梅野)それでは承知をしてくりやるか。

(伊織之介)さあそれは、……

(梅野)さあ、さあ、早く返答しや。二人の爲めを思ふなら、妾をいとしいと思うたら、よもや嫌とは申されまい。腕に覺えのあるそなた、かう云ふ時に空々しう、惚けて居るとは人が惡い。美しうてあでやかで、やさしいばかりが男の能ではないわいなあ。

(伊織之介)そのやうに仰つしやられては是非がござりませぬ。何處までも女らしう、か弱い風を裝うて、世を捨いて居たいのが私の望みでござりましたが、お前様の眼力で觀破れては詮ない仕儀、いかにもお承知致

しました。

(梅野)きつと異存はないのぢやな。

(伊織之介)不肖ながらも伊織之介、あの方々のお命は、必ず貰ひ受けまする。

(梅野)おゝ頼もしうござんする。そなたが引き受けてくりやつたら、仕損じのある筈はない。したが二人とも血氣にはやる猪武者、あまり相手を侮つて、かすり傷なと負はぬやうに、用心して下されや。

(伊織之介)はて御安心なさりませ。お二人が一度にかゝつて來ても、討ち果たすのに何の造作は入りませぬ。

(梅野)却つて相手が油斷して、たかゞ子供の腕前と、そなたを見くびつて居よう程に、いよ／＼勝負が始まつたら、二人を始め一坐の者がびつくりするでござんせう。まあいゝ氣味でござんする。

(伊織之介)今迄人に隱して居た腕前を、一度世間へ知られるからは、もう此の後は容赦なく、謀叛の邪魔をする方々は殘らず斬つて捨てまする。

(梅野)ほんに勇ましいそのお言葉、そなたが附いて居る上は一味の者には千人力、大望成就疑ひないぞゑ。

(伊織之介)その代りには梅野さま、(全く女のやうな嬌態をして、媚びるが如く笑ひながら梅野の手を取る。)どうぞ末始終私を、見捨てぬやうに可愛がつて下さりませ。

(梅野)念を押すには及ばぬこと、立派な手柄を立てさへすれば、やがて褒美にわれ／＼二人を晴れて夫婦(めをと)にしてやると、お部屋様の有り難い仰せぢやわいな。

(伊織之介)そりや、ほんたうでござりますかえ。

(梅野)何で僞りを云ひませう。……したが伊織之介さま、妾はそなたより十の年嵩、母親のやうな此の梅野に連れ添うても、決して嫌とは云はぬかいなあ。

(伊織之介)嫌だなどゝは勿體ない。不思議な縁(えにし)でお前様に可愛がれた伊織之介、若しも添はれぬくらゐなら、何樂しみに謀叛の加擔をいたしませうわい。

(梅野)それを聞いて妾も滿足、眞實うれしうござんする。

右の方の築山の蔭からお銀の方が窃み足で窺ひ寄り、亭の後ろに立ち止まつて不意に二人を呼びかける。

(お銀の方) これ、二人とも其處にかえ。

(伊織之介) おゝ、あのお聲はお部屋さま、……

(梅野) ひよんな所を御覧に入れて、お恥かしう存じまする。

(伊織之介) もし、お部屋さま、お免しなされて下さりませ。

兩人席を離れて、恭しくお銀の方の足下に跪く。

(お銀の方) 何の耻かしい事があらう。いつ見ても役者のやうに美しい伊織之介、ほんに梅野は果報者ぢや、妾は眞實羨しいと思うて居るぞえ。

(梅野) そのやうに仰つしやられると、耻かしいやら嬉しいやらで、穴へも這入りたうございまする。

(お銀の方) おほゝゝ、てもまあ梅野としたことが、年がひもない初ひ初ひしさ。――妾の前で遠慮するには及ばぬ故、たんと見せ付けるがよいわいなあ。

(梅野) えゝ、お部屋様のお口の惡い、もう好い程にお嬲りなされて下さりませ。

(お銀の方) それはさうと先程其方と手筈をきめて置いたこと、伊織之介に頼んでくれたであらうなう。

(梅野) 仰せまでもございませぬ。唯今此處でくれぐれも、申し含めて置きました。

(お銀の方) さうして其方は梅野から聞いた頼みの筋を、引き受けて賜るかえ。

(伊織之介) 未熟な私の腕前が、お役に立たば此の上もない仕合はせでございまする。何で御違背致しませう。

(お銀の方) それさへ聞けば滿足ながら、そなたのやうな優男を、あの荒武者に向はせては、どうやら妾も氣かゝりな。……なう梅野、其方や心配にはならぬかえ。

(梅野) その御心配は御無用になさりませ。妾の爲めには掛け換いのない大事な戀人、瑕我過のあるやうな、心もとない腕前なら、妾が第一危い場所へは出しませぬ。必ず共に、御氣遣ひをなされますな。

(伊織之介) 憚りながら伊織之介、まだ子供ではござりますが、あの方々に後れを取らうとは覺えませぬ。勝負の程は今から見えて居りまする。

(お銀の方) ぼんにけなげな其方の覺悟、頼もしう思ひますぞえ。――そなたのやうな若者に、梅野が心を寄せると云ふも無理はない。首尾よう望みを果したなら、妾がきつと二人の仲を、取り持つて進ぜるわいなう。

(梅野) そのお言葉を力にして、伊織之介さま、どうぞ立派に仕終せて下さんせいなあ。

(伊織之介) はてまあ、御念には及びませぬ。

(お銀の方) おゝそれそれ、すつかり忘れて居た事がある。(懐より一通の文を取り出す。)これ梅野、ちと知らせたい事がある程に、其方は酒宴の席に紛れて、此の文を靭負殿へ渡して賜れ。きつい急ぎの用事ゆゑ、一と足先に早う行きや。(文を梅野に渡す。)

(梅野) どんな御用か存じませぬが、幸ひ今しがた御家老様も、御酒宴に召された御樣子ゆゑ、少しも早うお届け致すでござりませう。

(お銀の方) 妾は其方と別々に、やがて後から行きまする。

(梅野) そんなら、お部屋さま、伊織之介さま、後刻重ねて御前でお目に懸りまする。

(お銀の方) おゝ、其方も抜かりのないやうに。

(梅野) 畏まりました。

梅野、橋を越えて左方に消える。伊織之介はまだ慇懃に地上へ兩手を衝いて蹲踞(うづくま)つて居る。その愛らしい肩つきをうつとりと見守つて、お銀の方が茫然と彳立して居る。暫く立つと、伊織之介は訝しさうに首を擡げたが、ぢつと自分を視詰めて居る女の樣子に心付いて、急に恐れを感じたらしく再びこつそり俯向いてしまふ。同時にお銀の方がにやにやと薄氣味の惡い笑顔を見せる。

(伊織之介) お部屋樣、なぜそのやうに私を、いつまでも眺めておいで遊ばすのでござります。

(お銀の方) いつまで見ても見飽きのしない、そなたの器量をしみじみと眺めて居るのが惡いかえ。

(伊織之介) 惡いどころか勿體なうて、空恐ろしうござります。

（お銀の方）恐ろしいのは疾うから其方も覺悟であらう。二人の仲が靱負殿に知れたなら妾も其方も命はないぞえ。

（伊織之介）それにつけても氣の毒なは梅野さま、ようまあ彼のお人は氣が付かずに居りまする。

（お銀の方）梅野を欺したいばつかりに、妾はあの、嫌な嫌な靱負殿に眞實焦れて居るやうな、心にもない狂言を書く胸惡さ。察してくれたがよいわいなあ。

（伊織之介）その胸惡さは私とても同じ事、早く夫婦になりたいと、毎日のやうに梅野樣の繰り言を聞かされて、ほとほと當惑いたしまする。

（お銀の方）梅野はいづれ折を見て、討ち果たすのに造作はないが、厄介なのは靱負どの。八年前から馴染みにして子まで儲けた仲ながら、今では二人の戀路の邪魔者、たとへ謀叛が成就して照千代樣の代になつても、妾は一生彼の人の自由にならねばなりませぬ。ほんに、ほんに、氣詰まりな。……

（伊織之介）又その時にはよい分別もございませう。先づ其れまでは謀叛が大事でござります。味方に取つて此の上もない御家老樣に梅野樣、隨分目をかけてお遣しなさりませ。

珍齋が築山の蔭から慌しく走り出る。頻りに邊をきよろきよろと見廻すうちに、睦しさうな二人の姿を認めて驚きながらうろうろして居る。お銀の方が早くもそれに眼をつける。

（お銀の方）其處に居るのは珍齋ぢやな。

（伊織之介）なに、珍齋が？　えゝ胡亂な奴め。（いきなり立ち上つて珍齋の襟首を捕へ、膝下に引き据える。）

（珍齋）あゝもし、何となされまする。何故あつて私を此のやうな目にお會はせなさります。あいたゝゝゝ。もし御無體でござります。ど、どうぞ、お助けなされて下さりませ。あいたゝゝ。

（お銀の方）これ珍齋、其方や今此處で、何をうろうろして居たのぢや。

（珍齋）へゝ、私は決してうろうろ致しては居りませぬ。實はお部屋樣に大急ぎで、申し上げたいお話がござりまして、唯もう夢中でお庭先へ、飛んで出たので

ございます。

(伊織之介)はて好い加減な嘘を申せ。其方は此の場の話の樣子を、立ち聽きして居たのであらう。

(珍齋)いえいえさうではございませぬ。なか〳〵以て私が、立ち聽きなどを致すことではございませぬ。あいたゝゝゝ。あいた、あいた、そのやうにきりきりと捻ぢ上げられては、腕がもげてしまひまする。もし伊織之介樣、お願ひでございます。あなたはまあ、女のやうな優しいお方だと存じて居りましたに、どえらい力がお有りなさる。いやもう私の背中の骨が、折れてしまひさうでござるわい。

(伊織之介)さてさて其方は臆病の癖に横着な男と見える。痛くば早く白状したがよいではないか。

(珍齋)いえどのやうに仰つしやつても、全く覺えのないことでございます。どうぞ御勘辨なされて下さりませ。

(伊織之介)もしお部屋樣、どうせ樣子を知られた上は、もう一刻も生かしては置けぬ奴、幸ひ人目にかゝらぬうちに、不憫ながら私が、此奴(こやつ)の命を此の場で申し受けまする。あなた樣には少しも早う、此處をお立ち退きなさりませい。

(珍齋)た、たすけてくれエ!

伊織之介、逃げようとして暴れ廻る珍齋を易々(やすやす)と小脇に抱へて口を塞ぎ、脇差を拔いてあはや一と突きに突かうとする。

(お銀の方)あゝこれ、暫く待ちや。

(伊織之介)それぢやと申して此の儘には?

(お銀の方)はて其のまゝにして置いて、何の氣遣ひがあらうぞえ。妾と其方と味方同士が二人(ふたり)で、話をしたのを見られたとて、格別怪しい道理はない。珍齋とても一味の者、殊には大事な役目もある、早まつた事はなりませぬぞえ。(輕く伊織之介に眼くばせをして頷かせる。)

(伊織之介)—そのお言葉では是非もございませぬ。てもまあ其方は、命冥加な奴ぢやなあ。(漸く珍齋を手から突き放す。)

(珍齋)えゝ危(あぶな)いこと、危いこと、もう少うしで笠の

臺がすつ飛ぶところであつたわえ。いや申しお部屋樣、重ね重ね命をお助け下されまして、忝う存じまする。死んでも御恩を忘れる事ではござりませぬ。

(お銀の方)さうして其方が、妾へ急ぎの話と云ふたは何事ぢや。

(珍齋)おゝ、あまりの恐さに大事の御用をすつかり忘れて居りました、實は唯今大變な事がござります。あのそれ、先刻梅野さまにお話し申して置きましたお二人の方々が、不意に御酒宴の席へ罷り越し、又しても殿樣に蹠爪らしい諫言沙汰、揚句の果てに聞き捨てならない惡口雜言を吐き散らすやら、御膳部を撥ね飛ばすやら、大騷動が起つたのでござります。

(お銀の方)して殿樣には何となされておぢや。二人の者の狼藉を、御了見遊ばしたかえ。

(珍齋)さあ其れからが又大珍事でござります。あの御短氣な殿樣が、何で御了見遊ばしませう。うぬ、無禮な奴め、勘忍ならぬと仰つしやつて、刀の柄へ手をお掛けなされたところ、……

(お銀の方)おゝ、さうして二人は見事お手討ちになつたのかえ。

(珍齋)なか〳〵さうではござりませぬ。あはや殿樣の御手にかゝつて眞つ二つと思ひの外、どつこいさうはと二人の方々が身を交はして、あらう事かあるまい事か、勿體なくもあべこべに殿樣を取つて押さへ、威丈高になつて、長たらしい御意見を申し上げて居りまする。

(お銀の方)なに、二人の者が殿樣を取つて押さへたと申すのぢやな。

(珍齋)左樣でござります。

(お銀の方)して多勢のお附きの者は、全體何をして居やる。誰も二人の亂暴を鎭める者は居ないのかえ。

(珍齋)何を申すも相手は自慢の腕利きゆゑ、誰あつて口を出さうとする者はござりませぬ。それにまあ生憎と、御家老樣も梅野樣も、先程から急にお見えにならぬ樣子、其の餘の者は猫に睨まれた鼠も同然、小いさくなつて顫へ上つて居りまする。

(お銀の方)え丶腑がひない者共ぢやなあ。

(伊織之介)それにつけても憎いのはあの二人、僅かな武藝を鼻にかけて、威張つて居るこそ此方の仕合はせ、此れから直ぐに駈けつけて、思ひ知らせてやりまする。

(お銀の方)ほんに、共方が手柄を立てるには、こんな好い折はないわいの。――そんなら伊織之介、妾は先へ行く程に、共方も後から早う參れ。

(伊織之介)斯くなる上は、二人の首はもう手に入つたも同じこと、はて心地よいことでござります。

(珍齋、心配さうに眞青になつて、)もし、伊織之介さま、あなた樣がたとへ如何程お強くても、あの方々には抗ひますまい。惡い事は申しませぬ。お止しなされた方が宜うございますぞえ。

(お銀の方)これ珍齋、餘計な事を申さずと、妾と一緒に來たがよい。

(珍齋)畏まりました。

お銀の方、珍齋をつれて橋を渡つて行く。伊織之介、跪いて後影を見送る。

第二場　殿中酒宴の場

大廣間の上手寄りに厚い緞子の坐布團を重ねて大守の席が設けてある。それに接して少し下手にお銀の方の席がある。脇息、煙草盆、膳部など凡べて同じやうにきらびやかな調度類が兩方の席に備へられて、後ろに極彩色の金屏風が引き廻してある。廣間の右側は襖、左側は縁側を隔てゝ庭に臨む。

今しも酒宴半ばに事變が起つた最中である。大守は血色の極めて青白い、眉の險しい、氣違ひ染みた眼つきをした、神經質らしい人品で、滿面に怒氣を含みながら白刄を提げて自分の席に突つ立つて居る。一人の侍が中腰になつて、大守の利き腕をしつかと捕へ、物凄い表情で邊(あたり)を睨み付けて居る。それが氏家である。その傍に菅沼が傲然と端坐して大守の姿を見上げて居る。兩人とも二十五六歳の、正直一圖な、馬鹿に忠義に凝り固まつて聊か上氣して居るやうな武士に見える。杯だの、椀だの、銚子だのが三人の足下に蹴散らかされて亂雜に轉がつて居る。

遙か下手に五六人のうら若い女中達が、琴、胡弓、三味線、鼓などを前に置いて、興ざめ顏に素垂れて控へて居る。その又下手の縁側に四五人の靑侍が度を失つて平伏して居る。

(氏家)あはゝゝ、いかゞでござります。殿にはいか程口惜(くや)しいと思し召しても、拙者の此の手を振り離

す事がお出來にはなりますまい。朝夕此やうななまめかしい、惰弱な遊戯に現を抜かすお身の上で、一人前の力をお持ちなされぬは御尤も。そのお腕前で拙者などをお手討ちになさらうとは、憚りながら笑止な事でござります。

(菅沼) 家來の身をも顧みず無禮を働くわれわれ兩人、どうせ命はないものと覺悟は極めて居ります。それにつけてもお情ないは殿の御心、先程から斯くまでお諫め申し上げても、お聞き入れはござりませぬか。

(大守) えゝ、うるさいわ、退り居らぬか、赦し難き奴なれど、忠義に免じて此の度だけは助けて取らせる。退れ、退れ、退れと申すに。

(氏家) お聞き入れのないうちは、何でおめ〳〵退りませう。われ〳〵二人の命は更に惜しからねど、若し近頃の御身持ちが、忝くも將軍家へ知れたなら、殿には何となされますする。

(菅沼) 晝夜を分たぬ歌舞宴樂は愚かなこと、ほんの一時の御酒興に、罪なき者を酷たらしう毎日のやうに御成敗遊ばすとは、桀紂以來暴君の例にも聞いた覺えはござりませぬ。ても恐ろしい御亂行でござりまする。

(大守) えゝ、云はせて置けば附け上り、主人に向つて桀紂などゝは言語同斷、こりや、誰ぞ居らぬか、早く此奴等を引つ立てい。

(侍一同) ははつ、(と云つて、たゞもじもじとお辭儀をして居る。)

(大守) 此奴等二人を憚つて、手出しをせぬとは卑怯な奴ばら、何をぐづぐづ致して居るのぢや。

(氏家) あはゝゝゝ、殿の大事を控へながら、靑くなつて顫へて居るとは、孰れも此れも腰拔け侍、いやはや見下げ果てたる方々ぢや。

(菅沼) あれを御覽なさりませ。殿の御座興を助ける者は、皆あのやうな腰拔け武士、まさかの時に一人でも、お役に立つ者はござりますまい。その御油斷があればこそ、お家を押領するなどゝ云ふ、謀叛の噂も起る道理でござりませうが。

侍二人、恐る恐る立ち上つて兩人の傍へ近寄る。

(侍の一)ま、御兩所、暫くお待ちなさりませ。そりやお身たちの仰つしやることも御尤もではござりますが、そのやうに事を荒立てゝは、却つて殿の御立腹を増すばかり、折角の忠義が役に立たなくなりまする。

(侍の二)いかさまでござる氏家殿、いづれにしても今日のところは我慢めされい。又その内に御機嫌のよい潮を見料つて、ゆつくりと申し上げたが上分別でござるてなう。

(氏家)えゝ面倒な。

(菅沼)つべこべ云ふには及ばぬわえ。

氏家は猶も太守の腕頸を捕へたまゝ、侍の一人を片手で見事に突き飛ばす。今一人の侍は菅沼に投げ返されて、鮮かなもんどりを打つて、上手の襖へどしんと打突かる。兩人辛くも悶絶しさうになつて、ふらふらしながら漸く腰を擡げ、這ふ這ふの體でもとの席へ戻る。

靱負と梅野とが襖を明けて這入つて來る。

(靱負)こりや、二人ともお控へめされい。して其方たちは御勘氣の身も辨へず、何用あつて御酒宴の御坐敷へ、案内もなく罷り越したのぢや。

(菅沼)そのお叱りは覺悟の上、お家の爲めに見るに見かねて、殿へお願ひに上つたのでござります。

(梅野)お願ひの筋があるならば、靜かに云ふたがよいではないか。まあまあ此の手を除けぬかいなあ。

梅野走り寄つて、捕へられた太守の手を振り放さうとする。

(氏家)はて、そなたこそお控へなさりませ。拙者の願ひをお聞き入れがないうちは、命に換えても此の手を放しはいたしませぬわい。

(梅野)さうして、其方たちのお願ひとはえ?

(菅沼)そのお願ひは、先刻から事を分けて、幾度も殿へ申し上げて居りまする。——

(氏家)殿の御身に喰ひ入つて、お家に仇をする毒虫のお部屋樣、お銀の方のお壽命が申し受けたいのでござりまする。

(梅野)えゝつ、

(靱負)なんと申す。其方や本心で云ふのぢやな。

(菅沼)知れたことでござりませうが。兩人共に本心で、お願ひ申して居りまする。

（靱負、菅沼の前にぴたりと据わつて身構へをする。）何故あつてお部屋樣の命が欲しいと申すのぢや。お覺えめでたいお銀の方を毒虫などゝは無禮であらう。兩人共嗜み居らぬか。

（菅沼）そりや御家老のお言葉とも覺えませぬ。言語に絶えた此の頃の殿のお身持ちは、抑も誰の爲業でござります。憚りながら奸智に長けたお部屋樣の、御寵愛が過ぎる故、忠臣あれどもなきが如く、御亂行は日に増し募るばかりでござる。

（氏家）御家老ともあらう者が、斯ほどの事にお氣が付かれず、佞人共の肩を持つて、媚び諂ひをなさらうとは、甚だ以て綏怠至極。

（菅沼）お部屋樣を生けて置いては、百の諫言も水の泡。殿の御眼を晦まして、邪道に導く魔性の者の、命を取るに不思議はござらぬ。

（靱負）ふむ、そのやうな無法な事を云ひ張つて、若しお聞き入れがない時はいかゞ召さるゝ。

（菅沼）斯く迄お願ひ申しても、お聞き入れがなくば是非に及ばず。――

（氏家）お家の爲めには換へられぬと、殿の御一命を申し受け、此の場に於いて我等も切腹いたすでござらう。

（大守）なに、余が一命を絶つと申すか。

（氏家）いかにも、さやうでござりまする。主君を弑し奉る天罰は恐ろしくとも、お家の危難を救ふ爲めには餘儀ない次第でござります。

（菅沼）もし、お願ひでござります。不忠に似て不忠ならざる我れ我れが申すこと、殿にはよくよく御賢察を仰ぎまする。

（氏家）さゝ、此れでもお聞き入れがござりませぬか。

（菅沼）いかゞでござります。お銀の方のお命をわれわれへ下さりまするか。

（氏家）それとも殿の御壽命を截させませうか。

（菅沼）殿には何となされまする。

（太守、默然として考へて居たが、やがて徐かにきつぱりと云ひ放つ。）何もそのやうに騒ぐには及ばぬ。余が一命を取らすであらう。

（菅沼）えゝつ、

（氏家）なんと仰つしやります。

兩人愕然とする。

（太守）家名も命も、お銀の爲めには惜しうない。さ
さ、早う余が首を打て。早う打て。

氏家があつけに取られて手頸を放すと、太守は白刃を投げ出してどつかと据わり、大聲をあげて荒れ狂ふ。

（太守）お銀を殺すくらゐなら、余が壽命を縮めてくれい。こりや氏家、斬れと申すになぜ斬らぬか、口程にもない臆病者め。

お銀の方が珍齋を從ひて、悠々と下手の縁側より入り來る。それと知つて、氏家と菅沼が忽ち氣色ばむ。

（太守、お銀の方の姿を認めると、俄かに心配さうな句調で）。おゝ、これお銀、其方は彼方へ參つて居れ、此處に居つては障りがあるのぢや。

（お銀の方）はてまあ惶しい其のお言葉。さうして此の場の狼藉は、どうした譯でござんする。

（太守）仔細は後に語るであらう。此處に居つては其方の身が危い。こりや珍齋、早く彼方へ連れて行かぬか。

（珍齋）へい、へい、へい、へい、もしお部屋樣、殿樣があのやうに仰つしやりまする。命あつての物種とやら、こんな所に長居は無益、さあさあ、彼方へ參らうではござりませぬか。

（靱負）此のやうな氣違ひ武士を相手にしては、お部屋樣のお爲めになりませぬ。殿のお仰せを幸ひに、暫く御遠慮なされませい。

（梅野）ほんにさう遊ばしたがようござります。今も今とて此處においでの、それはそれは強うい、えらあい、鬼のやうに恐らしいお人達が、勿體なくもお部屋樣のお命が欲しいなどゝ、勝手なことをほざいて居る最中でござります。此の方々の氣違ひが鎮まる迄は、それ、あの、（お銀の方に目くばせをする。）もう直きでござりませう程に、暫しの間お次ぎの間で、一服召し上つておいでなさりませ。萬事は妾の胸にあること、お氣づかひなさるには及びませぬ。さあ〱珍齋、何

をうろ／＼して居やるのぢや。ひよんな間違ひの起らぬうちに、早うお部屋様をお連れ申して、お相手を勤めぬかいなあ。

（珍齋）へい、へい、もしお部屋様、あのやうに皆様が仰つしやる事でござりまする。早くお次ぎへ罷り越し、何がな手前が、面白い輕口でもお聞かせ申すと致しませう。（お銀の方、一同の言葉を耳にも懸けず、イ立したまゝぢつと二人の侍を睨み詰めて、）これ、其處な二人の者、妾の命が欲しいなら、いつでも其方たちに進ぜませう。（つか／＼と二人の傍へにじり寄る。）

（太守）えゝ、其方や何としたのぢや。此れへ寄つては惡いと申すに。

（お銀の方）いゝえ、嫌でござんする。どうぞ妾の氣が濟むやうに、任せて置いて下さんせいなあ。（太守の傍の自分の席へ坐をしめて、體をしどけなく崩しながら脇息へ頬杖を衝く。）さあ二人の者、逃げ隱れはせぬ程に、斬るなと突くなと勝手にしや。……したが其方たちは、妾を斬つてもよいと云ふ、殿のお許しを受けたのかえ。

（梅野）おほゝゝゝ、そのお許しがないばつかりに、あれを御覧なさりませ。あのやうに口惜しがつて、地團太踏んで居りまする。

（お銀の方）さうであらう、さうであらう。命は惜しうはない程にいつでも其方たちに進ぜるが、かりそめにも御情を蒙つて居る體故、たつて欲しいと云ふのなら、殿のお許しを得たがよいぞえ。

（氏家）己れ憎さその一言、御寵愛を笠に着て、云はうやうなき氣儘放埒、もう此の上は勘忍ならぬ。それ！菅沼氏。

（菅沼）おう、心得た。

兩人一度に立ち上る。

（太守）えゝ何をする！

（靱負）無禮者めが！方々早うお立ち合ひなされい。

末席に控へた以前の青侍ども、ばらばらと駈け付けて二人に組み付く。氏家は刀に手を掛けてお銀の方に詰め寄る。女の危急を救はうとして藻搔いて居る太守の袖を、菅沼が摑んで居る。靱負と梅野

とはお銀の方の身を庇つて、その前に据わる。折柄縁側の方で伊織之助の聲がする。

(聲)暫く、暫く、暫くお待ちなさりませ。

その聲が聞えると、今迄縮み上つて死んだやうになつて居た四五人の侍女たちが、等しく項を上げてハラハラしたやうな顔つきをする。

(侍女の一)おゝ、あのお聲は伊織之介さま。

(侍女の二)先刻からお姿が見えぬ故、妾は氣に病んで居たなれど。……

(侍女の三)こんな所へ係り合つて、あの可愛らしい御器量に、

(侍女の四)何か過がなければよいが、

(侍女の五)ほんに心配でござんすわいなあ。

伊織之介、勢よく廣間へ馳せ入り、大守の足下に恭しくひれ伏す。

(伊織之介、すぐに再び女性的な、なまめかしい言葉になつて、厭らしい嬌態を作りながら。)どうぞ皆様、暫くお待ち遊ばして下さりませ。委細の様子は物蔭で、承はつて居りました。年はも行かぬ子供の癖に、面羞うはござりますが、退引ならぬ此の場の仕儀、殿様お部屋様の御災難を、お救ひ申しに參りました。

(太守)なに、其方が加勢に來てくれたと申すのか。

(伊織之介)さやうでござります。

(太守)はゝゝ、其の志は嬉しう思ふが、其方は一體いかにして、余を救うてくれるのぢや。

(伊織之介)生意氣かは存じませねど、痩せ腕ながらも此のお二方に渡り合ひ、相手を殺すか殺されるか、二つに一つの眞劍勝負が願はしうござります。

(太守)さてさて其方はけなげな奴、余が災難を氣遣ふあまり、命を捨つる覺悟と見ゆる。

(伊織之介)身に餘る御寵愛を蒙つた、日頃の御恩を報ゆるため、殿様とお部屋様のお身代りに、若年ながらも私が、此のお二た方にお相手を致しまする。勝負は時の運でござります。あながち私が後れを取ると、定まつた譯でもござりませぬ。

(梅野)成る程そなたの云ふ通り、孰方が勝つやら負けるやら分りはせぬ。世間の人は知らずに居ても、そ

なたの手並の見事さは、妾がよう知つて居る程に、何の此れしきの氣違ひ侍、恐れる事はござんせぬ。眼に物見せておやりなさるがようございます。

(太守)こりやこりや梅野、其方や何を云ふて居る。女ながらも武藝自慢の其方でさへ、此奴等が相手では抗ふまい。まいて若年の伊織之介、見す見す二人の手にかゝつて命を落すに極まつた者へ、勝負を許す譯には參らぬ。

(梅野)伊織之介さまの手錬の程を、御存知のない殿樣故、御氣づかひは御尤もでござりますが、うはべは優しいお姿の、花恥かしい若衆でも、鬼神を凌ぐ腕前の恐ろしさは、妾がたしかな證人になりまする。此處にござるお二た方のやうな、鼻息ばかり荒々しい、空威張りの名人を、片つ端から始末をするに何の雜作がござりませう。

(伊織之介)梅野さまのお言葉に、氣を許すではござりませねど、少しは腕に覺えのある伊織之介、滿更負ける積りではござりませぬ。どうぞ私のお願ひを、お聽きなされて下さりませ。

(侍女の一)これ申し伊織之介さま、忠義に凝るのもよいけれど、そのやうな向う見ずは思ひ止まつて下さりませ。

(侍女の二)あの猛々しい、荒鷲のやうなお人達に、雀のやうな其方が向うたら、一と摑みでござんすぞえ。

(侍女の三)まあ考へてもぞつとする。其方の命に係はる大事、

(侍女の四)どうやら人事(ひとごと)とは思へませぬわいなあ。

(侍女の五)もうもうふつつり止めにして、苦勞をさせずに置かしやんせ。

(靱負)常々からお氣に入りの伊織之介が願ひの筋、殿の御心痛はさる事ながら、本人の覺悟と申し、殊には思慮深い梅野殿がお口添へ、此れには必ず仔細がなうてはかなひませぬ。いつそのことに、お聞き届けなされては如何でござります。

(太守)いやいや何と申しても、此ればかりは許されぬわい。

（お銀の方）はて殿様のお情深い。伊織之介を不憫がつて、妾を不憫と思し召しては下さりませぬか。身代りに立つと云ふのなら、物の試しに勝負をさせて見たうござんす。
（太守）又しても其方は無法を云ひ張つて、余を苦しめると云ふものぢや。惡推量は捨てゝ置かぬか。
（お銀の方）惡推量でも無法でも、云ひ出したら後へは引かぬ妾の氣象。勝負が見たうござんす故、許しておやりなさりませ。それともいとしい伊織之介が、手傷でも負ふたなら、可哀さうだと仰つしやるのでござんすかえ。
（太守）手傷は愚か、いたましい最後を遂ぐるに極まつた奴、殺したうはなけれども、其方が強ひての望みとあらば是非もない。いかにも許して取らするぞ。
（伊織之介）おゝ、お許し下さりますとな。忝う存じまする。
（梅野）さあ面白い事になりました。お許しが出るからは、もうもう此のやうな狼藉者を、生かして置くには及びませせぬ。もし、伊織之介さま、早う二人の息の根を止めておしまひなりませい。
（伊織之介、氏家と菅沼の前へ慇懃に兩手をついて、飽く迄も落ち着いた、薄氣味の惡い猫撫で聲で）。それでは御兩所樣、唯今お聞きなされまする通り、お部屋樣のお命を御所望遊ばすなら、先づその前に私と、御前試合をなされて下さりませ。此のやうな小童では、嘸御不滿でござりませうが、一寸の虫にも五分の魂とやら、武藝勝れしお二た方の、お慰みには宜しうござりまする。
（菅沼、あまり話が突飛な爲め、安心しながらも聊か驚いて）。あはゝゝ、先刻から默つて樣子を聞いて居れば、たわけた事を抜かし居る。其方を相手にいたしたとて、慰みにもなりはせぬ。子供の癖に邪魔立てせずと、引込んで居れ。さゝ、早う其處を退け。
（伊織之介）いえく此處は退かれませぬ。子供々々と侮つて、相手にせぬとは御卑怯でござりませう。どうぞ私と眞劍の勝負をお願ひ申しまする。いざ御兩所

様、お支度をなさりませぬかいなあ。

(氏家) ええ、そのやうに厭らしう、拙者の傍へのめのめと寄つて參つては相成らぬ。拙者は其方が大嫌ひぢや。かりにも侍の子とあらう者が、女のやうな聲を出して、河原乞食の眞似を致すとは、いやはや男子の風上にも置けぬ奴。拙者は其方の顏を見ると、胸がむかむかして參るわい。

(伊織之介、ますます女らしくなる。)お氣に觸つたら御免なされて下さりませ。女のやうな聲を出して、河原乞食の眞似をする私が、あなた様に擦(かす)り傷でも負はせる事が出來ましたら、まあ何となされまするえ。

(氏家) こいつ、こましやくれた事を申すやつ。なう菅沼氏、無益の殺生致したうはござらぬが、此の青二才は佞人ばらの一味の者、毒虫奴等の片割れでござる故、不憫ながら血祭りに上げてやらうではござらぬか。

(菅沼) うん、成る程其れもようござらう。相手に致すも大人氣ないが、貴殿に代つて、拙者が此奴を刀の銹に致してくれる。

(梅野) ほんにさうなうてはならぬこと、先づ順々に一人づゝ、往生するのがよい分別。

菅沼、廣間の前方に走り出でゝ袴の股立ちを取り、上手を向いて體を構へる。

(菅沼) こりや青二才、拙者が相手になつてつかはす、命が惜しくば今のうちに逃げるがよいぞ。

(侍女の一) 伊織之介さま、ようお考へなさりませ。子供のそなたが逃げたとて、誰も卑怯とは申しませぬぞえ。

(伊織之介) 皆様の御心配は忝うござりますが、私にも覺悟のあること。――菅沼さま、いざお相手を仕りませう。

伊織之介は上手へ出て菅沼と向ひ合ふ。袴の股立ちも取らず、平然として鬢を撫でつけたり、襟を掻合はせたりする。

(菅沼) いざ、

(伊織之介) いざ、

兩人刀を拔いて立つ。

(珍齋) こりやいよいよ大變な事になつたわえ。あゝ

間違ひがなければよいが、・・・・手前は全體あのピカピカと光る刄物が大の禁物、氣のせゐか體中がうづうづして參りました。

（侍女の二）妾も胸が冷や冷やして、見て居る氣にはなりませぬ。

（侍女の三）お可哀さうな伊織之介さま、何とかしてお助け申す手だてはないものか。

（侍女の四）えゝいやなこと、いやなこと、妾は斯うして眼をつぶつて居りまする。

（侍女の五）いつそのことお次ぎへ下つて、耳を抑へて居た方が增しぢやわいの。

（珍齋）いや御尤も〳〵、此處に居ては壽命が縮まる。皆さま彼方（あちら）へお出でなさりませ。いの一番に手前が御免を蒙りまする。

（侍女の一）ほんに珍齋は悧巧者、其方と一緒にわれわれも逃がしてくれぬかいなあ。

（珍齋）さあ〳〵早うお越しなさりませ。

珍齋を先へ立てゝ、女中たち一同我れがちに下手へ逃げ去る。

廣間では既に勝負が始まつて居る。二三合鬪はぬうちに菅沼は忽ち伊織之介の鋭い鋒（ほこさき）に切り捲くられ、技倆の相違が歴然と曝露される。意外の結果を見て、菅沼も氏家も眞青になる。

（靱負）やゝ、伊織之介はいつの間に、斯程の手錬を積み居りしか。

（太守、喜色滿面、子供のやうにぞくぞくと肩を顫はせる。）ほう、こりやまことに不思議々々々。武藝自慢の菅沼が、あの大刀先に弄ばれて居るではないか。

（梅野）それ、それ、伊織之介さま、もう一と息でござんすぞえ。えゝ焦れつたい事ぢやわいなあ。

同時に「うーん」と云ふ呻きが聞えて、何處を斬られたのか、分らぬが、菅沼の體から三四尺の高さに血烟が噴き上る。體の半面が首から手から股へかけて眞赤に染まつて居る。伊織之助に腰を蹴られると、よろよろとなつてばつたり倒れる。

（氏家）おのれ猪口才な小童（こわつぱ）め！覺悟いたせ。

伊織之介が屍骸の止めを刺さうとする隙を狙つて、不意に後ろから氏家が斬つてかゝる。殆んど直ちに、伊織之介が身を翻して「えい！」と鋭く拔き打ちにすると、もう氏家は眉間を割られてしまつたらしい。芋蟲のやうな濃い血の塊が、額からたらたらと絲を垂らして

居る。さうして、赤ん坊が泣き出す時のやうな表情をして顔中の筋肉を機械的に歪めて居たが、やがて聲も立て得ず、棒の倒れるやうにどしんと倒れる。伊織之介、走り寄つて止めを刺さうとする。

（太守）こりや待て待て、止めを刺しては面白うない。余を散々に惱ました憎き兩人、そのまゝ息を止めずに置いて、酒の肴に嬲つてやるのぢや。

（靱負）さてさて、驚き入つたる手練の早業。殿の御恥辱を雪ぎ參らせ、お部屋樣の御危難をお救ひ申したは偏へに其方が働きなるぞ。其方こそ誠にお家の忠臣、あつぱれな奴ぢやわい。

（伊織之介）未熟な腕前が、お役に立つたは何よりの仕合せ。御家老樣のお褒めに預り、私も面目を施しまする。

（太守）いや、心地よし、心地よし、（血を見ると共に全く昂奮して、亂心の發作に襲はれ、狂人のやうな悽慘な眼つきになる。）早う酒を持て、此奴等の屍骸を肴に飲み直すのぢや。こりや、誰ぞ居らぬか。珍齋は居らぬか。珍齋々々、女どもを呼んで參れ。

珍齋、縁側へ駈けて來て、二人の屍骸を見て仰天する。

（珍齋、けたゝましく叫ぶ。）ひえゝ！もし、皆樣お喜びなさりませ。もう大丈夫でござります。伊織之介樣は御無事でござりますぞえ。

（侍女の聲）そりや本當でござんすかえ。

（珍齋）ほんたうとも、ほんたうとも、まあ此處へ來て御覽なさりませ。菅沼樣と氏家樣とが、血だらけになつて仰け反つて居るではござりませぬか。此れで漸う一と安心をいたしました。

侍女たちが廣間へ馳せ入つて屍骸の周圍を取り卷く。屍骸は二つとも仰向きになつて、未だに手足をばたばたと藻搔きながら、苦しげに呻き廻つて居る。

侍女の一人は銚子を携へて進み出で、太守に酌をする。太守、大盃をあげて立て續けに二三杯飲み乾す。

（梅野、侍女等に向ひ）さあさあ皆の衆、此の意氣地ない死態を、息のあるうちにたんと嘲つてやつたがよい。なんと小氣味よい事ではござんせぬか。

（侍女の一）それにしても此の有樣はどうしたこと、

（侍女の二）うれしいやら不思議なやらで、

（侍女の三）何だか夢のやうでござんする。

（侍女の四）今迄少しも知らなんだが、伊織之介さん

はえらいお方でござんすわいなあ。

（太守、次第に酔が廻つて來る。）うん、それ、それ、此れから此奴等を嬲り殺しに致すのぢやが、何かよい工夫はないものか。（どんよりとした瞳を据ゑて、にたにたと笑ひながら考へる。やがて、出し抜けにぽんと膝を打つ。）こりや女共、此奴等の着物を剝いて、素裸體(すつぱだか)にいたせ。

（侍女一同）はゝあ。

侍女等、朱に染まつた疊の上へぺつたりと蹲踞(うづく)まつて、屍骸の衣類を剝ぎ取る。侍女等の手足も血だらけになる。

（太守）はゝ、面白い、面白い、どうぢやお銀、其方の讐を取つてやるのぢや。何と胸がせいせいしたであらうの。さゝ、余が酌をして取らする程に、其方も祝ひに飮むがよい。

太守自らお銀の方に酌をしてやる。お銀の方は默つて杯を受けながら、うつとりと伊織之介の横顔に見惚れて居る。

（太守）伊織之介、其方にも酌をして取らするぞ。

（伊織之介）有難く頂戴いたしまする。

（太守、伊織之介の返す盃を波々と受けて喉を鳴しながら、執念深く屍骸を凝視する。）はて、まだ此れだけでは面白うない。――こりや伊織之介。

（伊織之介）はゝつ。

（太守）此奴等二人の喉頸を、眞直ぐ臀まで突き通してしまへ。

（伊織之介）畏まりました。

氏家も菅沼も其の時まで右の手に刀を握つて、醜く肥えた裸體を水銀のやうにぶるぶるさせて居る。伊織之介は屍骸の上へ跨がつて立ち、持つて居る刀を奪ひ取り、その鋒(ほこさき)を喉元へあてゝ錐を捻(ね)ぢ込むやうに垂直に疊へ突き通したまゝ、席へ戻つて來る。刀は二本の杭を打つたやうに立つて居る。

（太守）はゝ、どうぢや／＼。皆(みんな)此れを見てやらぬか。珍齋々々、其方には此奴等の恰好が何と見ゆるな。

（珍齋、恐ろしい光景に馴れて、いつの間にかすつかり安心して居る。）へゝゝゝ、先づ斯うやつた恰好は、さしづめ人間の鰌(どぢやう)が出來上つたやうなもの。いやはや何とも珍妙無類でござりまする。

（侍女一同）おほゝゝゝ。

（梅野）人間の鰌とはよう云ふた。ほんに其の通りぢやわいの。（憎々しげに屍骸の顔を睨みつけて、）どうお

や、二人共天罰と云ふものを、今こそ思ひ知つたであらう。難苦しからう、痛からう、おほゝゝゝ。

(太守)はて、もう息の根が止まつては、此奴等を見ても興はない。何か外に、一段と面白い事がありさうなものぢや。(きよろきよろと一座の者を見廻した後、最後に梅野へ眼をつけると、急に猛惡な相を帶びて來る。)こりや、こりや梅野。

(梅野、何かは知らず竦然として、)はゝつ、何御用でござりまする。

(太守)はゝゝゝ、何もそのやうに驚く事はない。其方はたしか、女だてらに武藝が自慢であつたなう。(突然甲高い調子になつて、)其方と伊織之介と、孰方が强いか眞劍勝負を致して見い!

(梅野)ひえゝつ、(と云つて、腰を拔かさんばかりに慄てる。)

(太守、梅野が躊躇する體を見て、ぴりぴりと癇癪を起しながら)さゝ、眞劍勝負を致して見い。余が厳命ぢや。背く事は相成らぬぞ。

お銀の方と伊織之介とが、密かに顔を見合はせる。

(靱負、當惑の色を押し隱してさあらぬ風に)あはゝゝ、殿にはあまり御冗談がお上手故、梅野殿が本氣にしてびつくり致して居りまする。

(太守)えい!余は冗談を申すのではない。こりや梅野、何を致して居る。早く勝負を致さぬか。

(靱負)此れはしたり、殿にはいかゞなされました。梅野殿も伊織之介も大事な御家來、孰れが負けても殿の御損でござりませうが。

(太守)餘計な事を申すに及ばぬ。それ、伊織之介、梅野がぐづぐづ致して居るなら、其方や構はずに斬つてかゝれ。

(梅野)もし、お部屋樣、何とか殿樣に仰つしやつて下さりませ。妾は勿論伊織之介樣にしても、どうして妾を斬る事が出來ませう。どうぞあなた樣のお聲かゝりで、二人の難儀をお助けなされて下さりませ。――伊織之介さま、そなたも共々お部屋樣へお縋り申したがよいわいな。

(太守)伊織之介!其方やなぜ早う斬り付けぬのおや。余が言葉より梅野の命が大切ぢやと申すのか。

（伊織之介）君命なれば是非なき次第、梅野さま、あなた様のお命は貰ひましたぞえ。（いきなり刀を拔いて斬りかゝる。）

（梅野）あれえ！どうぞ助けて下さりませえ！

梅野、一生懸命に叫びながら逃げようとする途端に、後ろから腦天の骨を横に殺がれる。髮の毛と頭蓋の生皮が剝ぎ落されて、眞赤な、むごたらしい坊主首になる。

（梅野）きやつ（と云って頭を抑へる。）

（珍齋）うわつ（と云って面を掩ふ）

（梅野）えゝ、そなたはよくも妾を殺せたものぢや。あのこゝな、薄情男め。

半ば夢中になつて、しがみ着いて來る女の肩先へ、伊織之介は更に第二の太刀を浴びせ、襟髮を取つて引き擦り倒す。梅野は頻りにひいひいと悲鳴を放つ。珍齋と侍女等顏を背けて戰慄する。

（太守）うゝ、面白い、面白い。こりや珍齋を始め女ども、此方を向いて見物いたせ。

（珍齋）へい、へい、外の方なら兎も角も、梅野樣ではお氣の毒で、とても見物は出來かねまする。

（太守）なぜ見物が出來ぬのぢや。余が云ひ附けを用ゐぬ奴は、片つ端から伊織之介に斬らするぞ。

（珍齋）ま、お待ち下さりませ。斬られては溜りませぬ。

（侍女一同）見物いたすでござりませう。

珍齋と共に侍女等も急いで正面を向く。

（太守）伊織之介、皆の見物いたす前で、梅野に止めを刺して見せい。

（伊織之介）はゝつ。――梅野さま、お免しなされて下さりませ。

伊織之介、刀を捨てゝ匕首を拔き放ち、女の胸へ乘りかゝりつゝ止めを刺す。更に一聲悲鳴をあげて、激しく虛空を掴むと見る間に、梅野は喉笛を抉られる。

（太守）わッはゝゝ、いやもう、たわいのない者ぢやなう。

侍一人、上手の襖をあけて轉ぶが如く出で來り、喘ぎ喘ぎ太守の前へ兩手をつく。

（侍）申し上げます。一大事でござります。

（太守）何ぢや、何ぢや。

（侍）何奴かは存じませねど、奥方の御膳部へ、毒を

盛つたる者あつて、唯今夥しく吐血遊ばされ、御苦痛の御様子でござります。早や早や彼方へ、お越し下さりませ。

太守を始め一同「えゝつ」と云つて、顔を見合はせてすつくと立つ。唯獨り珍齋は茫然自失した如く据わつて居る。

(太守)してして、すりや何者の爲業とも、未だ手がゝりはないと申すか。

(侍)手懸りとてはござりませぬが、不慣ながら其處に居ります珍齋に、聊か嫌疑がかゝつて居りまする。

珍齋依然として默つて居る。靱負が心配さうに其の態度を盗み視る。

(太守)なに、珍齋の爲業ぢやと、……

(侍)極まつた譯ではござりませぬが、先刻奥方の御給仕を勤めた珍齋、どうした譯か今日に限つてこそこそと、直きに退出致した様子。彼より外に御膳部へ近付いた者もござりませねば、自然と嫌疑が懸つて居りまする。——こりや珍齋、聞いた通りの次第故、一應其方を取り調べる。身共と一緒に參るがよい。

(靱負)お待ちなされい。少しく思ふ仔細もあれば、取り調べは拙者がいたす。(珍齋の傍へ寄り、兩手を背後へ廻して捕へ、慰めるやうに、)これ珍齋、よも其方の爲業ではあるまいが、兎も角も拙者が糺明いたすであらう。こりや、立ちませい!

珍齋おどおどしながら引て立られる。再び襖の外に騒々しい足音と聲とが聞える。

(聲)奥方の御最後でござります。早く早く、お越し下さりませ。

(太守)おゝ、皆參れ。

太守が眞先に、靱負、珍齋、侍女、侍等悉く上手と下手へ馳せ入る。お銀の方と伊織之介とが廣間に居残る。

(お銀の方)伊織之介、

(伊織之介 跪いて女の容貌を仰ぐ。)お部屋さま、

(お銀の方)うまく行つたわいなあ。

(伊織之介)話に聞いた毒藥が、どうやらお役に立ちさうな、……

(お銀の方)それにしても氣詰りなはあの珍齋、靱負殿の手に捕へたからは、こつそり殺してしまへばよいが、……(ふと、下を向いて梅野の屍を見る。)ほんに梅野は氣の毒な。なう伊織之介、此れでも其方の妻に

なる氣で居た女、満更憎うはなからうに、無殘な事をしたわいなう。

(伊織之介) 氣紛れな殿のお言葉を幸ひに、戀路の邪魔の梅野様を、斬つて捨てたはよいけれど、謀叛の爲めには大事な加擔人、早まつた事を致しました。

明け放された上手の襖から、靫負が密かに首を出して二人を覗詰めて居る。

(お銀の方、靫負の姿に氣がつく) あれつ、其處に靫負殿が、……

(伊織之介) えゝしまつた！もうかうなれば破れかぶれ。

(靫負) 不義者！

と呼んで奥へ逃げ伸びようとする所を、伊織之介が刀を振り翳して追つて這入る。襖の外で「えいつ」と云ふ掛聲諸共、靫負の斬り殺される呻り聲が聞える。

血刀を提げて伊織之介が戻つて來る。續いて其の後から、後ろ手にぐるぐると縛り上げた珍齋の繩の先を亂暴に引き擦つて、太守が血相を變へつゝ走つて來る。

(太守) やあ〳〵此奴等、おのれ今迄余をば巧みに欺き居つたな。珍齋めが自白に依つて、罪は殘らず知れたのぢや。

(お銀の方、圖太い調子で) 知れたが何としたのぢやえ。

(伊織之介、すつかり沈着な態度を失つて、かあつと上氣する。) 此の馬鹿殿め！うぬも冥途の道連れぢや！

腕白な子供のやうにがむしやらに怒鳴つて、ばらりずんと袈裟掛けに斬り落す。太守、體をろくろのやうに伸び縮みさせて顚へた揚句、ぐるりと廻つて前方へ頭を向けて仰向きに倒れる。その腹の上へ伊織之介は安心したやうに腰掛けてしまふ。

(伊織之介) お部屋様、此處へおいでなさりませ。二人一緒に刺し違へて死にませう。

(お銀の方) おゝ、斯うなるからは其れより外に道はない。其方と一緒に死ぬるなら、妾は嬉しうござんすぞえ。

お銀の方、男と並んで太守の胸の上に腰を下ろす。

(伊織之介) 覺悟は宜しうございますか。

(お銀の方、につこりして) 早う殺して賜ひなう。

兩人重なり合つて打ち俯す。六つの屍骸のまん中に、珍齋が縛られたまゝ臀餅を舂いて、氣絶して居る。—幕。

大正五年一月作

石女の寫眞

上司小劍

一

寒が明けてから却つて寒くなつたと人々はいふ。昨夜まで寒詣りの鈴が、六根清淨の聲とゝもに、優しく鳴り響いて、白衣の行者が二人三人づゝ、走つて通つた郊外のだら〳〵坂を、春雄は外套の襟を立てゝ、日和つゞきの灰を撒いたやうな道を、すた〳〵と急ぎ足に自分の家へ歸つて行つた。砂埃で靴が白くなつて見える。

家の玄關で外套を脱いでゐると、茶の間の方で、まだ漸く歩きかけたばかりと覺しい幼兒の聲がする。子供嫌ひ　殊に幼兒の嫌ひな春雄は、時々人が板の間を踏む音なぞを子供の聲と間違へて、ほんの一時たりとも厭やな心持ちをすることがあるので、今夜もまたそんなことかも知れぬと、聞く耳を立てると、廻らぬ舌で意味のない音をさしてゐるのは、何うしても人間の子に違ひな

い。まだ乳汁を呑んでゐるもの丶聲にきまつてゐる。

さう思ふと、俄に身體が固くなつて、自分の家ながら、もう茶の間へも入つて行きたくはない、このまゝこの玄關の暗いところへ潜んでゐたいとさへ考へられたけれど、偖さうもならぬので、上衣のボタンを外しながら、廊下へ出て、茶の間の障子を引き開けると、内部から暖かい空氣が顔を撫でるやうに流れ出て、顔の黒い女が、長火鉢の横に手を支へて丁寧に辭儀をした。

春雄の家では、ズッと前から、主人の出入りの爲めに家の者が一々送つたり迎へたりすることを禁じてゐるので、何時の間に出て行つたやら、歸つたやら、細君は知らずに居ることが多い。この夜は格子戸の開けかたが少し劇しくて、細君は其の音を聞くと、直ぐ立つて臺所で食事の支度にかゝつたから、茶の間には色の黒い女が、三歳ぐらゐになる男の子を遊ばせつゝ、一人で居たのである。

「あゝお久か。」と言つて、春雄は着衣を褞袍に更へ、鼠色縮緬へ波に千鳥を染め拔いた兵兒帶を、ぐる〱と巻きつけつゝ、長火鉢の前へ胡座をかいた。

「おいちやん怖い。」と、よくは廻らぬ舌で言つて、子供はベソをかきながら、お久の膝に取つ付いた。お久は其の子を邪險に押し退けるやうにして、座をすべつてから、いろ〱と長い文句を並べて、上手に挨拶をした。

「お久もなか〱巧いことを言ふやうになつたね。」と、春雄は微笑しつゝ、改めて彼女の顔をよく見ると、三年ばかりの中に隨分と老けて、この家に下女をしてゐた頃の面影は、額のあたりにほんの少しばかり殘つてゐるだけであつた。

「お久も今は立派な綿屋のおかみさんだもの、挨拶ぐらゐは上手に出來なけや仕樣がないね。」と、大きな聲で言つて、細君は臺所から春雄の食膳を揃へて運んで來た。さうして火鉢にかゝつてゐる小鍋から、赤い吸物椀に鯉濃汁を盛りながら、

「この鯉はお久に貰つたんですよ。本所から此處まで三里からも風呂敷に包んで持つて來たんですが、桶へ水を入れて放してやると、直ぐ泳ぎ出しましたよ。」と、面白さうに言つた。

「それやお前の子かね。」と、春雄は獨りで食事をしつゝ、お久の膝の上で頻りに鼻を鳴らしてゐる子供を見やつて言つた。

「左樣でございます。もうこんなものが出來て了ひましてございます。奥樣はまだお出來にならないのに、私の方が先きへ出來まして、濟まないやうな氣が致しますのでございます。」と、お久は三四年前下女をしてゐる時、笑へば必ず見せた額の筋を、昔の記念のやうに太く浮べて、溶け出しさうな顔をした。

「私は駄目だよ、一生子供がないんだらう。家で子供嫌ひだから、それで出來ないんだよ。……子供が生れたら捻り潰すつて言つてるんだもの。」と、細君は寂しさうな顔をして更らに、

「御覧よ、頭をお前の胸へ押ッ付けて怖がつてるぢやないかね。犬でも猫でも自分を嫌ふ人はよく知つてるから、子供でも矢ッ張り、嫌ひな人は分るんだね。」と、細君はほと／＼感心をしてゐる風をして言ひ／＼、手を差し伸ばして、子供の盆の窪を指でちよい／＼と突いた。子供はます／＼身を縮めて母にしがみついた。

「お嫌ひだと餘計お生れになると申しますが、こちらでは旦那樣がお子さん嫌ひでも、奥樣がお好きで

すから、それでお生れにならないのかも知れませんでございますね。……でも今にきつとお生れになりますでございますよ、まだお若いんでございますもの。』と、お久は自分の子の頭を撫で〳〵、細君を慰めるやうに言つた。

『なアにもう駄目だよ、私は諦めてる。それに三十過ぎての初産は重いといふからね。……もう直ぐ三月のお節句になるから、またお雛様でも飾つて喜んでゐようよ。お久の居る時分にもよくやつたね、お久は家で六度ほどお節句をしたらうね。』と、細君の言葉つきはだん〳〵寂しさの影を濃くした。

二

『それでも奥様、何んでございますよ、一人でもこんな小さいのが居りますと、足手纏ひになりましてね、こちら様へもこれの生れない中は一年に二三度づゝお伺ひが出來たのでございますのに、こんなものが居ります爲めに、三年も御無沙汰致して了ひました。……それに宅は變人でございまして、隨分無理なことを申して怒りますから、逃げ出さうかと思ふことが度々ございますが、こんな小さいのが居りますものでございますから、つい辛抱致しとりますと、いゝことにして餘計我儘を申すのでございますよ。』と、お久も何時しか染々とした調子になつてゐた。子供は母の懷に取つ付いたまゝ眠つて了つたので、お久は傍に脫いであつた自分の羽織を取つて、小さな寢姿の上へ引つかけた。

食事を終つた春雄は、つく〴〵とそれを見やつて、犬も猫も人間も、自分の腹から生み落したものゝ可愛がりやうは、總べて同じだなアと思つてゐた。

『お久の亭主は何時だつたか綿を持つて來て呉れたが、溫和しさうないゝ男ぢやないかね。』と、細君は

眼をくしや〱さして、お久のガツシリとした背の低い身體と、自分のスラリとした痩形の身體とを見比らべる風にした。女の大厄がもう一昨年濟んだといふ大年增になつてゐるのに、子を生まぬ故で、顏から胸のあたりへかけて、一面に若やかな光があつた。腹もペコンとへこんで、繻子の帶が派手な棒縞の銘仙の上からキユウと締つてゐた。

「猫を冠つてるのでございますよ、あれでなか〱癇癪持ちの變人でございますから。」と、お久は自分に出された座蒲團の敷かずにあつた上へ、靜かに眠つた子をおろして、そうつと羽織をかけた。

「寒いから風邪を引くといけないよ。」と、細君は立ち上つて戸棚から、燃え立つやうな新らしい友禪メリンスの小掻巻を取り出し、眠つた子へ、お久の羽織の上からフワリと載せてやつた。

「まア勿體なうございます、こんなお立派な掻巻を、……おほかた極樂へでも行つた夢を見てるでございませう、家では汚ない煎餅蒲團をかけて寢るのでございますから。」と、お久は嬉しさうにして、子供の寢姿に見入つたが、子供は少し首を振り動かして眼を覺ましさうにしたので、掻巻の上から、輕くトン〱と叩いてやつた。

「お久はまた出來たんぢやないかね。」と、細君は眉の濃い眼のパツチリとした圓形の色の白い賑やか顏を、態々寂しさうにして、いやにもぐ〱膨れたお久のお腹のあたりを見詰めた。

「皆さんがさう仰しやるんでございますよ。……この子が生れましてからお腹が元の通り縮まらないんでございます。」と、お久はドス黑い額へ皺を寄せつゝ、高い頰骨の上へまで笑ひの波を打ち上げ、大きな口を開くと何うしたのか、前齒が一本なくなつてゐるので、二十七になつたといふのが、細君よりも

老けて見えた。
「おい小便しやしないかね。」と、春雄は汚ならしさうな顔をして、子供の寝姿を眺めた。
「大丈夫でございます。この子はお尻癖がよろしうございますから。……」と、お久は自慢氣に言つて、また掻巻の裾の方を輕く叩いた。
「いゝ子だよ全く、お久に肖ないで、亭主の方に肖たからね。」と、細君は無遠慮なことを言つて、子供の寝顔ばかり見てゐた。
「あんな癇癪持ちの變人になると困ります。」と、それでもお久はまた嬉しさうな顔をした。
「そんなに癇癪持ちかね、家へ來た時なんぞ、綿十貫目と鐵十貫目とどッちが重うございませう、なんて戯談を言つて、ドッサリ綿を擔いで來て呉れたよ。其の掻巻に入つてる綿もあの時お前のとこから貰つたんだよ。」
「あはび貝の反對で、内づらがわるくて、外づらがいゝんでございます。それに浮氣者でございますから、女のかたには、それは優しいんでございますよ。」と、お久は莞爾ともしないで言つた。
「お久も家の奥さんの弟子だけあつて、嫉妬を燒くことを覺えたね。お前の亭主はいゝ男だよ、お前には過ぎてる、大事にしろ。けど、もう子を生むなよ、あんまり子を生むと、餘計愛相を盡かされるぞ。」と、春雄は夕刊新聞にも讀み飽きて、冷やかすやうに横から口を出した。
「私もこちらの奥様のやうにお綺麗でございましたら、小さいのがございませんでもよろしうございますが、私のやうな醜いものは、子がございませんでしたら、疾くに追ひ出されとります。……先日もお

向ふの新屋さんへ、十六になる可愛らしいお嫁さんが來たのでございますよ、お聟さんは宅より一つ上の二十八なんでございますがね。スルと宅では、俺もあんな若い綺麗なのを貰へや好かつたッて、羨ましさうにして染々さう申すのでございます、戲談でも何んでもなしにでございますよ。」と、お久は先刻子があるので仕方なしに辛抱してゐると言つたのを忘れたやうなことを言つて、ほろりと伏目になつた。

「男て、皆そんなものだよ。」と、細君は黒繻子のかゝつた襟を掻き合はして、下には娘のやうな小さい乳房を包んでゐるらしい胸のあたりを、白金に眞珠の光る指輪の篏つたかぼそい手で押へた。

三

「お晝過ぎからまゐりまして、隨分長いことお邪魔を致しました。」と、お久は子供の寢顏を見いく、暇乞ひをしやうとした。

「まアいゝぢやないか、何うせもう今から歸つたつて寢るだけだらう。九時になつてからお歸りよ。」

細君は友達とてもないので、元使つてゐた下女が遊びに來ることでもなければ、女同士でゆつくり話をするといふことがなかつた。今日はほんとうに久し振りで、稍長い言葉か幾度もこの細君の口から出たので、淡い疲れをさへ感じながら、心の底からお久の歸るのを惜んでゐた。

「宅ぢやまた怒つてるてございませう、四時頃までには歸ると申しといたのでございますから。……」

「いゝよ久し振りぢやないか、私が用事を賴んで遲くなつたつて、手紙を附けてあげるよ。」

「眞逆お手紙まで戴いて歸りませいでも、よろしうございませうが、奧樣、私にお手紙よりは、お寫眞を一枚頂戴出來ないでございませうか。」と、お久は黑い顏に笑ひを湛へて言つた。

「寫眞かね、去年の春だッたか、坊やを連れて鶴見の花月園へ行つた時、彼處の瀑布の側で撮つたのがあつたッけ、……あれを一枚あげよう。」と、細君は立つて用簞笥の抽斗をゴソ〳〵探してゐたが、やがてお久の眼の前に置かれたのは、大きな市松人形を抱いて、若木の櫻の咲いた崖を背景にした手札形の全身像で、これはまた殊に若く見える姿であつた。

「おや、よくお寫りになつて居りますこと、ほんとに奥様はお若くてゐらッしやいますね。」と、お久は惚々とする眼付きをして、ヂッと見詰めてから、押し戴いて、恭しく半紙に包み、ぶく〳〵した紡績飛白の懐中へ押し込んだが、また取り出しては包紙を披いて見たりした。

「奥様、お女中さんなしでは、ほんとにお困りでございませうね。」

「なアに、お前みたいなのが居て呉れるといゝけど、滅多に氣に入つたのはないから、一人の方が氣樂でいゝよ。それに二人ッきりだもの、用て何んにもないんだよ。御飯だッて面倒な時は鰻のどんぶりかお鮓でも取つて濟ましとくからね。」と、細君はまた寂しい〳〵顔をして、世間の奥様たちは三十五にもなると—三四人の子供を抱へて、一家の切り廻はしに忙しがつてゐるのに、自分はまだほんとうに家を持つたといふ味も知らない、とでも言ひたげな風が、お久の鉋屑を詰めたやうな頭にも、よく酌み取られた。

それから細君は、夫や自分の着物の古いのを幾つも取り出して、これもあれもとお久に與へ、浴衣までも持ち出して、

「寒さうだね、今こんなのを見ると、……だけど、よけれや持つてお出で。」と、お久の前を古着屋の店

頭のやうにした。

「夏も小袖と申しますが、冬も浴衣で結構でございます。」と、お久は柄にないことと言つて、鯉を包んで來た汚ない風呂敷のしわう乾いたのへ、いろ／＼のものをドッサリと包み込んだ。其の時丁ど子供が眼を覺まして啼き出したので、

「それぢやお暇致しませう。」と、子を抱き起して、黒い大きな瓢箪のやうな乳房を羞かし氣もなく露はして、乳汁を呑ました上、改めて長い挨拶をして、巧みな手付きで子供を背中へ負ふと、上から羽織を引ッかけて、「はいちやい、はいちやい」と立ち上つた。

細君は殘り惜しさうに臺所口まで送つて行つて、其處でまた貰ひ合はせの麥酒やら罐詰のやうなものを押し込んでやつて、お久の風呂敷包みをいよ／＼重くした。

お久がもう電車に乘つて餘程行つたと思ふ頃、細君は突然、

「おやッ。」と、妙な聲をしてお久の座つてゐたところを見た。其處には折角の細君の寫眞が、紙に包んだまゝ忘れてあつた。

若しやほかのものかも知れないと、細君は其の紙包を手に取つて見たが、矢張り寫眞に違ひなかつた。

細君の顏には、見る／＼不快な色が漲つた。（完）

社告

雜誌定價値上廣告

歐洲戰亂ノ爲メ紙價暴騰シ加フルニ印刷料モ亦値上ヲ來シ候ニ付不得已來四月號ヨリ定價貳割內外値上ノ事ニ相定メ候間此段謹告致候

大正五年二月

東京雜誌組合

右之通の次第に付止むを得ず、四月號より本誌々代を、左の如く改定いたし可申候間、御承知被下度希上候也

大正五年三月一日

中央公論社

一册	定價金參拾錢	郵稅金貳錢
六册	金壹圓八拾錢	郵稅を含む
十二册	金參圓六拾錢	郵稅を含む
十五册	金四圓五拾錢	郵稅を含む

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　北區東梅田町　宮內立誠堂
仝　東區瓦町　東枝支店
京都市七條停車場前　三共社
仝　間之町七條　大盛社

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

册數／國別	內國	國外
六册	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二册	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本鄕區西片町十番地中央公論社**とし拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし
一振替貯金口座は**東京三十四番**なり
一郵券代用必ず**一割增**の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢　及送達料共）
一受領證請求は必す返信料を要す

大正五年二月廿八日印刷納本
大正五年三月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　中央公論社
電話長下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.95; Single copy 35 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.